
FBIから来た女: 6 ~漆黒・黒の章

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FBIから来た女・6～漆黒・黒の章

【Zコード】

Z2970E

【作者名】

コーリ

【あらすじ】

ついに黄の組織も壊滅し、残すは黒の組織だけとなつたペンデュラムアンド。手がかりを求めてアメリカに旅立つたコナン達は、盗賊団の女ボスと出会う。彼女との出会いをキッカケに、運命の歯車は回り出していく。そして、ついに悪魔達の秘密が明かされていく。・・・これは、コナン達と黒の組織との戦いを描いた話である・・・

ファイル556・盗賊団の女ボスとの出合

哀達が乗っていたカーペットを撃ち落とした集団の長と思われる少女が、コナン達に近づいて来た。

ザツ、ザツ、

「あなた達……ベンテカラムアッシュでしょ？死刑よ。」

女性は親指を下に向けた。

哀

「私達は『アル』よ……ベンテカラムはあなた達でしょうか！？」

哀は女性に詰め寄った。

「んー？」

女性は目を前の光景をよーく見た。

ジーッ・・・

「……アタシ、何か勘違いしてた？」

哀

「私達はベンテカラム倒さうとしてるのよ……。」

理沙

「伊澄君……。」

伊澄

「ええ。最悪の事態じゃ、ないみたいですね。」

青井玲子『20 メアリードの女ボス』
アオイレイコ

「アタシ達もペンデュラムじゃないわー盗賊ドルギ『メアリード』よーーアタシは女ボスやつてる青井玲子つて言つたの。間違つて悪かつたわねえ。あなた達みたいな子供が、ペンデュラムなワケないわよねえーー！」

哀

「失礼な人ねアンタ！！」

口ナン

「あのーーー・メアリードって事は、ボク達から・R I N Gとかを奪う氣ですか？」

玲子

「ムツーーー！」

玲子は口ナンやハヤテ達男性陣をマジマジと見た。

玲子

「よく見てみればカワイイ男の子達いっぽいーーーアタシ、男の子からは物取らない主義なのーー！」

口ナン達は睡然とした。

玲子

「ずーっとペンドュラムのアホ共とつ捕まえようとしてたけどサッ

「パリだわ。他のトコにいる仲間からも連絡ないし！皆に一度戻るかな。あなた達もアイツら敵だと思ってるんでしょ？一緒に来ない？」

哀

「平氣かじら、コナン君？」

コナン

「メアリードは情報伝達は並じゃないからね。ヤツらの動向を探るには良いと思うよ。それにあの人、悪い人じやなさそう。」

玲子

「決まり。お密さん連れて帰りましょ。『ディメンション・R I N G』『ワープゲート』…この一帯の人間を全て、メアリードの階へ…。」

コナン達は、皆へとワープした。

「ベンッ！」

『メアリードの階』

玲子

「・・・なるほどねえ・・・高校生名探偵に元黒の組織の科学者、ペンドュラムの要が持つてたしゃべる・R I N G。アイツらから狙われるワケね！それで逃げるためでなく戦うために結成されたのが・・・アル・・・・か！美しい・・・少し遅かったのかも知れないわねえ・・・」

やつぱり、玲子はマジックボールを投げた。

ヒュッ！

カツ！

そこには、世界各地のビデオ光景が映っていた。

哀
な・・・

玲子
「これが・・・今の世界と言つて良い。イギリス、オーストラリア、
ブラジル、アフリカ・・・調べただけでも、半分近くの国が連中に
破壊されている。見せたい物があるわ。来て。」

哀達は、皆の裏へと案内された。

そこには、多くの墓があった。

玲子

「メアリーデの同志達の・・・墓よ。アタシは・・・ヤツらを絶対
に許さない。ここだけじゃない・・・全土が今、墓場になりつつあ
るのよ。ペントラムアードの宣戦布告で...」

ゴーリ

「そうだ！そしてこれが過去のやり方と同じなり・・・テロ的に行
う」の第1段階から、第2段階に戦争内容は移行される...」

康太郎

「第2段階！？」

ユーリ

「『組織大戦』だよ。半分程度の国々を叩き潰し存分に脅威を『えた後、『戦い』という名のゲームを持ちかけるんだ。それは造り反する者達を直接殺していくためであり、・R I N G等を手に入れるためであり、自分達こそが世界の霸者だという証を打ち立てるためのもの！8年前の組織大戦では、明美ちゃんやオレ達が参戦し、勝利を導いた！一度このゲームに負けているヤツらは、おそらく復讐もかねて同じようなゲームを挑むハズ！」

そこまで言つた時、哀が壁に拳を打ちつけた。

ゴッ！

哀

「ゲームですつて・・・？たくさんの人達を殺して、さらに入れ殺しのゲームですつて・・・！？」

哀の怒りは、最大になつてゐる。

その時、玲子の部下がやつて來た。

「玲子！動きのあるペンデュラムを発見！ヨーロッパの南西の村、ディストリアだ！－まだ暴れていらし－－」

玲子

「“地底湖のディストリア”か！行つた事あるからワープゲートの範囲内ね！どう・・・アル？アタシを連れてつてみない？一瞬でヤ

シリのところへ行けるわよー。」

哀

「わかつたわー！ ティストリアまで飛ばせでーー玲子ちゃんーー。」

玲子を仲間に引き入れた哀達！

ディストリアで彼女達を待ち受けれる者は、一體・・・

ファイル557・ディストリアへ・・・地底湖の戦い!!（前書き）

オリジナルキャラクター・ファイル71

青井玲子

盗賊ドルギ『メアリーード』の女ボスで、仲間思いの人情家。

青いニット帽をかぶつており、オーディコには斬りキズがついている。第1章の回想話（バスジャック事件）に登場しているが、出す機会がなくしばらく出番がなかつた。

ただし第2章でも少しだけ出ている。

ペンデュラムアッドによつて同志達を殺されてしまつたため、ペンデュラムアッドに対して敵対心を持ち、必ず連中を叩き潰すと心に誓つている（後にその仇の名がペンデュラムアッド第2の輩であるスレイプニルだとわかる）。

そのせいか、哀達をペンデュラムアッドと勘違いし攻撃しようとしました事も。

男からは物を奪わない主義。

超がつくほどの男好き。

氷の：R I N Gを扱う氷使いで、精神力・魔力共にかなりのもの。

年齢は20歳。

ファイル557・ディストリアへ・・・地底湖の戦い！！

玲子

「よーし、決まり！－ディメンション・RINGワープゲート発動！－」のメンバーを・・・ディストリアへ！！

ヴンッ！

哀達は、ディストリアへとたどり着いた。

ブンッ！

哀

「－！」

哀達の目の前に広がっていたのは、所々破壊された悲惨な光景だった。

玲子

「何で、マネを・・・。水と森の村ディストリア・・・前に来た事あつたけど、美しいト「だつた。それが・・・」

康太郎

「ヒテヒ・・・」

哀

「許せない・・・」

そつ言う哀達の前に、何人か人がやつて來た。

「アンタ達・・・何しに來なさつた？」

「ペントレラムか？FBIか？もうどちらでも良いがね。ディストリアはもう終わりだ。これ以上破壊されても同じ事・・・助けも遅かつた・・・好きにしてくれ。畠も家も潰された。我々はもう生きる氣力すらないのだ・・・」

哀

「そんな事言わないでよ、おじさん！元気出して！―壊れたってまた作れば良いじゃない！―」

「ムダだよ・・・作つてもまた壊されるだけさ。私はね、4年前までFBIのメンバーだった。しかし、何の抵抗もできなかつた・・・たつた2人のペントレラムアッドに・・・無力だつた。村を救うどころか、何もできなかつたんだ・・・」

コナン

「とにかくまずケガしてゐる人を手当てしそうー播磨さん！成美さん！」

紅子・成美

「はい！―」

玲子

「その2人はどこ行つたかわかる？」

「ああ。まだディストリアの中だ。そこの外れにある地底湖への入

口に入つて行つた。隠された・R I N Gを手に入れると書いてな・・

・

玲子

「行く、哀ちゃん？」

哀

「当然ーー！」

松葉

「アタシもつき合つてええよん」

「アンタら、まさかあの2人と戦つ氣か！？止めておいた方が良いーーそれに・・・あの地底湖には、亡靈が災いを招くという言い伝えがある・・・」

哀

「どっちも怖くない！仇を取つて来るわーーだから元気出してよーー！」

哀達3人は洞窟に入つて行つた。

伊澄

「康太郎様は、私が渡した・R I N Gを使って烟を直してください。使い方はわかりますね？」

康太郎

「はい。」

「ア、アンタ達一体・・・」

康太郎

「アル！…ペンドュラムを倒そつとしてる命知らずです…！」

「ま…・魔力…！」

「フツ…マヌケなアンタでも気づいた？3人よ…」

ゼクト

『ペンドュラムアッド構成員

』クラス』

ビショップ』

「う、うん気づいた…！」

ビターズ

『ペンドュラムアッド構成員

』クラス』

ビショップ』

「村の連中じやないわね！FBIかしら？何でも良いわ！組織対戦の前に、そこそこのヤツと戦える良い機会じやないのよ…！…ブチ殺してやるわ…！」

哀達3人は、洞窟内を進んでいた。

ゆっくり進んでいた松葉の後に、何かが現れた。

ボウ・・・

松葉

「キヤー！－何や今のおーつ！？」

玲子

「幽靈が出るって言つのはホントだつたか！確かに魔力とはちがつて薄ら寒い妙な気が充満してる！以前からここに：R I N Gが隠されているのは聞いた事あつた。昔手に入れようとしてたんだけど連中が封印してて。それが原因で狙われたんでしょうね。」

しばらく進むと、道が2手に分かれていった。

玲子

「ん・・・道が2手だわ。別れなきゃいけないわね！」

哀達はジャンケンをし、その結果哀とイズナが左側、玲子と松葉が右側を行く事になった。

玲子と松葉は、先に奥へと進んで行つた。

イズナ

「さて、私達も奥に・・・」

その時、イズナの背を悪寒が走つた。

ドクン！

哀

「へ?どうしたのイズナ？」

イズナ

「（何…？）の感覚は…・・・？誰！？）誰かそこにはいるわね！？
出て来なさい！…」

イズナが叫ぶと、哀達の後ろから何者が現れた。

哀

「（ペントコラム・・・アッシュ…）誰！？」

ダイ

「ごめんなさい、怪しい者じゃない。ボクはティストリアの村民で
ダイつていうんだ。」

哀

「何だ、ペントコラムかと思ったわ！」

イズナ

「（ん？感覚がなくなつた・・・気のせいしから？）

ダイ

「ボク達を助けようとしてくれる皆さんにとても感謝してるんだ。
少しでも君達に協力したくてここへ来た。ボクに戦う事はできない
けど、迷わず道を教える事くらいできるよ。同行させてくれ
ないか？」

哀

「それは助かるわーようしきね、ダイ…・・・でさあ、この子達幽
靈…・・・憑いたりしない？」

ダイ

「平気。ボクは「J」が好きでよく来るんだけど、何かされた事なん
てない。」

哀

「「J」が好き? 变ねあなた。」

ダイ

「そうちかな? でも入つて来たのは久しぶりだ。懐かしいなこの感じ。
君、何で名前?」

哀

「哀ー灰原哀ー」この子は私の…RING・イズナー一緒にペンドュ^{ラム}を倒すのよー。」

ダイ

「フーン。」

哀

「フーンで何よフーンでー。」

ダイ

「ゴメンゴメン。だつて…・ペンドュラムって強いよ?」

哀

「知ってるわー! でも絶対に倒してやる。私はアイツらが許せない!
アイツらのせいで、たくさんの人々が苦しめられている! 誰かが止
めなきゃいけないの! 私がそれをやるー。」

ダイ

「8年前の明美さんのようだっ。」

哀

「私は明美を越えるのー。」

ダイ

「・・・ワクワクしてきたよ。期待してる・・・」

一方、右の道を進んでいる松葉と玲子は・・・

玲子

「ねえ、哀ちゃんってどんな子なの?」

松葉

「カワイイ子や。アタシが会つた事のないタイプやね。(ハハ・・・)
会つた事がない。アタシの故郷では・・・)」

『アリスよ・・・RHIZGを薦めよーそして、探し出せーーあの
女を・・・殺せーー!』

「松葉ちゃん、松葉ちゃんでーー!」

松葉

「何や・・・。ー。ー。」

玲子

「氣づくの遅いわよー。魔力よ。」

ボコ・・・

湖の中から、何かが飛び出して來た。

ザバア！！

ゼクト

「魔力・・・強い魔力！！」

ゼクトは仮面をはぎ取った。

ガツ！

ゼクト

「オマエら・・・何？敵？」

ドゥン！！

松葉

「うつわ・・・氣色悪つ・・・」

松葉の言葉に、ゼクトは過敏に反応した。

カチン！

ゼクト

「オ、オレ・・・氣持ち悪くないーっー！」

ゼクトはいきなり殴りかかって來た。

松葉は難なく避ける。

「ゴォー！」

松葉

「（岩盤を力任せに殴つて手にキズ一つついていない・・・体中が岩以上の硬度になつている状態！力自慢が愛用する身体硬質化タイプのネイチャー・リングか・・・）」

玲子

「下がつて良いよ アタシに任せといてーっ。」

松葉

「あら、随分余裕やね？一人でできるつて事やろか。」

玲子

「そうね。アタシを誰だと思ってるの？メアリードのボス、玲子よ。ベンテュラムアンドブチのめしたい気持ちだったならね・・・哀ちゃん達にだつて負けてないのよ。」

果たして、玲子の実力とは・・・？

次回、2人の刺客との対決！！

ファイル558・青井玲子の能力（チカラ）！！

ゼクト

「何だよオマエーッ！！」

ゼクトは玲子に殴りかかって来た。

ゴッ！

碎いた石の数個ひつつかみ、玲子に向かって投げてくれる。

ブンッ！

玲子はかるうじて避けた。

松葉

「危なつかしいなあ。手伝ったるつてばー！」

玲子

「問題なしよ！」

ゼクト

「腹、減った。」

そう言つと、ゼクトは懐からソーセージなどを取り出して食べ始めた。

ガフガフ・・・

ゼクト

「オマエら……オレ誰だか知らないのか? ペンティコラムアッドのゼクトだぞ! 知らなかつたらかわいそつ、死ぬから。知つてて来たのなら……バカ。やつぱり死ぬ。」

ペロペロ……

玲子は無言で指を鳴らした。

「キ、キン!」

玲子

「お腹一杯になつたかしら、大きいの…よーく噛みしめなさい。アンタの最後の晚餐よ。」

ゼクト

「晩……餐?」

松葉

「(青井玲子……盜賊ドルギ『メアリーデ』の女ボス。今わかってるんは、同志を殺したペンティコラムアッドに敵対心を持つとる事。どんな子なんか、どれくらいの力を持つとるのかもわからへん。とりあえず感じる魔力はさほど高くない!あのリアンちゃんくらいの実力者なら魔力をあえて抑える事かてできるけど、玲子が今、それをやつているのかは未知!お手並み、拝見やな)」

玲子

「やる前に一度聞いておくわよ。ディストリアを破壊したのはあなたね?」

ゼクト

「そう！ゼクトとビターズがやった！！」

玲子

「どんな気分だった？」

ゼクト

「楽しかった！家とか壊した！みんなゼクト怖がつた！仲間達もたくさんやつてる！壊して壊して殺して殺して！ゼクトももっと殺したい！でも1回城に帰らなきやいけない！組織対戦が始まるからゼクトも帰る！オマエ達殺したら、ゼクトもビターズも城に帰る！」

玲子

「アンタはもう・・・誰も殺せないわよ。そしてビートにも帰れない。ここがアンタの墓場よ。」

玲子は冷たく言い放つた。

ゼクト

「それゼクトの言いたい事一つ！」

ゼクトは再び玲子に殴りかかった。

グアッ！！

だが・・・

ドン！！

ゼクトの怪力を、玲子は片手で受け止めた。

ゼクト

「！？」

松葉

「（あの怪力を・・・受け止めた！？）」

玲子

「弱いわねえ、アンタは・・・」

玲子は飛び上ると、ゼクトを湖めがけ殴り飛ばした。

バキイー！

ゼクト

「！」

バシャアー！！

松葉

「（腕力向上型の：R I N Gを使つた！？ちがう！・・・R I N Gとシンクロした気配なんてまったく感じんかった！！）」

ゼクト

「ゴホッ・・・カア・・・・」

玲子

「アンタに、最後の質問よ。ペントデュラムの中に・・・人間の血を残さず吸い取る・R I N Gを持つヤツがいるハズよ。その子の名前、教えなさい。」

ゼクト

「そつ・・・それ、知ってる知ってる！－！スレイプニル！－！た、助けてくれーっ！－！」

玲子

「スレイプニル・・・それがメアリードの仇の名前ね・・・ありがとね。」

そう言つと、玲子は両手にある・RINGを光らせた。

ガツ！

玲子

「フロスティック・アイ！－！」

冷氣の衝撃が、ゼクトを襲つた。

ドンッ！－

ゼクト

「ギャアアアアアア－！－！」

松葉

「（氷のネイチャー・RING！－！氷使い！－！）」

玲子

「つ・・・・ぢりしてかしらへ－！れを使つたびに、誰かを思い出し
そうになるわ。ま、こんなトコね－！」

松葉

「フン・・・やるやない！（この子・・・今の瞬間魔力が跳ね上がつた！あれでも本氣を出していない・・・！）」

哀

「何・・・これ！－幽靈船？・・・！下がつて、ダイ！」

ダイ

「え？」

哀

「魔力だわ・・・つまり、ペンデュラムアッシュだわ－－！」

ビターズ

「何だ、1人かあ？しかもガキじゃん。何よアンタは？アタシはペンデュラムアッシュのビターズよ－ブツ殺される覚悟は決めてるんでしょうね？」

イズナ

「1人じゃないわよ！私だつているわ！」

ビターズ

「イズナ・・・そつか、アンタが・・・スレイプの言つてた女・・・ダゴンの・R I N G を使つてる女、シェリー！今は灰原哀つていうらしいわね？1000年早いのよ、クソアマアーッ－－アンタみたいな力が使いこなすにはね、マヌケーッ－－こつちまで来なさいよ、アンタ。ダゴンに言いみやげができるだわ！」

哀

「ビターズとか言つたわね。ディストリアを壊したのはあなた?」

ビターズ

「壊したのはもつぱらゼクトって子よ。アタシは殺し専門。特にガキ狙つて殺したわ! 本当はもう少し楽しみたかったんだけどね、地底湖にある: RINGを探しに来たの。でもこの船の中にもそれらしい物ないのよねえ・・・アンタどつかで: RING拾つた? アンタは元同志だし、それをよこすなら半殺しで許してあげるわ。」

しかし、哀は無言でイズナをハンマー・バージョンに変えた。

哀

「アイツ・・・ブッ倒すわよ、イズナ。」

ビターズ

「気に入らないわね、その態度! ここの: RINGでアンタも死刑よ!! ネイチャーリング・フレアードアース!!!」

哀とビターズは、戦闘を開始した。

外では、コナンが次々とケガ人を治療していた。

キィィィイン・・・

「おお・・・痛みが!」

「スゴイ! これで15人目! 折れた骨まで治すなんて、スゴイ! : R

INGだ！」

紅子

「新ちゃん、少し休んで！」

成美

「顔色が良くない！精神力が保ちませんよ…」

コナン

「ヤダ。紅子ちゃん成美ちゃん、邪魔すると焼いちやうぞーっ！」

紅子・成美

「…」

康太郎

「おおりやあーっ！－ウェーブアース－！」

ドカン－！－

康太郎

「よし、こんなものか。ここに、東富家特性の豆！これをみんなで
まきましょう！一晩で実がなります！（こっちもがんばってるよ、
哀さん達！そつちも気合い入れてやってよ…）」

哀はビターズに殴りかかった。

ブンッ！

ビターズ

「くつ！！（この子・・・アタシの魔力と互角！？『冗談じやないわ
！！』ハツ！アタシが人を殺したのがそんなに腹立つたかあ！！？」

ビターズは左手に炎の剣をまとわせると、哀に斬りかかつた。

ガカッ！

『助けて・・・』

哀
？

ドカ！

哀

「ねえ。あなた今、『助けて』って言った？」

ビターズ

「あー？今、助けて欲しいのはアンタでしょ！バーカ。助けてあげ
ないけどね。特大のフレアードアースくれてやるわ！」

『助けて・・・助けて・・・』

哀

「（幽霊達ーー？）」

『船を海に出して・・・』『こづれ』といるのはもうイヤだ・・・

『船を出して・・・あの船壁を・・・崩して穴を開けて・・・』

『助けてくれるのならば、あなたに…RINGを差し上げまじょう・・・』

哀

「…よくわからないけど、ビターズ倒すと一緒にやってみるか…アレ使うわよ、イズナ…！」

イズナ

「あれって、あなたまさか…？」

ビターズ

「（魔力の波長が変わった…？）の子…何かをしようとしている…）でももう遅い…！」喰らって死にやがれ…！」

ゴウツ…！

イズナ

「アレを使うと…あーっ…もう良い…私は知らないからねつ…・・・」

哀

「バージョン3…！出で来なさいSF G…！」

果たして、2章から謎だった、イズナの3番目の能力とは、一体…・！？

次回、死闘の決着…！

ファイル559：イズナの第3の能力

哀

「バージョン3・・・出て来なさい、SFGー！」

哀が叫ぶと、船の甲板に穴が開いた。

そして、何かが出て来た。

ヌウ・・・

ズオオオオオ・・・

『オオオオオオン・・・』

出て来たのは、強大な魔物だった。

魔物は拳を振り上げると、飛んで来た炎の塊を殴り、粉々に破壊した。

バキヤアアアー！！

ビターズ

「なつ・・・（ガーディアン！？何なのあれは！？見た事もないタイプじゃないの！？それに・・・数あるガーディアンのどれともちがう何かを感じる・・・！？）」

回想・・・

2章のあの時・・・

「コナン、・・・何これ！？ 哀ちゃん！！」

哀『3つ目のマジックボールで想像して造った力！ SFG・・・シエリングフォードガーゴイルよ！！ ホラ、コナン君はフウちゃん持つてるし、他の人も持つてるでしょ？ 私もガーディアンタイプの能

力欲しかつたの！！』

「コナン、でも・・・これ・・・スゴイよ！ モノスゴイ力を感じる！ 哀ちゃんの想像力が強すぎて生まれた、とんでもないガーディアンだよ！ ！ この子を使い過ぎるのはスゴく危険だつてば！！ 特殊能力を持つ・RINGは、使うたびに術者の精神力を吸つていくの。高度で能力値の高い物ほど、比例して精神力を使う！ リアンちゃんくらい魔力のある子ならともかく、今の哀ちゃんじゃこの子は危険すぎる！！ ヘタをしたら・・・精神が破壊される事だつてあるかもしない！！ 多用は禁物だよ！ ！』

哀

「仇を取つてあげたい。助けてあげたい。倒したい！！ 今は使って良い時よね。コナン君！」

ダイ

「（一つ目はハンマー・・・たいした想像力ではないと思つたけど・・・）これは素晴らしい。素晴らしいよシェリー。もつと見せておくれ・・・）」

ビターズ

「くー！ ゼクトー！ こっちに来なさいアンター！ 一匕づして返事しないのよーつー！ ？」

そう叫ぶビターズの前に、ガーゴイルが迫つて來た。

ズン！

ビターズ

「ハツ！ナ・・・ナメンじゃないわよーつー！」

ビターズは苦し紛れのフレアードアースを放つたが、ガーゴイルは羽で炎弾を防いだ。

ボン、ボン、ボン！

『グルル・・・』

ビターズ

「み、見逃してよー助けてーもつ殺しはしないから・・・た。」

哀

「同じ事を言つたティストリアの人達に・・・あなたは何をした？」

ビターズ

「ア・・・アハハ・・・」

哀

「ブツ飛んで反省しなさいーーー！」

ガーゴイルは鉄拳で、ビターズを吹っ飛ばした。

ドガアーーー！

ビターズ

「キヤアアアアアアーー！」

ビターズは吹っ飛ばされ、湖に落っこちた。

バシャアアンーー！

『助けて・・・船を・・・壁に穴を・・・』

哀

「わかったわかった！今度はあなた達の番ねーー！」

ドン・・・

ダイ

「（今まで彷徨うだけだった靈達が、皆助けを求め始めた。それは、その人物なら助けてくれるであろうという靈なりの6感なのか・・・）」

哀『私、灰原哀ーーこの子は私の・R I N G ・イズナーー一緒にペンデュラムを倒すのーー私は明美を越えるのーー』

ザ・・・

『今・・・ビームおられたのですか？ほとんどの者達が城に集まりつつあります。どうぞお歸りください。ダゴン・・・』

ダイ＝ダゴン『もつ少し時間をくれ。今・・・とても氣分が良いんだよ、スレイプ。』

哀

「いきなさい！ガーゴイル！！」

ガーゴイルは壁に殴りかかつたが、なかなか砕けない。

ガツ、ガツ・・・

哀

「相当分厚いわね、これは！仕方ないわ！！アレ出すわよ！－！」

ビッ！

ガーゴイルが口を開けると、くわえていたリングが放たれた。

ガパ！

ダゴン』（ハハ・・・次は何を見せてくれるんだい？シェリー！－－）

『

哀

「シェーリングガーゴイルレイ！－！」

哀が叫ぶと、リングが光り出し、強大な光線が放たれた。

ドン！－！

ガーゴイルの攻撃により、壁は一瞬にして砕け散った。

哀

「もういいわ、イズナ！」

ガーゴイルはイズナの姿に戻った。

ヴン・・・

イズナ

「哀ちゃんーっ！！」

哀

「任務・・・完了！疲れた。」

ダゴンは、哀とイズナに気づかれないように去つて行つた。

イズナ

「このバカ娘ーっ！！力使い過ぎよーっ！－！」

哀

「あー、あー。今は説教聞きたくないーっ。」

そんな2人の前に、靈達の長と思われる女性が現れた。

カアア・・・

『ありがとう・・・これでここに閉じ込められていた私達も・・・
海へ・・・そして天にのぼる事ができます。』

哀

「アハハッ。良いって事よ！良かつ・・・」

パタ・・・

哀は氣絶した。

イズナ

「哀ちゃんーっ！！」

『せめてものお礼に、・・・R I N Gを差し上げましょ。あなたの力になりますよ。・・・』

玲子に敗れたゼクトは、逃げていた。

ゼクト

「ハアー、ハアー。ゼクト帰る・・・みんなに助けてもらひ・・・

そんな彼の前に、誰かが現れた。

ザ・・・

ゼクト

「だ、誰！？さつきのヤツの仲間！？許してーーもうゼクト戦えな
い！！」

ダゴン『何て情けない弱虫の田なんだろ。ペントコラムアッシュヒ
して、あまりにその姿は許し難いね。』

ゼクト

「あれ？オマエ・・・・

ピシ・・・

ゼクト

「ダ。」

ズバッ！！

ダゴンと諱に切る前に、ダゴンはゼクトをバラバラに斬り刻んだ。

ダゴン『少しあショリーを見習いなよ。来世でね。』

しばらくして、哀が目を覚ました。

哀
「ん・・・」

松葉

「あ、起きたー！」

玲子

「よし、あなたも一人倒したみたいねー！」

哀

「うー、どう？」

玲子

「入り口の真ん前ー！アタシがここまで背負つて来たのよー！」

哀の手の中に、マジックボールとカギが乗っていた。

哀

「マジックボールと、カギ?」

イズナ

「あの幽靈達が落としていったわー!くれると言つてた。」

哀

「松葉ちゃん、このカギ何だかわかる?」

松葉

「:RINGと思つけどわからへん。さっきも少し触つてみたけど、能力発動もしないんや。多分、特別な・・・」

松葉がさつ言いながら哀を見ると、また寝ていた。

松葉

「ありや・・・・」

哀達はその後、コナン達と合流した。

そして海の向こうへ、脱出した船が浮かんでいた。

『ありがとつ・・・・小さき女勇者・・・・』

成長した哀とイズナ・・・

次回、敵からの宣戦が来るー!・

ファイル560・月夜の宣戦布告、託された戦い！！

グビグビ・・・

イズナ

「プハアーッ！もつと酒一つ！…」

イズナは酔っていた。

イズナ

「あなたも飲みなさい哀ちゃん！レディーでもお酒をたしなむのは自由・・・あら？どうしてあなた3人もいるの？」

哀

「あーうつヒーしい！」

今ディストリアでは、宴が行われている。

「久々にみんな笑顔を見せている。一度は自ら死ぬ事すら考えていた我等が、生きる勇気を取り戻した！このたくさんの作物！東宮さんが与えてくれた！」

康太郎

「アハハ！大した事ないですよ！」

哀

「大した事ない事ないでしょ、東宮君！あれはいくら何でも育ちすぎじゃないの？」

そう言つ哀の眼前には、もつさりと育つた作物があつた。

康太郎

「た、確かに・・・自分でも驚いてるんですけどね。魔力が上がった事にプラスして、鷺之宮からもらつた地のネイチャーのマジックボール！かなりボク成長したみたいだね。」

「そして・・・1人1人ケガ人を直し、元気をコナン君が与えてくれた！」

クプクプクプ・・・

コナン

「ブハア。このジュースもつと欲ちいーつ！！」

コナン、イズナ化。

「それに地底湖に入りベンデュラムを倒してくれた3人！ヤツらに殺された者達も浮かばれましょう！」

「特に哀ちゃん！あなたには勇気を与えてもらつた！」

「あなたのような女の子がベンデュラムと戦いがんばつている！」

「大人のオレ達がくすぶつてんのは情けねえよな！！」

「ディストリアは復興しますよ。あなた方に与えられた力で、させてみせる！！」

玲子

「！ 哀ちゃん！ 月を見て！」

哀

「ん？月が何……………！」

哀が空を見上げると、月が鏡のようになっていた。

その用に、1人の男の姿が映つた。

ブン

スレイプニル『世界全土に存在する・・・我等ペントラムアツド
に敵意を抱く、全ての者達に告ぐ・・・再び組織対戦を始めよ
うではないか!』

ユ
リ

やはり・・・そうきたか！！

スレイプニル『場所はユーラシア大陸中央部に位置するディールゼイヴ城！！既に我等手中に落ちたこの城に我等との戦いを望む者は集え！！8年前の恨み、我等は忘れてはいない！！1人として集まらぬその時は、我等で世界全土を焦土と化す！！楽しませてくれる人間の参加を待つているぞ！！特に！！ダゴンの・R I N Gでありながらペンドュラムを裏切ったイズナ！！そしてそれを持つ少女！！開戦は明後日、正午！！待つているぞ！！フハハハハハハハハ！

!

フ

コナン

「酔いもこっぺんで冷めちゃった。行こう、哀ちゃん……『イールゼイヴへ！』」

康太郎

「そうだ！『ディストリアみたいな所をこれ以上増やさないため……つていうか、この前までただの高校生だったボクにできるのかな？」

ユーリ

「姿無き亡靈の影響でFBIの人数が減っている今、何人集えるかは期待できないが……行くしかない！！」

玲子

「FBIなんかいなくて良いわよ。アタシがいるからね。」

松葉

「雰囲気的に、おりられへんって感じ？（それに、気になる事もあるしな……）」

「哀ちゃん！我等は壊された村を全力で直す……」

「託してよいか！？この世界の命運を……」

「情けないのはわかっているが、我等に力はない。しかしふンデュラムと戦う力のあるあなた方ならば、世界全土に勇気を、希望を与えられる……託されてくれますか、組織対戦を！？」

「そして勝利して、またここへ……復興した『ディストリア』にいらしてくださいね。」

哀

「任せて！！

ついに宣戦布告してきたペンドュラム・・・

哀達は決戦の地へと向かう事に！

果たして、哀達を待ち受けるのは・・・？

次回、予選のテスト開始！！

ファイル561・血塗られた予選テスト!!

8年前、『ペントテコラムアッシュ』を名乗る集団が第1次組織対戦を行つ。

世界の約半数にのぼる国を破壊した後、彼等は『組織対戦』なる“遊び”を民衆に投げかける。

それは世界の命運をかけて戦う『バトル』であつた。

結果は明美率いるFBIが敵将ダゴンを討ち、世界は平和を手にしたのだ!!

しかし今、復活した彼等は全く同じやり方で再び戦争を巻き起しだったのだ!!

ディールゼイヴ城

「もうじき正午だな。」

「ああ、誰も来ねえ・・・」

「オレ達のこの城も壊されるのかなあ・・・」

「つていうか、世界全部が壊されるのかなあ・・・」

「ーおいつ、見ろつーー。」

白野兵士達が入口を見ると、瑛祐や秀一達が入つて來た。

「FBI!!」

「それに・・・見る・・・『黒き戦士』黒澤陣ーー！」

ズン・・・

「前回の組織対戦での強敵！？」

「最後のゲームで、FBIを苦しめた方だ！」

「今日は味方として来ててくれたーー！」

それからじぎじぎして、哀達も着いた。

哀

「うわー、大きい城ねこりやーーー！」

コナン

「セーフっぽいね！」

玲子

「前にここにも来た事があつてね！ワープゲートの範囲だったのー！」

ヨーリ

「どこにでも行くんだな、君は・・・」

松葉

「で？ペンティラムはどうやねん・・・」

哀

「瑛祐君！久しぶり！」

瑛祐
「あ、ああ。（哀ちゃん…？）の魔力…まるで別人じゃないか！？」

秀一

「正午だ…」

「ゴーン、ゴーン、ゴーン…」

「お集まりいただいた皆様、よつじそテイールゼイヴへ…心より歓迎致します。」

「姫…！」

哀

「姫？」

「の方は、我々ティールゼイヴの姫君なのだ…」

哀

「（どうして、お姫様が…？）」

「今より、組織対戦を開催致します。その前に、このゲームをするに相応しき者がテストを行います。参加希望者は、その位置に置かれているマジックボールを手にしてください。」

哀達は、マジックボールを手に取った。

「テスト、開始・・・」

力アツ！

哀
「！？」

康太郎

「急に真っ暗になつた！－！っていうかみんなど二ー・？」

松葉

「あのボール、ディメンションやな。1人1人を個別に、異空間へと跳ね飛ばした！」

ブン・・・

秀一

「ただのローン兵か。これでテストとは、随分ナメられたものだ。」

哀

「ハアツ！－！」

哀はローン兵を殴り飛ばした。

ドガア－！－

その瞬間、哀は元の場所に戻つた。

それと同時に、他の人達も戻つて來た。

哀
「あ！」

康太郎
「楽勝ーつ。」

コナン
「みんな大丈夫？」

玲子

「あの程度、準備運動にもならないわ！」

哀

「ん？ どうしたの瑛祐君？」

瑛祐

「ユーリさん以外のFBIが1人も帰つて来ない・・・」

秀一

「ジンまでが・・・！」

ブン、ブン・・・

哀

「何よ、帰つて來たじやない！」

秀一

「あ、ああ。」

一安心した秀一と瑛祐だったが、次の瞬間愕然とした。

そこには、他のFBIの無惨な亡骸が転がっていたのだ。

瑛祐

「みんな・・・！」

ザ・・・

カミュー『ペンドュラムアッドの試合進行役』

「フフフ・・・全つ部死体です。今回のFBIは1部を除き不作でしたね。ポーンにも劣るカスばかりでした。」

秀一

「くつ・・・ジンはどこだ！？アイツがポーンに負けるなど、ありえない！…」

カミュー

「フフフ。誰がポーンだけと言いましたかね？マジックボールの中に1つだけ『ハズレ』がありましてね。運の悪い方が1人、それがその方であったのでしょうか。」

「オオオオ・・・

トード『ペンドュラムアッド第8の輩』『・・・』

「秀一・・・」

ブン！

秀一

「ジン！！」

三口・・・

ジン

「不覚だつた・・・・・よもや・・・」のオレがゲーム前に失格とは・・・！」

哀

「まだ生きてる！」「ナン君！！」

コナン

「うん！・・・」

カミコ

「さすがは元黒の組織構成員のジン。負けたとはいえ、悪魔のトードを相手に命が残っているのですから。とりあえず讃めます。さて・

・・合格者は・・・」

灰原哀

江戸川コナン

東宮康太郎

赤井秀一

本堂瑛祐

桜野松葉

ユーリ・ハートネス

青井玲子

カミコ

「「」の8人！ イズナも入れると9人ですか！」

ちなみに伊澄達は別の準備のために一度帰っている。

カミコ

「少ない・・・少ないですね。前回のFBIは50人以上いましたか？ それに皆女子供ばかり！ これではダゴンも楽しめないでしょうなあ。」

哀

「楽しませるビビンが、ビビンせてやるわよーー早くゲーム始めようじゃないーー！」

カミコ

「まあそつカツ力なさう。今日はあくまでも予選。組織対戦は明日より行うのです。今日1日だけは・・・命ある幸運をありがたく思いお休みください・・・」

そつ言つと、カミコとトレードは消えた。

ブン・・・

康太郎

「たつたの8人・・・？ ボク達だけで組織対戦・・・？ ハツキリ言って、ビビンてるよ・・・」

「皆様は、「」ちりりでお休みください。」

玲子

「ねえ、あなたこの城の姫でしょ？『』して組織対戦の前口上なんをしてたの？」

「民のためです。言つ事を聞かねば、外にいる者達の命も危ういでしう・・・彼等を守るため、私は何でもするつもりです。1国の姫なのですから。」

ダゴン『・・・そつか。8人か・・・その中に、ショリーはいるんだよね？』

スレイプニル『はい。』

ダゴン『じゃあ問題ないんじゃない？きっと充分楽しませてくれるハズだ。楽しみにしている者も、たくさんいるだろうからね・・・』

ビターズ

「ブッ殺してやる！－！ブッ殺してやる！－！イズナを持つてるあの小娘・・・！今度はアタシの本当の力でブッ殺してやる！－！」

瑛美

「・・・」

組織対戦を託されたのは、たったの8人だけ・・・！

次回、いよいよ1STバトル開始！！

ファイル562：組織対戦、開始

カミュ

「昨夜は良く眠れましたか、皆さん？では、これより組織対戦のルールを説明いたします。バトルはチーム戦！人数はバトルごとにダイス1個または2個の目によつて変わります。この時、戦うファイナルドもダイスにより決定します。えーと、あなたお名前は？」

カミュは康太郎を指差した。

康太郎

「あ、東宮康太郎です！」

カミュ

「たとえば・・・」

カミュは紙を見せた。

×ペンドュラム1 - 哀
×ペンドュラム2 - コナン
ペンドュラム3 - 康太郎 ×

カミュ

「この図のように、東宮さんが個人で負けていてもチームとして勝利していれば、東宮さんは次のバトルにも参加できます。死んでなければね。反対にチームは負けてもペンドュラム3は個人で勝利しているので、やはり次のバトルにも参加できます。」

哀

「えーと・・・どういうルールなの、玲子さん？」

玲子

「あなたの頭はスッカラカンか！！」

松葉

「つまりチームとして勝てばええっちゅう事やな。万一負けたとしても、個人で勝った人間には次がある！」

コナン

「最終的には、強い人間だけが残っていくゲームなんだね。」

秀一

「ルールは前回と同じよつだな。とすると、キャプテンを決める事が必要か？」

カミュ

「左様。あなた方8人の中で1人、キャプテンを選んでいただきます。」

ペンドュラム1 - 康太郎 ×

×ペンドュラム2 - 玲子

×ペンドュラム3 - 松葉

カミュ

「チームが勝利してもキャプテンが負けた場合、例外としてゲームは終了です。前回はFBIのキャプテンが『宮野明美』・・・我等ペンドュラムは悪魔第1の輩『ダゴン』でしたね。さあ、誰を選びます?」

全員の視線が、哀に注がれた。

哀

「わ・・・私！？」

秀一

「本当は、オレか瑛祐君かリアン君にしておきたいが、リアン君は今来ていない。それに君は、『あの子の妹』だ。賭けてみたい、君に。」

哀

「世界の命運が、私に・・・」

瑛祐

「不安でいっぱいだけどな。ゲン担ぎってヤツだね。」

哀

「だつたらアンタ達2人の内のどちらかがなりなさいよ！バカ！！！」

カミュ

「それではそろそろ良いでしじう・・・組織対戦・・・開始！！」

ディールゼイヴの姫が、2個のダイスを投げた。

カツン！

3 1

カミュ
「人数3VS3！――場所はこの地、ディールゼイヴフィールド！――」

巨大なチェス盤のような物が落ちて来た。

ドカン！！

玲子

「へーっ、こんな仕掛けたの。『苦労な事ね！』

カミュ

「出でよー・ベンデュラム第1のチームー・ウェスティングファミリー
！！！」

カミュが叫ぶと、2人の男と1人の女が現れた。

ドン！！

その中の2人に、コナンと哀は見覚えがあった。

哀

「西沢歩ちゃんと弟の一樹君ー？」

コナン

「戦いの後逃げたってヒナギクさんが言ってたけど、まさかこんなトコにいたとはね・・・」

一樹

「ハツ、本当に8人だけだな。」

歩

「楽勝つぽい感じ！ね、オジー！」

「・・・」

カミュ

「そちらの3人をお決めください！」

哀達はジャンケンし合い、結果灰原哀・東宮康太郎・赤井秀一の3人に決まった。

西沢一樹＝ディタ

『ペンドュラムアッシュ構成員

＝クラス＝

ルーク』

「女の子は一人出たか。できればあの子と戦いたいな。」

赤井秀一

『FBI捜査官』

「まずオレが出よう。これが実戦だといつものを見せてやる。」

カミュ

「第1試合、開始！－」

一樹

「言ひねえ、色男！－！」

ドンッ！－

秀一

「ガーディアン・R I N G・14トーチームボール！ロッドバージョン！－！」

ガツ！

秀一と一樹はぶつかり合った。

「ど、どっちが有利に見える？」

「互角・・・？」

ジン

「あれはまだ本気ではない。秀一は・・・オレが今まで戦ったヤツの中で一番の手練れだ！！」

ダゴン『へへ・・・随分大きくなつたねあの子。8年も経つたんだもんね・・・懐かしいな。あの服じゃわからないけど、彼にプレゼントした呪いは進行中かな？ボクに会いに来てくれたんだよね？秀一君。』

ダゴンが秀一にプレゼントした呪いとは何か？

次回、秀一の力が・・・

ファイル563・赤井秀一 VS ディタ

8年前・・・

秀一『止める……これ以上オレの仲間を殺すな……』

ダゴン『良い皿をしている。魔氣ある瓶に、良いプレゼントを贈る
う。』

ユーリ『止める、ダゴン……シュウは組織対戦に関係ねえ……』

ダゴン『これはボクが君を気に入った証だよ。受け取つてまたいつ
かおいで。不死の絆……！』

ドンッ……

ダゴン『その印シルクが体中に回りきつたその時、君はボクと同類、生け
る屍となる。友達になろうよ、秀一君。』

一樹

「ネイチャー・RINGフリーズボール！！喰らって冷えくされ！
！」

ヒュ「ッ！

一樹が氷の弾を複数発放った。

秀一はそれを全て避ける。

秀

「選択権を『え』ようか。『苦痛を受ける敗北』と、『苦痛を受けない敗北』のどちらを選ぶ?」

樹

「あん？ その選択肢の中には
“テクニカ死ぬ” ってのはなしのか
い？」

秀

「殺しはしない。オーマエ達と同じになるのはイヤだし、
オレの狙いは、

步

「ちよつとオシー！ アイツ、アタシら眼中になしめたしな事言つて
るー！ ムカツくよねーつー！」

下がれ 樹相手が悪い。

一
樹

「アホな事言つてんだアジロ!!!!冷寢よ!!死はまどわれ!!!!」

「苦痛を受ける敗北の方がお気に入りのようだ。」

秀一がそう言うのと同時に、トーテムポールが一樹を突き上げた。

ドン！

一樹

「ゴフツ・・・」

ズシャー！

カミコ

「勝負ありー！FBI、赤井秀一の勝ちー！」

哀

「い・・・一撃で・・・」

一樹

「ぐつ・・・」

歩

「下がってなさい、カズー次はアタシの出番ー！姉ちゃんが仇どつたるー！」

降りて来た一樹に代わり、歩がステージに上がった。

哀

「よーしー！私が相手を・・・」

康太郎

「ちよつ、ちよつと待つて哀さんーー！」はーつ、ボクに任せてくれませんか？

哀

「あー、やせぬ気満々ねー良こわよ？」

康太郎が代わりを置つて出たのは、言わざもがな・・・

『ガーラガーラ・・・

康太郎

「（あんなのとやれねーっつうのーー。）」

カミコ

「第2試合ーー。」

「あの、お嬢ちゃん。あの子は・・・?ただの高校生にしか見えませんが強いんですか?」

松葉

「んにゃ?強い。」

ガリモザ

『ペントカラムアッシュ構成員

』クラス=

ルーグ

「さて、どうやつて舐しつめちゃおつかな?..」

康太郎

『アル メンバー』

「・・・」

松葉

「やがてタシの申じや一番弱い。」

「（強いヤビ弱いーー?）」

「（どうちだ！？）」

果たして、康太郎は勝てるのか！？

次回、康太郎・男の戦い！！

ファイル564：東宮康太郎ＶＳモザ

力ミユ

「第2試合・・・開始！！」

歩

「何かあなた弱つちそうね。さっきの人と比べて全然パツとしない。」

康太郎

「な、何をつ・・・ボクの力見せてやる！－ネイチャ－・R I N G・
自然のスコップ！」

ズン！！

哀

「東宮君！－来るわよ！－」

歩は木刀を変化させて殴りかかって来た。

ゴッ！！

歩

「妖木刀・影炎斬！－影球体金槌！」
シャドーボールハンマー

ガガガガ！！

康太郎

「うぐ！！！」

歩

「意外にかわすね！でも・・・」「れならどうかな？」

ガチ・・・

先端のボールが外れた。

歩

「ドオーンッ！－！」

ブンッ－！

ドカッ－！

康太郎

「がつ・・・」

歩

「この術はボールを着脱できるの。しかも動く相手を追尾する。もうお終いでしょ？」

秀一

「戦力外だな。殺される前にギブアップした方が良い。」

哀

「そんな事ない！あの子だつてこの2日間がんばって修業してたわ！－今度戦力外なんて言つたら、ブツ飛ばすわよ！」

康太郎は体制を整えると、何かのタネをまいた。

パラパラ・・・

歩
「？」

康太郎

「育てつー・ビーンズウイップ！！」

康太郎がスコップを叩きつけると、ツルのような物が歩に襲いかかつた。

ギュルル・・・

歩

「なつーーー！」

ツルが歩を絡め取った。

ニユル・・・

歩

「キヤーーーーーーー！」

康太郎

「動きは封じさせてもらつたよーーーさて、トドメを刺すよーーー！」

康太郎は歩に近づいた。

歩

「ぐ・・・負けてたまるかーっ！！」

歩が叫んだその時、康太郎のアソコにボールが直撃した・・・

ゴンー！

パタ・・・

カミュ

「ダウソー！勝者、ペンドュラムアッソ・ミモザーー！」

ユーリ

「これで1VS1になつたな！次の哀ちゃんで決まる・・・」

松葉

「・・・」

呆れてものも言えない。

カミュ

「どのみち哀はキャプテン。哀の負けはあなたの方の負けとなるのです！大将戦！ペンドュラムアッソ・ジエネヴァーー！」

西沢王牙＝ジエネヴァ

『ペンドュラムアッソ構成員

＝クラス＝

ビショップ

「ム・・・」

カミュ

「FBI・灰原哀！！」

哀

『アル メンバー

キャプテン』

「私は『アル』よ！！間違えないであなた！！さて、一発氣合い入れますか！！」

康太郎は後少しの所でダウン・・・

果たして、哀の運命は！？

次回、大将戦開始！！

ファイル565・灰原哀VSジエネヴァ『1』

スレイプニル『出て来ましたね。灰原哀・・・ですか。』

ダゴン『うん。』

スレイプニル『私はこの少女を一度見かけていますが、正直なぜあなたがそこまで興味を抱くのか解せません。』

ダゴン『面白い・・・創造力を持つているんだ。それに、宮野明美に似ている。』

カミコ

「ESTバトル最終戦！開始！！」

「おい・・・あの娘は確かキャプテンだよな？」

「そうか、つまり・・・あの哀という少女に世界がかかっているんだ！」

「うわーん、どうしようつ。」

コナン

「応援するのだ！！」

「頑張れ哀ーつ！！」

「負けんなよチックショー……！」

哀

「ウフフ、気分良いわねー。」

イズナ

「そんな余裕あるの、哀ちゃん！あのジェネヴァといつ男……あなたのは大きいわよ！！」

ズン・・・

王牙

「灰原哀……と言ったな？正直、オマエには同情を禁じ得ない。8人だけのチーム！そしてオマエのような娘がキャプテン！そのプレッシャーは相当だろ？。さらに……相手が私であるのだからな。来い。」

王牙は手招きした。

コナン

「頑張れーっ、哀ちゃんーっ！－！」

哀

「イズナ。」

イズナ

「うん。」

哀

「バージョン1！大きいからってギビツてないわよーっ！－！」

哀は王牙に突っ込んだ。

哀

「ハアツ！！」

ゴツー！

哀は一気に先制攻撃を仕掛けた。

ガガガガガガー！！

王牙

「女にしては良い拳だ。良い6感も感じる。だが・・・効かぬ。」

王牙はそう言つと、哀を殴り飛ばした。

ゴツー！

哀

「ぐつ・・・き、効いた・・・」

王牙

「見よ。左手に身体硬質化タイプのネイチャー・R I N G 5つ！右手には腕力向上型のネイチャー・R I N Gが5つだ！」

康太郎

「あんなにいっぱいって、ズルくないか・・・？」

瑛祐

「ズルくないんだよ、一応……（一人もの・RINGを同時発動させられる精神力……あの男、ビショップの中でも上のヤツか！）」

秀一

「（どうする、哀君？オレ達を信用させる戦いを見せてくれ。）」

哀

「まだまだーおじさんー！これなりぢー！？」

ジャキッ！！

哀

「シャボンガトリンガーー！！」

哀は泡爆弾を連射した。

ドンー！

ドカドカドカドカー！！

ヒヨオオオオオオオオオオオオオオ

王牙

「少ーし、痛かつたな。」

哀

「ゲーー・マジーーー？」

王牙は哀に突っ込むと、哀を殴り地面に叩きつけた。

バキ！！

ユーリ

「敵ながら、強い！！」

王牙

「この試合で組織対戦は終わる。ダゴンが出る必要もなくな・・・」

そう言つて、王牙は行こうとした。

哀

「待ちなさいよ、おじさん。」

王牙

「...」

哀

「まだ私、死んでないわよ。」

自分より倍も大きい男に対し、哀の反撃はいかに・・・？

次回、決着！！

ファイル566・灰原哀VSジエネヴァ『2』

王牙

「良い度胸をしている。樂には死ぬぞ、哀ーー。」

哀は集中力を高め始めた。

ス・・・

王牙

「（魔力の波長が変わった・・・！）何か別の手が来る・・・！」

「

「おい・・・哀、やる気あるのか？」

「わからん・・・」

秀一

「（何だ？何をする氣だ哀君・・・！）」

玲子

「気づいてる？松葉ちゃん。」

松葉

「当然。あちこちにウジヤウジヤー・ベンデュラムの連中が哀ちゃんを見ている。見定めている。アタシらのキャプテンの力量・・・これから使うであろう力を！！」

玲子

「アタシも興味あるわ。哀しみがどんな力を使って地底湖のヤツを倒したのかをね。」

コナン

「（使い氣だね、哀しみ…）」

哀

「ごくわよ。おじさん…バージョン3…」

オウツ・・・

哀

「ショーリングフオードガーゴイル…」

『オオオオオーン…』

グオツ・・・

王牙

「ガーディアン・RINGがあつ…その力もはなけてくれよつ…」

王牙はガーゴイルの拳を受け止めた。

しかし・・・

デコン…

王牙

「うぐ…（）、これは…）」

松葉

「何・・・あれ・・・！－アタシでも見た事がないガーディアン！
！それに・・・あの吹き上がる魔力は何やの－？」

秀一

「とんでもない隠し技だな・・・（10もの・R I N Gを使う男と、
化け物じみたガーディアン使い！ここから先は精神力の戦いだ！－）

－

歩

「オ・・・オジー－！」

哀

「あなた達は、楽しむためだけにたくさんの人を殺す！それが許せ
るかーつ－！」

哀の叫びと同時に、ガーゴイルが王牙を押し返した。

その時、10個の・R I N Gが割れた。

パキン－！

王牙

「（冗談じゃない！）こつちは10の・R I N Gをコントロールして
たんだぞ・・・！？）」

ガーゴイルは王牙を殴り飛ばした。

ドガア－！

王牙

「ぬぐつ・・・おふつ・・・おぶつ・・・」

ガーヴィルが追撃しようとしたその時、歩が前に立ち塞がった。

ザツ！

王牙

「歩・・・」

歩

「オジーの負けで良いから、助けて！アタシ達にとつては大事な叔父なんだ！！」

哀はそれに応じ、イズナを元に戻した。

ヴン・・・

カミュ

「15バトル終了！！哀の勝ちによりアルの勝利！！」

哀、見事逆転勝利！！

次回、ペンテュラムアッドが哀に注目！？

ファイル567・ダゴンに注目された哀…

カミュ

「ISTバトル勝利おめでとうございます。明日の2NDバトルに備えてください。明日のバトルも3VS3! 場所は砂漠フィールドにてとり行います。良い夢を…」

その夜

ペンテュラム城

スレイプニル『正直、あれほどどの力をこの短期間で身につけるとは思いませんでしたよ。先程も『哀と戦いたい』という者が何人も申し入れをしてきました。ドレイク！トード！イフリート！ビターズ！ETC…』

ダゴン『ドレイクやトードまで？そりゃスゴイ！！ナイト級にまで興味を』えちやつたか、哀は！でもまだダメだよ。ゲームはすぐ終わっちゃつまらないよね。育てて育てて…熟しきつてから…食べるんだ。』

その時、女の声が聞こえた。

「ダゴン…話がある。ちょっと良い？」

ダゴン『えーと…君は確か、本堂瑛美。キュラソー…だっけ？ 戦争幕開け前の時、一人で勝手な行動をして哀と戦つて…

負けて、大事な者を・・・壊されちゃった人。』

瑛美

「一番過酷な試練の扉の・R I N Gをちょうどだい。アタシは修業をし直す。」

スレイプニル『本当に一番強烈なヤツで良いのか?死ぬぞ、オマエ。』

瑛美

「・・・あんな物見せられちゃつたら・・・アタシもやるつきやないつしょ。アタシはナイト級まではい上がる。哀を殺す。そして、海斗をあんな姿にしたヤツも殺す。」

翌日

カミューの前に、コナン・松葉・玲子が進み出でていた。

カミュー

「さて・・・本日の組織対戦のメンバーはこの3人ですか!昨日とは全くちがうメンバーですね。結構結構』

秀一

「なぜオレが入っていない!?」

玲子

「シユウちゃん昨日思つたり暴れたじゃない！！！今日はアタシ達に暴れさせて！！！」

秀一
「誰がシユウちゃんだ！！」

瑛祐

「まあまあ、赤井さん。結局、袁ちゃんと康太郎君は帰つて来なかつたな。今頃どこで何をしてるんだ？」

松葉

「あの2人の事やから、どうかで修業でもしてるんやろー安心せえでー！」

コナン

「そつ。今日はボク達に任せでーーーそつこえば、刃・・・リアンちゃんはまだ来ないの？」

ユーリ

「最近寝不足で、ずっと爆睡してるやつー・・・」

コナン

「・・・」

カミユ

「それではあなた方を本日の舞台へお連れします。用意は良いですね？」

3人は頷いた。

カミュ

「ワープゲート！ 砂漠フィールドへーー！」

ヴンー！

トッ！

コナン

「わっ・・・」

組織対戦2 NDSステージ 砂漠フィールド

玲子

「うわっ！ 広いわねーーー！ ハハハで戦うのねーーー！」

松葉

「暴れ甲斐があるやなーい」

「3人共どつか行つちゃつたぞーーー？」

「これじゃ戦況がわからねえーーー！」

「イヤ、見ろあれーーー！」

ボウ・・・

球体のような物に、コナン達の姿が映った。

「ああ！あれで見れるってか！！」

「意外と親切だなペンデュラムー！」

「ペントグラムなんか誓めるなバカ！！」

カミュ

「出でよ、ペンデュラムアッシュー！」

カミュが叫ぶと、3人の男女が砂から現れた。

ボッ！！

カミュ

「サンブーカー！・シャルトリューズ！・スーズー！」

玲子

「よーし出て来たわー！・まずはアタシが・・・」

コナン

「ちょっと待つてーー！」

ズテッ！

コナン

「ボク、行くよー！・よーしゃーーーー！」

コナンは走つて行つた。

玲子

「（独特の世界観を持つた子ね・・・せ、逆らえない・・・）」

スーズ

『ペンドュラムアッド構成員

『クラス』

ルーク』

「アタシから行くよ。」

ザツ！

コナン

『アル メンバー』

「（がんばるからねつ、哀ちゃん！…）」

ダゴン』出て来ましたね、コナン・・・戦いを仕掛けてくるとは・・・
・どんな気分ですか？クイーン』

？？？？・？？？？？

『ペンドュラムアッド構成員

『クラス』

クイーン』

「最高ね。私が会いたかった人間・・・私に会いたがっている人間・・・
・・今回の組織対戦ね・・・ダゴン。面白い事になりそうだわ。」

この女の正体は、一体・・・？

次回、コナンの初陣！！

ファイル568・戦つ男の子、『ナン……』

カミュ

「2NDRゲーム1戦目……始め……」

スーズ

「あなたでしょ？少年探偵団のエース、江戸川コナンっていつのま。

」

「ナン

「そだよつ。何か文句ある！？」

スーズ

「話に聞いてた通り元気が良いね。あなたと戦えるなんて光榮よ。遠慮なくやらせてもらいますか。」

ジャラ・・・

スーズの周りに風が巻き起しつた。

スーズ

「ネイチャーラーニングワインディールウ。アタシの名は風使いのスーズ！…よろしく。ワインディカッター！…」

スーズは風のかまいたちを放った。

ドン！…

「ナン

「よつ、ハツ。」

コナンは風をかわすと、手を握った。

「ナン

「ネイチャーリング・・・フレアードースー！」

コナンの手から炎の塊が放たれた。

ボツー！

オオオオオ・・・

スーズ

「トルネード。」

スーズは風で炎を止めた。

バキイー！

玲子

「へエッ。コナン君案外やるじゃない？」

松葉

「炎使いね。」

「ナン」とスーズはぶつかり合つ。

サンブーカ

「どう見ますか？シャルト。」

シャルトリューズ

「強い意思を感じます。あの時はまるで別人のよう。あの子が変わった原因は、あの存在・・・シェリー。彼女もまた、別人のようになつてましたね。」

サンブーカ

「しかしこの砂漠ファイールドでは彼は不利・・・スーズは風使い、戦略はいくらでもありますからね。」

哀『あのね、新一君。明日から組織対戦始まるつて時にこんな事言うのも何だけど、あなた・・・出なくても良いのよ。死ぬかもしない戦いだし・・・』

パン！

コナン『良い？志保ちゃん。次そのセリフ言つたら釜茹でにしちゃうぞ』

コナン

「ボクだって、できる・・・」

スーズ

「そろそろ終わりにしましょーーーコナン君ーーーウインディカッターーー！」

風が砂を巻き上げ、壁のようになつた。

「オオオオオーーー！」

コナン

「（砂の・・・壁！..ビ）から来るか・・・わからない！..）」

「ナンがとまどつていて、壁からスーズが飛び出して來た。

ボツー！

コナン

「…！」

スーズ

「お休みの時間よ。コナン君…」

スーズはコナンのお腹に鉄拳をブチ込んだ。

ドカッ…！

「ああつ…？」

「まともに入つた…！」

秀一

「（新一君…！…）」

哀『そこまで言つのなら良じよー…ただしどんな時も約束してー…諦めないでよー…』

コナン

「…・フウぢやんつ…・・・」

コナンは炎のダルマを出すと、その手に乗った。

ドンッ！！

ボスツ・・・

コナン

「まだ寝ないよ、スーズー！諦めない！！」

コナンの初陣、勝利となるか！？

次回、決着！！

ファイル569・戦つ男の子、『ナン！』『2』

ザツ・・・

スーズ

「見事ねコナン君！―でも次で終わりよ！―ネイチャー・RING
ヴィンディールウ！―トルネード・・・トルネード。トルネード、
トルネード。トルネード！」

スーズの周りに、5つもの竜巻が発生した。

ゴオオオオオ・・・

玲子

「何で数の竜巻なの！？あんなの喰らつたらコナン君・・・！」

サンブーカ

「ただでは済まないでしょうねえ・・・スーズは終わりにするつも
りですよ。」

スーズ

「あなたと戦える事に光栄を感じたのはウソではない。しかし・・・
最後に勝つのは私よ！―『ナン！』トルネード×5（ファイズ）！
！」

スーズはトルネードを放った。

ゴオオオオオ！―

風がコナンを包み込んだ。

玲子

「コナン君ーー！」

ヒュウウウウウウ・・・

スーズ

「どこかに吹き飛ばされたか・・・砂の底に沈んだか・・・どのみ
ちコナンは・・・」

スーズがそう言つた時、風が消えた。

スーズ

「ーー何よあれはーー？」

炎のダルマ達が、コナンを囲んでいた。

コナン

「ありがと、フウちゃん達つ。」

松葉

「ガーディアン・RING・フレアマン。なるほど。あれに囲まれ
る事で竜巻を防いだ！」

コナン

「さて、とーーー！それでフイーッシューーー行くよスーズ！ーー

コナンは突っ込んだ。

スーズ

「ハツ・・・（何・・・！？何が来る！！？）」

コナン

「もう1回フウちゃんつ！…！」

超巨大炎ダルマが、スーズを押しつぶした。

ドン！！

スーズ

「がつ・・・ああ・・・（あんな小さな・・・男の子に・・・！…）

「

カミュ

「勝者つ・・・アル！コナン！…！」

コナン

「プウ。」

サンブーカ

「ガーディアンの使い方が上手かつたですね。」

シャルトリューズ

『ペンドュラムアッシュ構成員

『クラス』

ルーク

「ただの男の子じゃないです。シャルト少しビックリしました。次はシャルト出たいです。良いですね、サンブーカ？」

シャルトリューズが進み出た。

サンブーカ

「どうぞ。あなたと戦う相手はかわいそつだ。どちらが、餌食となるのか・・・」

玲子

「アタシ。行かせてもらつわよ。理由！－！アタシ、男の子大好きなの！－！アハ－」

松葉

「何がアハや！－！」

玲子が前に出た。

カミコ

「それでは第2試合を・・・始めましょう。青井玲子ＶＳシャルト
リューズ！！」

サンブーカ

「クク・・・玲子とかいうあの娘・・・シャルトを外見で判断していると、ヒドイ事になるでしょうね・・・」

コナンは勝利したが、果たして玲子は大丈夫なのか？

次回、シャルトの技が炸裂！！

ファイル570・玲子とシャルト！呪いのワラ人形！！

カミュ

「2NDバトル！第2試合・・・始め！！」

玲子

「さて。どうからでも来なさい、ボウヤ ボーアイズファーストよ。お先にどうぞ。」

コナン

「え・・・」

松葉

「余裕つてヤツ？あのアホ・・・ツ。」

シャルトリューズ

「シャルトもナメられたものです。少し怒りました。1発で決めてあげますから。」

シャルトリューズはそういうと、腰負っていたトランクを地面に降ろした。

ドスン・・・

玲子

「お、何？オモチャでも入ってるのかしきりの中にー。」

ゴソゴソ・・・

シャルトリューズ

「んー・・・これにします。呪いの7つ道具の1つ・・・リュカネス！ 動きを・・・封す！！」

カツ！

シャルトリューズがそう言つと、玲子の動きが止まつた。

ピキーン・・・

玲子
「あら？ あら？ 体が・・・動かない！！」

松葉
「あの男・・・ダークネス・R I N G 使い！！」

シャルトリューズ

「呪いの、ワラ人形！」

ボン！ ！

シャルトリューズ

「スパイク&ハンマー。」

シャルトリューズは次々と武器を取り出した。

玲子

「ちよつ・・・ちよつと待つて！ 何する気よあなたあ！ ！？」

シャルトリューズ

「ボーアイズファーストですから。」

シャルトリューズはそう言つと、クギをハンマーで人形に打ち込んだ。

コーンー！

玲子

「痛あーっー！」

コナン

「松葉ちゃんーー！あれ、もしかして・・・」

松葉

「ダークネスやなー呪いの・R I N G！-それを使うたび術者にも災いを招く・R I N G！-」

シャルトリューズ

「この・R I N G達はシャルトにとつては災いではないのです。副作用は『年齢が下がっていく』ですから。使うたびに若返つていきます。シャルト、これでも33歳です。」

コーンー！

玲子

「ぐうつーーーー！」

シャルトリューズ

「やりますね。大抵の人、2本でショック死します。スパイクは後3本。何本保つか楽しみです。3本目。」

シャルトリューズは3本目を打つた。

カーン！

玲子

「かはっ・・・・」

コナン

「ギブアップして玲子さん！…本当に死んじゃひょー…？」

玲子

「そうねえ・・・ギブアップしようかなあ・・・コナン君が後で水着姿見せてくれたね！」

コナン

「見せません…！」

コナンは叫んだ。

哀がこの光景を見ていたらどうなつていいた事が。

玲子

「フフッ・・・じゃあ・・・もつ少し粘るわ。」

玲子が両手を広げると、リュカネスにヒビが入った。

ピシ・・・

シャルトリューズ

「（リュカネスをホーリー・R I N Gじゃなくて精神力だけで破つた！？信じられません！…）4本！！」

カーン！

玲子は右手をシャルトリューズに向けた。

ゴゴゴゴゴ…

ス…・

シャルトリューズ

「（化け物…・・・）5本！…」

カツ！

ドンッ！・

シャルトリューズがクギを打ち込むと同時に、ワラ人形に冷撃が落ちた。

ワラ人形はあつという間に砕けた。

玲子

「この氷をブチ当てたいのはあなたじゃない。スレイプニルとかいうアホウよ！…だから今日は…・・・この辺に…・・・しといてあげる…・・・」

玲子は氣絶した。

パタ・・・

カミュ

「勝者！…ベンデュラムアッド・シャルトリューズ…」

シャルトリューズ

「（5本確かに打った…それでも生きている…動けないハズなのに反撃までされた。シャルトを狙えたハズなのにそれもせず…実力でシャルトが負けてました…）」

サンブーカ

「よくやりましたよ、シャルト。次は私が、アル初の死人を出します。」

余裕発言のサンブーカに対し、松葉の反応は…？

次回、緊張の戦いが始まる！！

ファイル571：恐るべきくノ一、松葉！－『1』

松葉

『アル メンバー』

「言つてくれるなあ。アタシを誰か知らへんのかな？」

サンブーカ

『ペンドュラムアッド構成員

『クラス』

『ビショップ』

「あなたなど知りませんよ。そして興味もありません。これから死ぬ者の事などね。」

松葉

「アタシが・・・死ぬ？アーハツハツハツ！アーハツハツハツ！アハツ、アハツ、アハツ・・・冗談にしては笑えへんな。」

コナン

「（笑い過ぎつてくらい笑つてたよ！）」

カミコ

「2NDバトル最終戦、始め！！」

玲子

「松葉ちゃんか！戦うト「見るのは初めてねえ。」

スーズ

「サンブーカなら大丈夫よね？」

シャルトリューズ

「多分。ただ、気になる事が一つ……あの女……どこかで見た
ような……」

松葉

「まずは……小手調べーアーマーリング！！」

ポンッ！

ガシャガシャガシャ……

サンブーカ

「そんな誰でも扱える様な・R I N G ……私もバカにされたもの
だ。」

そう言つと同時に、アーマーリングの動きが止まった。

カキッ！

コナン

「ガーディアンの動きがつ……止まつた！！」

サンブーカ

「奇遇でしたねえ。私もガーディアン・R I N G 使いなのですよ。」

サンブーカの前から、流動体の生物が現れた。

ドロドロ……

サンブーカ

「私のガーディアン『バキュアス』！－包み込んだ物を全て・・・
破壊します。」

アーマーリングは壊れ、・R I N Gも割れた。

ボンッ！

パキン・・・

松葉

「ヘエ、結構レアな・R I N G持つとるやん。それ欲しいな。」

サンブーカ

「差し上げますよ。あなたに私が倒せたならばね！行け、バキュア
ス！！」

ドロオオオー！

松葉

「ガーディアン！－ブリキス！－」

松葉はブリキスを召喚した。

ドスン！

サンブーカ

「ホウ。哀のガーボイルよりも大きい！確かにそのガーディアンな
ら易々と包み込む事はできないでしょうね。ただ・・・」

ブリキスがバキュアスに殴りかかった。

ドガ！！

ブルン！

ニユル・・・

サンブーカ

「バキュアスは流動体！ダメージは・・・受けません。」

松葉

「フ・・・」

コナン

「松葉ちゃん・・・笑ってる・・・？」

松葉の目つきが変わった。

ス・・・

シャルトリューズ

「！！（あの目！）似ている・・・？いや、まさかそんな・・・そ
んなハズは！－）」

？？？？

「この子が私のよく知る女・・・アリスならば・・・あの青マント。
力不足ねえ。」

松葉

「戻り、ブリキス！」

松葉はブリキスを戻した。

ボンッ！

サンブーカ

「おや？観念しましたか。次は・・・あなた自身を包み込んであげましよう。そして死ね。アル初の死者となりゲーム終了だ！！」

松葉

「ディメンション・R I N G ・・・ジッパー！！」

ボンッ！

ジジ・・・

ジイイ・・・

松葉

「ど・れ・に・し・よ・う・か・な。アンタを殺す・R I N G 」

余裕のサンブーカに対し、松葉の次なる攻撃は・・・？

次回、松葉の非情さが明らかになる！！

ファイル572・恐るべきくノ一、松葉！！『2』

松葉

「これでもないなあ・・・これもちがつ・・・ん！やつぱ！」イツやな」

松葉は：RINGを取り出した。

チリーン・・・

サンブーカ

「ホウ？それは何の：RINGですか？ウェポン？ガーディアン？どのみちあなたは・・・バキュアスに包み込まれて死ぬのです！ククク・・・包め、バキュアス！！」

ドロオオオオオ・・・

バキュアスが松葉に向かつて行く。

だが、松葉は余裕の表情だ。

松葉

「出ておいで。リリ。」

松葉が一言呟つと、空間に穴が開いた。

そして、今まさに松葉に飛びかかるとしていたバキュアスに噛みついた。

そして、そのまま引きずり込んだ。

ズル・・・ン！

サンブーカ

「！？」

クチャ、クチャ・・・

グチュ、グチュ・・・

「何だ！？」

「何が起じてるんだ！？」

秀一

「（く）ー・・・松葉！（）」

クチャ・・・

ゴクン・・・

ペツ！

空間から何かが吐き出された。

それは、・R I N Gの破片だった。

サンブーカ

「！バキュアスッ・・・私のバキュアスがーつ！？」

松葉

「おこしかつた?リリ」

松葉の声に答えるように、空間を壊しながら一匹のネコが出て来た。

バキバキバキ・・・

「なあんかドロドロしてて・・・マズイわねえ・・・」

松葉

「：RING・・・壊してもうたやない。アホネコッ、アホネコッ
！――！」

松葉はネコをペシペシと叩いた。

ペシペシー

「イタタツ・・・スマン松葉ちゃん――食べて良いとばかり・・・

松葉

「ま・・・いらんかつたけどな、あんな趣味悪いの。」

サンブーカ

「喰つた!？バキュースを喰つただと――？」

松葉

「ガーディアン・RING『レインキャット』。名前はリリ、お気に入りの子や。食いしん坊でなあ・・・」

サンブーカ

「ギ・・・ギブアップだ!! 私はもう・R I N Gを持つていないと
だあ!!」

カミコ

「勝者つ・・・」

松葉

「待ちや。まだ終わらせへん。」

松葉はサンブーカに近づいた。

松葉

「ゴメンな。アタシ、みんなみたいに優しないんよ。覚えとき・・・
アタシは女忍者・松葉! リリ・・・食べな。」

リリは口を大きく開けた。

グアツ・・・

サンブーカ

「え・・・」

リリはサンブーカに噛みつくと、食べ出した。

ガブ・・・

クチュ、クチュ・・・

シャルトリューズ

「サンブーカ・・・」

コナン

「ヒドイッ・・・殺す事なかつたのにーーー！」

玲子

「それはちがうわよ、コナン君。これは戦争なの。明日はあなたが殺されるかもしない！これは遊びじゃない。松葉ちゃんはそう言いたかつたんじゃないかしら。」

ボン・・・

松葉

「あらあら。ペンデュラム初の死人になつてしまつたな。」

遊びじゃない・・・

これは戦争なのだ・・・

次回、新たな強敵が登場ーーー！

ファイル573・ロマネコノトイと新たな希望

カミュ

「2NDゲームオーバー！！勝利、アル！！」

松葉達は、ティールゼイヴ城に戻った。

ヴン・・・

「スゴイッ・・・連勝だあーっー！」

「ここのチーム強いぞーー！」

「お姉ちゃん負けちゃつたけどね。」

玲子

「えーー、やかましいーー！」

秀一

「（桜野松葉・・・この娘が敵でなくて良かった・・・）」

松葉

「来る。」

ヴン、ヴン・・・

哀と康太郎が戻つて來た。

哀

「疲れたあ～つ。」

康太郎

「お、鬼だよ・・・あの人・・・」

ザ・・・

秀一

「やはりオマエが2人を連れて行つてたのか。どうだつた、ジン?」

ジン

「ああ。なかなか育てるのが面白いぞ、アイツら。見よ。」

ジンは2人目掛けて石を投げた。

ブンッ!!

哀はすんでのところで石を避けた。

ヒュッ!

康太郎は右手を上げ、拳で石を碎いた。

バキッ!

哀

「何すんのよ、ジン!..」

康太郎

「ギャース！！手が～つ～！」

ジン

「まあ、こんなところだ。」

秀一

「（魔力も通わせてない石の気配を読んだ！！）この短時間で・・・
康太郎君はバカだが・・・」

イズナ

「この子らバカ2人だけではなーい！！私だってパワーアップした
のよーー！」

コナン

「イズナちゃんも修業してたの？」

イズナ

「私はスゴイ女だから修業なんかしない！！」これを見なさいコナン
君！ディストリアの地底湖で見つけた、4つ目のマジックボールセ
ット！！」

イズナの左手の平に、マジックボールが入っていた。

コナン

「えーっ！？どんな力を創造したの！？」

イズナ

「ウツフツフツ、それはまだ秘密なのよ。」

哀

「何いばつてんの。創造して造ったの私でしょうか？」

イズナ

「つるむむーいつ！！」

カミュ

「2NDバトルの勝利、おめでとうございます！それでは早速ですが、明日の3RDバトルの人数とフィールドを決めさせていただきます。」

ディールゼイヴの姫が、ダイスを2個投げた。

コンッ！

5 4

カミュ

「5VS5！－氷山群フィールド！－！」

哀

「氷山？」

イズナ

「それよかお酒～つ。私もう疲れたあ～つ。」

「あの・・・」

1人の女が、哀達の前に現れた。

「み、見事な戦いでした・・・あ、明日はよ、よろしくお願ひします・・・」

康太郎

「・・・誰？」

「わ、わあっ、スミマセン・・・名前も名乗らず出て来てしまってス、スミマセン！わ、私はペントテュラムアッシュのロマネコンティと申します。あ、明日のバトルに出ると思いますので、ごあいさつに・・・」

「

コナン

「何？ちつとも悪い人に見えないよ？」

ユーリ

「ペントテュラムにもこんな子がいるんだなあ・・・」

康太郎

「えーと。」

ロマネコンティ

「そ、それでは失礼します！..」

ピューッ・・・

シャルトリューズ

「（ロマネ・・・ついに、ナイト級の人間が動いた・・・）」

哀

「へへー、コナン君と松葉ちゃんが勝つたのねー、スゴイー！」

イズナ

「で、あなたが負けたと。男の子に甘えてる場合かー。」

玲子

「やがましいわー！」

「負けたって言つても、スゲヒ緊張感のある戦いだつたぜーー。」

「そりだー、あの冷撃も打たればよーー。」

「さすがは我々メアリーデのボスねー。」

「さすがボスーー。」

「ボスーー。」

哀

「あーー、アンタらーー？」

第2章で哀達からイズナを盗もうとした人達。

「まあまあ哀君。過去は水に流そうではないか。」

哀

「それは私のセリフでしょーー。」

「しかし・・・我々もビックリしてるんですよ哀君ーー、我々が盗も

うとしていたイズナが・・・ベンテュラムと互角以上に戦える、
RINGだったなんてね！！」

「頼むわ、なんて凶々しいけどな、哀。殺された人々やアタシ達メ
アリードの仇を、ボスと一緒に晴らしてやつて！ボスはああ見えて、
仲間思いの良い人なんだ。殺させないでくれ。」

ユーリ

「フフ・・・懐かしいな。」

康太郎

「何がですか？ユーリさん。」

ユーリ

「8年前の組織対戦の時もな、勝つた日はひつしてみんなで酒なん
ぞ酌み交わして笑っていたんだ。」

秀一

「覚えている。」

瑛祐

「あの時は明美さんがいて、色々希望を『えでくれましたよね。』

「『悪いヤツが栄えた試しはないのよ！』とか、『アタシ達は必
ず勝つ！』と言つて、いつも励ましてくれたっけ・・・明美さん
が今いれば・・・」

哀は無言でイズナの近くに行つた。

哀

「イズナー！」

イズナ
「うにゃ？」

哀はイズナの手から酒瓶を引ったくつた。

ガツ！

イズナ

「あつ・・・バカ！－それはっ・・・

哀はそのまま、一気に酒を飲んだ。

グーグー！

「おおーっ、哀ーっ！－良い飲みっぷりじゅねーかあー－！

やさやさや！

哀は酒瓶を地面上に投げつけと、叫んだ。

哀

「この世界は私達が守るの－－！－？私達は必ず勝つ－－明美の妹が言つてゐるよ。信じなさい－－！」

「マ・・・マジ・・・・？」

哀

「ヒック。」

哀せ田がトロソとなると、バタリと倒れた。

バタリ・・・

「わーっ、倒れたーっ……ちつぱん子供にお酒はいかーん……」

コナン

「子供じやなこでちゅ。赤ひやんでちゅ。ー。」

ベローン・・・

コナン、またしても・・・

「ハーツかそり、今の話・・・」

ゴーリ

「ああ。」

ジン

「この顔を良く覚えておぐが良い。コイシは間違になく明美の妹!ー。」

ゴーリ

「我々の新たなる希望だー。」

松葉

「(この戦い・・・糸を引いてるのせダーランとかいつ人間とかしゃべ。アンタなんや?!)」

「(さすが出したるわ。)」

ペンデュラム城

ビターズ

「・・・まさか、もうあなたが出るとはね。驚いたわ。ロマネ。」「イ、イヤー、あのー・・・アハハハハ。じ、実は私が一番驚いてるんですよ・・・」

ビターズ

「どうしてビショップのアタシよか、あなたが先なの?ダゴンの考えが全くわからないわ!-」

「じ、実のところ私にもよくわかつていないのでよ。『君なら大丈夫だよ』って・・・ど、どういう意味なんでしょう?うーん。」

ビターズ

「(相変わらずイライラする子ね・・・)とりあえず哀を殺さないでよ!-ヤツをブチ殺すのはアタシだからね!-」

ロマネコンティ

『ペンデュラムアッシュ構成員

』クラス=

ナイト』

「ウフフ・・・瑛美さんも同じ事・・・言つてしましましたね。ダメですよ・・・そんなに期待させちゃ・・・」

ペンデュラムアッシュ・ナイト級の人間は、別名『トゥエンフォルアック』とも呼ばれる。

トウエンフォルアック
二十四星座。

24人のナイトが存在するからだ。

その中の一人、ロマネコンティ。

明日の3RDDバトルにて・・・

その姿が明らかにされる・・・

次回、あの女が見参!!

ファイル574・遅れて来た女、リアン！！

カミュ

「さて・・・本日の3R Dバトルですが・・・アルの5人は・・・誰ですか？」

赤井秀一・灰原哀・東宮康太郎・江戸川コナンの4人が名乗り出た。

「あのメンバーか！」

「4人だ。松葉か玲子は出ないのか？」

ユーリ

「2人共乗り気じゃないらしい。しかも玲子は昨日の呪いが祟つてから、男の子とイチャイチャするんだと。」

瑛祐

「心配ないよーちゃんともう1人いるんだからー出て来な、5人目！ー！」

瑛祐が指を差した方向に、リアンが現れた。

リアン

「おはよう、諸君。」

カミュ

「ー！」

ジン

「リ・・・」

「rian!？」

「rianだーつー！」

「前回の組織対戦で明美の右腕だつた女！！」

「生きていたのか！？！」

「スゲー・・・アルにこんな隠し玉がいたとは・・・」

rian

「久しぶりやな、ジン。」

ジン

「スマン・・・オレは組織対戦前のテストに失格して、バトルに参加できない事になつてしまつたのだ・・・！」

カミュ

「そう、そしてあなたも参加できません。テストを受けていないのですから。いかに前回の実力者とはいえ、認める訳には・・・」

rian

「おい、そこのかボチャ！！」

rianが振り向いた方向、城の城壁にドレイクがいた。

ヒョウウ・・・

リアン

「8年前は引き分けやつたな。どや?ケリつけたくないか?」

ドレイク『……。カミュー……』

カミュー

「あつ・・・はい……ドレイク様……」

ドレイク『今ダゴンからの伝言が届いてね、偶然だがオレと同じ答えが出た!特例として、リアンの組織対戦参加を認め、また今後来たヤツでもテストに合格すれば参加を認めると……』

「な、なら・・・陣さんも・・・」

ドレイク『ソイツもダゴンとの意見が一致しててねえ・・・ヒュヒュ・・・『裏切り者に用はない……』』

ジン

「……」

康太郎

「ガツカリしないでください、ジンさん!…ジンさんはボク達を鍛えてくれてるじゃないですか!成長見せましょうね、哀さん!…

哀

「ええ!」

カミュー

「それでは』の5人を・・・氷山群フィールドへ!…ワープゲート!…』

哀達は、ワープした。

組織対戦3R Dステージ 氷山群フィールド

哀
「わーっ！本当に氷山だわ！！」

康太郎
「あのさ、氷口に落ちたら死ぬ？」

カミュ

「多分。」

康太郎
「でしううね・・・」

コナン

「ねえ。ペンデュラムのメンバーはいないの？」

カミュ

「それが・・・そのう。1人・・・寝坊した人がいまして・・・」

哀
「寝坊！－！ペンデュラムが寝坊だつて！－！」

哀が大笑いしていると、空間が光った。

ヴン・・・

カミコ

「あー来たようですね。」

ドン！

2人の男と2人の女が現れた。

哀

「4人しかいない！？後の1人は・・・！？」

歩

「ここで転んでいるわ・・・」

哀はコケた。

ザ・・・

ロマネコンティ

「み、みつともないトコ見せてしまいました・・・し、しかも寝過ぎてしまつて。きょ、今日の戦いの事考へたら眠れなくて・・・今日はよ、よろしくお願ひします・・・」

ニッコニッコ

哀

「昨日の変な人だわ！」

コナン

「うーん、本当に悪い人に見えないなあ。」

リアン

「覚えとるか、シユウ?」

秀一

「ああ、8年前にもいた女だ。」

リアン

「あの時は確か、ルークがビショップ級やつたが・・・ナイト級になつとるわ！」

チリーン・・・

リアン

「あん時は何もできんかったアンタが組織対戦に出とるくらこや。時間は確かに動いとるつて事やな！いきなりアタシが出てやる。」

パキポキ・・・

リアン

「ナイトの姉ちゃん！出で来おくんのか？どの子が相手でもええんやで。」

ロマネコンティ達4人は、沈黙している。

そんな中、一人の男が進み出た。

「どいつもコイツもビビつてんのか！？だらしねえんだよバーカ！
！オレが・・・こんなポンコツ速攻倒してやらあ！！」

ぬう・・・

「そしたら意氣地のねえロマネー！オマエが格下げされて・・・オレがルークからナイトに2階級特進する事になるだろうなー！」

ロマネコントイ

「そうなつたら・・・仕方ないですよ。がんばってくださいねアブサン・・・。」

「（情けないぞよー！なぜここの娘がナイトなのじやー？）

歩

「アタシもあの娘は『メン』だよ。行きなアブサン・・・。」

「・・・」

アブサン

『ペンドテコラムアッシュ構成員

＝クラス＝

ルーク

「ギヒッ・・・オレがオマエを殺したら、ドレイクもさぞ悔しいだろうなあ・・・。」

ザ・・・

リアン

『FBI捜査官』

「威勢のええ若造やな。勇気だけ高ひ置つたるわ。」

カミュ

「3RDバトル1戦目・・・始め！！」

アブサン

「ガーディアン・R I N G・・・魔神のランプ！！」

ボンッ！

アブサン

「教えてやるぜ、F B I 捜査官のリアンちゃんよ！オレをルークと思つてナメるな！！ベンデュラムには人間によつて級クラスが存在する！だがその階級に『強さ』が比例してるのはかぎらねえ！！ルークだってビショップよりも強いヤツはいるし、ロマネみてえなアホナイトもいる！！要は：R I N Gの使い方！それによつちや金星だつて取れるのさールークのシャルトだつて玲子つて女倒したしなあ！！そしてこの…R I N Gは、大金星を取れる…R I N Gよ…！」

アブサンはランプをこすつた。

ゴシゴシ・・・

アブサン

「出でよ、ランプの精！！」

ランプから魔神が出て來た。

アブサン

「コイツはオレの第6感との波長が一番合つてナイトの人間だつて簡単に扱えねえハズの代物よ…！わかつたか？オレはテメエを…」

「

アブサンの言葉を、リアンが遮った。

リアン

「あー、わかつたわかつた。来い。」

「ナン

「ダ、ダメだよリアンちゃん！！そんな余裕見せちゃ・・・玲子さんみたいに負けちゃうよーっ！..」

玲子

「ムカ・・・」

康太郎

「た、確かにあの魔神強そう・・・」

秀一

「イヤ・・・君達はまだ・・・わかつていない。あの娘の怖さを！..」

アブサン

「余裕かまして死にやがれ！..」

魔神はリアンへと突っ込んだ。

だが・・・

リアン

「やれやれやな・・・」

リアンはやうにいつと同時に雷を拳にまとわせると、一撃で魔神を粉砕した。

ドン！

アブサン

— なあ！？

驚くアブサンの目の前に、リアンが現れた。

ナ

リアンは鉄拳をアブサンの腹にブチ込んだ。

デゴシ！

そしてアブサンの背中をつかむと、引きずりながら歩き出した。

「アンタは3つ。間違うてた。」

ズル、ズル・・・

アブサン

「！」

リアン

「一つ目。：RINGつちゅうのは完全にシンクロするまでに時間がかかる。集中力、第6感。魔力を戦闘中に練り上げる。別の意思を持つガーディアンやつたら、なおさら精神力が必要や！初めっから奥の手出しどのアンタは・・・アホや。」

リアンは氷口までアブサンを引きずつて来た。

アブサン

「ヒツ、ヒイイ・・・・」

リアン

「二つ目・・・アタシと戦ひにせば早過ぎやつたなあ。」

アブサン

「やつ・・・止めろ！止めて！わかつたから止めてーつー止め・・・」

リアンはアブサンを氷口の中に突き落とした。

トンッ！

アブサン

「ギャアアアア・・・・」

リアン

「三つ目・・・誰にむかってタメ口きてんねん。」

これがリアンの強さ・・・・・！

次回、康太郎の雪辱戦！！

ファイル575・男を見せろ康太郎！幻惑のキノコ！

カミュ

「第1戦つ・・・リアンの勝利！！」

哀

「スゴイわリアンちゃん！魔神を一発で倒した！！」

リアン

「あんな魔力もろくに通つてないの、風船と同じやからな。」

コナン

「後、4人・・・」

歩

「やつぱりアブサンじゅダメだったね。次はアタシが出ます。」

歩が進み出て来た。

哀

「あら？歩ちゃんのチームは倒したのに、歩ちゃんはまた出るの？」

秀一

「やはりバカだ！ルールを全然理解していない。たとえチームが負けても、個人的に勝利した人間は次のバトルにも出られるんだよ。」

歩

「（姉ちゃん、頑張るからねっ！）あて、相手は誰！？」

康太郎

「ボクが相手だ！！」

康太郎が前に出た。

歩

「えーっ、あなたあ？ 1回アタシに負けたじやない。大して強くな
いんだから引っ込んでなさい！」

康太郎

「ボクが怖いか？」

哀

「ねえ、歩ちゃん！ 東宮君を、この前と同じと思わない方が良いわ
よ。」

歩＝ミモザ

『ペンドュラムアッシュ構成員

＝クラス＝

ルーキ』

「・・・オッケー。相手してあげるよ。今度は、殺す氣でね。」

カミユ

「第2戦、東宮康太郎ＶＳ西沢歩・ミモザ！ 初め！！」

力チン・・・

歩

「ドカンッ！－！」

歩は前と同じように、ボールを飛ばして来た。

歩

「（加速・・・曲がれつ！）」

ボールが不規則に曲がる。

康太郎

「（ジンさんのパンチはまだまだ見切れてないけど・・・この動きは、わかる！）」

康太郎は背後から飛んで来たボールを受け止めた。

バシイ！！

歩

「（つかんだ！？）」

だが、康太郎は手を押された。

フルフル・・・

リアン

「（カッ！つけるからや、このアホ・・・）」

康太郎はむき出しになつている地面にスコップを突き刺した。

ドス・・・

康太郎

「今度はじつちの番だ！！」

歩

「（あれが来る…？）」

康太郎はスコップを刺したまま、ゆっくりと歩いて来た。

ザツ、ザツ・・・

「ナン

「丸腰！？何考えてるんだよ康太郎君！…？」

歩

「バカだねっ！…悪いけど、連勝をせてもう一つ…！ × 6（ヘキ
サゴン）！」

そう言つと、ボールが6つに分かれた。

ギュン、ギュン・・・

康太郎

「今のボクじゃ見切れて5つ…まだまだジンさんとの修業が必要だなあ。」

そう言つと、康太郎は突っ込んだ。

ドンッ！！

歩

「捨て身の直進？本当にバ・カ」

康太郎はボールを避けながら、歩に近づいて行く。

後少しどうとこりで、ボールの破片が康太郎に当たった。

ゴッ・・・

歩

「おしかつたよ。」

康太郎

「イヤ・・・作戦成功だ！！」

歩

「何を・・・」

ビクン！

歩

「痛つ・・・」

歩が痛みに反応すると、腕のあちこちに何かが刺さっていた。

歩
「・・・?木の・・・トゲ?」

康太郎

「出で来い！！」

康太郎が叫ぶと、スコップが光った。

カツ！

スコップが光つた瞬間、歩の腕からキノコが複数生えてきた。

ポンポン！

步

「！？イヤーッ！！何よこれーつ！！？」

康太郎

ミケル・ダッシャー!! タイフ!!

步

「！…ぬ・・・ぬ・・・ぬ、抜けないよおおーー！（気持ち悪い）

歩がキノコを抜こうとしているところ、氷山が噴氷した。

ドカラアアアアン！！

步

「氷山がつ・・・噴氷したあーつー！」

続いて、歩の腕にミニマズがまとわりついた。

步

歩は暴れ出した。

バタバタ・・・

「な、何か……様子がおかしいぞよ！？」

ロマネコンティ

・・・・・幻覺です・・・・・

「何・・・? 幻覚?」

「あのキノコの形見た事あるよー・マラライダケーーー！」

哀

リアン

「食べ物つちゅうか毒キノコやな。幻覚作用が主な特徴や。UP系に入ると、神様が降りてくる感覚になるが・・・DOWN系に落ちてまうと・・・ああなる。」

步

「えいっ！..えいっ！..」

ロマネコンティ

「・・・バラライカさんが同じような事できます・・・か、彼は植物を操るネイチャー・R I N G使いですね・・・」

哀

「（試練の扉でジンと修業しながら、あんな新しい技を考えてたの

ね！頑張つてゐるぢやない、東宮君！――」

康太郎は歩へと近づいた。

康太郎

「そのキノコはボクしか抜けないよ！ギブアップするか、西沢さん？」

歩

「あ・・・」

康太郎

「ボクに抜かせてくれ！西沢さん！――」

康太郎の顔が、凜々しくなった。

パアアアアア・・・

歩

「・・・はい。ギブアップしまーすう」

歩は康太郎に抱きついた。

ボム

カミュ

「第2戦・・・アル、東宮康太郎の勝利！――」

バラライカ

『ペンドュラムアッド構成員

II クラス II

ナイト

二〇四

哀

「やつたじやない、東宮殿ーー！」

コナン

「ボク、見直しちゃつた！！」

「ま、あんなもんだよ・・・」
康太郎

リアン

「あんなキノコで勝つたぐらいでテカイ顔すんな。」

康太郎
「初めて勝つたんだから、讃めてくださいよーー！」

コナン

「おひなさん!! 次、ボケ出ますよおー!!」のまお3連勝だい!!

!

ロマネ・コンティ

「……………2750ですね……………そろそろ……………追って詰められてます……………」

「（出るのが！？ナイトの1人口マネー！）」

ロマネソンティ

「……といつ事で……勝つて来てください、トーリックさん……」

「

「何ぞよ、それ……？」

ロマネコンティ

「わ、私は男の子と戦つのがとても墨れへんなのです……それとも……コリンズを出ます?」

Mr・トーリック

『ペントラムアッシュ構成員

= クラス=

ビショップ

「わかつたぞよ……なりば、某が『ナナンと戦おつ……』

Mr・トーリックは進み出た。

ザ……

カミュ

「ペントラムアッシュ、Mr・トーリック……アル、江戸川コナン……第3戦……開始……」

Mr・トーリック

「INの勝負……もはや結果は明りかぞよ……」

リアン

「確かに……ナナン君は勝てへん。」

リアンとトーリックの言葉の意味は、一体……?

次回、コナンの弱点が発覚！！

ファイル576・ボク負けないよ!氷山群の「ナン」!!

Mr・トーツク

「5分で終わらせるぞよ!」「ナン殿!!スクリューブレード!!」

Mr・トーツクは螺旋状の剣を発動した。

ジャキッ!!

ギュルルルル!!

コナン

「フレアリング!!炎の剣!!」

飛んで来た剣を、コナンは炎をまとった剣で受け止めた。

カキイ!!

哀

「コナン君調子良いじゃない!!何が『勝てない』よ。リアンちゃん!!」

リアン

「・・・アンタ・・・なーんも見えてへんのやなあ・・・」

コナン

「ハア、ハア・・・」

Mr・トーツク

「フツフツフツ……もつ2分は経ったぞよ。限界は……近いであらう?」

ピシ・・・

コナン

「(炎の剣が……形を成さない……)」

Mr・トーック

「(君)はあなたにとっては地獄のフィールド……」

ギュル!!

秀一

「コナン君の扱う・RINGの属性は『炎』……彼は常にその・RINGとのシンクロを余儀なくされるため、低温や氷に体質からして弱体化している。簡単な事だ。氷山群フィールドという冷氣の地で彼は誰よりも体力を消費している。それによる肉体的・精神的疲労は・RINGとのシンクロを鈍らせる。魔力は低下し、彼に勝機はない!!」

康太郎

「そういう意味だったのか……マズイよ袁さん! ギブアップさせた方・・・」

哀

「コナン君一つ……もう良い。次、私やるから! ……」

コナン

「まだ・・・やれるよつ。」

「・・・！」

「・・・！」

「・・・！」

コナン

「（大丈夫・・・最後の一撃のために・・・弱つてゐる魔力を少しづつ練り上げたんだよ。）」

Mr・トニック

「後・・・・1分！！」

チャラ・・・

コナン

「フウちゃんつ。」

巨大化した炎のダルマが、Mr・トニックに向かつて行つた。

オンッ！！

Mr・トニック

「ここの状況下でよくぞ出した！！しかし……某とてこれを予期しなかつたワケではないぞよ！…」

カツ！

Mr・トニック
アンガードアンカ
怒之碇！！！」

巨大な碇が、ダルマを押しつぶした。

ドカアアアン！！

哀

「コナン君ーっ！…」

秀一

「勝敗は明らかだ。コナン君のギブアップといつ轟で良いかな？」

M・・・トニック

「かまわんぞよ。（コナン殿は殺す事ができぬ。の方に命令されているからな。）」

『新一は生かして私の前に連れて来い・・・』

哀はコナンに駆け寄った。

哀

「大丈夫、コナン君ー？」

コナン

「うん・・・スゴく疲れちゃった・・・ゴメンナサイ・・・諦めてなかつたよね？ボク・・・」

哀

「（バカ・・・やつぱりあの時の、私の言葉を・・・…）」

リアン

「コナン君はしばらく戦線を離脱せざる。この子はもう限界や…！アンタよお、哀ちゃん。この子とつるんでから実は何も見えてなか

つたのかもなあ。」」の子はアンタより年下の一歳なんやで。少し
せ、休ませてやれりや。」

哀

「立てるへ。」ナン君。」

「ナン

「う・・・うん。」

カミュ

「第3戦一つ…ペントラムアッシュドロー・トーシクの勝利…！」

「ナン

「…ねえ哀ちゃん…ボクつて…足手まといになつてな
いかな？」

哀

「んな事ない…あなたは立派に戦つてる…。」

哀は「ナン」を背負つた。

「ナン

「わっ・・・」

哀

「ただ…これからは諦めないだけじゃなくて、ムリもしないで。
あなた死んだら、みんな悲しいのよ。私もね。」

「ナン

「うん・・・」

衰弱負けしたコナン・・・

次回、呪いVS聖なる守護者！！

ファイル577：哀VSココンズ・ロウソクの呪いと聖なる守護者！－

組織対戦3RDバトル、氷山群フィールド

1戦目、リアンVSアブサン 压倒的な実力差でリアンの勝利。

2戦目、康太郎VS歩 ミラクルマッシュルームという新技で康太郎の勝利。

3戦目、コナンVSミー・トーック 冷氣で衰弱していたコナンは、ミー・トーックのアンガードアンカーに沈んだ・・・

3RDバトル残りし戦士は、4人・・・

Mr・トーック

「楽な勝負だつたぞよ。しかし・・・残りの2人は注意した方が良いぞよ。哀と秀一というたか。楽には勝てぬハズ！！」

ロマネコンティ

「そ、そうですね、どうしましよう・・・ココンズさん?どっちが先に出ます?」

ココンズ、無言。

ロマネコンティ

「・・・ココンズ・・・さん?」

コックリコックリ・・・

ツルッ！

「コーンズはトに落ちた。

ベシャツ！

「モグワーーー？」

シーン・・・

「あひ。アブサンは？」

歩

「一戦目で死んだじやないっ・・・って・・・アンタ・・・もしか

して・・・今まで寝てたのーつーーー？」

「まあ真打ちは後で登場つひまうひまち。残つてるのはコーンズ
と誰や？」

ロマネコンティ

「わ・・・私です・・・」

「さよか。ほんならコーンズ出でみよう。向こうで残つてるんは誰
と誰や？」

秀一

「次のペンドュラムはあの関西弁の女か・・・ナイトの女は最後だ
な。ナイトはオレがやる。行つて来い、哀君ーー！」

哀

「命令されるの、何かムカツク……」

秀一

「忘れるな。君はキャプテンだらう？戦闘能力的にまだ未熟な君は、ナイトと戦うには危険すぎる！君はどんな事があつても勝ち続けなければならぬ。キャプテンの負けはそのチームの負けになるのだから。」

哀

「わかったわ！行くわよイズナー！」

哀は進み出た。

「コリンズ

『ペンドュラムアッシュ構成員

『クラス』

ビショップ』

「へへ、ジルネヴァを倒したアンタか？悪くないなあ。」

カミュ

「ペンドュラムアッシュ、コリンズ！！アル、灰原哀！！勝負・・・

開始！！」

ス・・・

コリンズは哀に左手を向けると、一言叫んだ。

「ドーン。」

哀

「？？今・・・何されたの？」

コリンズ

「アンタはこれでコリンズに呪われた。カワイソウなこいつちやーー！」

コリンズはシルクハットを脱いだ。

コリンズ

「このロウソクが燃え尽きた時にはな・・・ロウソクになったアンタも消えてまうつちゅうんじやーー！」

コリンズの頭の上に、ロウソクが燃えていた。

哀

「なつ・・・」

康太郎

「何ーっ！？？」

秀一

「ヤツのリングを壊せ哀君！！ダークネス・R I N G・キャンドルボディー！ヤツの言つている事は本当だ！！」

コリンズは・R I N Gを口に入れた。

パク！

ゴクン！

コリンズ

「タネも仕掛けも・・・消えてしもたつハーヒヤー。」

哀

「お腹ブン殴つて吐かせてやるー！イズナ・バージョンーー！」

哀はイズナをハンマー モードにすると、コリンズに突っ込んだ。

ドンシー！！

ガツ！

ガキッ！

コリントス

（ホイホイせりへん！！ちよいじ速いねえ！！？）

L

哀はコリンズの腹に鉄拳をブチ込んだ。

ゴッ！

コリント

「ゲホ・・・本当に吐きそうになつてしまつて笑えない！作戦変更や

ね
「

コリングズは左手に持ったウェポン・RINGで、ロウソクに火をつけた。

ボンツ！

ドロオオオ・・・

哀の溶ける速度が速まつた。

哀

コリンズ

「一秒でも速い！」、燃えぬきでもらうのも懸くない！！ダークネス・RING・キヤンダルボディー！」コンズの頭の上にあるロウソクが今のアンタつちゅうこいつちやー！アンタは今ロウソクなんぜ。もうすぐドロドロに溶けて消えてまづ。」

秀
—

・マスイな・・・よりによつて、ダークネス・RING使いとは・
・ダークネス・RINGはクセのある・RINGだからタチが悪い。
2NDバトルで玲子君が苦戦を強いられたように、真っ向からの防
御が数限られる！！」

康太郎

「あの技を破る方法はあるんですか？」

コナン

「2つしかないよ。：RING自体を破壊するか、ホーリー：RING—！」

リアン

「チッ・・・一戦四のタメを出でさせ、おまけにこいつた・・・。」

「オイオイ・・・何か・・・ヤベエぞ哀ーー！」

松葉

「哀ちゃん・・・ーー！」

ポタ、ポタ・・・

哀

「コリングズって言つたわね？あなた、どうしてペンデュラムなんかやつてるの？あなたも、人を殺す事が楽しいの？」

コリングズ

「・・・人殺しには興味あらへん！ただコリングズって女は、スリルと刺激が欲しいんや。組織対戦なんて刺激的や。悪くないやろ？ギリギリの命を賭けた『ゲーム』に興味あるんや。コリングズが負けて死んでも悪くない！アンタに勝つてスッキリするんも悪くないっちゅつこつちや。」

哀

「ただのバトルバカがあなた？単なる悪者じゃないわね？」

コリングズ

「そういう意味じゃアンタ側について、ペンデュラムの連中と戦つてたんも悪くない話やつたなあ。」

哀

「イズナーー！」

イズナ

「うん！使う時が来たわね！！成長するのは緊張するけど・・・あれしかあるまい！！」

哀は魔力の波長を変化させた。

ス・・・

コリンズ

「（魔力の波長が変化したな？ガーゴイルってヤツか！？）」

康太郎

「ガーゴイル！？！」

秀一

「イヤ、ちがう！？」

リアン

「（この涼しげな魔力・・・ま、まさか・・・）」

哀

「バージョン4！？」

ポワ・・・

コリンズ

「！？」

哀

「聖なる守護者・ルピナス！？！」

哀の背後に、美しき聖女が現れた。

パアアアアア・・・

ルピナスが両手を哀に向けると、溶けるのが直り出した。

スウウ・・・

コナン

「ど、溶けるのが直つていいくつ・・・あれがイズナちゃんの4つ目的能力！！」

リアン

「ホーリーの力を持つガーディアン！－この1戦を前に、あの力を創造してたんはラッキーやつたな！－（これで哀ちゃんはダークネスの呪いを無効化できる・・・明美さんの妹・・・！－）」

哀

「よし！これでまた1から戦いましょう！－とことん相手してあげるわよコリンズ！－こつからは・・・ただのケンカよ！－」

コリンズ

「・・・アカンなあ・・・失敗してもたなあ・・・アンタみたいなおバカさん相手に、キャンドルボディなんか使わなきゃ良かつた・・・最初っからただのケンカ・・・してれば良かつたなあ・・・」

そう言ひコリンズの頭が、溶け出していた。

ドロ、ドロ・・・

哀

「コリングズ！？」

秀一

「代償だ。ダークネス・R I N Gは、術者に何かしらの反作用をもたらす。キャンドルボディの代償・・・『失敗は術者を逆に溶かす』。」

コリングズ

「アンタ！ペンドュラムはナイト級からがホンマの戦いやで！ホンマの敵は・・・これから出て来るつちゅうこつちゅう！負けんなや・・・（敵にじつけ言葉を贈つて、消えてくのも悪くない・・・）」

その言葉を最後に、コリングズは完全に溶解した。

ドロオオオ・・・

哀

「コリングズ・・・」

カミコ

「第4戦！！灰原哀勝利！！これによりアルの勝利ですが・・・戦士の出場権をかけるため、戦いは続きます！！最終戦！！」

ロマネコンティ

「あ、あらり・・・ついに出番・・・来ちゃいました・・・」

次回、ついにナイトの女が出陣！！

勝利と引き替えに失つたのは、心通わした少女の死・・・

ファイル578・もう一人の不死の絆！赤井秀一VSロマネコンティイー！

哀

「何とか勝つて来た！」

康太郎

「スゴイですよ哀さん！何でこうんですかあの女の子！」

哀

「えーと、ルピナス！」

康太郎

「でも・・・あれもイズナさんなんだよね・・・」

コナン

「ルピナス、か・・・想像で創造したっていうが、妄想で創造したガーディアンだね！哀ちゃんあんな風になりたいって事？」

哀

「妄想なんかしてません！！」

リアン

「ま、姿形はどうあれ、あの能力をプラスしたんは正解やつたな。ルピナスを創造してへんかつたら今頃アンタは死んどる。」

哀

「うん・・・でも代わりにコリンズが死んじゃった・・・あの子・・・ただの悪者じゃなかつたのに・・・」

リアン

「やうなきややられてたんや……」「コンズかでペントコラムに入つた時から覚悟は決めとつたハズやで。アンタも覚悟を決めるんや、哀ちゃん！思い出し！ペントコラムが何をした軍団か！組織対戦でアタシらに勝つた後、何をしようとしたる軍団か！……アンタの姉は希望となつた！戦いを迷つた、哀ちゃん！……戦え！……哀ちゃん！」

哀

「うん。」

秀一

「とつあえず生き残つた事を讃めるよ。次はオレだ。」

秀一が準備を始めた。

『ペントコラムはナイトからがホンマの戦いや。ホンマの敵はこれから出て来るわ』
『』

哀

「き・・・『氣をつけて、赤井さん！…』」

秀一

「ああ。」

ロマネコンティ

『ペントコラムアッシュ構成員

= クラス =

ナイト』

「そ・・・それでは・・・私も行つて来ますね・・・」

テテテ・・・

Mr・トーヴィク

「（某は・・・8年前の組織対戦に参加していながらナイトの実力
といつものを知らぬ。見せてもらひぞよ、ナイトの力を！…）」

カミコ

「3RDバトル最終戦！！赤井秀一vsロマネコンティ！！始め！」

秀一

「14トーテムポール！！」

ドン、ドン！

ロマネコンティ

「あわわっ・・・イヤーン！..」

ヒヨイッ！

秀一

「イッ・・・イヤーン！..？」

ロマネコンティ

「ダメ～ッ。」

ヒヨイッ！

ロマネコンティ

「キャ～ツー！」

ヒョウイツ！

ロマネコンティは悲鳴を上げながら、ポールを抜けた。

ズズ・・・

秀一

「（全てのポールを・・・抜けた！？）」

リアン

「油断すんな！…来るでー！（運良く逃げたんといひやつ…見切つ
とるーーー）」

ロマネコンティ

「じゅ・・・じゅあ次は・・・私の番ですね。」

ロマネコンティの団づきが変わった。

ロマネコンティ

「キュー・ブーストーンーーー！」

氷山の地面がばがれ、多数の石の立方体になった。

カキ・・・

ロマネコンティ

「はねなさい・・・」

石が秀一へと向かつて來た。

秀一

「（石……使い……）」

秀一は石を避け、その上に乗つた。

だが・・・

『3、2、1、』

ピーッ！

ドカン！！

石は突然爆発した。

秀一は間一髪で逃げた。

秀一

「爆弾石の……ネイチャーリング……」

ロマネコンティ

「当たり……です……！」

そう言つロマネコンティが、秀一の腕にある印に気づいた。

ロマネコンティ

「…あなた…ダゴンの…せ、洗礼を受けているのですね？…
…なら…私と…同類ですね…」

やつぱり、ロマネコンティは左手のソテをめくった。

秀一

「なつ・・・なぜだ！？なぜダゴンは味方のオマエに・・・その印を入れた！？それは不死の絆『デスター』印が体中に回りきつた時・・・その人間は、死する事のない生ける屍と化すと知っているのか！？」

コナン

「呪い・・・！？」

哀

「（じやあ赤井さんも、その呪いを・・・！？）」

ロマネコンティ

「なぜ・・・そんなに激昂するのですか？これは・・・選ばれし者の証明ではありますんか・・・私は・・・自ら望んで洗礼を受けました・・・彼^{ダゴン}と同じ道を歩むために・・・」

カツー！

秀一

「なぜだ！？自ら生ける屍を望むのは、なぜだ！？オマエがそこまでダゴンと共にいる理由・・・それは何だ！？」

ロマネコンティ

「彼が私の・・・居場所だから・・・私は子供の頃、両親を早く亡くしました。たった一人で生きていました。周りの人間は無関心だった・・・みんな、私を見て見ぬふり。あるいは、本当にその視界

に入つていなかつたのかもしぐれませんね・・・放つておいたらそのまま死んでいたであろう、脆弱な娘など・・・そんなある日、彼が現れたんです・・・私は大きなフライドチキンを差し出してくれた彼・・・そして、『一緒に来るかい?』・・・彼はただ一言そう言いました・・・

ドカン!!

秀一

「くつ・・・(強い・・・!-)」

ロマネコンティ

「そしてダゴンは・・・色々・・・教えてくれた・・・わ、私の中に眠つていた第6感・・・戦い方・・・生き方・・・世界を私達だけの物にするという考え方・・・私はそれに乗りましたよ・・・?あなたのそれも彼に認められた証じやないですか・・・こっちの人間になりませんか?」

秀一

「オマエは利用されてるだけだ!!なぜそれに気づかない!-」

ロマネコンティ

「それでも良いんですよ・・・彼に必要とされてるならばね・・・」

そつと、氷山の氷口の氷岩がヘビ状になつて出て來た。

ドロオオオ・・・

ロマネコンティ

「氷岩・・・はねなさい・・・」

アイススネーク

キシャアアアアアア・・・

氷の蛇が、秀一に襲いかかった。

ドガア！！

秀一

「（）これが・・・ナイトの力！－（）」

吹っ飛ばされ地面に叩きつけられた秀一に、そのまま蛇が突っ込んだ。

ドゴオオオ－！

哀

「赤井さんーつ－！」

哀が叫んだ、その時・・・

ピキ・・・

バキヤアアアアア－！

氷の蛇が碎けた。

「おお！－石の蛇が碎けた－！－」

「何があつたんだ！－？」

玲子

「喰わせたのよ。14トーテムポールを蛇の口の中にねじ込ませたのね。コンマ1秒の判断……やっぱ強いわショウちゃんは！」

松葉

「そやけど……」

秀一

「ハア、ハア……」

リアン

「：RINGの乱発で、集中力が途切れたか！精神力の限界や！負けを認めろ、ショウ！…」

カミコ

「ギブアップを宣告しますか？赤井秀一……」

秀一はゆつくりとロマネコンティに近づく。

ザツ、ザツ……

哀

「バカ、赤井さんあなたーっ！…ムチャしてんじゃないわよーっ！
！死ぬわよバカーッ！！」

イズナ

「わからないの哀ちゃんーあの男のプライドと意地を…！…秀一君は負けたくないのよ。ペンデュラムアッドにも…あなたにもね。」

ロマネコンティ

「わ、私は……できれば人を殺める事はしたくないのです……ギブアップしてください秀一さん……そもそもあなたは爆死します……」

秀一

「……ハイスピード……14……トーテムポール……！」

トーテムポールが、強烈な速さでロマネコンティの右頬を直撃した。

ドオオッ！！

ロマネコンティ

「……」

秀一

「ギブアップだ……今のオレはナイト級にそり遠くない。通用する事を理解した！足りないものは一つ！魔力の持久力！！すぐに追いついてやるぞ……」

カミコ

「勝者……ペンドコラムアッシュ・ロマネコンティ……」

ロマネコンティ

「（秀一さん……次の戦いのために割り切りましたね……ダゴンがどうして印を入れたかわかりましたよ……素晴らしい素質です……）」

カミコ

「3RDバトル終了です！！生き残ったメンバーをティールゼイヴ

へー！

哀達は『ティールゼイヴに戻つて來た。

ウン・・・

哀

「ただいまー玲子さん、松葉ちゃん！色々あつたけど勝つて來たわ
ー！」

玲子と松葉が、ある一点を見上げている。

哀

「ん？」

「・・・あれ・・・見ろよ・・・ー！」

「生きてやがった・・・ー！」

「生き還つてたんだあーーー！」

哀の視線の先には、ダゴンがいた・・・

後1歩及ばなかつた秀ー・・・

次回、25人のナイトが集結！！

ファイル579・ダゴンの狂氣とアウェンフォルックー再び試練の扉へ…

哀

「あなた・・・ダイ!『ティストリアのダイじやない!』ヤツホーツ、元氣一つ!?」

イズナ

「あの時感じた感覚・・・いつこう事だったのね・・・!」

哀

「何言ひてゐの? イズナ・・・」

リアン

「アンタ・・・何勘違いしとんねん! 哀ちゃん! ! アイツは・・・
ペンドュラムアッドの司令塔! ! ダゴンや! ! !」

哀

「(アイツが・・・アイツが! ! お姉ちゃんにキズをつけた男、ダゴン! ! !) テツ・・・テメエそこ動くんじやないわよ! ! ブツ殺・
・・」

イズナ

「待つて、哀ちゃん! ! !」

リアン

「動かへん方がええんはアンタや! ! 今のアンタじや、ヤツにキズ1
つつけられへん! ! !」

「その瞳に・・・良く焼きつけるんだ。ヤツこそ・・・倒さねばならない最大の敵だ！！」

ダゴン『ロマネ・・・上手にできたねえ・・・誉めてあげるよ。』

ロマネコンティ

「あ、ありがとう」やります・・・！光榮ですダゴン・・・

ダゴン『アルやFBIの君達もなかなか頼もしい。フフ・・・25人がゲームに興味を持ち始めたようだよ・・・』

ヌツ・・・

23人の構成員達が、ダゴンの周りに現れた。

ザツ・・・

姿形もそれぞれで、恐ろしい。

松葉

「（あの女は・・・いない。）」

玲子

「魔力がケタ外れに強いわよ・・・あの24人・・・」

リアン

「ロマネも合わせて25人！――十五星座トウセンフォルックのナイト！――」

ダゴン『ねえ。哀！ボクはこの世界が大っ嫌いだ！！臭くて臭くてたまらない。花も木も石も水も鳥も村も町も山も・・・でも一番臭

いのは・・・人間だ。世界の中心に置くのは常に自分。他者をキズつけ、妬み・・・嫉み・・・それでもいつも自分が正しいと思っている。嫉妬・憎悪・背信・不遜・傲慢・欺瞞・・・それが人間の本質・・・醜悪だね・・・見せかけだけ。皆バカばっかりだ。だから全て殺す事を決めたのさ。ペンドュラムの人間は、この世を見限つた者が集まつた。逆に言えば、世界から捨てられた者達ばかりなのさ・・・だからボク達は1つになつた。・・・どうかな?君さえ良ければ、こちら側の人間になつても良いのだけれど・・・

哀

「ふざけるな!!アンタのやつてる事こそ自己中心的でしちゃうが!
!私はアンタをブッ倒す!!」

ダゴン『明美と同じ事を言つんだね。それ故に哀れだ・・・これを・
・あげるよ。』

そう言つと、ダゴンはボールを投げた。

コツ!

ダゴン『イズナのボールだ。強くなつて会いにあいで。まさか8年前ボクが使つていた:R I N Gと戦うとは思わなかつたな。ねえイズナ?2人共・・・楽しませてくれよ・・・』

ダゴン達は消えて行つた。

ヴン・・・

イズナ

「(あの男が・・・過去私を使つていていた男・・・!)」

哀

「（倒すべき・・・敵！）」

数分後

カミコ

「さて・・・組織対戦は3日おきに、1日休みがあります。明日は『
自由に観戦^{クシロ}ください！』

玲子

「よつしゃーナンパよー！」

秀一

「そんな事してる場合かバカ！！」

康太郎

「やつぱり修業ですよね・・・」

哀

「その前に、試してみたい事があるのー赤井さんの呪いを今から解
く！ルピナスでね！」

哀は魔力を注いだ。

イズナはルピナスの姿になると、秀一に向けて光を当てた。

パアアアアアア・・・

だが・・・

シーン・・・

何も起きない。

哀

「ルピナス?」

フルフル・・・

ルピナスは消え、イズナに戻った。

フツ・・・

哀

「赤井さん！-！」

秀一

「オレの呪いは、ダゴンにかけられたものだ。ヤツを殺す以外、消す事はできない・・・気持ちだけ受け取つておく。ありがとう、哀君。」

康太郎

「でも・・・ダゴンは死んでも生き返るゾンビなんでしょう? どうすれば解けるんですか! ?」

秀一

「後々考えるさ。それより、ジン!」

ジン

「ああ。哀、康太郎、秀一、玲子、松葉！オマエ達には今から、1日分試練の扉に入つてもらう！…」

コナン

「あの…ボクは？」

リアン

「言つたハズやでコナン君！アンタは少し休んでおらう。」

コナン

「シユン…」

コナンはシユンとした。

哀

「一日つゝ言つと、あの中じや 60日分ね！…」

ジン

「それも、今回は特別メニューだ。もつオマエ達に余裕はないのだが入つて来る事は必至！！」

リアン

「確かに…ナイト級が動き出した。これからバトルにナイトが入つて来る事は必至！」

ジン

「覚悟は良いな？5人共。」

ジャラ…・

ペントラム城

ペンドュラム城では、ダゴン達25人のナイトが集まっていた。

・
・
『
ダゴン』うーん……でもねえ……他にも出たいって人もいてね・

「知ったこいつちやないんだよおーー何なら邪魔するヤツブツ殺して
でも出てやるぞーー！」

ドレイク『ヒュヒュ・・・・言つてくれるなマラスキーノ。相手にな
つてやうつかへ。』

「まあまあ。仲間内で揉めても仕方ない・・・」

イフリート』言つたら聞かない子よ。彼女の好きにさせようかしら
ね・・・』

「決まりね！！」

そう叫ぶと、女はローブを脱いだ。

バサツ

マラスキーノ

『ペントテコラムアッド構成員

『クラス』

ナイト』

「4THバトルは私の物さーー、ギャハハハーー、絶頂しちゃうよーー
つーーー！」

ヤバそうな女性ナイト・マラスキーノが見参ーーー

果たして、哀達の運命は・・・・?

次回、修練開始ーーー

ファイル580・敵は自分自身!・シャドーヒューマンバトル!-

ヒョウウ···

哀
「···」

哀『あら? 今日はジン入つて来ないの?』
ジン『5人相手なんかするか!! オマエ達は今回···『ある意味
最も戦いにくい敵』と戦う事になる。』

玲子
「戦いにくい敵ねえ···男の子かしら。」

松葉

「松葉ちゃんは一つ。修行なんかしなくてもナイト級とやりあえる
つもりなのにつ。」

秀一

「5人を別々の場所に分けた···仲間同士戦わせる修行と思つた
が···ちがうのか···?」

康太郎

「ん?」

康太郎が足下に目をやると、地面から彼の影が出て來た。

ズル、ズル···

康太郎

「何だあーつ！？」

ドン！！

哀

一
はわわ
・
・
・
「

松葉

「アタシの影か……立体化しようた……」

ジン

「そういう事だ、5人共!!!今回オマエ達の戦う相手は自分自身!!
！ネイチャー・R I N G『シャドーヒューマン』！！影とはいえ、
魔力の強さも各々全て同じ！！体をイジメ抜いて魔力を向上させよ
！！魔力が高まれば、シャドーヒューマンも同じ魔力になつて応戦
するがな。己の敵は己という修行だ！！」

ルビアン---

玲子

「キヤ～ツ！」「

卷之三

秀一

（同じ能力も使うという事が！！） 14トーテムポール！！

タマノミ

グルル・・・

松葉

「こんなにやるう・・・リリまで・・・・・！」

康太郎

「うわあああん！！同じ強さだなんてウソだーっ！ボク・・・
こんなに強くないもん！！」

ジン

「それぞれが魔力値MAXの状態で攻撃して来るぞ！極限の力で立
ち向かえ！！己の限界を突破するのだ！！！」

哀

「ガーゴイルVS・・・ブラックガーゴイルつてところね・・・・
！（強くなる・・・アーツを・・・倒すのよーーー）ハアアアアア
！！！」

コナン

「・・・ねえリアンちゃん。お願いがありますつ。」

リアン

「何や？」

コナン

「ボクも試練の扉に入りたいです。」

リアン

「アカソウひめうつむやわ！」のバカ男！…アンタは休…」

コナン

「試練の扉の中だつたら、60日分休めるじゃない。」

リアン

「…・ゆづくつ休むつて約束できるか？」

コナン

「うん！でも休み終わつたらボクにも修行させで…・足手まとつて
ヤだもんね！…」

ペントュラム城

マラスキーノ

「ラン！…ラン！ラランランランランシ ラン ララン…妹お…!
私のカワイイ妹どこだいい！？妹おおお…！」

「ここにこらわよーお姉ちゃん。」

ス…・

ビターズ

「来たのね？アタシ達の出番が…！」

マラスキーノ

「そりだよおお…イッちやつよおおお…あのブタ共を狩る時間
だ…2日後のお天氣は血の雨注意報だよおギャハハハハハハハハ

！！！

ナイト級のマラスキーノは、地底湖で哀が戦つたビターズの姉だつた！！

殺戮の宴が始まる予感・・・！！

次回は番外編、伊澄と理沙だ！！

ファイル581：伊澄と理沙の最初の出会いーー！

鷺之宮伊澄と朝風理沙。

現在主人とメイドの関係になつてゐる2人だが、当然ちゃんと出会つた過程があるワケで・・・

今回はその出会いの話をいたしましょう！

数ヶ月前・・・

鷺之宮邸

着替えていた伊澄は、氷田と火枝を呼んだ。

伊澄

「ねえ～。氷田～火枝～！」

火枝

「はい？」

氷田

「いかがなさいました？伊澄お嬢様。」

伊澄

「やつぱりこれ気に入らないから、青い和服持つて来てください。」

「

ガチャ！

伊澄はドアを開けた。

下着姿のままで。

当然ながら2人は放心。

伊澄

「・・・って、どうしたんです？」

火枝・氷田

「お嬢様あ！！せめてストールぐらい羽織つてからお呼びになつて
ください！！」

伊澄

「な・・・何ですか急に・・・」

2人の執事は、伊澄の事について相談をしていた。

火枝^{ヒノエダ}『鶯之富家に仕えて18年。34歳』
「マズいな・・・ハヽツ。」

氷田^{ヒヨウタ}『鶯之富家に仕えて16年。35歳』
「ああ。これは由々（ゆゆ）しき問題だ・・・フヽツ。」

火枝

「伊澄お嬢様ももうじき14歳。ずっと子供だと思っていたが・・・」

「

氷田

「最近成長が著しいからなあ・・・」

火枝

「仕方ない。こうなつたら・・・」

2人は伊澄にある話を持ちかけた。

伊澄

「はい?専属のメイドさんを雇う?却下!じゃあ私は咲夜の所に行つて来ますわ。」

伊澄、即答。

氷田

「お待ちくださいお嬢様!-!」

伊澄

「何ですか。」

氷田

「やはりお嬢様も女性として肉体が成長してきてる以上、男だけでお仕えというワケにはいきません!!」

伊澄

「私は気にしないから良いんですよ。」

火枝

「我々が気にします！！」

伊澄

「けどそれなら、乳母の織田信子さんがいるでしょうが！彼女一人じゃ不満なんですか。」

火枝

「信子さんも今年で米寿の88歳。『まだいけると思っていたが昔のように若さに任せた仕事はできない。そろそろユーホームを脱ぐ時が来たのかも知れない』と現役引退を考えておられます。」

伊澄

「・・・けどマリア様のように非の打ち所のない天才とか、サキ様とワタル君のように姉弟のような関係とか、千桜さんと咲夜のように元気良い関係なら、良いんでしちゃうけど・・・いきなり赤の他人につきまとわれても私、気が休まりませんよ？」

火枝

「ご心配なく！お嬢様にピッタリのメイドさんを見つける、一画期的プロジェクトがあるのです！！」

伊澄

「え？」

伊澄達3人は、目的地に着いた。

メイド喫茶『イス ミン』

伊澄

「・・・・とりあえず・・・看板がムカつくので変えてくれますか?」

火枝

「!?」

『シャクナゲ』に変更。

伊澄

「まあ、あなた達の考えそうな事は大体読めてたけど・・・私のメイドさん一人探すのにどれだけ金を掛けているんですか。」

伊澄と火枝と氷田は、モニタールームにいる。

火枝

「ですが、これなら実益と・・・何より働きっぷりや人間性も見る事ができます。」

伊澄

「本當ですか。けど、イマイチピンと来る子が・・・」

伊澄はモニターを見ながら愚痴る。

氷田

「そんな事ございません。ホラ、そう言つてる間に・・・新しい子

が・・・

朝風理沙がシャクナゲに入つて来たのがモニターに映つた。

伊澄

「・・・イヤ、これはないです。」

火枝

「なぜですか？マジメそりでカワイイじゃないですか？」

伊澄

「カワイイのは良いのです。けどこんなつまらなさそうな顔を一日中されてたら、私の気が滅入っちゃいますわ。やっぱり私のメイドさんをやつてもうつのならば・・・もつと明るくて元気で、そして何より私が吹き出すくらい面白い人じゃないと・・・」

伊澄は文句を言つていた。

ところが、数分後・・・

理沙

「お帰りなさいませ ご主人様」

キューペーン

ブホッ！

理沙のキャラの変わりよつに、伊澄は飲んでいた紅茶を吹き出してしまつた。

理沙

「お帰りなさいませご主人様。今日は何になさいます? コーヒー? 紅茶? それとも私のえ・が・お」

伊澄

「・・・」

氷田

「明るくて元気じやないですか。」

火枝

「つていうか、お嬢様今吹き出しましたよね?」

伊澄

「た・・・! 確かに! 確かに面白かつたけど・・・! 面白いだけでメイドさんが勤まりますか! やっぱりテキパキ仕事ができなきや・・・」

朝風神社と白皇生徒会で鍛えられた実力。

テキパキ、テキパキ・・・

伊澄

「・・・」

氷田

「できますね。」

火枝

「能力高いですね~。」

伊澄

「け・・・！－けど肝心なのは私との相性でしうが－－それが良
くないなら結局・・・！」

火枝

「では、会つて直接お話ししますか？」

伊澄

「え？・・・あ－－私ちょっと用事思い出した－－そんなワケで出
かけて来ますわ－－」

氷田・火枝

「ええ？お嬢様！？」

愛沢邸

伊澄は咲夜の家に遊びに来ていた。

ハヤテは千桜の手伝いをしている。

ハヤテ

「どうなさいたんですか伊澄さん。何だか浮かない表情ですけど・・
・」

伊澄

「明るくて元気で、能力があつて面白い……」

ハヤテ

「はい？」

伊澄

「どうしてハヤテ様、男なんですか……どうしてメイドなんかじゃなくて執事やつてるんです……！」

ハヤテ

「え！？え！？」

咲夜

「別にメイドでもかまへんよ？」

千桜

「私もどちらかといふとそっちの方が

ハヤテ

「・・・」

咲夜と千桜に言われ、ハヤテは困った。

「つていうか伊澄さん、人の家まで来て何浮かない顔をしてるんや？」

伊澄

「何つて、そりや・・・・・・ねえ咲夜・・・どうしてハヤテ様と恋人同士になつたの？」

ハヤテ

「えっと・・・それはボクの男としての魅力に疑問が・・・」

伊澄

「え！？ちがいますちがいます！！そつじゃなくて・・・！ホラ、
彼氏って言っても初めはどんな人かわからない赤の他人よ！？それ
なのに能力とかも見ないで彼氏に決めたのは・・・」

咲夜

「運命や。」

伊澄

「え？」

咲夜

「あの日・・・運命に出会ったんや！それだけや。」

伊澄

「・・・」

伊澄はゲームセンターに来ていた。

伊澄

「（運命か・・・まあ確かに、それくらいのものがないと・・・赤
の他人に惚れるワケないか・・・）」

『ヴァタリアン13』

チャリンチャリン！

伊澄

「（あ・・・って、）いつか、思わずお金入れちゃつたけど・・・これどうすれば良いんでしょ？えーと確か・・・あら？」

理沙

「銃を軽く振つて弾を装填。前のボタンは手榴弾ですよ。」

伊澄の横に理沙がいた。

伊澄

「え？へ？（あ、）この人・・・さつきの・・・」

理沙

「あ、スミマセン。カワイイ女の子が一人でプレイしているのが珍しくて・・・ついコインを入れてしましましたが・・・ご迷惑でしたか？」

伊澄

「イー！イヤ、そんな事ないですよーー！」

理沙

「（『ないですよ』、それに和服・・・和風の子か・・・）では早速・・・」

伊澄

「けど私、こんなのは初めてですかから・・・すぐ死んじゃうかもしねませんよ?」

理沙

「・・・あなたは死ない・・・」

伊澄

「え?」

理沙

「私が守るから。」(綾波レイ風)

理沙にとつてそれは・・・

本人にあまり自覚のない悪いクセだったワケだが・・・

元ネタをあまり知らない伊澄には効いたという・・・

理沙
「では行きます! !」

伊澄

「はー! !はー! !」

そして・・・

『シャー! !』

理沙

「これで! !」

ジャキッ！！

理沙

「ラストオーー！」

ドンーー！

見事クリアー。

伊澄

「フウ・・・何とかクリアしたみたいですね・・・」

理沙

「けどりまかったですね。飲み込みも早かつたですし・・・」

理沙は伊澄に自販機で買ったミルクティーを渡した。

伊澄

「イヤ、そんな事ないですよ。けど、こんな怖いの女の子がやる物じゃないですねえ。」

伊澄がミルクティーを飲みながら言つ。

理沙

「女の子でもストレス発散に、コイン2枚でカワイくない2次元のゾンビを撃ち殺すくらいは良いでしょ？それに、悪いゾンビから地球の平和も守れましたよ。」

伊澄

「ハハ。 けど架空のでしょ？」

理沙

「ええ。 ゾンビだけに・・・リセット一つで蘇ります。」

伊澄

「え？」

理沙

「・・・」

伊澄

「・・・」

理沙

「し！失礼しました！！では私はこれで・・・！」

伊澄

「アハ そんな置いて行かないでくださいよ。 私は・・・面白い人が大好きなんです だから待ってくださいよメイドさん。」

理沙

「ええ！？」

こつして、朝風理沙は鷺之宮伊澄のメイドになつたのだった。

似た者同士つて事なのかな？

次回、悪夢の4THバトル開始！！

ファイル582：4THバトル開始！！

ジン

「そろそろ・・・帰つて来る頃合だな。」

リアン

「・・・来る。」

オン、オン！！

哀

「ただいまっ！-！」

康太郎

「シャドーヒューマン⁶⁰日はキツかつたです・・・死ぬかと思つた。」

「あの・・・陣さん。彼等は修行に行つていたのですよね？何か変わつたように見えますか？」

ジン

「フ・・・わからぬか？リアン。」

リアン

「あん？」

ジン

「年はとりたくないものだな。」

リアン

「アタシはまだ若いでジン！！」

ジン

「正直・・・」ここまで上がるとは・・・」

リアン

「磨けば、磨くほどか・・・」

カミュ

「おはようござります。それでは本日より、組織対戦を再開させて頂きます。」

ディールゼイヴの姫がダイス2個を振った。

コツ・・・

6 4

カミュ

「6VS6ー！場所は・・・炎原ステージー！」

秀一

「6人が。」

康太郎

「コナン君がいないからピッタリですね！」

リアン

「イヤ・・・今回アタシは・・・出えへん。」

哀・玲子

「なつ・・・」

哀

「リアンちゃん！ あなた一番強いでしょうが！ …」

玲子

「一回勝つただけでワガママですか！？」

リアン

「あーっ。ウルセ^{ウルセ}うるせえ！ 五月蠅え^{ウルセ}！ 今回はアンタらがどんぐらこマシになつたか見届けたるわ。アタシがおらんと負けてまつぐらこやつたら・・・ その程度の戦争やつたつてこりやー！ …」

哀

「（・・・試してゐ・・・）の状況で何て娘なの・・・！ …」

玲子

「やつたつましょ。」のトなんていらなにわー！ …」

カミコ

「それではこの5人を・・・ 炎原ステージへー！ …」

哀達は、炎原フィールドへとワープした。

ヴンッ！ …

組織対戦4THバトル 炎原フィールド

ゴオオオオオ・・・

康太郎

「暑ーつー！」

松葉

「氷の場所から一転して炎の場所やからねえ・・・」

哀

「相手は6人なんでしょう？私達どうすれば良いの？」

カミュ

「はい。5人の内誰か1人にもう一度戦う事になつて頂きます。ただし、一度戦闘に勝つている人間に限られます。」

秀一

「・・・来るぞ。」

オン・・・！

ザ・・・ンー！

4人の男と1人の女が現れた。

男達の中に、3RDバトルでコナンを倒したMr・トニッケもいる。

女はもちろん、あのビターズだ。

そして、もう1人女が・・・

ガスツ!!

マラスキーノ

「暑いね暑いねえ!! こういう時はどうすれば良いんだい!? 冷つたーい物を喰うのさ!! オマエ達全員冷しゃぶにして喰つてやるよおおーつ!! この美しいマラスキーノ様がねええーつ!!」

哀
・
・
・

この女
・
・

ヤ・バ・す・ぎ・るつ!!

次回、秀一が空を舞う!!

ファイル583・静かなる闘志・秀一の力！！

マラスキーノ

「チビ!!!!不細工な女!!!!もう1人不細工!!!!鮎!!!!醜女!!!!テメエら全員地獄に叩き墮とすよおお!!!!ブツ殺してやる!!!!ギャハハハハハハハハハハ!!!!」

批評世說新語

「なつ・・・何なのあのドリル頭のオバサンはつ・・・」

力ミユ

「マラスキーノ様……クラスはナイト!! 性格はヒステリックで好戦的で自己中心的。しかし……強いですよ。」

マニアック

いきなり自分が出ようとするマラスキーノ。

そのマラスキーノをビターズが止めた。

ビターズ

マラスキーノ

「何だいビターズ？」

ビターズ

「お姉ちゃんはアタシ達のボスでしょ？やつぱ最後の方が良いよ！」

マラスキーノ

「んんー？まあ・・・カワイイ妹がそう言つならねえ・・・」

「そうですね。それにお言葉ですがマラスキーノ様。あの二人はブサイクとは思いませんよ？カワイイです！」

ビターズ

「バ・・・・バカ！！お姉ちゃんに謝・・・」

パアン！！

マラスキーノが男の1人の頬をはたいた。

マラスキーノ

「じゃあ・・・どっちが美しいんだいいーっ！？あの2人とお・・・私のわあ！・・・！」

「・・・マ・・・・マラスキーノ様です・・・」

マラスキーノ

「言葉にや気をつけな、私はデリケートなんだ！・・・このクソ男！・・・！」

M'r・トニッケ

『ペンドュラムアッシュ構成員

』クラス』

ビショップ『

「それでは・・・某が一番手を任せられるぞよ。（ナイトにも、色々なタイプがあるなあ・・・）」

Mr・トニックが進み出た。

ザツ、ザツ・・・

秀一

「喜劇は終わったようだな。相手はあの男か・・・『ナン君の仇でも取らせてもらひうか。ジャンケンにも勝つた事だし。』」

哀

「どうして一発で決まるのよおーっ！――

ブー、ブー――！

秀一

「オマエ達全員『パー』だからだ。」

カミコ

「4THバトル第1戦！！赤井秀一 VS Mr・トニック！！

ス・・・

Mr・トニック

「！」

秀一

「来い。始めはノーガードでいてやるよ。」

Mr・トニック

「ぐつ……愚弄するかあ！？ フィッシュングロッドー！」

Mr・トニックは釣り竿を出した。

ザシャアアー！

Mr・トニック

「追尾せよー！」

ヒュルル・・・

釣り針が秀一の左肩に迫る。

ザクッ！

Mr・トニック

「一本釣りー！」

秀一は空中に放り出された。

フワッ・・・

Mr・トニック

「空中では逃げられぬー！ ハープーンスピアーッー！」

Mr・トニックは槍型・RINGで秀一を襲った。

ブンッー！

だが

秀一は槍を叩き折つた。

Mr.トニツク

「あの男・・・」

「強い！！」

「やつぱりカワイイです。」

ボゾ

タツ

ビターズ

「あの男使えないわー！お姉ちゃんー！」

マラスキーノ

「ギャハハハ!!!! M'r・トニック!!!! 負けたらどうなるかわか
つてるねええ!!! 制裁が待つてゐるよおおーっ!!!!」

Mr.トニツク

「ム・・・ムチャを言つた・・・！・！」

一口にクラスと言つても、その中ではランクが存在する。

ナイトに限りなく近いビショップ、ルークに近いビショップと…
ビショップのランクが『1（強）～10（弱）』の『10』に分け
られたとすると、Mr・トニックは『10』附近なのだ。

10 弱
9 8 7 6 5 4 3 2 1
強

Mr・トニック

「あの男は…まだ…R I N Gすり出していないんだぞ…」

Mr・トニックは、後ろに下がった。

Mr・トニック

「う…（あの男…ロマネと戦った時よりも確実に強さを
増している…息一つ乱さず…R I N G一つ使わずに戦うとは…某
最強で最後のあれを使うしかないぞよ…魔力を極限まで…狙い
を定めよ…）行くぞ…アンガードアンカー…！」

アンガードアンカーが、秀一に降り注いだ。

ドンッ！！

ドカアアアー！！

マラスキーノ

「終わりだねえ・・・」

マラスキーノがそう言つて、Mr・トニックの後に秀一が現れた。

Mr・トニック

「ハア・・・」

トンッ！

Mr・トニックは倒れた。

ドサッ・・・

カミュ

「勝者！！チームアル！赤井秀一！！」

哀

「よつしゃあーつ！！」

康太郎

「ナイスです秀一様あ！！！」

秀一

「（あれから8年が経ち、確かに戦争は繰り返された。そして今、

オレは組織対戦で戦っている。」

哀

「 楽勝だつたじやなこのよコノヤローヴー。」

イズナ
「音の一古」
フ
ハ
ヒ
リ

秀一は笑顔になると、こう言った。

秀一

哀

松葉

「何やの秀一さん？その質問？」

秀一

そう、今度こそ世界に平和を・・・

次回、康太郎が出動だ！！

ファイル584・じゅうする康太郎！封じられた植物戦法――

ザツ、ザツ・・・

マラスキーノ

「負けちやつたねええ――制裁だよおMr・トニック――！」

Mr・トニック

「こ・・・殺すのか・・・？」

マラスキーノ

「さてねえ・・・それはオマエ次第さ――ジャンケンをしようかまあ
おお――オマエにとって一世一代のヤツをねえええ――！」

Mr・トニック

「ジャ・・・・ジャンケン――？」

マラスキーノ

「わづせ――行くよお――ジャンケーン・・・」

Mr・トニック

「ま、待って・・・」

マラスキーノ

「ホイ――！」

マラスキーノ・チヨキ Mr・トニック・パー

Mr・トニック

「負け」

そつといたマーティックの首が、飛んだ。

ザシュツ！！

Mr.トーチク

一
た
わ

ドサシ

マラスキーノ

「八八八八！！！」

マラスキーノが高笑いした時、哀の怒鳴り声が聞こえた。

哀

「おいババア!!!! アンタは自分の仲間も殺すの!!!!? それがペンドュラムのやり方なの!?!?」

マラスキーノ

「ああいい・・・オマエ・・・今何て言つた・・・!?

松葉

「ババア つちゅうてるんやババア。ハツキリ言つてさつきから不愉快なんやよね、アンタ。その大きいダミ声も、姿形も・・・ムカツくつたらありやせんわ！！」

イズナ

「全くだわ。無礼極まりないわね。作法も知らぬ愚か者よ！！」

松葉とイズナにも罵られ、^{ののこ}マラスキーノはついにキレた。

ビキ

マラスキーノ

「ああ、今人をスニケ殺したいーー！！！全員来いよーー！」

ビターズ

「あ、待つてよお姉ちゃん!! お姉ちゃんここは一番おいしい所をやりせてあげる。もしどちらへ辛抱して。」

マラスキーノ
「哀・・・くノ一・・・アイツ、死なないと・・・絶頂なんかでき
ないよおーつー!」

ヒヨコッ!

アントロ

『ペンドュラムアッド構成員

ノイツ

「次。オレ出る。次、オレ、アイツらの一人倒す。マラスキーノ様見てる。オレ勝つトコ見てる。」

哀・松葉・康太郎・玲子

「ホイ！！」

哀・松葉・玲子・バー 康太郎・チヨキ

康太郎

「よしつ！…ボクの番だな…！」

哀
「東宮君…！」

康太郎
「行つて来る…！」

康太郎

「行つて来る…！」

カミュ

「第2試合！…ベンデュラムアッド、コアントローーーー！アル、東宮
康太郎！！開始！！」

コアントローはトランプをバララララとくった。

そして、コアントローは一枚のカードを康太郎に向けて投げた。

シユピッ！

サクツ！

康太郎

「？」

絵柄はジョーカー。

コアントロー

「それオマエの運命…死。オマエ、オレに絶対勝てない理由あ

る。マジカルハンマー！！」

ブン！

康太郎

「フン！！絶対なんて絶対にないんだよ！！ボクがどれだけ成長したか・・・見せてやる・・・」

バラバラ・・・

ドカッ！

康太郎

「育て！！ビーンズウイップ！！！」

シーン・・・

康太郎

「あれ？」

玲子

「そうか！！溶岩が満ちている上の地面じゃ・・・植物は育たないんだわ！！」

コアントローはハンマーを持つて突っ込んで来た。

ドンッ！！

康太郎

「ぬぬ！！」

「アントローのハンマー攻撃を、康太郎はスコップで受け流す。

「」「」「」

康太郎

「（見切れる！…見切れるぞ！…60口間の自分との戦いは、確かに手応えありだね！…）」

ザツ・・・

「アントロー

「一撃・・・一撃入れればオレの勝ち決定。一撃当てる。」

セイツヒツヒツと、「アントローは康太郎の方を向いて言った。

「アントロー

「ああーつーーあれ何！…？」

康太郎

「・・・引つ掛からない！…」

「アントロー

「（後ろ向く思つたのに！…「イシ中々やるーー」仕方ない。これ使い一スローデリューー！…）

「アントローが・RINGを発動をせると、康太郎の動きが止まつた。

ピキーん・・・

康太郎

「あ・・・れ・・・体・・・が・・・重い・・・動か・・・ない・・・?
・?」

秀一

「ダークネス・RINGだ。」

哀

「何ですって!?!?」

秀一

「オレも1つ持っている。相手の動きを完全に封じるタイプの物だ。
『イツの場合、使った代償は全身を走る激痛だが・・・』『スロード
リュー』、相手の動きを鈍らせる!あのタイプの代償は確か・・・
発動させている間視力を失う!?!」

ザツ、ザツ・・・

コアントロー

「さて、どこ?」

康太郎

「(クソ!-)こんな簡単に負けてたまるか!-それに・・・)」

『この世界が好きか?なら、一緒にペンドュラムアッシュを倒すぞ!』

康太郎

「(ボクは白皇学院っていうお金持ちが集まる学校の高校生やつて
るから、『この世界が好きか?』って聞かれても話が大きすぎて正

直ピンと来ない。ボクにとつて、この世界を守るつて事は・・・この世界のために戦うつて事は・・・イギリスで執事修行をしてる野々原と、野々原と一緒にいる姉貴のために戦うつて事だ。」

グッ！

康太郎は魔力を上げ始めた。

秀一

「ダメだ康太郎君！！魔力を上げるのは逆効果だ！！！」

コアントロー

「感・・・じた！！」

コアントローはハンマーで康太郎を殴った。

ドゴッ！！

康太郎

「アイテテ・・・クソッ・・・！あつ・・・体の重みがなくなつた！！よし！！ここから・・・あれ？」

康太郎が上を見上げると、コアントローが大きくなつていた。

ドン・・・

康太郎

「きょ！..巨大化してる！..？」

コアントロー

「逆。オマエ小さくなつた。マジカルハンマーで一撃当てる。相手小さくなる。」

そう言つと、コアントローは康太郎を蹴つた。

ゴッ！

康太郎

「ごふ……」

ザリザリザリ……

コアントロー

「何度も蹴る。死ぬまで蹴る！コアントロー負けない！Mr・トニツクみみたいに死にたくない！！！」

ズン、ズン……

コアントローの攻撃が続く。

ドゴッ！

グシャツッ！

ゴッ！

哀

「どうにかならないの赤井さん……」

秀一

「難しいな・・・あのハンマーを壊すか、術者を倒せば良いのだが・
・あの体の大きさのちがい・・・そしてビーンズウィップを封じ
られている今は・・・」

康太郎

「負けないぞ。ここでボクが死んだら、最大の執事不幸並びに姉不
幸じゃないか！！見ててくれよ（ムリだけど）野々原、姉貴！！ボ
クはこの世界のために最高の孝行をするぞーっ！！（この体の大
きさのちがいじゃ打撃は効かない！！ミラクルマッシュルームも小さ
すぎて効果は期待できない。あれを使うしかない！！）」

ザツ・・・

リアン

「康太郎君・・・何かを考えよつたみたいやな。」

コアントロー

「その顔・・・気に入らない。」

そう言つと、コアントローは康太郎を蹴りつとした。

ヒュオツ！

康太郎は蹴りを避けると、コアントローのブーツにしがみついた。

康太郎

「ぬぐつ・・・・」

コアントロー

「墮ちる。」

「アントローは康太郎を振り落とそうとしたが、康太郎は耐えた。

そして・・・

康太郎

「秘技！―ロッククライミング！―」

康太郎は「アントローの体を登り始めた。

ダダダダダ・・・

「アントロー

「くー！（何をする気！？）」

タンッ！

康太郎

「だあーっ！―」

「アントロー

「ーー（何も・・・起こらない・・・？）」

「ゴクン！

「アントロー

「ーーオ・・・マエ・・・アントローに何飲ませた・・・！？」

康太郎

「おいしい・・・物ですよ。育て！―ビーンズウイップ！―！」

康太郎

康太郎がスコップをかざすと、アントローの口から植物が生えてきた。

「ヨロツク！」

「アントロー

「・・・！」

「アントローは倒れた。

ズズン・・・

カミュ

「勝者！..東宮康太郎！..」

哀

「大逆転だわーつー！」

秀一

「窮鼠猫を噛むとは、まさにこの事だな・・・」

「アントロー

「うぐう・・・」

「アントローは這いながらマラスキーノ達の所に戻った。

マラスキーノ

「ジャーン。ケーン。ホイツ！..」

マラスキーノ・グー ロアントロー・チヨキ

マラスキーノはロアントローの首をはねた。

ザシユツ!!

マラスキーノ

「ギャハハハハハハハハ・・・」

哀

「アイツまた仲間を!! もう許せな・・・」

松葉

「頭に血が上りすぎやで、今の哀ちゃん 次は松葉ちゃん行つま
isu!! おーい、出て来いよババーッ!!」

ビキ・・・

康太郎、奇跡の大逆転!!

次回、松葉が?秒で勝利!?

ファイル585・優しい配慮？桜野松葉、5秒の戦い！！

松葉

「次は松葉ちゃん行つきました！おーい、出て来いよババアーッ
！」

ビキ・・・

マラスキーノ

「だ、だ、誰がババアなんだい！？私はまだ29なんだけどね～
っ！」

松葉

「ウソつけ。どう見ても40やババア。死ね。」

マラスキーノ

「キイーッ！-ギイイーッ！-！」

ズカズカズカ・・・

ビターズ

「ま、待つてよお姉ちゃん！！あんなバスの挑発に乗るなつてば！
！お、お姉ちゃんの方が・・・全然キレイ・・・よ・・・・・？」

ピタ！

マラスキーノ

「そりゃうそりゃうそりゃビターズウ～ カワイイ妹がそう言つなら本当
だろうねえ～。」

ビターズ

「え、ええ！ホントだつてば・・・・・後・・・・4人か・・・」

松葉

「あらら。あのババアのつてこないや。つまらへんの！」

哀

「松葉ちゃん。」

松葉

「なあに？哀ちゃん。」

哀

「ペントコラムでも・・・殺しちゃダメ！松葉ちゃんも女の子でしょ？私、松葉ちゃんが人殺しする所なんか見たくない！！」

玲子

「甘いわよ、哀ちゃん。これは戦争・・・」

松葉

「よし！約束する。」

カミコ

「第3戦！！ペントコラムアッド・アドヴォカートー！アル・桜野
松葉！開始！！」

アドヴォカート

『ペントコラムアッド構成員

』クラス』

ビショップ』

「オレの・・R I N G『ゼロキー』・・・『イツはどんな物でも斬る！・・・R I N Gでも・・・だ！」

アドヴォカートがそう言った瞬間、松葉がミニナイフで彼の腹を裂いた。

ザンッ！

アドヴォカート

「なつ・・・何もしてない・・・」

松葉

「急所外したから。死なへんよ」

カミュ

「勝負あり！・・・勝者、桜野松葉！・・・」

わずか5秒で試合終了。

松葉

「イエイツ！・・・これで良ーい？ 哀ちゃん

哀

「は・・・はい。」

秀一

「（強い・・・松葉君はもう、ナイト級だ・・・！）」

アドヴォカート

「う・・・ジャンケンか・・・」

ヨロ・・・

マラスキーノ

「オマエみたいなクズは、ジャンケンする・・・必要もない。すぐ死ね。」

アドヴォカートは首をはねられた。

ボツ・・・

「次、行きますつ。アドヴォカートのよつこまほこきませんからつ。」

ザツ・・・

「カルーア君、がんばっちゃうよーつ」

ロリーン

イズナ

「何なの、あのブリブリは！？あれが戦うの！？」

次に出て来たのは、一見弱そうなロリロリ少年・・・

果たして、彼の実力はいかに？

次回、玲子の優しさが垣間見える！？

ファイル586・カルーアとア「ヤ君と玲子流!!

ポテポテポテ・・・

「わーい。わーい。わーい。」

玲子

「アルで残つてるのは・・・アタシ達2人か・・・哀ちゃん。あの子の相手は任せてね!!」

康太郎

「来たあーつ!!」

秀一

「言ひつと思つた!」

松葉

「スケベ。」

玲子

「スケベは納得いかない!!」

哀

「良いわよ。向こうも、私と戦いたがっている子がいるみたいだから。でも玲子さん、2NDバトルでシャルトって男の子に負けたんでしょう? 大丈夫かなあ~つ。」

玲子

「そういう事言わなくて良いの!! 男の子相手にはね・・・それな

りの・・・戦い方があるのよ。』

カルーア

『ペンドュラムアッシュ構成員

＝クラス＝

ビショップ』

「がんばっちゃうよーっ！…！」

ダゴン『フフフ・・・玲子ちゃんか・・・君・・・だよね？彼女と
“知り合い”なのは・・・戦つてみたいかい？』

？？？＝？？？？？

『ペンドュラムアッシュ構成員

＝クラス＝

ナイト』

「・・・」

カミコ

「第4戦！！青井玲子ｖｓカルーア！！開始！！」

玲子

「お先にどうぞ。ボーアイズファーストよー！」

松葉

「あのアホ・・・！！前回負けた事全然懲りてない！！！」

康太郎

「もつと言つてやつてくださいーー！アホつてーー！」

カルーア

「わあ！何て優しい人なんでしょう……ありがとうございます。それでは……甘えちゃおつかな～」

カルーアは服の中から・R I N Gを取り出した。

カルーア

「ガーディアン・R I N G……出て来てアコヤ君……」

ドズズズズン！！

カルーア

「GOーっ！！」

ドン！！

玲子

「な、何！？貝！？ウエポン・R I N G！…ペガススランス！…」

玲子はランスを持つと、真上からアコヤガイ目掛けて突っ込んだ。

ガキン！

しかし、何ともない。

玲子

「（硬つ・・・！）」

カパ！

アコヤ貝は口を開けると、真珠を撃ち出して来た。

ڦڻڻڻڻڻ

玲子

「キヤ！！真珠！！？」

「アコヤ君は最高の防御力を持つてるの
の味はどうですか？カワイイお姉さん。」
必殺技『パールラッシュ』

シユウウウウウ

玲子

一 残念だったわねえ。
二 発も当たらなかつたわ。

カルニア

「あら。まあ。フムウ。それでは作戦を変えましょう！！」

ローリー
ン

カルーア

ヴ
ン!
!

カルーア

「ひせ」

ポンッ！

カルーアはスケート靴を履いた。

玲子

「ん！？スケート靴！？」

哀

「ウエポン：R I N Gかしら？」

松葉

「そうは見えへんけど・・・ようわからん敵やなあ。」

カルーア

「せーの・・・スイーツ！！」

ジヤツ！

カルーアは玲子の周りを滑り出した。

カルーア
「スイーツ、スイーツ、スイーツ、スイーツ。」

しばらく回った後、カルーアは止まった。

カルーア

「よし！！行きますよおーつ。玲子さん！プハーッ・・・」

カルーアはサザエの笛を吹いた。

ブオオオオオオ！！

すると、玲子の真下に何かが現れた。

ヌラ・・・

玲子
「！」

地面が割れると、巨大な怪魚が現れた。

バシャツッ！！

玲子

「（スケートで円を描いてたのは・・・）コイツの出現場所のマーキングだった！！」

怪魚は玲子を飲み込んだ。

バクン！

ザブン！！

哀

「玲子さんーっ！..」

カルーア

「ネイチャーリング・スピカラです。これでカルーアは炎海のお友達を呼べるんですよー！」

水面に血が浮かび上がった。

ザア

哀

「（目…玲子…の…）れつ…玲子…」

ザバアアアアツ！！

哀が叫ぶと、飛び上かつた怪魚に切れ目が入った。

七八

哀
・
九
川
ノ
ノ

ズバアアアア！！

玲子

「娘ちゃん、呼んだ？」

玲子が外に飛び出すと、怪魚は地面に落ちた。

ドオオオオーン！！

玲子

「ペガススランス！さつきの貝は失敗だつたけど、斬れ味は抜群よーっ 魚のエサになるなんて、シャレにもならないからねえ。」

カルーア

「ヤダ……」

カルーアの脳裏に、首を斬られたMr・トーツク、コアントロー、アドヴォカートの姿がフラッシュバックした。

カルーア

「首を斬られるのはイヤですう！－アコヤ君！－！」

ドン－！

カルーアはアコヤ貝を召喚すると、貝の口の中に入った。

ヒヨイ！

バクン！

玲子

「そろそろ……潮時ねえ。」

キユル・・・

ギュルルル・・・

カルーアを入れたアコヤ貝が、回り始めた。

カルーア

「ローリング・・・アコヤ君アタックですうーつ！－！」

ドンッ－！

アコヤ貝は玲子に突っ込んだ。

玲子

「上等よ。」

アコヤ君の中で回転してるカルーアは、目を回していた。

カルーア

「（この勝負に負けたら・・・カルーアもマラスキーノ様に首を斬られるかもしれません。勝たせてください、玲子さん！）」

近づいて来るアコヤ貝に対し、玲子は両腕に魔力を集中させ、一気に冷撃を放つた。

玲子

「フロステイックアイ！！！」

ヒュドン！！

哀

「（氷の…RING…）」

バフッ！

アコヤ貝の口が開くと、カルーアがふらつきながら出て來た。

ザ・・・

カルーア

「へ・・・へ・・・ヘロヘロ～ツ・・・」

フラフラ・・・

カルーアは倒れた。

パタ・・・ン！

カミコ

「勝者！…玲…」

玲子

「ちょっと待つたーつ…！」

カミコが勝利宣言をしようとしたその時、玲子が止めた。

見ると、玲子が大の字で倒れていた。

玲子

「アタシももうバテバテよ。って事は…・・・両者ドローで良いでしょ？」

カミコ

「あ、あなたわざ今までピンピン…・・・」

玲子

「バテバテよ、文句ある…？」

哀

「玲子さん…・・・（あの子を助けようとしたんだわ…）」

カルーア

「れ・・・玲子さん・・・」

カルミコ

「・・・第4戦!!両者、ドロー!!」

カルーア

「（玲子さん・・・ありがとう・・・）」

哀

「やるじゃないのよ玲子さんーっ!!私見直した!!」

イズナ

「意外と聖女じゃない！」

玲子

「イヤーン、もっと言つてえ。これが・・・男の子とやる玲子流
『それなりの戦い方』ですわ。シユウちゃんも勉強しなきゃダメよ
！」

秀一

「なぜオレに言つ?」

康太郎

「ちょっと待つて・・・何か様子がおかしいぞ・・・!!」

そう、カルーアは今、制裁を受けようとしていたのだ・・・

カルーア

「どうして・・・何でジャンケンなんですか！？カルーア・・・ドロ一でしたよ！？」

マラスキーノ
「敵に情けをかけてもらつて恥ずかしくないのかいいーつ！？オマエは負けたんだよブタアア！！だから制裁なんだよおカルーアーッ！」

カルーア

「わかりました。ジャンケンに勝てば、首斬りはなしですもんね？」

マラスキーノ

「ああ。 そうともそうとも。 ジャーンケーン・・・ホイ！！」

マラスキーノ・バー カルーア・チヨキ

カルーア

「勝つたつ・・・」

カルーアがホツとしたその時、彼の腹を炎の剣が貫いた。

ズン！！

カルーア

「うぐ！？」

ビターズ

「アタシが・・・グーよ。」

マラスキーノ

「ヒヤハハハハハハ！……」

カルーア

「れ・・・玲子さん・・・」

その言葉を最後に、カルーアは絶命した。

ガク・・・

玲子

「カルーア・・・」

哀

「テツ・・・テメエーツ！……」

ビターズ

「ヒヤハハハハハーッ！……」

本当ならカルーアはアイコだったのに・・・

あまりにも非情なビターズに、哀、ついに怒髪天！――

次回、ビターズの逆襲！――

ファイル587・逆襲のビターズ！ヒュドラーVSガーネイル！！

ドサ・・・

ビターズ

「ヒヤハハハハハーッ！…やつぱり男を殺すのは楽しいわーっ！…」

哀

「テメエーッ！…」

哀は突っ込んだ。

ドンッ！…

カミコ

「しつ・・・試合開始ーっ！…」

ビターズ

『ペンドュラムアーデ構成員

＝クラス＝

ビショップ』

「ヘッ・・・アンタと戦うのを待つてたわよ、哀…フレアードアー
ス！」

ビターズは炎弾を連発した。

哀は炎弾を破壊していくが、急に飛んで来た巨大な炎弾を避けきれ
ず、炎弾に当たった。

「ゴッ！－！」

ズシャツ・・・

哀

「チツ・・・チクショーツ！－！バージョン3－！ガーゴイル！－！」

哀がガーゴイルを召喚した。

ドンッ！

ビターズ

「来たわね！ディストリアでアタシを殴ったガーディアン！－！それ相応の：R I N Gは用意しといたわ！ガーディアン・R I N G！－！ヒュドラ！－！」

ビターズは炎のガーディアンを召喚した。

突つ込んで来たガーゴイルを、ヒュドラはことなげに殴り飛ばした。

ゴッ！－！」

哀

「－！ガーゴイルが・・・力負けした！－？チクショウチクショウ・・・チクショウチクショウ！－！」

秀一

「マズイな。感情に流されて続いている！－！」

松葉

「魔力を少しも練り込んだらへんなーあの状態じゃ、いくらガーネイルでも・・・」

ビターズ

「ああいい・・・ディストリアの地底湖では世話になつたわよねえ・
・・今日はそうはいかない!!なぜならここは炎の空間!!炎使い
のアタシにとってはその力を何倍にもしてくれるので!!今のアタ
シはナイト級にも匹敵する!!そんなにカルーアを殺した事が腹立
つたかバカヤロウ。アンタは敵にも同情する甘ちゃんかつてーの!

マラスキーノ

「許してくださいって言つてみな。考へてやらない事もないのよ。」
?ヒヒ・・・「ビターズ

哀

「誰か・・・誰かアンタみたいなヤツに謝るかあ！！！もう1回よ！
！もう1回ガーゴイル！！」

そう叫ぶ哀の前に、
イズナがいた。

「イズナ・・・? ガーゴイルだつてば・・・」
哀

イズナ

「イヤよ。しつかりしなさい愚か者一つ！…」

哀

イズナは哀を殴つた。

ドゴッ！

イズナ

「確かにあなたの怒りはわかる！！ヤツは女として最低だわ！！だけどね・・・ヤツはそうする事によつてあなたを挑発し、あなたの戦い方を荒くしたのよ・・・頭を冷やしなさい。この私の使い手でしょうが！！」

哀

「スーツ、ハーツ・・・ありがとね。イズナ！」

イズナ

「じゃあ行きますか！！あの女、無礼を通り越して鬼畜だわ！！ブツ倒すわよ！！！」

哀

「おーい。ビターズ！許してくださいって言つてみなさいよ。許さないけどね。」

ビターズ

「だつ・・・誰にもの言つてやがるのクソヤロウ・・・！！喰らいなさいビッグフレアードアース！！！」

哀の言葉にキレたビターズは、巨大な炎弾を乱射して來た。

哀

「バージョン2！シャボンガトリンガー！！！」

哀はランチャーから泡爆弾を乱射し、炎弾を破壊した。

「ゴン、ゴンー！」

ビターズ

「ヒツ・・・このガキヤーッ！…」

哀

「ビターズ。あなた達はどうして仲間も殺せるの？」

ビターズ

「ハア？簡単な事じゃないのよバーカ！！仲間だと思つてないからよーっ！…アイツらは所詮使い捨ての道具なのよ…！…道具が壊れたら捨てる…！使えない道具になんか用がある！？」

哀

「…やつぱりそういう答えか…かわいそうな子よ、あなたは。」

ビターズ

「かわいそなのはアンタよ哀ーっ！…ネイチャーライジング…ヒートクレバス…！」

ピシィ…・

哀の足下がヒビ割れる。

ゴッ・・・

哀はその中に落ちて行つた。

ズズズズズン・・・

マラスキーノ

「さすが！妹お！」

ビターズ

「フツ・・・フフツ・・・アル、キャプテン死亡！…組織対戦終了
よーーーー！」

カミコ

「勝者…ビタ・・・」

カミコがそう言いかけたその時、地面が吹っ飛んだ。

ドン！

ビターズ

「？」

ビターズが振り返ると、哀がゼリー状の物体に包み込まれていた。

フルルン・・・

ビターズ

「なつ・・・何よあれえーつ！…！」

哀

「イズナ・バージョン5『ディフェンスジョリー』…どんな重た

い攻撃も、Jのジーリーは吸収しちゃうのだー！」

リアン

「なつ・・・何やあの能力は・・・！？ガーディアンでもない！ネイチャーワードも！属性が良くわからへん・・・！」

ビターズ

「チ・・・チクショウチクショウチクショウ！チクショウ！チ
クショウ！ヒュドラー！」

アーネスト

「ガーボイル！」

ビターズ

ガーゴイルとヒュドラは、再びぶつかり合った。

ガキン！

マラスキーノ

「良いよおーーそのままガーゴイルの腕へし折つてやりなあーー！」

ビターズ

「（こ）は炎原！！炎のガーディアン・ヒュドラは100パーセント以上の力を出す事ができる！！負けるハズがない！！」

哀は田を廻つてゐる。

秀一

「わかるか松葉君？」

松葉

「うん。さつきとは全然ちがう・・・魔力が通っている。それもその上がつて行くスピードがハンパやない！―まだ上がる・・・まだ上がるつとる！―」

玲子

「さあてどうなる！？」

ビターズ

「この大自然全てがあなたの味方よ！―魔力MAX！―行けヒュドラアーー！」

ビターズが叫んだその時、哀は目を見開いた。

それと同時に、ガーゴイルがヒュドラーの両腕をもぎ取った。

ブチャイー！

ビターズ

「なつ・・・」

ガーゴイルはシェリングガーゴイルレイで、ヒュドラーを吹っ飛ばした。

ドン――！

ビターズの手の・R I N Gが割れた。

パリン！

ビターズ

「ウソ！？」

ビターズの前に、ガーゴイルが降り立った。

ズン！

ビターズ

「ハツ・・・！」

哀

「次はあなたよ。ビターズ！！」

ビターズ

「わ、わる・・・悪かつたわ、ホント反省してる。ホントだつて、
悪かつたつて・・・」

哀

「ブツ飛んで反省しなさい。」

狼狽えるビターズを、ガーゴイルが殴り飛ばした。

ドガア！！！

ビターズ

「キャ〜ツ！？」

キラーン・・・

ビターズは星になつた。

カミュ

「第5戦！！灰原哀VSビターズ！！勝者、灰原哀！！」

哀

「ブハッ・・・スツキリしたーっ！！」

非情な女に、哀の鉄拳成敗が炸裂！！

！ 次回、ヒステリックなマラスキーノ相手に松葉が本領を發揮する！

ファイル588・桜野松葉VSマラスキーノ！唄え、クレイジーメルト！！

「マラスキーノ

「・・・よくも・・・よくも・・・よくもカワイイ妹にあんな事してくれたねえーっ！..哀い！..!!..6戦目もテメエが出て来い哀！..ビターズの仇を討つてやるよおーっ！..」

哀

「上等よ。あなた達姉妹にはムカついてるからね！..」

やつ言い出よつとした哀を、松葉が止めた。

松葉

「アカンで哀ちゃん。今戦いでだいぶ精神力を使つたハズやで。あのババアの相手はアタシに任せて下がりなさい。」

哀

「松葉ちゃん・..」

松葉

「おーい！..わかつたかババア！..松葉ちゃんが相手してやるで！..喜べーっ！..」

秀一

「確かに松葉君は3戦目、一瞬で終わらせたからな。」

玲子

「体力有り余つてるわね！」

マラスキーノ

「ババア・・・・ババアつて・・・・そんなに私を絶頂させたいのかい・・・・相手になつてやるよおーつー！くノーーーーー！」

松葉

— そこの前に――・・・フフーン —

力チヤ！

松葉は別の : R I N Gをつけた

「あ！…R I N Gをつけ替えた！…」

秀

「上級の：R I N G だろう。松葉君は決してマラスキーノをナメでない。二十五星座。^{トウェンティーフォーラップ}ナイトの一人だからな。」

力ミユ

「4THバトル最終戦！！桜野松葉ＶＳマラスキーノ！！開始！！」

ユラ

マラスキーノ

『ペンドュラムアソード構成員

三ヶ領
ナイト

「まぢは・・・軽ーくイッちゃうよおお。フレアスパイク！！」

炎のトゲが、松葉に襲いかかつた。

ガシャガシャガシャ！

松葉はそれを華麗に避ける。

松葉

「よつ・・・ババア。ナメてんの？こんな攻撃じゃ康太郎君も倒せへんよ。」

マラスキーノ

「私は美しい・・・ブサイクなオマエには、わからないようだから教えよう。周りをよく見てみなー！」

松葉の周りのトゲが、動き出した。

ズズズズズ・・・

マラスキーノ

「スペイクサンドーー！」

ガシャーー！

壁が松葉を挟み込んだ。

マラスキーノ

「もう一度言つてやるよー私は美しい。オマエはメスブタだくノーー！」

マラスキーノがそう言つた時、松葉が壁を何かで押し返した。

ギギギギギ・・・

松葉

「い、今のは少し・・・驚いたでババア！！」

そう言つと、松葉は壁を破壊した。

ド「コオ！－！」

松葉
ファイアリーウィング
熱風蝶翼！－！」

哀

「あ、あれ・・・松葉ちゃんが空を飛ぶ時に使つてゐる翼！－！」

秀一

「ただの翼を忍者が使つと思つか？あれは・・・」

マラスキーノ

「そつか・・・オマエ・・・炎風使い！－！」

ヒュオオオオオ・・・

マラスキーノ

「このメスブタめ、炎風使いかい！－！私の炎と・・・どっちが強い
かねえーっ！－！」

マラスキーノは再び炎のトゲを出した。

パギパギ・・・

松葉は翼でトゲを全てなげ払つた。

松葉

「相殺。アンタの炎はアタシに絶対当たらへん。ぜんねんで
したっつ」

そういうと、松葉は翼をはためかせて風を飛ばした。

ヒュン！

風がマラスキーノの左頬をかすつた。

チツ！

マラスキーノ

「あつ・・・私の顔にキズ・・・私の美しい顔にいい・・・やつ
てくれたねメスブタアーッ！・・・本氣でえ・・・絶頂イカをせてもうらつ
よおおーつ！！」

そういうと、マラスキーノの髪がざわめきだした。

ザワ・・・

マラスキーノ

「ネイチャー・RHNG『マスターへア』・・・・・」

『マーマーマーマ・・・

マラスキーノは髪を変化させると、周りの地面に突き刺した。

ドン、ドン、ドンー！

松葉

「髪でバリアを張つたつもり！？そんなもん熱風で斬つてやるでバ
バア！」

松葉は翼をはためかせた。

その時・・・

ズンー！

松葉の下腹部に髪が突き刺さつた。

松葉

「ゴホッ・・・・！（これは・・・硬質化した髪の毛！？地炎を碎
いてアタシの懷に入つて來た・・・しもた・・・！）」

哀

「松葉ちゃんー！」

康太郎

「あの・・・松葉さんガー！」

マラスキーノ

「風使いには1つ弱点があるー！自分の中心は台風の目！つまり・
・無風空間が存在するー！その深手じゃもう風も生み出せないだろ
うー？ええーつー？メスブタアーーー！マスターへアーッーーー！」

ズシャアアアー！！

マラスキーノはマスターへアーで松葉を痛めつけた。

哀

「もう止めてーつー！松葉ちゃんの負けよー！」

マラスキーノ

「お生憎様だねえ・・・ビターズは男、私は女を殺すのが大好きなさあーー昔ある所に4人の家族が住んでいました。父、母、姉、妹・・・ある時病氣で父が死にました。後夫と再婚した母は変わりました。姉妹に食べ物も与えず、毎日ムチで2人を殴りました。2人には心に大きなキズがつき・・・ある日ついに・・・2人は斧で眠っている母親と義父を殺しました。どうだいーつー！泣ける話だろうー？その姉妹が私達さあーつー！私はくノ一を殺して次のバトルに出る。そして次は哀ー！オマエだあー！」

松葉

「泣ける話ねえ・・・自分達だけが辛い思いをしてきたみたいな顔すんなや。殺したくなくとも・・・殺さなアカン人間かてあるんやー！」

哀

「（松葉ちゃん・・・！？）」

松葉

「ゴホッ・・・ちょいと・・・ヤバイね・・・仕方ないや。コイツを使うか！出て来な・・・！」

松葉は人形のようなガーディアンを召還した。

ボンッ！

マラスキーノ

「死に損ないが・・・！それがオマエの使う最期の・RINGになるよ、メスブタ！！」

松葉

「ガーディアン・RING・・・クレイジーメルト！』

人形のファスナー状の口が開いた。

ジイイ・・・

『おはよう松葉アタイだよ！！スクラップのクレイジーメルトさ！今日アタイは何をすればいいんだい！？何てつたって外に出たのは何日ぶり！？何ヶ月ぶり！？それとも何年ぶりかもしれないよねえ！！道具箱のような所にアタイをずーっととしまってさ！..』

松葉

「キ、キズに染みる・・・！こいつちで大声出さんとつてくれへん！？今日の獲物は・・・あれやで。」

髪を振り乱したマラスキーノ。

『ヒヤーッ！またスゴイヤツがいるよーっ！キラキラのゴテゴテ！出しゃばりなシスター達の中でもあんなヤツはいないよ！..』

松葉

「あのババア倒してくれへん？」

『イヤよ！－アタイは今、久々に自由なんだ！－何をしてもかまわないの！－花を摘んだり石コロを動かしてみたり小さな子供達と遊ぶ事だつてしていいのさ－－んう－－？』

メルトはキズだらけの松葉を見た。

『松葉死にそうなキズじゃないのか！－誰にやられたの！－そりが－－アイツね？アイツなのね！？』

哀
「ひ、ひむとい・R I N Gねえ・・・」

康太郎

「全然強そうにも見えないし・・・」

秀一

「（松葉君が戦闘前につけ替えたくらいの・R I N Gだ。何もないハズがない！－）」

『許せない！－許せないよ！－アタイのお友達にあんな事をして－！クレイジーメルトは今、怒っているのさ－－！』

メルトは突っ込んだ。

ゴウ－！

マラスキーノ

「しゃらくせいねえ－つ－－マスターへア－－！」

マラスキーノは髪を伸ばした。

ヒュン！

メルトはそれを華麗に避ける。

『アンタもクレイジーかい！？でも残念…アタイはもつともつ
とクレイジーなのさ…!!』

メルトはマラスキーノの頭上を回り出した。

グルングルン…

マラスキーノ

「！？何だいつ…！？何をする気だい、この人形みたいなガーディアンは…？」

松葉

「唄え。 クレイジー・メルト…！」

メルトは唄い出した。

『井戸の中見りやイタチが1匹、助けようにも助からないなぜってヤツには羽がないからね 井戸の中にはアタイは入れない なぜつてメルトに染みがつくからね…!!』

ビロビリ…

マラスキーノ

「なつ…何だあ…？」の唄声は…！？頭がグシャグシャに

なるつうーつー！

秀一

「怪音波・・・！人間を不快にさせる音波を造り出すガーディア
ン！」

玲子

「ここから聞いても頭が痛い！！マラスキーノならたまつたものじ
やないわよこれ！！」

哀

「んーっ！…」

マラスキーノ

「（こ・・・こんな所で・・・負けられないんだよおおー！・ビター
ズの仇討つてやるんだ！！見ててよビターズ、姉ちゃんが頑張つて
る所・・・！・ビターズ・・・カワイイビターズ・・・私のたつた
1人の肉親・・・）」

その時、松葉の風がマラスキーノの腹部を裂いた。

バシュー！！

マラスキーノ

「あ・・・（一瞬で・・・）」

マラスキーノは倒れた。

ズン・・・

マラスキーノ

「（ガードイアンを消して、風に切り替えた・・・ビター・・・ズ・・・絶頂・・・できなかつたよお・・・）」

カミコ

「桜野松葉／＼マラスキーノ！－勝者、桜野松葉！－！」

哀

「やつたわ松葉ちゃんーつー！」

玲子

「わーつー！」

康太郎

「ん？」

倒れているマラスキーノの元に、松葉が歩み寄った。

松葉

「ナイト級のアンタやつたら知ってるハズや。答えてもうらうで・・・『ティアナ』という女を知つていいるな？」

マラスキーノは驚いた表情でこいつ言った。

マラスキーノ

「な・・・なぜ・・・クイーンの名を・・・ー？」

松葉

「・・・やつぱりな。点と点がつながつた。アタシは忍者の国に一度戻らなアカン・・・」

松葉がマラスキーノから聞き出したのは、ディアナといつクイーンの情報・・・

果たして、彼女と松葉の関係とは・・・!?

次回、哀達が忍者の国に向かいます!!

ファイル589・忍者の国、インセントイアへ（前書き）

ペントテュラムアッドの階級

キング

クイーン

ナイト

ビショップ

ルーク

ローン

ファイル589・忍者の国、インセティアへ

カミュ

「4THバトル終了！！生き残ったメンバーを・・・」

玲子

「待つて！！」

玲子はカルーアを抱えていた。

哀

「玲子さん・・・」

玲子は海まで行くと、カルーアを海に降ろした。

ザパ・・・

玲子

「安らかに眠るのよ・・・カルーア君・・・」

カルーアは海の底へと沈んで行つた。

ザアアアアア・・・

カミュ

「・・・4THバトル終了です。生き残ったメンバーを・・・ディ
ールゼイヴヘ！！」

哀達は『ディールゼイ、ヴヘと帰つて來た。

「ブン！」

「英雄達のお帰りだ！」

「スゴイぞー！全戦全勝じゃないかーー！」

「松葉ちゃん。」

松葉が声のした方に振り向くと、コナンがホーリー・RINGを持つて立っていた。

カツ！

松葉のキズは、一瞬にして塞がつた。

スウ・・・

松葉

「これだけ深いキズを一瞬で直した・・・アンタもまた魔力が上がったな？」

コナン

「うんーーついさっきまでシャドーヒューマン修業してたのだ！」

「ビターズブツ飛ばした時はスッキリしたわーーさすが哀ちゃん！」

「！」

哀

「イヤ～ッ。」

「赤井もよ一やつたーー！」

秀一

「当然だ。」

「玲子さんステキだつたーー！」

「結婚してーー！」

玲子

「浮氣はあるわよ？良い？」

リアン

「アンタから今回は100点の戦い方やつたで。特に松葉ちゃんはナイトを1匹倒したからなーー！」

松葉

「リアンちゃん。話がある。」

松葉はリアンに耳打ちした。

リアン

「何や・・・と？」

カミコ

「えー・・・アルの姉さんに報告があります。明日の組織対戦は1日延期になりました。」

秀

「なぜだ。」

力ミユ

「ダゴン様の命令です。彼は明日行きたい所があるらしく・・・そうするとあなた方の戦いが観覧できないのが残念なので、そうしたうえですね。」

哀

「ナニカア...」

康太郎

「あなたそ
ればっかりで
すねえ・・・」

カミュ「それでは・・・解散・・・」

哀達は『ティールゼイヴ城で食事をしていた。

「イヤーッ、勝利の後のゴハンはおいしーっ！」

康太郎
「本当ですねーっ。
」

松葉

「みんな！話がある・・・」

松葉の言葉に、哀達は一斉に振り返った。

松葉

「明日、アタシと一緒にインセティアに来て欲しい。」

康太郎

「インセティア？インセティアって・・・？」

リアン

「忍者の国インセティア！！他の国との国交をほとんど持たずにある、地球の中でも未知なる場所や！！」

松葉

「みんなにも関係がある大事な話がある。アタシを信じて来て欲しい。」

コナン

「ボク達にも・・・関係がある・・・？」

哀

「良いじゃない！！忍者の国なんてワクワクするわー！みんなで行きましょうーーインセティアへーー！」

翌日

松葉

「ほな・・・いくで。このメンバーを・・・インセティアへーー！」

カツー！

ブンー！

哀達は、神秘的な場所に着いた。

コナン

「い・・・いこが・・・

リアン

「インセティアーーー！」

哀

「忍者の国・・・そして・・・松葉ちゃんの生まれた所ーーー！」

松葉

「あの浮いてる城が目的地や。行くで。」

イズナ

「うう・・・ん・・・

哀

「どうしたのイズナ？」

イズナ

「私はここを知っている！－私はここに来た事がある・・・－？あるいは・・・」

哀達は門へと歩いて來た。

「アリス様・・・アリス様ではありますんか！－お帰りなさい！－！」

松葉

「ただいま、ティム。門を開いてけようついだい。」

ティム

「ハツ！－しかし・・・この者達は・・・？いかにも怪しげな連中に見えますし・・・インセディアの探として他国の者は・・・」

松葉

「仲間や。特例として入れてあげて欲しいの。」

ティム

「ハツ・・・はい！－」

ガコン・・・

哀達は門の中に入つた。

「あーつ！－アリス姉様！－！」

「アリス様？」

「アリスだ！！」

「アリス！！何年ぶりだ！？」

「お帰りなさいアリス様！！」

「リリやクレイジー・メルトも元気か？」

松葉

「まーな。皆も元気そうで何よつや。」

「とこりあの者達は？」

松葉

「子分みたいなものかな！」

秀一

「誰がだ！！」

「アリス姉様、外の国のお話聞かせて！－！」

松葉

「ゴメンな。今日は大ババ様とお話があるんや。」

「…見つけたのか・・・！？」

「クン！」

「ならば早く城へ！－！」

康太郎

「あれが城？浮いてるし。どうやって行けば良いんですか？」

松葉

「このメンバーをインセティアの城へ！ドロン・リドルウ！」

松葉の呪文で、哀達はワープした。

ウンー！

哀

「わあ！スゴイー！」

秀一

「（魔力に満ちた国だ・・・全ての民にそれを感じた。小さな子供にさえも・・・）」

哀達はしばらく歩き、松葉が急に止まった。

松葉

「着いたで。」

哀達は奥へとたどり着いた。

「久方じやのう、アリスト・・・帰つて來たといつ事はつまり・・・」

松葉

「はい、大ババ様。ディアナを見つけました。」

松葉の言葉に、コナンは過敏に反応した。

コナン

「…（ディアナ…・・・ディアナつて…・・・）」

松葉

「ペントュラムアーデを御存知ですか大ババ様？」

「ウム。8年前世界に戦火を灯した者達じゃな。」

松葉

「その中のクイーンです、ディアナは…！アタシの姉はインセディアを捨て、そして…・・・素性を隠してベビーシッターとなり…・・・コナン君を育てた者の一人となつた…！」

康太郎

「ど、どういう事一つ…？えーっとクイーンってのもペントュラムですね？」

リアン

「ナイトの上にいる2人の存在の1人や…！8年前の組織対戦では、2人共見つけられず、決着がつかんかったと言うてええ…・・・見つかるワケがあらへん…！味方やと思ってた中に、ソイツはおったんやからな…！」

哀

「クイーンが松葉ちゃんのお姉ちゃん…？どういう事なの…？」

松葉

「ディアナは…・・・昔から何でも欲しがつた。食べ物もオモチャで

も・・・そしてその欲望はついに、爆発して大事件になつた！！インセデイアに存在した897個の特殊能力を持つた・R I N Gを、盗んでインセデイアの外に逃げた！！」

「ウム・・・10年も前の事じやつたな。デイアナは、インセデイアを裏切り、捨てた反逆者じや。禁を破りし者は捷として身内が何とかせねばならぬ。アリス・・・デイアナを殺せるか？」

松葉

「はい。殺します。」

哀

「（殺す・・・松葉ちゃん・・・！）」

松葉に課せられた、実の姉を殺す指令・・・

果たして、哀の反応は・・・？

次回、インセデイアに侵入者が・・・？

ファイル590・ティアナの真実

哀

「そんなのダメよー！松葉ちゃん約束したじゃないー！それにいくらペントラムの人間だからって・・・お姉ちゃん・・・なんですよ？」

「少女よ・・・何の約束を交わしたかは存ぜぬがこの件は特別じゃ。アリスはティアナの唯一の肉親・・・肉親が手を下さねばならんのじゃ。それも、インセティアの掟・・・！」

哀

「松葉ちゃん・・・どうして黙つてるのよ！本当にそれで・・・」

リアン

「哀ちゃん！...」から先のティアナの話は・・・アタシが語つたらう。12年前・・・アタシやリリー姉達が新米FBIやつた頃の話や。」

康太郎

「リアンさんつてFBI特別部隊のナンバー2じゃなかつたんですねか！？」

リアン

「その頃FBIはあつたが、特別部隊は存在しとらへん。ペントラムがおらんかつたからな。不幸が起こつた。アタシ達が世話をなつていたベーシッターが亡くなつたんや。当時まだ幼かつたアタシ達はたくさん泣いたな。見てるジェイムズさん達が痛いくらい泣いた。アタシ達を心配した当時のボスは、新しいベーシッターを

世界中の民に求めた。そやけど、なかなかボスのおめがねにかなう人は現れんかった。2年が過ぎた。1人の女性が現れたんや。」

秀一

「その女が・・・『ディアナ!』

リアン

「誰にでも優しかったディアナはアタシ達もすぐに気に入り、実の親子のように仲良くなつた。聞いた話では、新一君も彼女に世話をなつたと聞く。そやけど、そんな幸せは長くは続かんかった!!さらに2年後・・・アタシが11歳の時! ペンデュラムアッドを名乗る集団が世界のあちこちを潰し始めた。第1次現代世界対戦!!! その軍勢に対抗するため、FBIの捜査官を中心に世界中の戦士を集めた。世界を守る軍団、特別部隊はこうして生まれた。するとディアナは言った、『この・R I N Gを使いなさい。きっとペンデュラムアッドとも戦える事でしょ!』とアタシ達に・R I N Gを差し出したんや。こつしてゲームを持ちかけて来たペンドュラムアッドに明美さんを中心とした特別部隊は戦つた。たくさんのが犠牲・・・そして明美さんの胸のキズを代償に我々は勝利した。」

『負けか。しかし終焉ではない。死する事のないダゴンは、またいつか蘇る!! その時戦争は再び繰り返されるのだ!!』

リアン

「忌まわしい予言の通り、再び戦いは始まつた!! ペンドュラムアッドは死んどらへんかつたんや!! ペンデュラムアッドの本当のトップはダゴンやない。その上に2人、キングとクイーンが存在した! アタシ達は血眼になつて捜したが、結局ヘビの頭は見つからへんかつた・・・』

玲子

「その1人が・・・ベビー・シッターの女性!!」

康太郎

「リアンさんや新一さんを、かわいがっていた人・・・」

リアン

「まさかベビー・シッターがペンデュラムの中心人物やとは誰も思わへんで。そやろ?アタシ達に:R I N Gを与えて、組織対戦を勝利に導いた張本人なんやからな。しばらくして先代ボスが病に倒れた頃、ディアナはそのドス黒い本性の実体を現し始めた。」

『もつと美味なる物を私に持つておいで。欲しい、まだ欲しい。もつと美しい服を、宝石を私に持つておいで。欲しい、まだ欲しい。世界中に存在する魔力を秘めた:R I N Gを私に返しておくれ。欲しい、まだ欲しい。この世界が・・・欲しい。』

リアン

「自作自演やつたんや。ペンデュラムを作り:R I N Gを渡したんも、特別部隊を作り:R I N Gを与えたんもディアナ。」

秀一

「一度敗戦にしたのは、信用を得るための故意か・・・もしくは想像以上の伏兵を与えてしまった失策か・・・」

松葉

「イズナとコナン君達が狙われた辺りから、ペンデュラムアッドが怪しいと思うとつた。そやからコナン君達の仲間になる事で、クイーンの正体を知りうとしたんや。ビンゴやつたってワケや・・・」

ダゴン』『それではクイーン……本当にようじいのですね?』

ディアナ

「・・・」

コクン!

松葉

「秀一さん。不死の絆をつけられたんはいつ?」

秀一

「8年前。前回の組織対戦の時だ。」

松葉

「不死の絆の能力……あれは多分、ディアナがダゴンに『えたハズ……その呪いの解き方も、ダゴンの殺し方も知っているのはディアナ……』

そんな中、ダゴン達が門の前に現れた。

ザツ!

ティム

「何だオマエらは!?!?これはインセディア!!-侵略のつもつ……」

ズバアー！！

ティム

「か・・・」

ダゴン『侵略ねえ・・・クイーンの生まれた国だから、放つておいただけ。そのクイーンが許したんだから・・・好きにして良いのさ。』

ティムを斬り刻んだダゴンは、そつと囁いた。

『

哀

「ちゅうとー！オバサンー！」

哀は長老に詰め寄った。

哀

「いくら撃だからって姉妹で殺させ合つなんてヒドイわよーーーアンタには血も涙もないのーーー？」

松葉

「（あ、哀ちゃん・・・大ババ様に向かつて何て無礼な・・・）」

「この子供が元黒の組織の科学者か！フオフオフオー元気が良い。」

コナン

「哀ちゃんーーたくさんの町や村を見たよね？哀ちゃんもーーーベン

デュラムアーデにみんな殺されて・・・たくさん的人が辛い思いを
している・・・かわいがってくれた人と戦う事はとても辛いけど・・・
・あの人原因で戦争が起こっているのだとしたら・・・ボクは日
本警察の救世主として“ディアナ”を倒します。」

哀

「（重い。コナン君がこんなに重いなんて・・・）」

「世界の平和を乱したのはインセティアの民であるディアナじゃ。
その責任は取る。あなた達に協力する。」

「えー・・・あなた・・・」

リアン

「？」

「そしてあなた・・・あなた・・・あなた・・・あなた・・・あなた・・・あなた・・・」

長老の側にいた女は、リアン・康太郎・秀一・瑛祐・玲子・ユーリ・
コナンを次々に指差した。

「新しい・RINGを受けましょう。ついて来てください。」

玲子

「そんなんへこんじやダメよ、哀ちゃん！..組織対戦に参加した時
点で覚悟は決まってたハズよ？」

リアン

「ゲームやないんや。戦争なんや。」

秀一

「オレはオレの戦いをする。君も自分の戦いを見出すんだな。」

「む哀に玲子達は次々に激励をかけると、女について行った。

哀

「（戦争・・・私の戦い・・・私は、甘かったのかもしないわね・
・・）」

イズナ

「しつかりしなさいバカ者一つー！」

パシイー！

氣落ちする哀を、イズナがはたいた。

イズナ

「悪は滅さなきやいけない！悲劇が繰り返されないようになー！」

そんなイズナに、長老が意外な一言を言った。

「なつかしいねえ、イズナかーーここにあつた物じゃ・・・」

松葉

「ええーつー？」

イズナ

「なつ・・・私がここで・・・ーー？」

「イズナは『ティアナが盗んだ・RINGでも特別じゃ。なぜなら・・・』

・
・

そこまで言つた時、突然爆発音が聞こえた。

ドン！－！

哀

「－何の・・・音－？」

哀・松葉・イズナは、少し走った。

渡り廊下から外を見ると、所々で爆発が起つていた。

ドン・・・

ドオン・・・

松葉

「インセニアが襲撃されどる・・・－！『ティアナ・・・ついに自分

の生まれた国まで・・・許せ・・・へんつ－！－！行くで哀ちゃん

！－！」

哀

「ええ！－！－！」

ついにインセニアにまで襲撃範囲を広げたペントコラムアッシュ・・・

・

身勝手な姉の行い、許すワケにはいかない！－！

次回、
哀VSルーク38人！！

ファイル591：激闘！哀VSルーク38人！！

「オオオオオオオ・・・

インセディアの一角が、火の海になつてゐる。

「パパーッ。ママーッ。ママ・・・・」

泣いている子供。

その子供を、松葉が抱き締めた。

ギュ・・・

松葉

「ゴメンね・・・アタシの姉のせいでこんな・・・

松葉に1人の女が近づく。

「アリス！敵は『ペンデュラムアッシュ』を名乗つていた。我々も忍法で応戦したが・・・人数が多くすぎた。」

松葉

「ヤツらがまだここにー？」

「恐らくは西の塔と、東の塔へ・・・

哀

「やつぱり・RINGが狙いか！」

松葉

「2手に別れて先回りしよ、哀ちゃん……西の広場まで飛ばすでー！」

哀

「うん……」

松葉

「アタシを東の広場へ、哀ちゃんを西の広場へ飛ばせー……ドロン・リドルウ！－！」

松葉と哀は、2手に別れた。

哀は西の広場にワープした。

ヴン！

西の広場に着いた哀を、38人の集団が待ちかまえていた。

「オイ。」

「見ひよ。」

「へへ……シヒリーだぜ。」

哀は鋭い目つきになつた。

ミドリ

『ペンドュラムアッシュ構成員

』クラス』

ルーク『

「あのジョンネヴァやビターズを倒したヤツだ！」

レゼルブ

『ペンドュラムアッシュ構成員

』クラス』

ルーク『

「オレ達じゃ倒せねえかもしないねえ・・・」

エギュベル

『ペンドュラムアッシュ構成員

』クラス』

ルーク『

「相手が一人ずつだつたらな！！」

ミドリ・レゼルブ・エギュベル

「かかれーつ！ー！」

ミドリ達6人が、一斉に飛びかかつて来た。

哀

「シャボンガトリンガー！」

ジャキン！

玲子『組織対戦に参加した時点で覚悟は決まってたハズよ？』

リアン『戦争なんや』

哀は一気に泡爆弾を発射した。

ミドリ
トトロ！

「ぐわ！！」

エギュベル
「ガハツ！！」

ミドリ達6人は、一気に倒された。

6人

ガリアーノ

『ペントラムアッド構成員

』クラス』

ルーク』

「やるわね！！次はアタシが相手よ！！！」

鎧で武装した女が、剣を持つて突っ込んだ。

秀一『オレはオレの戦いをする　君も自分の戦いを見出すんだな』

哀はハンマーに切り替えると、ガリアーノを殴り飛ばした。

ドカ！！

7人

コナン『ボクはティアナを倒します』

哀

「ハアアアアアア！！！」

ドゴオ！！

10人

哀

「（みんな必死で戦ってるんだ！あなたもそつだつたんでしょう？
お姉ちゃん。）」

ザン！！

16人

「まだだ！！」

「ヤツだつて人間だ！！」

「疲れは必ず来る！！人海戦術だ！！」

複数人が、ズラリと並んだ。

ゾロッ！！

哀

「シェリングフォードガーゴイル！！」

哀はガーゴイルを召喚し、シェリングガーゴイルレイを放った。

「オオオオオオ！！！」

一気にペンデュラム達が吹っ飛んだ。

38人

哀

「ハアハア・・・」今は終わったわよ。松葉ちゃん。」

哀がそう言った、その時・・・

『まだ・・・終わりじゃないよ。』

ダゴンが哀の目の前に現れた。

ドンー！

哀

「ダ・・・ダゴンー！」

ダゴン『君も今日ここに来てたのかい？嬉しい偶然だよ、シェリー・ルーク級とはいえ、30数人を10数分で倒した・・・組織対戦じゃないんだけど・・・ここで戦つてみたいなあ・・・』

哀の目の前に現れた、倒させばならない存在の1人・・・

次回、哀とダゴンが激突！！

ファイル592・ダゴンとの死闘――その果てに――

哀

「（今、田の前に居る・・・倒さなければならぬヤツの一人・・・
ダゴン！――）」

ダゴン『来なよ。シェリー。』

哀

「わああああああああ――！」

哀はダゴンに突っ込んだ。

ブンッ――

ブンッ――

力任せに攻撃する哀だが、ダゴンはそれを苦もなく避けている。

ダゴン『ヒドく疲れてるようだね、シェリー。第6感も全然定まってないし。それじゃあ暴れているだけの獣のようだよ・・・フフフ・・・ホラ―もつとリラックスして！フフフ・・・』

哀

『（口イツ・・・バカにしてるの！？ムカツく！――）』

ミドリ

『ダゴン様殺してくれ！――』

エギュベル

「そうだ！！」

「組織対戦なんて関係ねえ……」

「今すぐここで……」

ダゴン『それはできないよ君達。シェリーは君達全員を倒した実力者だし・・・何よりその疲労がたまっている。やるならお互いベストの状態でやりたいからね。今日はお遊びさ。フフフフフ・・・』

哀

「こなくそーつ……！」

ブンッ！

哀はダガーで攻撃したが、またもダゴンに避けられた。

ダゴン『ねえ哀。人間は醜い。儂いしね。君も不死の絆を受けなよ。そこには永遠が約束される。』

哀

「脆くて儂いからこそ人間は美しいのよ！…あなたはその輝きを失つた！…私はその光を失いたくないのよ！…！」

哀はシャボンガトリンガーに切り替え、泡爆弾を連射した。

ドン！…

ダゴンは右手を前にやると、鱗のような物を盾状にして泡爆弾を止

めた。

ゴンゴン！！

ダゴン『境遇から生まれる思想からして、相容れないんだろうなあ・
・・ロマネ達みたいに自ら望む者は救われる。君は哀れだよ。この
戦いに勝つて君に何のメリットがある?』

哀

「損得の問題じゃないわ！－正しか···間違ってるかどうかよ
！－！」

ダゴン『君とも友達になれそうにないのかな？残念だけど。』

そつまうと、ダゴンは不気味な物体を召喚した。

ボツ！－！

ドン！－！

『ゲゲゲゲゲゲゲ！－！』

物体は哀の方に飛んで来た。

ゴオオオオオ···

哀

「バージョン3！－ガーゴ···（ダメだわー精神力が切れてる···
···）」

ド「オオオオオオ！」

物体の爆発に巻き込まれ、哀は氣絶した。

「よつしゃあーつーーー！」

「殺しちまえーーー！」

ダゴン『待て。』

哀に襲いかかるとするルーク達を、ダゴンが止めた。

ドロ・・・

ダゴンの右腹部から、血が出ていた。

ダゴン『満身創痍の中でボクにキズをつけた・・・初めて会った時は全然ちがう、強くなつたね、哀。・R・I・N・Gはもう良いや。帰るよ。東の塔に向かつた連中にも伝えておいて。』

「はつ・・・はこーーー！」

ダゴン『哀。次、会つ時は・・・殺すからね。』

やつぱり、ダゴンとルーク達は消えた。

ヴン、ヴン、ヴン、ヴン・・・

松葉

「哀ちゃんーー哀ちゃんーーーー！」

東の塔から帰つて来た松葉が、哀に駆け寄つた。

あの人だつて・・・

あの人だつて人間だつたハズなのに・・・

ダゴンはどうして、クイーンの不死の絆を受け入れたのかしら？

・・・わかつてゐるのは、今日私が・・・

ダゴンに何一つできなかつたつて事だわ・・・

ダゴンの圧倒的な力の前に、哀は手も足も出なかつた・・・

果たして、哀は世界の希望になれるのか・・・？

次回、試練の扉が狙われる！！

ファイル593・狙われた試練の扉---

哀

「ん・・・んう・・・」

哀が目を覚ますと、城の中にいた。

秀一

「起きたか。哀君！」

康太郎

「元気そうで良かつたです！！」

哀

「あまり元気じゃない。頭クラクラする。」

リアン

「何10人ものペントレーラムと一人でやりあつたらしいやないか！
ムチャな子やで。」

「下界の様子はいかがであつた？」

松葉

「半壊です。復旧には時間がかかるかもしれませんぐ・・・・RI
NGは無事でした。」

「そりか・・・不幸中の幸いじやな・・・」

哀

「ダゴンがいた。」

娘の顔葉に、全員が反応した。

秀一・ゴーリ

「…」

ロナン

「?」

玲子

「娘ちゃん…あなた…ダゴンとも戦つてたの…?」

哀

「うそ。負けちゃった。私は自分の力を過信してた。」

玲子

「い、今氣づいて良かつたんじゃないの?」

哀

「うそ。」

リアン

「（そ、そんなロンドティシヨンで戦つたら負けで当たり前やないか…）ムチャを通り越してアホな娘やで…?」

松葉

「…やつこねば歸れ…?」

秀一

「皆それぞれの属性の・R I N Gを頂いたよ。いずれ戦いで見せてやるぞ。」

「そうそう・R I N Gと言えば・・・イズナについての話が途中じやつたな。そもそも特殊能力を秘めた・R I N Gは、我々忍者が特別な彫金を施したアクセサリーに、その忍法をダウンロードして造る物！！」

康太郎

「それが・R I N Gの正体！？全ての・R I N Gはインセディアから生まれた！？」

松葉

「ただの武器みたいに魔力の通つていない・R I N Gやつたら普通の彫金師でも造れるけどな。マジックボールも含めて、発祥の地はインセディアと言うてええ。さらに・R I N G自体、別の世界にある・A R Mという物を我々の先祖がいくつかインセディアに持ち帰り、その形状を研究して造られた物や！」

「イズナには前長老の意識が魔力と共に存在している！・・・つまり・『人間の意識』をもダウンロードできる数少ない・R I N Gなのじゃ！？」

イズナ

「私つてこの国の長老だったの？」

「そうじゃ。」

イズナ

「じゃあ偉いのね！？」

「今はただの・R H I N G、偉くも何ともないわ。」

イズナ

「シクシク・・・」

「問題は12年前の事じゅつた。この国、インセデイアにはこの世界全ての悪意、放たれてはならない人間の意識を封じていたオープがあつた。ディアナはそのオープの封を解いて、その意識をイズナにダウンロードしてこの地を捨てたのじゅ！！」

リアン

「なるほどな・・・ほんで8年前のイズナは・・・」

「今はそれは入っていないようじゅ。ちがう意識が入っているように見える。お主、半分の人格の記憶を失つてあるな？」

イズナ

「半分の人格！？」

「どれ・・・消えている記憶が戻るように忍法をかけてみよう。」

カツ！

哀

「イズナ・・・？」

イズナ

「・・・あなた・・・志保・・・か！？」

哀

「当たり前でしょーーー何言つてゐのよ、バカッ。」

イズナ

「・・・ハッ。そ、そうねーーー（今の感覚は・・・一体・・・！？）

」

松葉

「大ババ様、申し訳ありませんが、明日からも戦いがあるのです。」

「ウム。復旧は任せておけ。ディアナを・・・止めてくれ・・・」

哀達は、ディールゼイヴへと戻つて行つた。

ブン・・・

ディールゼイヴに戻つて來た哀達は、今回の事について考えていた。

哀

「やつぱり、また試練の扉に入った方が良いんじやない？」

コナン

「そうだね。これから相手はさらに手強くなるかも知れないし・・・

・

リアン

「決まりやな。ほな、今から行つて來い。」

そう言つと、リアンは試練の扉を召喚した。

「……！」

リアン

「中に入つたら、それぞれ2ヶ所修業場所がある。そこで修練には
げむんや。ええな？」

哀達は頷くと、中へと入つて行つた。

バタン！

リアン

「さて、アタシはどうしたもんかね……？」

リアンが頭をひねつていると、突然彼女の体が固まつた。

ピキー！

リアン

「な……何や!?」

リアンが動けないと、彼女の元に真っ黒な7人組がやつて來
た。

ザツザツ……

リアン

「な……何者や、アンタら……」

「我々は、ダゴンのやり方に不信感を抱く者・・・今から試練の扉
は、我々が乗つ取る！！」

7人組は、一斉にリアンに襲いかかった。

リアン

「キヤ〜ツ！！」

果たして、彼らの正体は・・・？

次回、瑛祐達に襲撃者が！！

ファイル594：襲撃！スリーレディースプラネット！！

康太郎と瑛祐は、襲い来る練習のガーディアン達を叩きのめしていった。

瑛祐

「へエ、君も姉がいるんだ。何か親近感が湧くな。」

康太郎

「本堂さんも姉がいるんですか？」

瑛祐

「ああ、今はワケあってペンデュラムアッシュにいるんだがね。」

康太郎

「そうですか・・・早く抜けられると良いですね。」

瑛祐

「ああ。」

その2人を、謎の3人組が見つめていた。

3人組は不敵な笑みを浮かべると、その場から消えた。

コナンと哀は、湖が見える場所で仲良く添い寝をしていた。

それを秀一とユーリが微笑みながら見ていく。

その4人を、向こう岸からコツソリと監視している2人がいた。

2人は静かにその場を去つて行った。

6人の男女が、1ヶ所に集まっていた。

「ダゴンのやり方が気に入らないから、自ら来たワケだけど……大丈夫かしら？」

「相手が誰だろうと、全力で役目を全うするだけです……！」

「オレ達は形式上はルークだが、強さではナイト級。勝てるだろうよ。」

「やつてみないとわからないけどね……」

「あら？ 1人足りないと思つたら、あのいまいましい猫娘は？」

「集団で戦うのイヤだから、出番が来たら合図くれつてさ。」

「相変わらず協調性ないヤツだな……」

6人の男女は、作戦会議を始めた。

松葉と玲子が、瑛祐と康太郎に合流していた。

ちなみにコナンと哀・ユーリと秀一は別の場所で休んでいる。

その松葉達4人を、3人の女性が監視していた。

3人はうなずき合つと、一斉に飛んで行つた。

ドン！－！

玲子

「松葉ちゃん、この気配……」

松葉

「ああ。魔力やね。あっちの方からしてきよるわ！－！」

松葉が振り返ると、3人の女がいきなり突っ込んで來た。

松葉

「な、何やコイツら！？」

4人は瞬時に攻撃をかわした。

3人は向こう側に着地する。

トッ！

マーキュリー

『ペンドュラムアッシュ構成員

』クラス

ルーク』

「氷使いのマー・キュリー……！」

ネプチューン

『ペンドュラムアッシュ構成員

』クラス』

ルーク』

「水使いのネプチューン……！」

ヴィーナス

『ペンドュラムアッシュ構成員

』クラス』

ルーク』

「雷使いのヴィーナス。我ら……！」

マー・キュリー・ネプチューン・ヴィーナス
『スリーレディース・プラネット!!!!』

3人は決めポーズを取った。

ドン！－！

玲子

「何なの、コイツら？」

松葉

「魔力は割りと高そうやね。そやけど頭は良くなさそう。」

ネプチューン

「そういうセリフは、この状況を打破してから言つべきセリフよ……！」

！』

ネプチューンは両手から・R I N Gを発動した。

ネプチューン

「ネイチャーライジング・ニークーンキャノン！！」

ネプチューンは両手からヤリ状のミサイルを発射した。

ドン！！

瑛祐

「3人共下がれ！！」

玲子達3人は後ろに下がった。

瑛祐

「アイアン・テオギドナ！！」

瑛祐は重力技でヤリを地面に沈めた。

ズドオ！！

だが・・・

マーキュリー

「ヨソ見はいけませんよ。」

瑛祐

「し、しまつ・・・」

マー・キュリー

「ネイチャーライ・R I N G・バブリングブロウー！」

マー・キュリーは水の拳で瑛祐を吹っ飛ばした。

ドガアー！！

瑛祐

「ぐああーー！」

瑛祐は地面に落ち、気絶した。

康太郎

「本堂さんーー！」

ヴィーナス

「ダークネス・R I N G・・・キュー・ティア・ヴォイス！！」

ヴィーナスはマイク型・R I N Gを使ったキレイな歌声で、松葉達の動きを止めた。

ギシイー！！

松葉・玲子・康太郎

「うあああーー！」

ヴィーナス

「殺しはしない。少し気絶させるだけよ。」

松葉

「ぐ・・・

もうダメかと思われた、その時・・・

「ラージア・デュリス!!」

マーキュリー・ネプチューン・ヴィーナス
「!!」

突如空中から降り注いだ攻撃を、マーキュリー達は慌てて避けた。

ババッ!

「間に合って良かったよ、アル。」

2人の男女が、松葉達に近づいて来た。

松葉

「ア、アンタらは・・・

瑛祐

「ファミリアさんとデュリオア!?」

強力な助つ人、参戦!!

次回、デュリオアの力が炸裂!!

ファイル595・思わぬ味方！ファミリアとデュリオアー！

マーキュリー達を奇襲したデュリオアとファミリアは、松葉達に近づいた。

デュリオア

「間に合って良かった。」

瑛祐

「どうして、ファミリアさんとデュリオアが一緒にいるんです？」

ファミリア

「和解したのよ。一応ね。」

ギン！！

デュリオア

「…！」

デュリオアはファミリアの冷たい視線にビクッとした。

ファミリア

「さて、サッサと戻りましょうか？」

ネプチュー

「アタシ達を倒すですか？」

マーキュリー

「良い度胸じゃないですか！」

ヴィーナス

「返り討ちにする・・・」

ヴィーナスは再びマイク型・RINGを出した。

ヴィーナス

「キューティア・ヴォイ・・・」

ファミリア

「新美ー！」

新美

「ガズン・ファミスー！」

ファミリアは両手から光弾を連射した。

ドビードビードーー！

ヴィーナス

「し、しまつ・・・」

ヴィーナスは光弾をモロに喰らった。

ドガアーー！

ヴィーナス

「キヤアアアアアーー！」

ドサッ！

ヴィーナスは倒れた。

マー・キュリー

「ヴィーナス先輩！！」

デュリオア

「キュー・ティア・ヴォイスには弱点がある！歌を歌う瞬間、一瞬動けなくなるんだ！そこをつけば、術者は無防備で必ず攻撃を当たられる！」

マー・キュリー

「よ・・・よくも、ヴィーナス先輩を…！」

マー・キュリーは突っ込んで来た。

ダッ！

マー・キュリー

「バブリング・ブロウ！！」

マー・キュリーはがむしゃらに殴りかかって來た。

デュリオアはそれを苦もなく避ける。

デュリオア

「イライラする状態になると、魔力も自然と荒れるものだ…・・・ヴィノー。」

ヴユノー

「テオデユリス！！」

デユリオアは攻撃でマークュリーを吹っ飛ばした。

「ゴッ！－！」

マークュリー

「キャン！－！」

ドサッ！

マークュリーは気絶した。

ネプチューン

「マ、マークュリ・・・」

叫ぼうとするネプチューンの背後に、デユリオアが回った。

ヒュッ！

ネプチューン

「ゲ！？」

デユリオア

「油断は大敵だよ、お嬢さん。」

デユリオアは手刀でネプチューンを倒した。

トスッ！

ネプチューーン

「あう・・・」

ドサツ！

康太郎

「つ、強い・・・圧倒的だ、この2人・・・」

松葉

「それにして、2人共どうやって入って来たんや？そもそもリアンちゃんはどうないなつとるん？」

ファミリア

「コイツらに襲われて閉じ込められたって彼女は言つてました。」

瑛祐

「そうだったんですねか。」

デュリオア

「とりあえず、君達はこの3人を縛つておいてくれ。オレとファミリア達はコナン君達に合流する。恐らくあの子達の所にも刺客が行つてるだろうからね・・・」

そう言つと、デュリオア達4人は走つて行つた。

次回、2人のコンビネーションが炸裂！！

ファイル596・強すぎ！？ファウナ兄妹のコンピネーション！-

3人の刺客を退けたファミリアとデュリオアは、コナン達4人に合流した。

コナン

「そうか、リアンちゃんがそんな事に。」

哀

「それで、変なヤツらが試練の扉内に紛れ込んでいるってワケね。」

デュリオア

「そういう事だ。4人共充分警戒してくれ。」

ファミリア

「既にこの辺りにいるかもしだれませんからね。」

コナン・哀

「わかった。」

8人が話をしていたその時、既に湖の中から3人の刺客が彼らを狙つていた。

弓の名手ウラノス。

人間離れしたサターン。

そして、もう1人・・・

ウラノス

『ペンドュラムアッシュ構成員

『クラス』

ルーク

「（オレに貫けぬ物はない……どんな距離にいようと、必ず撃ち抜く自身がある……）」

ウラノスはイルカの血が流れた魚類忍者である。

つまり、水の中からでも水の抵抗〇で矢を撃てるため、的を外す事はほぼないのだ！！

ウラノス

「（必中必殺の間合いまで、後少し・・・！）」

ウラノスは矢を引き始めた。

サターン

『ペンドュラムアッシュ構成員

『クラス』

ルーク

「（『鉄矢のウラノス』の異名を持つウラノスは、随一の『撃の名手だ。だが・・・ファミリアとデュリオアには魔力を察知する能力がある。2人共に矢を当てる事はできないだろう。そこで・・・オレ様の出番つてワケだ！）」

サターンは持っている・RINGと並外れた身体能力を組み合わせ、恐ろしい速度を生み出すのだ。

サターン

「（ウラノスの弓撃と同時に繰り出されるオレ様の突進は、何人も止める事はできねえ！！！」

?????

『ペンドコラムアッシュ構成員

『クラス』

『ルーク』

「・・・」

デュリオア

「どこから敵が来るかわからん。用心しろ、ファミリア。」

ファミリア

「言われなくともわかってる。」

そう言つたファミリアが、ピクッとした。

デュリオア

「どうした？」

ファミリア

「魔力だわ・・・私の左の方向から1人、デュリオアの方向から1人！私の方はかなり近づいて来てる！！」

デュリオア

「オレも感じた。後10秒・・・・9・・・・8・・・・7・・・・6・・・・5・・・・4・・・・3・・・・2・・・・1！！」

ファミリアがデュリオアの声と共に、右方向を向いた。

その瞬間、左方向から『矢が飛んで来た。

ヒュッ！！

新美

「アム・ファミナグル！！」

ファミリアが腕を強化し前に突き出すと、その拳にサターンが衝突した。

ゴッ！

サターン

「ふ・・・へ？」

ファミリアは左拳でウラノスの『矢を掴み、右拳でサターンを殴り飛ばした。

ドコオ！！

サターンは湖に落ちた。

バシャア！！

ウラノス

「（バカな！！オレの矢を防いだだけじゃなく、逆方向からほぼ同時に突進して来たサターンの攻撃にも反応しただと…？）」

ウラノスが驚いていると、正面からデュリオアが突っ込んで来た。

ウラノス

「！！」

ヴュノー

「リオル・ソルデュリス！！」

デュリオアは両手を剣に変えると、ウラノスを斬りつけた。

ザシユツ！！

ウラノス

「ぐあつ！！」

デュリオアが陸に上ると同時に、ウラノスが浮かび上がって来た。

プカア・・

ゴーリ

「な、何が起こったんだ！？」

秀一

「（ファミリア君はあの一瞬で向こう側から突っ込んで来るサター
ンに目を向け、デュリオアは水中のウラノスを倒すために呼吸を整
えていた・・・もし0・1秒でも遅ければ、ファミリア君はキズを
負いデュリオアも水中の敵を仕留めきれず、この2人との戦いは何
分もかかつた事だろう・・・乗り切った・・・この2人の抜群のコ
ンビネーションによつて！）」

秀一は2人の「ンビネーション」に感心した。

すると、1人の男が「ナン達の前にやつて來た。

「たいしたものだ。まさか」の子にまで出番が回つてくるとは思わなかつたよ。」

男は不敵に笑つている。

「出番だ、ジュピター！！」

男がそういつと、1人の女が湖から飛び出して來た。

ザパア！！

果たして、この女の実力とは・・・？

次回、「デュリオア」と「ジュピター」が激突！！

ファイル597・荒ぶる猫娘！テュリオアバジュピター！！

「出番だ、ジュピター！！」

ザパア！！

タンツ！

ジュピター

『ペンドュラムアッシュ構成員

＝クラス＝

ルーク』

「で？ フアミリアってどいつかニヤ？」

マーズ『セブン・プラネットのリーダー』

『ペンドュラムアッシュ構成員

＝クラス＝

ルーク』

「ロングヘアで桃色の髪をした女だ。ソイツ以外、好きにして良いよ。」

ジュピター

「マジかニヤ、リーダー？ わーいニヤ」

ファミリア

「何なの、この娘は・・・」

新美

「魔力は今までの6人の中で一番高い感じよ。でも何か頭悪そう。」

新美の言葉に、ジュピターは過敏に反応した。

ジュピター

「今、頭悪そうって言ったのオマエかニヤ？」

新美

「！」

ジュピター

「アタシ、バカにされるの大嫌いニヤー！」

そう言つと、ジュピターは新美めがけて突っ込んで來た。

ダツ！

そのジュピターを、ファミリアが止めた。

ガシッ！

ジュピター

「ニヤ？」

ファミリア

「あなたの相手は」の私です！..」

ファミリアはそつと、ジュピターを突き飛ばした。

ドンッ！

「 ジュピター

「 ニヤー..」

ジュピターは少し先で踏ん張った。

「 ジュピター

「 ウワサ通り強いヤツだニヤーならアタシも本氣で行かせてもらつ
ニヤー..ウHポン・RINGIヤウブレー..ド..」

ジュピターは剣を持って向かって来た。

「 ジュピター

「 ニヤ、ニヤ、ニヤ..」

ジュピターは高速で剣を振つて来た。

ブンブンブン!!

「 ファミリア

「 キヤツ..キヤツ..」

ファミリアの足下がふらついた。

グラッ!

「 ファミリア

「 あつ..」

「 ジュピター

「 もうつたニヤー..」

ジュピターは剣を振り下ろした。

ブンッ！！

その剣を、デュリオアが腕をクロスさせて防いだ。

ガキン！！

ジュピター

「ニヤ！？」

デュリオア

「ぐ・・・」

デュリオアはジュピターを振り払った。

彼の腕からは血が流れている。

ファミリア

「だ、大丈夫！？」

デュリオア

「これぐらい平氣だ。さて、そろそろトドメを刺すか。」

デュリオアはそう言つと、再び腕をクロスさせた。

ババッ！

デュリオア

「ヴュノー！」

ヴュノー

「シラン・デュリオア・ジオデュアス……」

ヴュノーが呪文を唱えると、巨大な生物がジュピターの目の前に現れた。

ジュピター

「お、大きいニヤ……」

ジオデュアスは巨大な手でジュピターを押し潰した。

グシャー！！

ジュピター

「フニニヤーーーー！」

ピクピク・・・

ジュピター

「や・・・やられた・・・ニヤ・・・」

ジュピターは気絶した。

デュリオア

「さあ、後はオマエだけだな？」

マーズ

「・・・」

ジュピターを倒したデュリオア。

だが、マーズは余裕の様子？

次回、ついに決着！！

ファイル598・届け！哀の優しき愛力（あいぢから）――

ジュピターを倒したデュリオアは、マーズの方を向いた。

デュリオア

「これで残るはオマエだけだな。」

マーズ

「やうだね。でもそう簡単にはやられませんよ。セブン・プラネットのリーダー、マーズの実力・・・とくと見せてやるよ。」

そう言つと、マーズは・R I N Gを取り出した。

マーズ

「ネイチャー・・R I N G・・・フレイムウェイツプ！――」

マーズは炎のムチを召喚した。

ボオ・・・

マーズ

「行け！――」

炎のムチが、コナン達に向かつて行った。

ズオオオオオ――

ファミリア

「新美！――」

新美

「ゴウ・スクエア・イルミリオ！！」

新美が呪文を唱えると、強大な正方形の盾がムチを防いだ。

ガガアン！！

マーズ

「何！？」

新美

「スクエア・イルミリオよりも数段パワーアップしたこの盾に、防げない攻撃はないわ！！！」

マーズ

「なるほど、確かに強いね。だが、この力には勝てまい・・・」

そう言いつと、マーズはディメンション・R I N Gでマークュリー達を呼び寄せた。

ヴン！

マークュリー達6人は気絶したままだ。

マーズ

「見せてやるつ。我ら7人の真の力を・・・」

そう言いつと、マーズは・R I N Gを取り出した。

マーズ

「ガーディアン・R I N G · · · プラネット・プルートゥー！」

マーズがガーディアンを召喚すると、マーズ達7人がガーディアンに吸い込まれた。

スウウ···

ユーリ

「な、何だコイツは！？」

マーズ

「人間達が徐々に忘れつつある惑星の1つ、冥王星···このガーディアンは、それを払拭させるために造られた···人間達の愚かな行いを、幼き頃より惑星の名前をつけられたオレ達は忘れはしない！現にブルートーは『あの事が発表』された後、自ら命を断ったんだよ、『自分には生きている資格がない』ってね。アイツの無念を晴らすため、オレ達7人はペンデュラムに入つたんだ。人間達への恨みを晴らすために！」

ガーディアンは動き始めた。

ゴゴゴ···

『ギシャアアア！』

ガーディアンの口から、強大な光線が放たれた。

ドン！！

ユーリ

「ぐつ、瑛祐君！！」

瑛祐

「はいーー！」

ユーリ

「アイアン・グラビ・・・・」

瑛祐

「アイアン・テオ・・・・」

秀一

「ダメだ、耐えられん！！」

ズドオー！！

ユーリ・瑛祐・秀一

「うわあああーー！」

ユーリ達3人は吹っ飛ばされた。
ドシャーー！！

コナン

「な、何てパワーだーー！」

哀

「相当怨念がこもっているわね、このガーディアン・・・・」

康太郎

「こんなのが、どうしたら勝てるんですか！？」

康太郎が顔を青くしながら叫ぶ。

マーズ

「オマエ達に勝つ手段はない……このガーディアンを倒す術などないのだ！！」

ガーディアンはコナン達を再び攻撃する。

ドゴォ！！

コナン達は吹っ飛ばされた。

玲子と松葉も気絶した。

コナン

「もう、ムリだよ・・・勝てない・・・」

コナンは絶望的な気持ちになつた。

哀

「そんな事ないわ！ずっと耐えれば、いつかスキが・・・」

マーズ

「このガーディアンにスキなどない！もう諦めるんだなーー！」

哀

「クッ・・・」

哀が俯いた、その時だつた。

ファミリアとデュリオアの声が聞こえた。

ファミリア

「まだ終わつてないわ！！」

デュリオア

「オレ達が力を合わせれば、できる！！」

新美とヴユノーが、ファミリアとデュリオアの横に立つた。

新美

「シイン・ファミリア・ジガディウス・ジオファウナ！！！」

ヴユノー

「シラン・デュリオア・ジオデュアス・ディオファウナ！！！」

新美とヴユノーが呪文を唱えると、強大な生物がガーディアンの両脇に現れた。

ズオオ！！

マーズ

「な、何だ！？」

そして、ガーディアンを押さえつけたのだ。

ガシイ！！

マーズ

「グオツ！！」

ファミリア

「今よ哀ちゃん！！」

哀

「はい！バージョン4・ルピナス！！」

哀がルピナスを召還すると、淡い光がガーディアンを包んだ。

パアアアアア・・・

そして、マーズ達をガーディアンから解放し地面に降ろした。

トサッ！

哀

「今だわ！バージョン3・シェリングフォードガーゴイル！！」

哀はシェリングフォードガーゴイルを召還し、シェリングガーゴイルレイでガーディアンを破壊した。

ドン！！

パキイン！

マーズ

「勝てなかつた・・・プルートーの無念、晴らせなかつた・・・」

コナン

「できるよ、これからでも。」

哀

「これからは自分達の意見を政府にちゃんと伝えねば良いのよ。ね？」

コナンと哀は笑顔でマーズ達に接した。

その2人に、マーズ達は笑顔を見せたのだった。

その後、マーズ達は自分達の目的を遂げるためにペントデュラムアッシュを抜けた。

ちなみにリアンはと、ダークネスで動きを止められた所をマーズ達に襲われ、大きな箱の中に監禁されていたらしい。

ともあれ、コナン達は無事に試練の扉から外に出た。

だが、7人の戦いで体力を消費したコナン達に、5THバトルに出る体力があるのだろうか・・・？

次回、ハヤテ達がようやく合流します！！

ファイル599・新たな援軍！任せて、5THバトル！！

セブン・プラネットとの戦いを終えた袁達は、ディールゼイヴへと戻つて來た。

もう時刻は夜中になつてゐる。

袁

「疲れたわ・・・」

コナン

「7人との連戦だったからね・・・」

ファミリア

「今日はもう遅いです。すぐに寝ましょー。」

コナン達は、城の中に入つて就寝した。

翌朝

カミコ

「監さん、おはようござります。昨日はよく眠れました・・・か？」

カミコは言ひ切つとして、啞然とした。

コナン達は、みんなグッタリしていたからだ。

カミコ

「どうしました、皆さん？」

哀

「昨日ペントコラムの連中7人がティメンション・RIVINGの中に
入って来て、戦つてたのよ。」

カミコ

「セブン・プラネットの連中ですね。全く自分勝手な連中です。」

カミコがそう言つと、ディールゼイヴの姫がダイスを持つて來た。

「さて、どうやら皆さんかなり疲れているようですが・・・今日の
5THバトルに出られる方はいませんか？」

コナン達は全員首を横に振つた。

カミコ

「困りましたねぇ・・・参加資格のある者全員が出場できないとなる
と、試合を延期するしか・・・」

「その必要はありませんよ。」

カミコや哀達が振り向くと、ハヤテや咲夜を始めとする27人以上の
集団が現れたのだ。

その中に、歩いている。

どうやら4THバトルの後、弟や叔父と共にペントコラムを抜けた

ようだ。

コナン

「ハヤテ君ーー！」

哀

「咲夜ちゃんーー！」

ハヤテ

「遅くなつてスミマセン、暫さー。

咲夜

「ここから先はしばらく待ち合わせで、ゆっくり休んでや、みんなー！」

カミコ

「援軍とこいつケですか。それではダーリン様のルール変更に伴い、あなた方も今から予選テストを受けてもらいますよ。」

千桜

「資格があるかどうかのテスト、とこいつケですか。」

ソニア

「望むところです。」

ハヤテ達は、予選テストを受けた。

結果は・・・

コミュ

「ぜ・・・全員合格・・・です・・・」

コナン

「よつしゃあーー！」

カミニュは、これ以上はない真っ青な顔をしていた。

カミニュ

「ま、まさか、全員に予選を突破されるとは・・・いくら今回はナイトが混じっていなかつたとはいえ、何という強さなんですか、皆さんは・・・」

カミニュが驚いていると、1人の女性が現れた。

「あら、今日は随分顔ぶれがちがうのね？」

カミニュ

「あ、バラライカ様。」

バラライカ

「植物使いのあの男の子は出ないの？」

カミニュ

「ええ、スタミナ切れでして。」

バラライカ

「そう。残念だわ。」

バラライカは残念そうな顔をした。

カミュ

「では、今回は人数と場所の決定を2個ずつのダイスで決めましょ
う。」

ディールゼイヴの姫が、ダイスを4個投げた。

ヒュッ！

カツン！

5 4 計9

4 3 計7

カミュ

「人数9 VS 9！場所は、草原フィールド！！さあ、誰が出ますか
？」

進み出たのは、歩美・理沙・美希・泉・千桜・愛歌・鈴・サキ・そ
して結だ。

カミュ

「この9人ですか。ではこのメンバーを、草原フィールドへ！！」

組織対戦5THバトル 草原フィールド

ヴン！！

歩美達9人は、草原フィールドへとやつて来た。

歩美 「わー、見渡す限り草で一杯だわ！」

鈴 「暴れ甲斐があるじやない。」

サキ 「・・・来ますよ。」

サキの言葉の直後、9人の構成員がやつて來た。

ドン・・・

バラライカ

「アタシは最後に出るわ。ナイト級だしね。」

カミニュ

「さあ、新規メンバーの初陣！－まずは誰が出ますか？」

歩美

「私よ。」

歩美が進み出たのだった。

次回、歩美が可憐に戦う－－

ファイル600・吉田歩美、可憐な舞！！

バラライカ

「相手はあの子か。」さうからほます誰が出る?」

リカー

『ペンドュラムアッシュ構成員

＝クラス＝

ルーク』

「アタシ。急にしゃしゃり出て来たガキ如きが簡単に突破できないつて事を、このリカーが教えてやる。」

カミユ

「5THバトル第1戦！アル、吉田歩美！ペンドュラムアッシュ、リカーノ開始！！」

リカー

「ウェポン・RING・フェザーソード！！」

ボンッ！

リカー

「さあ、そつちはどんな攻撃を・・・え！？」

歩美

「ハアアアアアツ！！」

歩美が力を込めるごとに、彼女の手足に刃が生えた。

ジャキン！！

歩美

「行くわよお！！！」

ドンッ！！

歩美はリカेに突っ込んだ。

リカー

「わっ！ちょっと、ちょっと待って・・・」

リカーは狼狽えるが、歩美は容赦なく攻撃を繰り出す。

歩美

「やつ！せい！..」

リカー

「キヤツ！キヤツ！..」

歩美

「ゼエイツ！..」

歩美は強力な一振りをした。

ブンッ！！

リカー

「キヤアツ！..」

リカーは何とか避けると、後ろに下がった。

ザザザ・・・

リカー
「冗談じゃないわ、こんなの！こんな子、アタシじゃ倒せるワケない！！」

「相手が悪かつたようですね、バラライカ。」

バラライカ

「そうね。相手の力量を軽く見たのが運のつきよ。」

リカー

「接近戦じゃ分が悪いわ！間合いを取つて、何とかスキを・・・」

歩美

「ブレイドカッター！！」

歩美は両腕についた刃を飛ばして来た。

ビュン！！

リカー

「ウソオオオ！！」

リカーは飛んで避けた。

ドンッ！

リカ－

「フウ、危ない危な・・・」

安心したリカ－の後ろに、歩美が回り込んだ。

バツ！

リカ－

「あ、しまつ・・・」

歩美

「寝なさい。」

歩美はリカ－の後頭部に空手チョップを叩き込んだ。

トスッ！

リカ－

「うつ！..」

リカ－は地面に叩きつけられた。

ドスン！！

リカ－は完全に気絶した。

ピクピク・・・

カミュ

「第1戦！勝者！アル、吉田歩美！！」

歩美

「ま、こんなものよ。」

歩美は、刃を手足に直した。

歩美にはルークも敵ではなかつたようで・・・

次回、理沙が戦います！！

ファイル601・危うし！流血の理沙！！

「リカーめ、あんなガキにやられるとは情けない。まああの子が強かつたつて事だな。次はオレが出るぜ、良いよなボス？」

バラライカ

「好きにしなさい、ブラティイ。」

ブラティイ

『ペントテコラムアッシュ構成員

＝クラス＝

ルーク

「了解、ボス。さあ～て、誰がオレと戦うんだ？」

ブラティイはニヤニヤしている。

鈴

「じゃあ、ここはアタシが・・・」

理沙

「イヤ、鈴君。ここは私に任せてくれないか？」

進み出ようとする鈴を、理沙が止めた。

鈴

「わかったわ、頑張ってね理沙ちゃん。」

理沙

「ああ。」

理沙は笑顔で言った。

カミュ

「第2戦！アル、朝風理沙！ペントコラムアッド、ブラティ！開始
！」

理沙

「伊澄君の見ている前で、無様な戦いはしない…ああ、来い…！」

ブラティ

「威勢の良い女だねえ。オレそういう女は嫌いじゃないぜえ…！」

ブラティは突っ込んで来た。

ブラティ

「ネイチャーライニング・ブラッヂソード…」

ブラティは血でできた剣で、理沙に斬りかかった。

ブンッ！

理沙

「おつとー！」

理沙は軽く避ける。

ヒュンッ！

理沙

「……」

理沙がブラティを見ると、彼の腕から血が流れていた。

理沙 「どういう事だ！？なぜ君の腕から血が……」

ブラティ

「IJの・R I N Gは、オレの血を糧^{カテ}として攻撃力を高めるんだ。つまり、オレの血の容量^{キャパ}がなくなるまでしか戦えないってワケよ。」

理沙 「それでよく君生き延びてここられたな……」

ブラティ

「ああ、IJの・R I N Gは他の人間の血も吸えるからな。」

理沙

「な、何だと！？」

ブラティ

「そう、オレはIJの・R I N Gで人間の血を吸い取りながら、容量を延ばし生き延びてきたのさ。つまり、だ。この戦いでオマエの血も頂く。そしてオレは、永遠にこの・R I N Gで戦い続けるんだよ！」

理沙

「君がどんな人生を送つて来たか、私にはわからない。だが私は、何としても負けられないんだ！私をメイドとして雇つてくれた、伊澄君のためにも・・・私は絶対に負けない！！」

理沙はお札を取り出す。

理沙

「ハアツ！！」

理沙はお札を放つた。

ビッ！

ブラディ

「ナメるな。」

ブラディはお札を一枚残らず斬り裂いた。

ザシユ！！

理沙

「お、お札が！」

ブラディ

「頂くぜ、オマエの血液！！ダークネス・R I N G・モスキートロ
ープ！！」

ブラディは赤い繩を放つた。

ドシユ！！

繩が理沙に巻きつく。

グルグルグルグル！！

理沙

「キヤアアアアアアーー！」

理沙は赤い縄でグルグル巻きに縛られてしまった。

理沙

「うぐ・・・」

縄がさらに赤く染まり出した。

ギリギリー！

理沙

「キヤアアアアアアツーー！」

理沙は苦しそうに叫んだ。

ブラティ

「この縄が巻きついている限り、オマエの血は徐々に吸われていくぜ。勝負あつたな？」

理沙

「う・・・」

理沙は座り込んだ。

ガクン・・・

伊澄

「理沙さん、ギブアップして……」のままじゃ死んじゃうわ……！」

伊澄が叫んだ。

だが、理沙は・・・

笑みを浮かべていた。

理沙

「言つたじゃないですか、伊澄君・・・私はあなたのためなら、どこまでも頑張れるって・・・朝風陰陽術・・・朝日^{イヤシカゼ}の癒風！！」

理沙が叫ぶと、彼女を縛っていた赤い繩が粉々になつた。

ブチィイイイイー！

そして、理沙のキズが少しづつ治り始めた。

スウウウウウ・・・

ブラティ

「な、何い！？」

理沙

「あらゆる呪いを跳ね飛ばし、身体のキズを直す朝風家に伝わる治癒術・・・いざという時のために、勉強しておいて良かつた・・・」

理沙はふりつきながら、立ち上がつた。

「 ブラティ

「 やられちまつたなあ・・・」 こんな事になるなり、 こんな・R I N G
G使わなきや良かつたよ・・・」

そいつのブラティの体から、一気に血が噴き出した。

「 ブショウ！ ！」

「 ブラティ

「 グハアアアアア！ ！」

理沙

「 ブラティ！ ？」

「 ブラティ

「 気にするな、これがこの・R I N Gの代償なのさ・・・相手の血
を吸いきれなかつた場合、逆に術者の血液を一気に奪つ・・・正々
堂々と勝負すれば良かつたよ・・・すまなかつ・・・た・・・」

ブラティは倒れ、絶命した。

「 ドシャ！ ！」

カミユ

「 第2戦！ 勝者！ アル、朝風理沙！ ！」

理沙

「 ブラティ・・・」

理沙、流血の勝利！

次回は美希が出陣だ！！

ファイル602・美希、頑張る！！

バラライカ

「ブランディ、調子に乗って血を吸う…RINGを使い過ぎたわね。

まあ仕方ないわ。さ、次は誰が出る?」

マリー

『ペンドュラムアッシュ構成員

』クラス』

ルーク』

「私が出るわ。これ以上アルにナメられてたまるか。」

バラライカ

「バカな事はしないでね。」

マリー

「わかつてます。」

サキ

「こつちは誰が出来ますか?」

美希

「私が出る。理沙だつて頑張ったんだもの、私だつてやれるトコ見て
せてやるわ。」

カミユ

「第3戦！アル、花菱美希！ペンドュラムアッシュ、マリー！開始！」

！」

マリー

「ウハポン・RING、ダブルブーメラン！－」

ポン！

マリー

「行くわよ、嬢ちゃん！－」

マリーは両手のブーメランを投げた。

ブン！

美希

「パー能力、マリー！リフレクトシールド！－」

美希はマリーのパー能力で、ブーメランを弾いた。

バチーン！

マリー

「へへ、やねじやない？」

美希

「風月ちゃん達と迷い込んだあの洞窟で手に入れたこの道具、持つて来ておいて良かったわ。さあ、今度はこっちから行くわよー。コペー能力、ジェット！－ジェットストリームアタック！－」

美希は背中にジェットパックを背負い、マリーに突っ込んだ。

ドゴオ！－

マリー
「グツ……」

マリーはよろめいた。

マリー

「やるわね……でも、勝つのは私よ！――！」

マリーは美希に突っ込んだ。

美希

「コペー能力、スーパーレックス！――！」

美希の頭に紫色のハチマキが現れた。

美希
「ハツ――！」

美希はマリーの突進を避け、マリーを掴んだ。

ガシツ！

マリー

「キヤツ――！」

美希はマリーを掴んだまま、空中に飛び上った。

ドンッ――！

美希

「岩石落としいにいにい！！」

美希はマリーを地面めがけてブン投げた。

ブンツ！！

マニーは毎日忙しかった。

マニ・ベラル

マリーはふらつきながら立ち上がった。

マリ

一
あ
あ
・
・
・
「

だが、そのまま再び倒れた。

ドサツ・・・

力ミュ

「第3戦！勝者！アル、花菱美希！！」

美希

「か、勝てた・・・この私が・・・?」

理沙

「スゴイじやないか、美希!-!」

美希

「う、うん・・・」

美希は赤面した。

泉

「よーし!次、泉出ますよおー!-!」

泉が笑顔で名乗り出た。

果たして、泉は勝てるのか!?

次回、泉の初陣だ!!

ファイル603・泉、華麗な剣術！！

泉

「ルンルン」

泉は上機嫌で前に進んだ。

バラライカ

「向こうはあの笑顔がステキな子か。こつちは誰が行く？」

クワス

『ペントデュラムアッシュ構成員

『クラス』

ルーク

「ワイが出よ。」

ズン！

カミュ

「第4戦！アル、瀬川泉！ペントデュラムアッシュ、クワス！試合開始

！！！」

クワス

「嬢ちゃん。戦うんは初めてかいな？」

泉

「うん。そだよ」

クワス

「 もうか。 ならワイスが教えてやるわ。 」Jの戦いの厳しそうもんを
！ ！」

クワスは身体硬質化タイプのネイチャー・RINGを発動せると、
泉に殴りかかった。

グオッ！！

泉

「 わあ ！」

泉は軽やかに避けた。

クワスは地面を殴つた。

ドゴォ ！！

クワス

「 なぬ？ ワイの鉄拳が避けられたやとー？ こんな小娘にーー？」

泉

「 どうしたの？ 私はまだまだ元気だよー ！」

泉は元気に弾んでいる。

クワス

「 お、 おのれえ・・・ 」Jのワイスがこんな小娘に「 ケにされて・・・ 黙つとれるかあーー！」

クワスは力任せに殴りかかつて来た。

クワス

「つおおおおおおーー！」

クワスはがむしゃらに鉄拳を繰り出した。

ブン、ブンー！

だが泉はそれを全て避けた。

ヒョイ、ヒョイ！

クワス

「ハアハア、ハアハア・・・」

息も絶え絶えのクワスに対し、泉は相変わらず笑顔だ。

泉

「じゃあ、次は・・・私の番だね。」

泉の目つきが鋭くなつた。

そして、腰に差していた何かを抜いた。

スラッ！

クワス

「な、何や、それは！？」

泉

「これ？私がメイドする事になった家の子から貸してもらつた、妖木刀・物干竿だよ。」

泉は冷静に答える。

泉

「さつきまで私の事、散々好き放題言つてくれたよねえ・・・今度は私の攻撃だよ。」

クワス

「ヒツ・・・」

泉

「行くよおーー！」

泉は木刀を持つて突っ込んで來た。

泉

「ハアアアアアア・・・」

泉が念じると、木刀が長く伸び始めた。

グググ・・・

泉

「弾けろーー！」

泉が叫ぶと、木刀がいくつもの節状に弾けた。

泉

「必殺！！物干銳利千先端刺し！！！」

いくつもの節が、クワスに襲いかかつた。

ケワス

ケツスは何とか避けきった。

「ハア、ハア
・・・」

そんなクワスの眼前に、泉が立っていた。

ケワス

四

「セハイ！」

泉は元に戻った木刀でクワスの頭を叩いた。

バシイ！！

クワス
グハ
・
・
・
』

クワスは倒れた。

ドサツ・・・

カミュ

「第4戦！勝者！アル、瀬川泉！！」

泉

「わい」

泉は笑顔に戻った。

泉、強い！

次回は千桜が頑張ります！！

ファイル604・千桜、戦うメイドさん!!

千桜

「「」の順番でいくと、次は私の番ですね。」

千桜が進み出る。

愛歌

「千桜さん、大丈夫なんですか?」

千桜

「大丈夫ですよ。ゲームセンターでよく格闘物やっていますし。」

愛歌

「そ、そういう問題ではないのです・・・」

千桜

「心配しないでください」

千桜は笑顔で言った。

ギムレット

『ペントテコラムアッシュ構成員

『クラス』

ビショップ

「5戦目はボクが出るよ。」

カミュ

「第5戦!アル、春風千桜!ペントテコラムアッシュ、ギムレット!開

始…！」

ギムレット

「まずは軽く行くよ。ウHポン・RING、ボムチHーン…」

ポンッ！

ギムレット

「で、やつらは何を出すかな？」

千桜

「メイドプリズムパワー…！変・身！」

千桜は一瞬でメイド姿に変身した。

ギムレット

「ちょっ…今どいつもやつて着替えたんだよ…!?」

千桜

「禁則事項ですよ」

千桜は笑顔で言つ。

ギムレット

「…」

両チーム共放心状態。

ギムレット

「気を取り直していくか…」

ギムレットは千桜に向かつて行く。

ギムレット

「ハツ！」

ギムレットはチエーンを伸ばして攻撃した。

ギュン！

千桜

「やつ！..」

ヒョイ！

千桜は華麗に避けた。

千桜

「今度はこっちの番ですね？」

千桜は5章のマラソン大会でも使っていたブーメランを取り出した。

千桜

「このブーメランは、あの時よりもパワーアップしています。行きますよーー！」

千桜はブーメランを投げた。

ブン！

ギムレット

「チョーンよ、剣状になれ！」

ギムレットが叫ぶと、鎖は剣のようになり固くなつた。

カチン！

ギムレット

「チョーンよ、ブーメランを斬り裂け！！」

ギムレットが剣状になつた鎖を一振りする。

ザン！！

ブーメランは、見事真つ二つに・・・

ならなかつた。

ギムレット

「な、何！？」

何と、真つ二つになつたハズのブーメランが、2つに増えていた。

ギムレット

「な、何い！？」

2つになつたブーメランが、ギムレットに迫つた。

ギュン！

ギムレット

「ウオオオーー！」

ギムレットは辛くも避けた。

ギムレット

「これならどうだあーーー！」

ギムレットは2つのブーメランを斬つた。

ザシュー！

ギムレット

「よし、これで・・・」

そう安心したギムレットは、驚愕した。

何と、斬り裂いた2つのブーメランが今度は4つに増えていたのだ！

ギムレット

「バ、バカなーー！」

ギムレットに迫る4つのブーメラン。

ギムレットは3つまで何とか避けたが、最後の1つを避けきれず、腹部をかすつた。

スペツ！

ギムレット

「グッ！…」

ギムレットは耐えきれず、ガクリとビザをついた。

ガク・・・

ギムレット

「な、なぜ・・・」

ドサツ！

ギムレットは倒れた。

千桜

「このブーメランは改良を加え、斬られるたびに分裂するようになつたんですよ。残念でしたね」

千桜は最後まで笑顔だった。

カミュ

「第5戦！勝者！アル、春風千桜！…！」

ビショップ相手に余裕の千桜！

次回、愛歌が真の力を發揮する！…

ファイル605・愛歌の真の力！！

愛歌

「頑張りましたね、千桜さん。流れからって次は私の番ですね。」

愛歌が前に出た。

バラライカ

「次は6戦目か。あなたが行つて来なさい、リキュー。」

リキュー

『ペンドュラムアッド構成員

』クラス』

ビショップ』

「わかりました。」

カミュ

「第6戦！アル、霞愛歌！ペンドュラムアッド、リキュー！開始
！！」

リキュー

「ネイチャーナーニング、マジカルベイリーフ！！」

リキューがナーニングを発動させると、草原の草がざわめきだした。

ザワザワ・・・

愛歌

「え？」

リキュール

「私は草使いのリキュール！私の・・R I N Gは雑草を始めとするあらゆる草花を操る事ができるの。」んな風にね！」

リキュールが念じると、葉っぱが畠に浮かんだ。

リキュール

「行きなさいーーー！」

リキュールが愛歌を指差すと、葉っぱが矢のよつて愛歌を襲つた。

ギュン！

ザシュー！

愛歌

「キヤーーー！」

葉っぱが愛歌の頬をかすつた。

愛歌

「う・・・」

リキュール

「中々の高威力でしょ、うーこのワイルドでの私の力はナイト級にも匹敵するの。」

愛歌

「確かにキツいですわね。でも、私だって負けるワケにはいかないんですよ！」

愛歌はそう言つと、何かを取り出した。

スッ！

愛歌

「牧村さんに作つてもらつた、この道具・・・私の真の力を引き出してくれるハズです。ハツ！」

愛歌が念じると、彼女の周りにいくつもの竜巻が発生した。

「オオオオオオ・・・」

愛歌

「ハアツ！！」

愛歌が竜巻を放つと、それはリキュールの視界を塞ぎ始めた。

「オオオオオオ！！」

リキュール

「な、何これ！？ま、周りが良く見えない！！」

リキュールは周りを見回している。

千桜

「そういう事ですか。愛歌さんの名字は『霞』。つまり愛歌さんの真の力とは、霧と霞で視界を遮り、相手を惑わせる・・・攻防一体

の力というワケですね・・・

リキュール

「ぐ・・・う・・・」

リキュールは・R I N Gを取り出した。

リキュール

「ネイチャー・R I N G・霧払いの風！！」

リキュールは霧霞を吹き飛ばした。

ゴオオオオオ！！

そのリキュールの前に、愛歌が現れた。

スッ！

リキュール

「！」

愛歌

「えい！..」

愛歌はソニアに借りたトンファード、リキュールの腹部に一撃を入れた。

リキュール

ドゴオ！！

「あ・・・」

ドサ・・・

リキュールは倒れた。

カミュ

「第6戦！勝者！アル、霞愛歌！－！」

愛歌

「フウ・・・ギリギリでした・・・」

愛歌、可憐に勝利！！

次回はいよいよ鈴が戦う！－！

ファイル606・鈴、怒りの鉄拳!!

鈴

「千桜ちゃんも愛歌ちゃんも、スゴイね。さあて、次はアタシが暴れて来るとしますか。」

鈴は右手を回しながら歩いて行った。

バラライカ

「相手はあの子か。どちらが先に出る?」

マオタイ

『ペンドュラムアッド構成員

』クラス』

ビショップ』

「オレが出てえ。あの娘の態度が気に入らねえんだ!!」

ズン!

カミュ

「第7戦!アル、遠蘭鈴!ペンドュラムアッド、マオタイ!開始!」

マオタイ

「おい、小娘ナメた態度取つてんじゃねえぞ?速攻で終わらせてやるよ。ネイチャー・RING・フレイムリング!!」

マオタイの周囲に、炎の輪が複数現れた。

ボン！

マオタイ

「行け！…」

マオタイは炎の輪を飛ばした。

ビュン！

鈴

「やつ！」

鈴は難なくかわした。

鈴

「アンタ」こそナメてんの？こんな攻撃じや元太君も倒せないよ？」

マオタイ

「オマエ、何も見てねえんだな…・・・周りをよく見てみな！」

鈴

「？」

鈴が辺りを見回すと、周囲が火の海になっていた。

マオタイ

「オレの・R I N G の攻撃で、オレとオマエの周囲は火に囲まれた！言わば炎上の闘技場つてワケよ。どうだ？ オマエの死に場に相応しいステージだろ？」

マオタイは笑いながら言った。

だが、鈴は冷静にこう言い返した。

鈴

「言いたい事はそれだけ？」

マオタイ

「何？」

鈴

「アタシにケンカ売った事、後悔させてあげる・・・ラージア・バ
ブルス！！」

鈴が地面に手をつくと、地面から水が四方八方に飛び散った。

ドパーン！！

そして雨のようになり降り注いだ水が、一瞬にして炎の海を消火した。

ザアアアアアアー！！

シュウウウウウ・・・

マオタイ

「バ、バカな！！オレの炎の海が一瞬にして消されただとおー！？テ
メエ、何をしたあー！？」

鈴

「別に？アタシの呪文の力で、アンタの自慢の炎の海を消火してあ

鈴はマオタイに歩み寄った。

ツカツカ

マオタイ

「...」シヨウ・シヨウ

金

- 後悔して眼涙な！！！」

鈴はマオタイの腹を殴った。

ドーナツ！！

マオタイ

マオタイは遠くに吹っ飛ばされ、氣絶した。

ドザアアア・・・

金

「あー、スッキリした！」

鈴の変貌振りに、歩美達は恐怖感を抱いていたという・・・

力ミユ

「だ、第7戦！勝者！アル、遠蘭鈴！！」

鈴、怒りの鉄拳・・・

次回、メイドのサキが戦つよ！－！

ファイル607・サキ、麗しき風！！

鈴

「口だけで大した事なかつたわ。」

鈴はそう言いながら戻つて來た。

サキ

「次は私が出ますーで、でも、メイドの私に戦えるのでしょうか・・・」

サキは戸惑つてゐる。

鈴

「前まで普通の女子高生だつたアタシだつて勝てたんです。自信を持つてください、サキさん！」

サキ

「そ、そうですね！」

サキは鈴の言葉に励まされた。

バラライカ

「これで残るは、私とあなた・・・行きなさい、グラッパ。」

グラッパ

『ペンドュラムアーブ構成員

』クラス

ビショップ

「了解。」

カミュ

「第8戦！アル、貴島沙希！ペントデュラムアッド、グラッパ！開始
！」

グラッパ

「ウェポン・RING、一一ドルバット。」

ボン！

グラッパ

「行くぞ、メイドー！」

グラッパはバットを持つて突っ込んで来た。

ブンー！

サキ

「キャア！！」

グラッパの攻撃を、サキはかるうじてかわした。

サキ

「この戦い方、どこかで見た事あると思つたら・・・前に若と一緒に遊んだSDK2のリメイク版のボスじゃないですか！」

サキが言つているSDK2とは、1995年にスーパーファミコン用ソフトとして任天堂から発売され、2004年にはゲームボーイアドバンス用ソフトとしてリメイク発売された大人気のゲーム・ス

－パードンキー コングの事である。

そのゲームのボスの1人に、トゲ棍棒を使って襲つて来るグラッバ
というワニがいるのだ。

サキ

「あのワニと同じ戦い方を得意とするとは・・・私にとつて不足は
ありません！」

サキは右手に風をまとわせた。

ギュルル・・・

サキ

「ジキルガ！！」

サキは風の攻撃を放つた。

ギュオ！！

グラッバ

「フン！！」

ドカ！！

グラッバは棍棒で風を弾いた。

グラッバ

「この程度か？なら、次はオレの番だな。」

そう言つとグラッパは空高く飛び上がり、地面に着地した。

ドズン！！

サキ

「キヤー！」

サキの足下がしびれた。

サキ

「か、体がしびれる・・・」

グラッパ

「ククク・・・動けないだろ？」「

グラッパはサキに近寄つて来る。

ザツ、ザツ・・・

サキ

「こんな所で負けるワケにはこきません！私だって、頑張るんで
す！！」

サキは両手と両足に風をまとわせた。

ギュルルル・・・

サキ

「シ!!ン・サキコラオウ・ディオジキルガ！-！」

サキは超巨大な風の魔物を放った。

ビュゴオオオオオオオオ！！

グラッパ

「風の魔物を召喚する術かあ！！その力もはねのけてくれるわ……」

グラッパは棍棒で風の魔物を受け止めようとした。

だが・・・

ガガーン！！

グラッパ

「グオ・・・」

グラッパは押し返される。

グググ・・・

グラッパ

「バカな・・・このオレが力で押し負けているだとー？こんな事が・・・こんな事があり得るかあああああーー！」

グラッパは絶叫したが、ムダなあがきだった。

ドゴオオオー！！

グラッパ

「グハアアアアーー！」

グラッパは吹っ飛ばされ、気絶した。

ドザア！

カミュ

「第8戦！勝者！アル、貴島沙希！！」

サキ

「フウ・・・」

さすがだね、サキ！

次回、結の初陣です！

ファイル608・結の輝かしき光！！

結

「ここまで全勝ですね。みんな強いです！私も勝つて、気持ち良く終わらせて来ますわ！！」

結は大きく深呼吸すると、走り出した。

バラライカ

「私の出番ね。行つて来るわ。」

バラライカも歩き出した。

ザツ！

カミュ

「さあ、5THバトルも最終戦！好戦を見せてもらいましょう！！
5THバトル最終戦！アル、三千院結！！ペンデュラムアッシュ、バ
ラライカ！！試合・・・開始！！！」

バラライカ

『ペンドュラムアッシュ構成員

』クラス』

ナイト』

『ネイチャーリング・ボムハーブ！！』

バラライカは真っ赤な花を出して來た。

バラライカ

「ああ、これに対しどう対処する?」

結

「ロンド・ナディス!...」

結はムチ状になつた光で、ボムハーブを攻撃した。

ビュン!

チヨン!

ドカーン! !

結

「キヤツ! ! 直接攻撃は少し危険ですね。ならば・・・「ラージア・ナディス! !」

ドン! !

デゴオ、デゴオ! !

結は波状に広がる光で、一気に植物を消し飛ばした。

バラライカ

「フフフ、中々面白い戦い方をするわね。私のボムハーブを一撃で根絶やしにした。ならばこちらも少しずつ本気を出していこうかしら。」

バラライカは新しい・RHNGを取り出した。

スツ！

バラライカ

「ネイチャー・RING、ユグドラシル！」

バラライカは・RINGの力で、フィールドに巨大な大木を出した。

ドン！

バラライカ

「上がつて来なさい、嬢ちゃん。勝負よ。」

バラライカは木の上に飛び登った。

ヒヨイツ！

結

「望むところです！」

結も彼女の後を追つた。

ヒヨイツ！

バラライカ

「ここからが本番よ。リーフカッター！」

バラライカが叫ぶと、木に生えた葉っぱが結めがけて飛んで来た。

ザザツ！

ギュオ！

結は服を数力所斬られた。

ザクッ！

結

「うぐ！！これがナイトの力ですか。でも、負けませんよー！！ガズン・ナディス！！」

結は光弾を連射した。

ドドドドドー！

バラライカ

「ローズウイップ！！」

ムチは光弾を弾きながら、結に襲いかかる。

バシィ、バシィ！

ムチが結を絡め取つた。

ニユルルル！

結

「キヤッ！！」

結はもがいた。

ジタバタ・・・

結

「「」おーーーナディス・ドロンーー！」

結が呪文を唱えると、体が柔らかくなりムチが外れた。

スルッ・・・

結

「「」から先はムチによる拘束は効きませんよ。」

バラライカ

「やるわね・・・でも、そろそろ決めさせてもうつわ。」

ザワザワ・・・

バラライカ

「スネーキー・ボウーー！」

バラライカが叫ぶと、木がヘビのようになにか變化し結に襲いかかった。

ギュオーーー

結

「ソルド・ナディスーーー！」

結は光の剣を発動すると、木のヘビを斬り裂いた。

ザシューーーー

バラライカ

「何ですって！？」

結は木のベビを全て斬り終えると、そのままバラライカに突っ込んだ。

ドンッ！！

結

「ハアアアアアアツ！！」

ブンッ！！

バラライカ

「キャツ！！」

バラライカは結の攻撃をかろうじてかわした。

バラライカ

「あ、危なかつ・・・」

結

「せい！！」

結はバラライカに追撃を喰らわせた。

ドゴオ！！

バラライカ

「あ・・・（一瞬で武器をハンマーに切り替えて・・・）

結

「ホルド・ナディス。光のハンマーを召喚する呪文です。ソルド・ナディスは剣ですから、直接的攻撃力はありませんからね。」

バラライカ

「ぐ・・・」

バラライカは倒れた。

ズン・・・

バラライカ

「私が油断したところをついて攻撃して来るとはね・・・完敗だわ。」

「

カミコ

「5THバトル最終戦！－勝者－アル、三千院結！－」

結

「フウ・・・」

結の勝利で、5THバトルは全勝！－

次回は瀬川泉とマリアの話です！－

ファイル609：瀬川泉がメイドになるまで

瀬川泉、白皇学院の2年生で生徒会委員長。

現在彼女、東尾マリアのメイドとして休日に仕えているのだが・・・もちろん、出会うまでの過程があつたワケで・・・

今回はその話をお話しましょーーー！

ハヤテと咲夜がつき合いだした頃、ナギやマリアなどはすぐに2人の交際を認めたが、中々すぐに受け入れられない者達もいた。

生徒会娘達、桂ヒナギク・瀬川泉・花菱美希・朝風理沙・春風千桜・霞愛歌の6人である。

実はこの6人、6人共が密かにハヤテに恋心を抱いていたのだ。

特にヒナギクと千桜、そして泉の3人はハヤテに告白しようとしたいだぐらいである。

そのハヤテが咲夜とつき合いだと聞かされたのだから、ビックリして当然だろ？。

幸い美希・理沙・愛歌の3人はすぐに立ち直ったが、残りの3人は中々立ち直れなかつた。

特に泉は夜通し泣いていて、兄の虎鉄がずっとなだめていたそ�だ。

よつやくヒナギクと千桜が立ち直った後も、泉だけはずつと元気がなかつた。

授業が終わると、決まって一人だけどこに行ってしまうのである。

そして、そんな日が長く続いたその後、泉は一人の少女に出会う事になる・・・

美希や理沙がメイドになつてからしづらへ経つたある日の事・・・

泉はいつものように、授業が終わると一人でそそくさと帰つていた。

泉

「（ハヤ太君・・・）」

泉はハヤテの事を考えながら歩いていた。

そのためか、彼女は周りがよく見えていないようだ。

やがて、泉は前から歩いて来た3人組にぶつかつた。

いや、正確に言つと3人組が意図的に彼女にぶつかつたのだ。

ドン！

泉

「キヤツ！！」

泉はそこで3人組を見上げた。

「何じゃ『ゴルア！』」

「やんのかワレハニ！..」

ハヤテ原作に時々出て来る、ダシム・ンギエフ・トルコ似の3人組である。

泉

「キヤアアアアアアー！」

泉は悲鳴を上げた。

「テメエ、どこの見て歩いてやがんだあああー!?」

「兄貴がケガしたらどうするつもりだ『ゴルアアアー！』」

泉

「ヒニーヤアアアー！..」めんなさいいいいー..！」

泉は再び悲鳴を上げた。

「グッ・・・右腕折れたかもしんねえ・・・」

泉

「えええええーーー！」

「兄貴ケガしたぞ！…どうすんだゴルアアアーー！」

「感謝料払えや感謝料！…！」

泉

「「めんなさい」「めんなさい」…」

泉はガタガタと震えている。

「どうあえず」「じゅうじゅう何だから、ちがつトコ行つて話そつか？」

男が泉の手を引っ張りつとした、その時だった。

1人の少女の声が聞こえたのは。

「そこまでにして、チンピラ。」

男達と泉が振り返ると、東尾マリアが立っていた。

「何じゃ オマエはああーーー！」

「ただのクソガキじやねえか！…！」

マリア

「アンタからかてガキみたいなもんやないか。自分からぶつかつて相手に言いがかりつけるやなんて、中学生のガキレベルやね。」

「何だと」「ゴルアアアーーー！」

「調子こじらねえぞワレハハハ…！」

【マリア】

「そんな『テカイ』声出したかて全然怖ないで。だいたいその骨折れた
いつやつ、アンタ口から出仕せやろ？」

「な、何言つてんだ！ オレは確かに右腕が…」

【マリア】

「セハイ！」

マリアは木刀を前に突き出した。

ヒヨッ…！

「グッ…！」

男は右手で木刀を弾いた。

【マリア】

「ホラ見てみい。右手ちゃんと動くやないの？」

マリアは冷静に言った。

「テメエあんま調子乗つてると、たとえガキでも許さねえぞ…！」

そつぱうと、兄貴の男はマリアの服を掴んで持ち上げた。

ガツ！

だが・・・

「マリア

「調子乗つとんのは、オマエやあーーー。」

マリアは木刀で男の右肩を強打した。

ドガアーーー

「イデヒヒヒーーー！」

男は片膝をついた。

ガク・・・

「ア、兄貴イーーー！」

「マリア

「あーーら、ちよつとキツラ当てすぎた？今度はホンマに折れたかも
なあ？」

「テメエーーー兄貴をバカにするどこのオレ達が・・・」

2人の男が手を出そうとするが、マリアは2人を睨みながら言った。

「マリア

「オレ達が・・・何やあーーー？」

マリアはモノスゴい殺氣をみなぎらせている。

その背後に、テキーラの姿が映った。

マリア

「来るなら来いや。詫うとくけど……ウチは弱い者イジメしようとする輩には、容赦せえへんでえ?」

マリアは凄まじいダークオーラで2人をにらみつけた。

• • •

卷之三

チシビテ達3人組は一目散に逃げて行つた。

夕々々々々

アリア

一 大丈夫か(?)

宗

「は、はい！！」

マリア

「わよか、良かつた。」

マリアは微笑んだ。

泉

「あ、あの！私、瀬川泉と言います！あなたは何て名前なんですか？」

マリア

「ウチか？ウチの名は東尾マリア。帝丹小学校で少年探偵団いうグループに入つとう一人や。」

マリアは一拍おくれて、再び口を開いた。

マリア

「ウチはもう行くわ。ほなな。」

マリアはさう言つとい、帰らうとした。

泉
「ま、待つて……！」

泉はマリアを呼び止めた。

マリア

「ん？何や？」

泉

「あの、その……私を鍛えていただけませんか？」

マリア

「ウチが……アンタを鍛える？」

泉

「はい！あなたスゴく強かつたです！あなたに鍛えてもらえば、私も肉体的にも精神的にも強くなれると思ってまして……」

「…」

「…」

「マリアはしびらへ考えたが、すぐに口を開いた。

マリア

「ええやろ。アンタを鍛えたるわ。」

泉

「ほ、本当ですか！」

マリア

「その代わりといつては何やけど、おとウチの家に来てもういえるか？」

泉

「はい、わかりました。」

泉は快く返事した。

マリア

「よつしや。ほなウチについて來い。」

泉はマリアについて行つた。

東尾邸

マリアと泉は、庭で1戦交えていた。

マリア

「ハアッ！－！」

マリアの強烈な一撃が泉に迫る。

「ゴッ－！」

泉

「わわっ！－！」

泉は竹刀でマリアの攻撃を受け止めた。

ガキン！

マリア

「とつそれの判断にしては上出来や。そせけど・・・」

そつぱうと、マリアは上空に飛んだ。

ドンッ－！

マリア

「ハアアアアアアッ！－！」

マリアは勢いよく竹刀を振り下ろす。

泉はとひて三田をつぶつた。

ザンッ－！

泉が目を開けると、竹刀が真つ二つに折れていた。

泉

「し、竹刀でこれほどの斬れ味だなんて……」

マリア

「キリ良いトコド、ちと休憩しよか?」

マリアは、笑顔で言った。

マリアと泉は、一緒にお菓子を食べていた。

お菓子を作ったのは泉である。

マリア

「つまいー。こんなうまいん久しぶりに食べたわ!」

泉

「やう? 良かつたです。」

泉は微笑んでいる。

泉

「といひでマリアちゃん。あなたつてスゴく強こよね。ギリヤッてそこまで強くなつたの?」

マリア

「ウチがここまで強うなったんは、オヤジに鍛えられたおかげなんや。半年前に爆発事故で亡くなつたけどな。」

泉

「そうなの・・・」「メンナサイ、変な事聞いやしましたね。」

マリア

「ええんよ。オヤジがある組織の一員やつたんは事実なんやから。」

マリアは冷静な声で言つた。

泉

「そ、その組織つて、まさか・・・」

マリア

「ああ・・・ジン達が所属しつた、黒の組織や。オヤジの本名は
東尾禎鬼郎^{ヒガシオテイキロウ}・・・」「コードネームはテキーラや。」

泉

「わつだつたんですか・・・」

マリア

「ああ。あー、とこりでアンタ・・・泉ちゃんつていつ前やつた
な?」

泉
「あ、はい。」

マリア

「ウチ決めた。アンタ、ウチのメイドやつてくれへんか?」

泉はキヨトノとした。

泉

「メ、メイドですか？」

マリア

「ああ。アンタ料理上手やし、剣術の腕も見込みある。ウチ、オカソが帰つて来るん遅いさかい、いつも一人で寂しいんよ。たまにたくまが来てくれるんやけど、さすがに毎日頼むワケにもいかへんな。」

泉

「やうなんですか。」

マリア

「どや？ 引き受けてくれるか？」

マリアが聞くと、泉は笑顔で答えた。

泉

「うそ、良いよ 休日とかは時間あるからね。」

マリア

「おおきい。感謝するで。」

泉

「どういたしまして」

「うして泉はマリアのメイドとなり、彼女から妖木刀・物干竿を貸

してもう一歩進む事になつたのである。

泉とマリア、これからも仲良くなれそうだね

次回は6THバトル開始です!!

ファイル610・6THバトル！海上の戦い！！

コナン達は、6THバトルの選手とフィールドを決めるためティールゼイヴに集まつた。

カミュ

「監さんおはようございます。昨日はよく眠れましたか？」

コナン達は微妙といふ表情をする。

カミュ

「微妙といふところですか。このバトルが終わればまた1日休めますので、頑張って乗り切つてくださいませ！」

カミュは敵らしからぬ激励をする。

ティールゼイヴの姫が4個のダイスを振つた。

ヒュッ！

カツン！

6 3 計9

5 3 計8

カミュ

「人数9 VS 9!! 対戦場所は海上フィールド……ああ、誰が出ますか！？」

カミュが叫ぶ。

名乗り出たのは、ヨリ・琴美・マリア・実希・園子・真・真（宝極）
・隆太・マリア（東尾）の9人だつた。

カミュ

「この9人ですか・・・」

そんな9人の前に、1人の男がやつて來た。

ザツ！

「何だあ？ほとんぢ女ばっかじやないか！本当にやる氣あるのかあ
？」

カミュ

「サングリア様、それは愚問です。彼女達は予選テストを全員突破
した実力者なんですから。」

サングリア

『ペンドュラムアッド構成員

』クラス』

ナイト』

「はいはい。まあ死なない程度に頑張りな。』

サングリアの挑発に、東尾マリアは殺意を覚えた。

カミュ

「・・・とりあえず、この10人を海上フィールドへ！！！」

組織対戦6THバトル 海上フィールド

ユリ達9人は、海上フィールドへとワープして来た。

ヴンー！

隆太

「ヒヤーッ！本当に海の上だな！」

真

「向こうに浮島が見えますね。あそこで戦えという事ですか。」

マリア

「・・・来るので。」

ヴンー！

ルーグ級とビショップ級4人、そしてナイト級のサングリアが現れた。

5THバトルと同じ構成である。

サングリア

「オイラはナイトだから最後だ。わあ、まず誰が行くよ？」

カバ

『ペンドュラムアッシュ構成員

『クラス』

ルーク『

「オレが行くよ。』

ザツ！

カバが進み出た。

マリア

「相手はルーク級か。こつちはまず誰が出る?」

マリアが聞くと、1人の少女が進み出た。

ザツ！

ユリ

「私よ。』

海の上での6THバトル、最初に出るのは金田一ユリ！

次回、ユリとカバの戦いだ！！

ファイル6-11：ユリ、知識的戦略！！

カミュ

「6THバトル第1戦を始めます！！アル、金田一ユリ！ペンデュラムアッド、カバ！試合開始！！」

ユリ

「このバトル、3分で終わらせてあげるわ。ネイチャーリング・スタンガントンファーーーー！」

ヴン！

ユリ

「ハアアアアアッ！！」

ユリはカバに向かって行く。

ユリ

「一気に行くわよーーー！」

ユリはトンファーを振った。

ブンッ！

当たる直前に、カバは腕をクロスさせて攻撃を防いだ。

ズボオー！！

ユリ

「なー?」

カバ

「ネイチャーライジング・サンドワインガ。腕を砂状にする・RINGだ。これによつてオレに君の雷系の攻撃は効かん。3分で終わらせるのは、逆にオレになるかもなあ?」

琴美

「あの男・・・砂使いか。」

ユリ

「だつたら、他の方法で体力を減らすまで!-!」

ユリは速度を上げ突っ込んだ。

ドンッ!!

カバ

「は、速い!!」

ユリはだんだん速度を上げて行く。

カバ

「クツー・ウーポン・RISING・サンドキャノン!!」

カバは砂の弾丸を連射して来た。

ドンドンドン!!

だが、ユリには1発も当たらない。

ヒコ、ヒコー！

カバ

「クソー！なぜ1発も当たらん！…」

カバは焦つている。

ユリ

「後、2分。」

カバ

「クツソオオオー！」

カバはがむしゃらに撃つた。

ドン、ドンー！

だが、そんな弾丸がユリに当たるワケもない。

ユリ
「最高速度。そして、後1分！」

カバ

「チックショオオオー！」

カバは力を溜め始めた。

カバ

「（最後の一撃のために、限界まで力を溜めてやる・・・）」

カバは高速移動するユリに狙いを定める。

カバ

「喰らええええ！」

カバは全力の砂弾を放った。

ドン！！

砂弾がユリに向かつて来るが、彼女は微動だにしない。

カバ

「当たる！！」

砂弾が当たるギリギリの所で、ユリは弾をかわした。

ヒュッ！

カバ

「バカな！！」

後退りするカバの眼前に、ユリが現れた。

ザツ！

カバ

「ヒツ・・・」

カバは恐怖のあまり、腕で攻撃を防ぐのが遅れた。

ユリ

「ハアアツ！！」

ユリはカバの腹部に鉄拳を叩き込んだ。

ドゴオ！！

カバ

「ガハアアアー！！」

カバは吹っ飛ばされる。

ユリ

「塩分が入っている海の中なら、砂の力も関係ない！ハアツ！！」

ユリが海の中に電撃を撃ち込んだ瞬間、カバは海の中に落ちた。

バツシャアアアン！！

バリバリバリ！！

カバ

「ギャアアアアアー！！」

カバは感電し、海に浮かんだ。

プカア・・・

ユリ

「これで3分、時間通り。逆転はできなかつたわね、残念でした」

カミュ

「第1戦！勝者！アル、金田一ユリ！！」

ユリ
「ルン」

相性をも覆す、ユリの知識・・・

次回は琴美が出陣！！

ファイル6-12・琴美、恋人のための気迫！！

「マリア

「次は第2戦やな。誰が行く？」

「マリアがそう言つと、琴美が進み出た。

「琴美

「アタシが行くわ。瑛祐の分まで頑張らないと。」

「サングリア

「こつちは誰が出ようか？」

トカイ

『ペンドュラムアッド構成員

『クラス』

ルーク』

「ボクが行くよ。」

カミュ

「6THバトル第2戦！アル、日向琴美！ペンドュラムアッド、ト
カイ！開始！！」

「琴美

「ジエムド！！」

琴美は宝石の弾丸を発射した。

「ドン！」

トカイ

「ウエポン・R I N G・ダブルブレイド！！」

トカイは両端に刃物がついた武器を両手に持った。

トカイ

「てい！」

トカイは弾丸を弾いた。

琴美

「まだ、まだあ！－ガズン・ジェムド－！」

琴美は弾丸を連射した。

ビビビビビビビビビビ－－！

トカイ

「うわ、うわ、うわ！－！」

トカイは何とか避けていく。

琴美

「ゴウ・ジョムド－！」

琴美は一際大きな弾丸を放つた。

ドオン！－！

トカイ

「クツ！！」

トカイは腕をクロスさせて何とか弾いた。

だが、琴美は攻撃の手を緩めない。

琴美

「ギガム・ジエムド！！」

琴美はさらに大きな弾丸を放つた。

ドオン！！

トカイ

「うわっ！！」

トカイは弾ききれず、弾丸に当たった。

ドゴオ！！

トカイ

「うわあああ！－（何だ？）の娘の気迫・・・尋常ではない！－」

琴美

「ハアアアアアツ！！」

琴美は雄叫びを上げながら、トカイに突っ込んだ。

琴美

「（私は今まで、瑛祐に頼つてばかりだつた。そう、あの時も・・・だから、だから・・・今後は私が瑛祐を助けていく！！それが、瑛祐の恋人である私の誇り！！）アアアアアアツ！！」

トカイ

「う・・・うわあああ！！」

琴美

「トドメよおおおーー！シエン・ゴルミア・ディオジエムドンーーー！」

琴美はファミリア・プロトタイプとの戦いの時に使つた『ゴルミア・ディオジエムドン』よりもはるかに強力な宝石の豪雨を降らせた。

トカイ

「ギヤアアアアアーー！」

トカイは琴美の呪文に押し潰された。

ドゴオオオオオオ！！

呪文が消えると、トカイは完全にノックアウトされた状態で出て來た。

シユウウウ・・・

ピクピク・・・

カミコ

「第2戦！勝者！アル、日向琴美！！」

琴美

「やつたあ～っ！～」

琴美、相手に何もさせずに勝利！！

次回、メイドのマリアさんが可憐に戦います！！

ファイル6-13・マリア、可憐なメイド!-

「マリア
「次は私が出ますわ。」

琴美が帰つて来ると、マリア（ハヤテキャラ）が次に出ると発言した。

琴美

「大丈夫ですか？」

マリア

「心配しないでください。」

マリアは微笑むと、歩いて行つた。

カミコ

「第3戦！アル、マリアー・ペンドラムアッシュ、ココモ！開始！！」

ココモ

『ペンドラムアッシュ構成員

＝クラス＝

ルーク

「フン、メイドさんが相手かよ。楽勝だねえ。」

「ココモは、笑つている。」

マリア

「相手がメイドさんと思つてナメてもうしかも困りますわね。」

マリアはさすがに、三千院家から持つて来たナイフを数本取り出した。

チャツ！

マリア

「このナイフは切れ味抜群ですね。防げるものなら防いでみなさい！」

マリアはナイフを投げた。

シユツ！！

ロロモ

「シールド・RING、ボルカニックシールド！！」

ドン！

ロロモが盾を出すと、盾に当たったナイフが溶けた。

ボシュ！！

マリア

「あらあら、大した溶解力ですわね・・・」

ロロモ

「三千院家！」血漫のナイフも溶けるよ！じや、アンタの体も溶けちまつんじやねえか？」

マリア

「あら・・・なら試してみれば良いじゃないですか。」

「マリアはシラッ」と叫んだ。

「ココモ

「言つてくれるねえ・・・ボルカニックシールド、変化！あの女を燃やせえ！！」

「ココモが叫ぶと、盾から炎の竜が飛び出しマリアに襲いかかった。

ガアアアアア！！

だが、マリアは平静を保っている。

マリア

「その程度の攻撃で、私を倒せると思つたのですか？」

マリアはもう一言つと、大きな『』を取り出した。

「ジャキッ！」

「ココモ

「！－！」

マリア

「マラソン大会の時に使っていた」です。この『矢の威力は、ナイフの比ではありませんわよ』

「そう言つと、マリアは矢を放つた。」

パシュー！！

矢は一直線に「ココモ」めがけて飛んで行く。

ギュン！！

「ココモ」

「クツ！…ボルカニックシールド！…」

「ココモ」は炎の盾を発動した。

ドン！…

だが…

ズドオ！…

矢が盾に当たると、盾にヒビが入り始めた。

ピシ、ピシ…

「ココモ」

「な、何！？」

「ココモ」が驚いている前で、ついに盾が粉々に壊れた。

バギャアアアア…

「ココモ」

「そ、そんなバカな……！」

「ココモは後退する。

その後ろで、マリアが回り込んだ。

ザツ！

「ココモ

「！」

マリア

「えい！」

パコツ！

「ココモ

「ぐ・・・」

「ココモはまだサツと倒れた。

マリアはまどろみからかホウキを取り出すと、ココモの後頭部を叩いた。

カミコ

「第3戦！勝者！アル、マリア！－！」

マリア

「ウフフ」

さすが、最強メイド・マリア……

次回は真希の妹、実希出陣！！

ファイル614・実希、最強！？

「マリア
「ルン」

マリアは上機嫌で戻つて來た。

琴美
「次は誰が行く？」

実希

「ウチが行かせてもらひ。」

実希が進み出た。

サングリア

「相手はあの子か。行け、ウゾ。」

カミュ

「第4戦！アル、片桐実希！ペンドュラムアッシュ、ウゾ！開始！！」

実希

「来いや、ガキ。始めはノーガードでおつたるわ。」

ウゾ

『ペンドュラムアッシュ構成員

『クラス』

ルーク』

「クツーこのオレを愚弄するかこのガキイ！－ネイチャ－・RIN

G・キューブリックシユート！－

ウゾは立方体の箱を5つ呪喚した。

その箱に、次々と何かが宿つていく。

電気、炎、水、草、地面の5つのエネルギーだ。

琴美

「あの男・・・風月ちゃんと同じく複数属性使いか。でもまあ、実希ちゃんの敵じゃないわよね。」

ウゾ

「余裕がまして散りやがれ。行け！－！」

ウゾは5つの箱を実希めがけて放つた。

ドン！－！

だが、実希は平然としている。

実希

「結論。やっぱアンタではウチの相手は力不足やったなあ・・・ガズン・エムル！－！」

実希は炎の弾丸を複数放つた。

ドンドンドンドン！－！

弾丸はあつという間に箱を壊した。

バガン、ドガン！！

ウゾ

「バ、バ力な！！」

ウゾは後退りした。

実希

「終わりや。バルド・エムセンー！」

実希は炎をまとった砲弾を召喚した。

ズン！！

実希

「ファイア×4！！」

実希が叫ぶと、炎をまとった円柱の槍が4発放たれた。

ドオン！！

ウゾ

「ウ・・・ウォオオオオ！！」

槍は4つ共ウゾに命中した。

ドゴオオオオオ！！

大きな煙が上がる。

シユウウウ・・・

煙が晴れると、ウゾがふらついた状態で現れた。

ウゾ

「ハア、ハア・・・」

ウゾは氣絶した。

ドサッ・・・

「第4戦！勝者！アル、片桐実希！！」

カミュ

「だから言つたやないか。」

実希

「実希、アツサリ勝利！！

次回はお嬢様、園子が戦う！！

ファイル6-15・園子、戦つお嬢様！！

園子

「次は私が出ようつかな？」

園子は半ば遠慮がちに言った。

マリア

「あなただつたらできますわ。頑張つて来てください、園子ちゃん！」

園子

「そうですね。」

マリアが励ますと、園子は微笑みながら歩いて行つた。

サングリア

「ルークは全滅か。次はビショップだな。行つて来い、ウンター。」

ウンターベルク

『ペンドュラムアッシュ構成員

＝クラス＝

ビショップ

「わかりました。」

カミュ

「第5戦！アル、鈴木園子！ペンドュラムアッシュ、ウンターベルク
！試合開始！！」

ウンターベルク

「聞いたよ。君、鈴木財閥のお嬢様なんだってね。」

園子

「そうよ、何か文句ある?」

ウンター・ベルク

「金持ちのお嬢様だからどんな子かと思つてたけど元気良いね。お嬢様と戦えるなんて光栄だよ。ウェポン：RING・電ノコブレーク！ボクはベンデュラムアッシュのウンター・ベルク、クラスはビショップ！よろしく。」

ウンター・ベルクは剣を持つと、園子に向かつて行った。

ウンター・ベルク

「せいー！」

ウンター・ベルクは剣を振り下ろした。

ブン！

園子

「ハツーーー！」

園子は剣を両手で受け止めた。

ウンター・ベルク

「何！」

園子

「ネイチャーライジング・ダイヤモンドームーJの・RINGの

効果で、私の腕はダイヤのようだに硬くなるのよーー！」

琴美

「園子ちゃん、アタシと同じ宝石使いか。」

ウンター・ベルク

「やるね。電ノコブレードにヒビが入った。でも、まだ負けたワケじゃ……」

園子

「ネイチャーライ・R I N G・ダイヤモンドナックル！！」

園子は硬質化した拳で、剣を破壊した。

バキヤア！！

ウンター・ベルク

「なつ！！」

園子

「私は腕や拳を硬質化させる・R I N Gを使い戦う・・・真さんの足手まといにならないために・・・そして、真さんの恋人だと誇りを持つて言えるために！－－ハアアアアアツ－－！」

園子は魔力を練り込み始めた。

「オオオオオ・・・

園子

「私の真の力、解放！！ガーディアン・R I N G・ダイヤモンドダ

ストレーディー！…」

園子は宝石を身にまとうガーディアンを召喚した。

園子

「行きなさい！…」

ガツ！

園子のガーディアンは、宝石の豪雨をウンターベルクめがけ降らせた。

ザアツ！…

ウンターベルク

「ウオオオオオ！」

ドザアアアアア！…

ウンターベルク

「う・・・ぐ・・・こんな華奢な、お嬢様に・・・」

ウンターベルクは倒れた。

ドサツ！

カミュ

「第5戦！勝者！アル、鈴木園子！…」

園子

「勝てて良かった・・・

強くなつたね、園子！！

次回は京極が出陣だよ！！

ファイル616：京極真、優しき戦い！！

真（京極の方）

「園子さん、良くやりましたね。次は私が出て来ます。」

園子

「頑張つてね、真さん！」

真

「ええ。」

真は微笑んでから進み出た。

サングリア

「まさかただのお嬢様がガーディアンまで使えるとは・・・少しナメていたようだね。ヒーリング！ 次は君が行け。」

ヒーリング

『ペンドュラムアッシュ構成員

』クラス

ビショップ』

「はい。」

カミュ

「第6戦！アル、京極真！ペンドュラムアッシュ、ヒーリング！開始！！」

ヒーリング

「私は今までのビショップとは格がちがいますよ・・・ネイチャー・

RING・ブレイズナックル！－行きます！－

ヒーリングは両手の拳に炎をまとわせ、真に突っ込んだ。

ドン！

真

「女性と戦うのは気が引けますが・・・私も負けるワケにはいきませんからね！」

真はそのまま、RINGを取り出した。

スッ！

真

「発動！－！」

真はそう叫び、ヒーリングに突っ込んだ。

真・ヒーリング

「ハアアアアアツ！－！」

両者の拳がぶつかり合つ。

ドン！－！

ヒーリングの方がわずかに押された形だ。

ヒーリング
「ぐつ、固い拳・・・岩使いですか。」

真

「いじ詰答。ネイチャーライジング・ストロングナックル！この・R
INGの効果で、私の拳は岩の如く硬くなります！！」

真は拳を突き出した。

ゴシ！

ヒーリング

「キヤー！」

ヒーリングは辛くも避けたが、真は間髪入れずに次々と鉄拳を放つて来た。

ブン、ブン！

ヒーリング

「キヤ、キヤー！」

ヒーリングは後退りしながら、拳を避けて行く。

だがやがて、端っこに追い詰められた。

ザッ！

ヒーリング

「あつ・・・」

真がヒーリングに近づく。

真

「私はできれば、女性をキズつける事はしたくありません。ですか
ら、ヒーリングさん・・・」

ヒーリング

「は、はい・・・」

真は最後の一撃を繰り出した。

「ゴッ・！」

ヒーリング
「キャアッ！・！」

真の拳はヒーリングの真横をかすった。

ヒーリング
「ヒッ・・・」

真

「ギブアップしてください、ヒーリングさん。」

真は静かに言った。

ヒーリング
「は、はい・・・」

ヒーリングはヘタヘタと座り込んだ。

ペタッ・・・

カミュ

「第6戦！ヒーリングのギブアップにより、勝者！アル、京極真！」

園子

「さすが、真さん！－！」

真

「フフ・・・」

京極、紳士的な勝ち方だね！

次回は隆太の彼女・真が戦うぞ－－！

ファイル617・真、蒼海の天使!!

隆太

「残るは3人か。誰が先に出る?」

マリア

「ウチは確定やから・・・真ちゃんと隆太君の2人か。」

隆太

「え!マリアちゃん最後なの?」

マリア

「ああ。ウチ、あそこにあるアイシャドー入れたヤツどうしてもふちのめしたいさかいな。ビショップの2人はアンタらに任すわ。」

マリアは微笑んだ。

隆太

「(怖っ!-)」

隆太はビクッとした。

真(宝極の方)

「残り2人ですか。じゃあ、7戦目は私に任せてください、隆ちゃん。」

隆太

「わかった、気をつけるよ真ちゃん。」

真

「うん。」

真が進み出た。

カミニュ

「第7戦！アル、宝極真！ペントュラムアッシュ、ノイジー！開始！」

ノイジー

『ペントュラムアッシュ構成員

＝クラス＝

ビショップ

「一気に行かせてもらひわよ！ウエポン・RING・チーンワイ

ップ！！」

ノイジーは鎌のムチを出した。

ノイジー

「しなれ！！」

ノイジーはムチを放った。

ムチは真っ直ぐに真に向かつて行く。

そして、真を絡め取つた。

ゴオツ！！

ギュルルル！！

真

「キヤツ！！」

ノイジー

「これであなたは逃げられない・・・スピアレインボウ！！」

ノイジーが叫ぶと、槍の雨が誠を襲つた。

ズバアアアー！！

真

「キヤアアアアアー！！」

ノイジー

「その状態じゃ動けないでしょ？勝負は見えたわね。」

ノイジーは笑みを浮かべる。

真

「う・・・ま、負けるワケにはいきません・・・私は隆ちゃんの恋人として、誇りを持つて戦います！！」

真が叫ぶと、彼女の服の胸ポケットから水色の宝石が出現した。

ポウ・・・

ノイジー

「？」

真

「この宝石はジュエリックトルース、私の中に眠っていた宝石です。日本壊滅の危機を乗り越えた後、私と隆ちゃんにそれぞれ宝石が現れた。でも今まで使えなかつたのは、私達の決意が弱かつたから……でも、もう迷いません！私と隆ちゃんは、身分の差を乗り越えてきつと幸せになつてみせる！！」

真が叫んだ瞬間、真を縛っていたムチが粉々になつた。

バチャイ！！

パキン！

ノイジー

「な、何ですつて！？」

ノイジーは焦つた。

真

「蒼海色に輝く、ジュエリックトルースよー今ここに、その神秘の力を示せー！セラフイック・セレナーデーー！」

真が叫ぶと、水色の光がノイジーを直撃した。

パアアアアアー！！

ノイジー

「キヤアアアアーー！」

ノイジーはふらついた。

ノイジー

「スゴいわね・・・あなた達の決意・・・負けたわ・・・」

ノイジーは倒れた。

ドシャ！

カミュ

「第7戦！勝者！アル、宝極真！！」

真

「見ててくれましたか、隆ちゃん・・・」

真、愛の力で勝利！！

次回は隆太が頑張ります！！

ファイル6-8・隆太、輝く橙色!!

隆太

「真ちゃん、スゴイよ! オレも頑張つて来るからね。」

真

「うん、頑張つてね。」

2人の周りの空気が少し和んだ。

カミコ

「ラブラブですねえ。では8戦目を始めましょう! 第8戦! アル、平尾隆太! ペンデュラムアッシュ、ドラーゼー! 試合、開始! ...」

ドラーゼー

『ペンドュラムアッシュ構成員

』クラス=

ビショップ』

「テメヒら、戦場でラブラブやつてんじやねえぞ! ブチのめしたろかあ! !」

ドラーゼーは殺氣満々だ。

隆太

「別に良いじゃない、オレと真ちゃん恋人同士なんだし。真ちゃん、すぐに終わらせて来るからね。」

真

「うん。」

さらに良い雰囲気の2人。

ドラー・ゼー

「いい加減にしろ～っ！…ネイチャーライジング・シャドーソーサー！」

ドラー・ゼーは黒いフリスビーを複数枚放つた。

デシュー！！

隆太

「やつ～よつ～」

隆太はそれを軽やかに避けた。

トツ！

隆太

「黒いフリスビー。影使いか。」

ドラー・ゼー

「そうだ！テメエなんか数秒で葬り去つてやる～～！」

ドラー・ゼーは殺る気満々だ。

隆太

「それはオレのセリフだ。」

そう言いつと、隆太は朱色の宝石を取り出した。

スツ！

ドラー^{ゼー}

「何だ、それは？」

隆太

「オレの体内に入っていた宝石、バレンシアアライズ。瞬殺されるのは、君の方だよ。」

そう言つと、隆太は念を込め始めた。

ドラー^{ゼー}

「な、何だ？ 何かマズい氣がする・・・何かする氣だな？ させるかあ！！」

ドラー^{ゼー}はシャドーソーサーを再び放つた。

ドシユツ、ドシユツ！！

だが、隆太はそれを華麗に避ける。

隆太

「ハツ！ やつ！ よつ！」

ヒュツ、ヒュツ！

ドラー^{ゼー}

「なぜだ！ なぜ当たらん！ ？」

隆太

「その理由は簡単だよ。君が弱いからさ。」

隆太はシレッと言つ。

ドラーゼー

「チックショオオオオオオーー！」

ドラーゼーはすっかり冷静さを失つてしまつた。

隆太

「冷静さを失つた事が、君の敗因だよ。」

隆太はそう言つと、宝石を持つ手を強く握つた。

ギュッ！

隆太

「朱色に輝く、バレンシアーライズよ・・・今オレに、その橙の力を示せ！！」

隆太の身体を、オレンジの光が包み込む。

パアアアアアア・・・

隆太

「喰らえ！！ルナティックプレリュードーー！」

隆太はオレンジ色の光を放つた。

パアアアアアアー！！

ドラーゼー

「ガハアアアー！！」

ドラーゼーは吹っ飛ばされ、海に落ちた。

バッシャーン！！

ブカア・・・

カミュ

「第8戦！勝者！アル、平尾隆太！！！」

真

「やつたあ、隆ちゃん」

隆太

「へへッ・・・」

隆太、強すぎです・・・

次回はいよいよ東尾マリアだ！！

ファイル619・東尾マリア、任意解除の人猫化！！

「2人共ようやつたな。最後はウチが頑張つて来るさかい、応援してや。」

マリアはそう言つて、バッグから村正を出した。

スッ！

マリア

「あれ、どうや。これもこれも。」

マリアは続けて、バッグから小さな小瓶を取り出した。

小瓶をポケットに入れる。

「ああ、叶の勝利が何よりも嬉しいソフト？」

サングリア

『ペンデュラムアッド構成員

II クラス II

ナイト

「望むどいJugだよ、嬢ちゃん。相手になつてやるよーーー。」

力
ミ
ュ

「6THバトル最終戦！アル、東尾マリア！ベンデュラムアッシュ、サングリア！試合・・・開始！！」

サングリア

「まずは軽くいぐよ。ネイチャーリング・モルフォライフル

！－！」

サングリアはライフルを構えた。

ジャキッ！

サングリア

「喰らえ！毒の弾丸！！！」

サングリアはライフルを撃つた。

ドン－！

弾丸はマリアに向かって行く。

ゴオ－！

マリアは村正で弾丸を叩き斬った。

ザン－！

サングリア

「やるねえ、君。」

マリア

「先に言つとくけど、ウチには毒は効かへん。耐性があるさかいな。

－

サングリア

「そのようだな。だが、戦況はオイラの方が有利だ。君、ネコが大の苦手なんだろ？」「

マリア

「ギクッ！…な、何でそれを…？」

マリアは珍しく焦っている。

サングリア

「忘れたのか？こないだの雷音寺獅子雅の野望に、オイラ達ペンデュラムアッドが関わってた事を…あの時上から聞いたのさ、君の弱点をな。」

マリア

「うつ…」

マリアは冷や汗が流れる。

マリア

「そやから何やねん…弱点を知られたから言つて、まだウチの勝つ可能性がなくなつたワケやない…！」

サングリア

「それはどうかな？」

「そつぱり」と、サングリアは・RINGを取り出した。

スッ！

マリア
「え？」

サングリア

「既に君対策の…R I N Gは用意しておいた。出でよー…」

サングリアは海めがけて…R I N Gを投げた。

ポイッ！

ドボン…！

マリアは睡然とする。

マリア

「何しとんねん、アンタ…・・・

サングリア

「フフフ、何も気づいていないようだね、君は…・・・

マリア

「何やど？？」

サングリア

「後ろの海を見てみな…！」

サングリアの発言にマリアが後ろの海を見ると、何かの影が海を漂っていた。

ヌウ・・・

マリア
「・・・」

マリア
「・・・」

そして次の瞬間、『それ』は海の中から飛び出してマコアに襲いかか
つて来た。

ザパアアアン！！

マリア
「キヤ～ツ！！」

マリアは悲鳴を上げ、怪物に飲み込まれた。

バクン！！

ドパン！！

実希

「マリアちゃんが飲み込まれた！？」

サングリア

「コイツはオイラのガーディアン『オーシャンキャット』…要する
に海の猫だ。猫が弱点である彼女への対策として用意しておいたの
さ。今頃彼女、腹の中で氣絶してるだろ？ねえ・・・」

マリア（ハヤテキヤラ）

「そ、そんな・・・」

サングリア

「後1分もすれば、オイラの勝利は確実・・・」

サングリアがそこまで言つた時、突然海からオーシャンキャットが飛び上がつて來た。

ザツパアアアアン！！

サングリア

「ん？」

サングリアが見ていると、オーシャンキャットの腹から爪が出て來た。

ズボッ！！

サングリア

「え？」

次の瞬間、ネコ化したマリアがオーシャンキャットの腹を斬り裂いて飛び出て來た。

マリア

「フニーヤアアアアアアーー！」

ザンッ！！

サングリア

「な、何い！？」

マリアが着地すると同時に、オーシャンキャットは消滅した。

「……」

パリン！

サングリア

「バ、バカな……なぜ……」

実希

「マリアちゃんの弱点知ってるんやつたら、この事も知つとんやつ
？彼女はネコに追い詰められた時、人猫化するんやー！」

サングリア

「何だとお……」

園子

「でもマズいわよ。前も見境なしに仲間を襲つたらしいし、このま
まだとまた仲間を攻撃して……」

園子がそこまで言つた次の瞬間、マリアはポケットから小瓶を取り
出した。

そして、フタを開けて中身を飲む。

グビグビ……

ゴクン！

すると、マリアの逆立つた髪や血走った瞳が元に戻つた。

スウウウウウ・・・

サングリア

「な、何！？なぜ元に戻った！？」

マリア

「この小瓶の中身は、たくまの血液とマタタビのエキスを調合して作った、ウチ用の鎮静剤や。哀ちゃんに作ってもらたんよ。ともかくこれで、アンタのガーディアンはなくなつた。さあ、本氣でいくでえ！！」

マリアは村正を手に持ち、サングリアに突っ込んだ。

ドンッ！！

サングリア

「ぐ、来るなあ！…モルフォライフル！…」

サングリアはがむしゃらに銃を撃つた。

ドン、ドン！！

しかし、マリアには1発も当たっていない。

マリア

「この勝負、初めから結末は見えとつたかもしけんなあ・・・

サングリア

「ヒイツ・・・

マリア

「アンタがウチに勝てへん最大の理由、教えたろか？」

サングリア

「うわあああ！！」

サングリアは最大の一発を放つた。

ドオン！！

マリア

「ハツ！！」

ババッ！

マリアはそれを華麗に避けると、サングリアの背後に着地した。

トッ！

サングリア

「！！」

マリア

「アンタがウチに勝てへん最大の理由、それは・・・アンタが銃の力を過信しとる事や。銃は弾を発射した後、次の弾を撃つまでにスキがある。それに比べウチが使う木刀等は素早く攻撃できる故、相手に一切スキを与へん！アンタとその実力やと、アンタが10発弾丸撃つまでにウチは5回はアンタを攻撃できるつちゅうこつちや

！！」

サングリア

「ヒ・・・ヒイイイイイッ！－！」

三

「終わりや！」

マリアは村正でサングリアの後頭部を強打した。

ドカラア！！

サンブリア

「ぐあ」

サングリアは倒れた。

ドサツ！

力
ニ
ユ

「6THバトル最終戦！！勝者！アル、東尾マリア！！」

マリア

「ええ氣分転換になつたわ。」

さすがだね、マリア！！

次回は番外編、瑛祐と琴美の話だよ！！

ファイル620・瑛祐と琴美の愛しき過去！！

長い間明らかにされなかつた、琴美が瑛祐に惚れた理由。

今日はその原因となつた話をお話ししましょう！

それは、2人が中学2年生だった頃まで遡る・・・

3年前

当時瑛祐と琴美は、中学生でありながらFBI捜査官をやつていた。

2人の実力は大人達にも勝るとも劣らない実力であり、ボスにも認められていた。

そのため、大人でも難しい困難な任務を任される事も多かつたのである。

瑛祐と琴美の2人はお互に協力し合いながら、どんなに困難な任務でも最後には必ず成功させてきた。

そんなある日、2人に今まで最大最難関の任務が任される事になつたのであつた……

瑛祐と琴美は、日向邸でボスからの指令メールを見つめていた。

本堂瑛祐『当時 14 歳』

「今度の任務は、麻薬組織への潜入・及び壊滅か・・・」

日向琴美『当時 14 歳』

「今まで一番困難で、やりがいのある任務ね。」

瑛祐
「どうする、琴美？ オレ最近寝不足だから、長時間の仕事はキツいぜ。」

琴美

「それなら、今回はアタシに任せてくれない？」

瑛祐

「大丈夫なのか？」

琴美

「ええ。アタシ、夜は強い方だから。」

瑛祐

「そうか。じゃあ頼むぜ。何かあつたらメールしろよ。」

琴美

「ええ。」

琴美は頷くと、日向郎を出て行った。

しばらくして、琴美はコンビニに着いた。

琴美

「ボスの話だと、密売人はここによく買い物に来るって言つてたわ
ね・・・とりあえず、何かしながら待つてましょうか・・・」

琴美はそう呟くと、飲物を物色し始めた。

琴美

「あ、これが良さそう。昨日新発売されたメロン味のファンタ！」

琴美はメロン味のファンタのボトルを手に取ると、レジに向かう。

琴美

「これ、ください！」

「150円になります。」

琴美はレジでお金を払うと、商品を入れた袋を受け取った。

琴美

「これは後で飲むとして・・・雑誌でも読もつかな？」

琴美は雑誌「一ノナ」に向かうと、雑誌を読み始めた。

その時である。

1人の男がコンビニに入つて来たのだ。

黒い服を着て帽子を口深にかぶつた、いかにも怪しそうな男である。

琴美

「（何？あのいかにも怪しそうな男は……）」

琴美は雑誌を見ながら、男の様子を窺つた。うかが

「マイルドセブン一つ。」

男はタバコの箱を指差した。

「380円になります。」

男は500円を出し120円のお釣りをもらつと、袋を持ってコンビニを出た。

琴美

「（出たわね。よし、私も……）」

琴美は雑誌を棚に戻すと、男の尾行を開始した。

琴美はさつきから、男の尾行を続けていた。

男はタバコを吸いながら、ゆっくりと歩いている。

琴美はコンビニで買ったジュースを飲みながら歩く。

琴美

「（アイツ、振り返りすらしないなんて・・・よほど末端の密売人なのかしらね・・・）」

琴美はそう思いながら、尾行を続ける。

30分くらいして、男はどこかの廃ビルの前までやって来た。

琴美は影から様子を窺う。

男は辺りをキョロキョロすると、そのまま廃ビルの中に入つて行った。

琴美

「（入つて行つたわー）」は、北戸のホテル跡地ね・・・」

琴美は地名を確認すると、瑛祐に自分が今いる場所をメールした。

琴美

「（瑛祐にはメールした。今回はアタシ一人で任務を成功させてみせるーー）」

琴美はそう決意すると、廃ビルの中へと入つて行った。

琴美は、ゆっくりと内部を探索していく。

見張りがいる気配はない。

琴美

「見張りはないのかしら。そのまま樂にいけると良いけど・・・」

琴美はそう思いながら、上へと進んで行った。

その頃自分の部屋で寝ていた瑛祐はとこりといよいやく目を覚ます
うとしていた。

瑛祐

「ん・・・よく寝た・・・」

瑛祐は腕時計を見る。

瑛祐

「もうこんな時間かよ。ちと寝過ぎたな。」

瑛祐はぼやきながら、携帯の電源を入れた。

するとほどなく、メールが受信された。

瑛祐

「ん? メールか・・・琴美から?」

瑛祐はメールの内容を読んだ。

『麻薬組織のアジトを見つけたわ。北杯戸のホテル跡地にあるみた
い。アタシ、頑張るからね！』

瑛祐はメールを確認すると、すぐに着替え出した。

瑛祐

「あのバカ！ アイツはまだ能力者として未熟なんだぞ！－！」

瑛祐はそう言いながら、着替えを終える。

瑛祐は上着を羽織ると、日向邸を飛び出した。

瑛祐

「ムチャするなよ、琴美！－！」

同じ頃、琴美は廃ビルの最上階にたどり着いた。

琴美

「ついに何もなかつたわね。」

琴美はそう言いながら、静かに扉を開ける。

キイ・・・

琴美の視線の先にあつたのは、麻薬の取り引きをしている男達の姿
だつた。

琴美は真っ直ぐ進み出る。

琴美

「そこまでよ、 麻薬密売組織……」

男達は振り向く。

「誰だ！…」

琴美

「アタシは日向琴美！ FBIよーー！」

「FBIの小娘か。」こを突き止めた事は誓めてやるぜ。」

「だが、もう終わりだ。」

男のセリフと同時に、複数の集団が琴美を取り囲んだ。

ズラッ！

「小娘を引っ捕らえろお！…」

リーダー格らしき男が叫ぶと、男達が琴美に飛びかかった。

琴美

「ジユムドーー！」

琴美は宝石の弾丸を放った。

ドンー！

1人、また1人と男達を倒していく。

「やるな、嬢ちゃん。だが・・・」

リーダーの男は不敵に笑った。

どうやら琴美、まだ自分の能力を使いこなせていないらしく息が上がってしまっているようだ。

瑛祐が言つた『まだ未熟』とは、この事だったのである。

琴美
「ハア、ハア・・・」

琴美は片膝をついた。

「ククク、ここまでだな。オマエ達！！」

リーダー格の男が一言言つと、男達が琴美に襲いかかった。

琴美
「キヤアアアアアー！！」

数分後、琴美は手足と体をロープで縛り上げられてしまった。

オマケに口には声が出せないようにガムテープまで貼られている。

その状態で、琴美は男達に取り囲まれていた。

琴美

「ん~、ん~・・・」

琴美はジタバタともがいでいる。

そんな彼女を、男達は笑いながら見つめていた。

「1人で乗り込んで来た勇気は高評価だが、相手が悪かったなあ。」

「で、この子どうします？ボス。」

「そりだな・・・取引現場を目撃されたし、顔も見られている。生かしておくワケにもいかないだろう。」

リーダーの男は一拍おくと、いつ言った。

「なかなかの上玉だが、仕方ない。かわいそつだが、始末するしかねえな・・・」

琴美

「! !」

琴美はビクッとする。

「オマエ達、殺れ。」

リーダーの男が言つと、男達は拳銃を取り出した。

ジャキ！

そして、ゆっくりと琴美に近づいて行く。

琴美

「ん、んん・・・（イ、イヤ！まだ死にたくない！瑛祐にアタシの気持ちを伝えてないのに、こんなところで終わりたくない！…）」

琴美は震えている。

琴美

「んんんん～つ！…！（助けて、瑛祐～つ！…）」

琴美は必死に叫んだ。

「ハハハ、もう終わりだあ！…」

男達が高笑いした、その時だった。

この状況を覆す、少年の声が聞こえたのは。

「アイアン・テオギドナ！…」

「ゴッ！…！

突然聞こえてきた声。

次の瞬間、男達は地面に叩きつけられた。

グシャアアアアアア…！

「ギャアアアアアアー！」

「な、何だ！？誰だ、出て来い！！」

男達を一気に倒され、リーダー格の男はたじろぎながら叫んだ。

ドアがゆっくり開くと、さっきの声の主が中に入ってきた。

コツ、コツ・・・

琴美

「（え、瑛祐・・・）」

瑛祐は立ち止まると、リーダーの男を睨みつけた。

瑛祐

「よくもオレの仲間をヒドイ目に遭わせてくれたな・・・しつかり落とし前つけさせてもうつから、覚悟しやがれ！！」

瑛祐はかなり怒っている。

リーダーの男は自分一人だけだというのに、琴美という人質がいるせいが強気でこんな事を言つた。

「へッ、オマエそこ動くんじゃねえぞ。1歩でも動いたら、この小娘の命は・・・」

瑛祐

「ギドナ。」

瑛祐は重力弾を放つた。

「ドンー！」

「無視か〜！？」

リーダーの男は吹っ飛ばされた。

瑛祐

「ロンド・ギドナ！」

瑛祐は重力のムチを放ち、琴美を救出した。

瑛祐

「大丈夫か、琴美？」

瑛祐はそう言いつと、琴美のロープとガムテープを解いた。

琴美

「う、うん・・・大丈夫よ・・・」

琴美は俯き加減に答えた。

瑛祐

「そうか、安心したぜ。」

瑛祐は微笑むと、左手で琴美を抱き寄せた。

ギュッ！

琴美

「ちよつ、瑛祐！？」

琴美が頬を染める。

瑛祐

「琴美、オレの側から離れるなよ。」

瑛祐がそう言つと同時に、やつきの男達が瑛祐と琴美を取り囲んだ。

ズラツ！

瑛祐

「フン、まだやる気かよ・・・どうやらオレを本気にさせたようだな！」

瑛祐は右手をかざす。

瑛祐

「ラージア・ギドナ！..！」

ズラツ！

瑛祐は右足を軸にして高速回転しながら呪文を放ち、男達を吹っ飛ばした。

「な・・・」

たじろぐリーダー格の男。

瑛祐

「ハアアアアアツ！！」

瑛祐はリーダー格の男に突っ込むと、鉄拳で男を殴り飛ばした。

ドゴオ！！

「ガハアアアー！」

リーダーの男は気絶した。

その後、瑛祐と琴美は男達を拘束した上で警察に通報した。

そして警察が来る前に、2人は引き上げた。

こうして、瑛祐と琴美は最大最難関の任務を無事に成功させたのだ
つた。

田向邸

瑛祐

「琴美、今日のオマエ授業中ずっと上の空だったな。」

琴美

「そう？」

瑛祐

「何か思い出したのか？」

琴美

「あの時の任務の事思い出してたの。麻薬組織に捕まつて殺されそうになつて、あなたに守られたあの任務をね。」

瑛祐

「そうか。そいついえばあの時からだつたな。オマエの能力が飛躍的に上昇したのは。」

琴美

「うん。あなたに少しでも追いつきたくてね。」

瑛祐

「オマエはオマエなりに頑張れば良いんだよ。それがオマエの言いうト」「なんだから。」

琴美

「そうね。ありがと、瑛祐。」

そう言つと、琴美は瑛祐の肩に寄りかかつた。

ポスツ！

瑛祐

「琴美？」

琴美

「？」

「『メン、しばらぐ』のままにこなせて……」

瑛祐

「あ、ああ。」

琴美はしばらくすると、スヤスヤと寝息を立て始めた。

琴美

「スースー……」

瑛祐

「寝ちまいやがつた。つたく、しょうがねえな……」

瑛祐は愚痴ると、琴美を抱きかかえた。

そして、琴美の部屋まで運んで行く。

瑛祐

「今日は一緒に寝てやるか……」

瑛祐はそう呟いた。

琴美は寝ているハズだが、その腕はしつかり瑛祐の首に回っていた。

琴美

「（大好きよ、瑛祐……）」

琴美は笑顔で眠っていた……

瑛祐と琴美は、昔なら仲が良かつたんだね

次回は伊澄と理沙とワタルのお出かけ！！

ファイル621・伊澄と理沙とワタルのお出かけ!!（前書き）

オリジナルキャラクター・ファイル72

わがのみや おはひ かわのみや いつさ ひがのみや せひさ ひがのみや なのは
鷺之宮朧・鷺之宮月夜・鷺之宮雪月・鷺之宮花

『ハヤテの「ごとくー」』のキャラクター、鷺之宮伊澄の姉弟妹々（きょうだい）である4人。

4人共伊澄と同じく方向オンチな事が多い。

朧はカワイイ男の子に目がなく（月夜曰く異常）、カワイイ男の子を見るとすぐに着せ替えゴッコに巻き込もうとするクセがある。実際コナンとハヤテは初めて会った時、彼女の着せ替えゴッコにつけ合わされそうになつた。

月夜は咲夜に良くカワイイがられていたためかお笑いが好きになり、常時ハリセン（突っ込み用）を持ち歩いている。

朧が度を越した事をしようとするときハリセンで突っ込み止める立場にある。

彼女の異常過ぎるカワイイ男の子好きには迷惑しているようであり、コナンとハヤテの貞操の危機を救つた（しかしコナンとハヤテは既に女装させられた経験があるので貞操を救つたと言えるかどうか不明）。

月夜の発言から察するに、彼自身も朧の着せ替えゴッコに巻き合わされた事があつたのだろうと思われる。

雪月と花はまだまだ甘えん坊で、伊澄にかまつてもらえるならどんな事でもするという純粋で無垢な少女達である。

得意技はウソ泣きと抱きつきで、特にウソ泣きを応用した泣き落としをやられると伊澄は妥協せざるをえなくなる。

4人の伊澄と他の子に対する呼び方及び1人称は、朧が『伊澄姉』『月夜』『せーちゃん』『なーちゃん』『アタシ』、月夜が『伊澄

姉ちゃん』『朧』『せーちゃん』『なーちゃん』『オレ』、雪円が『伊澄
姉ちゃん』『朧姉ちゃん』『兄ちゃん』『なーりちゃん』『私』、花
が『おねーたん』『ねーね』『にーに』『せーせ』『私』。
何だかんだ言って、4人共伊澄の事を愛しているのは確かである。
名前の由来は、朧と月夜が『朧月夜^{オボロヅキ}』で、雪円と花が『雪円花』。
朧と月夜は11歳で、雪円は7歳、花は5歳。

ファイル621・伊澄と理沙とワタルのお出かけ!!

白皇学院から帰つて来た鷺之宮伊澄と朝風理沙は、素早く私服に着替えていた。

なぜ2人がこれほどまでに急いでいるかといふと、水曜日の夜10時に8チャンネルで放送されている『爆笑 レッドカーペット』の生放送を橋ワタルと観に行く事になつてゐるからである。

早く行きたくなるのも当然といえよう。

伊澄

「じゃあ、行きましょうか・・・」

理沙

「絶対に音を立てないでくださいよ・・・」

伊澄と理沙の言葉に従うのは、氷田と火枝。

鷺之宮家執事衆の中でも1・2を争つ実力者である。

彼らがいる限り伊澄の身は安全、誘拐犯だらうが暴漢だらうが指一本触れさせはしない。

さうに理沙もいるのだから、まさに最強のボディーガードである。

- 実に頼りになる3人だが、そんな彼らでも手の出せない相手がいた・

「お姉ちゃん！」

「おねーたん！」

伊澄

「ホギヤ！！」

ドカー！

背後から突然の体当たりを喰らつて、伊澄は床に頭から突っ込んだ。

彼女を転ばした張本人達は無垢な笑顔で笑っている。

伊澄

「イタタタ、これだから人の体は未熟で困るわ・・・」

「何、咲夜姉ちゃんみたいなボケやつてるの、伊澄姉ちゃん？」

「わーい、おねーたんが転んだー」

伊澄

「あーもう、離れなさい雪月に花ー！！」

倒れた状態で怒る伊澄だが、雪月と花は両足にくつついたままである。

大好きな長女にかまつてもらいたいが故に見せる無邪気なスマイル。

伊澄に頭をいくら叩かれても、全く動じる気配がない。

サギノミヤ 鶯之宮雪月 7 伊澄の妹

「アツハツハツ、姉ちゃんのチヨップだチヨップ～」

サギノミヤ 鶯之宮花 5 伊澄の妹

「もつとやつてやつて、ウフフフ～」

伊澄

「二、この子達・・・氷田、火枝、理沙さん一何してるんです、私を助けなさいよ～！～！」

いへり伊澄の命令でも、氷田達にはじつじょうもない。

なぜなら、仲の良い姉妹の馴れ合いで割り込めば、娘達を溺愛する源治郎や初穂から何を言われるかわかったものではないからなのだ。

無論、伊澄と理沙は後で弁護してくれるとは思つが・・・

後でも説明するが、こいつの状況において伊澄が勝つ可能性はほんの99パーセントないのである。

「あつ、伊澄姉やんにいたのか。」

玄関でじゅれ合つた姉妹と傍観する2人の青年。

理沙はびつじょひつじょとオロオロしていく。

そんな膠着状態を破つたのは、家の奥からやって来た双子の姉弟だった。

11歳になる臍と月夜、反抗期になりつつある小憎たらしく2人で

はあるが、今の伊澄には救いの女神に見えるだらう。

伊澄

「月夜、良いところに来てくれたわー。この2人をどうにかしてよ。」

朧

「お手柄よ、セーちゃん、なーちゃん。ところで伊澄姉、そんなに急いでどこに行く気だったの？」

伊澄

「お、朧、あなた・・・」

現れた2人が女神どころか猛獣使いだという事を瞬時に悟った伊澄。

しどろもどろになりながらも、妹の問いに答えた。

伊澄

「ど、どこでも良いでしょう。お年頃の女には野暮用も多いの、あなたもその内わかるわよ。」

朧

「まさか2人でレッカ（レッドカーペットの略）を観に行ったりなんかしないわよねえ、伊澄姉？」

伊澄

「どうしてあなた、それを・・・ハツ！？」

理沙は『もつダメですね』という表情をした。

しまったと口を押された伊澄だったが、時既に遅し。

予想通りの返事を聞いた朧は両手を素速く組み合わせると、瞳を潤ませてウソ泣きスタイルに入った。

その横では月夜が両手をヒラヒラさせ、雪月と花に『泣け』とサインを送る。

雪月

「伊澄姉ちゃん、私達の事置いて行くつもりだったの？」

花
「うええ〜ん、おねーたん私達の事嫌いになつたんだわ！…私達なんか、いない方が良いんだわあああ！」

泣きじやぐる妹3人と、後ろから恨みのこもった視線で見つめる月夜。

それは理沙がメイドとして鷺之宮家に仕える以前からこの家で見られており、休日になるたびに繰り広げられている光景である。

そして、こうなつてしまつては伊澄に選択の余地などない。

座り込んだ伊澄は雪月達の頭を撫でつつ、朧達の筋書き通りの敗北宣言を口にした。

伊澄

「わかったわかった、一緒に行きましょう。みんなでレッカ観に行きましょ。」「

花

「嫌々言つてゐるんじゃないの？」

伊澄

「ちがうちがう、私達も雪月達とみんなで行けた方が楽しいの。さ、支度して来なさい、朧達と一緒にね。」

雪月

「わあ～い、姉ちゃん大好き！～！」

そう言いながら朧達が支度しに町に向かうと、伊澄と理沙はため息をついた。

負け犬公園で伊澄達の事を待つていたワタル・サキ・愛歌・ソニアの4人は、やつて来た伊澄達を見て啞然とした。

なぜなら、伊澄と理沙と氷田と火枝の他に、朧達がいたからだ。

ワタル

「伊澄・・・」

愛歌

「どうやら、妹さん達の魔の手から逃げられなかつたようですね・・・」

ソニア

「ひつなるとい、やはり・・・」

サキ

「ああなりますね・・・」

ワタル達もため息をついた。

家族で観に行くとなれば、ガラス張りのVIPルームを借りて見る事になる。

伊澄達が朝から並んでようやく手に入れた、舞台すぐ側の指定席のチケットは、「ミニ箱に捨てるしかない。

その事に困り果てながら、伊澄達は目的地へと向かった。

伊澄達はVIPルームから、レッドカーペットの生放送を観ていた。

ワタル

「あ～あ、せっかく伊澄達と並んで買った特等席のチケットだったのにあ・・・」

ワタルが愚痴る。

理沙

「しようがないじゃないか、伊澄君の妹達に見つかったら逃げられないんだから。」

ワタル

「それはそうだが・・・ま、いつか。みんなで観るのも楽しいし。」

ソニア

「優しいですね、ワタル君は。」

ソニアが微笑む。

伊澄

「私はワタル君のそういうところ、好きですよ。」

伊澄は笑顔で言った。

ワタル

「い、伊澄……」

ワタルは赤面している。

そんな2人を、理沙達は保護者のような眼差しで見つめていた。

その後、ワタル達はレッカの生放送を満喫し、帰りに外食して帰路に着いた。

ちなみに一番面白かったのは、ナベアツビザ・パンチ、そしてバカリズムだったそうだ。

余談だが、最前列の座席には真希と実希と敦志が座っており、その3人も充分に楽しんでいたんだとか……

最強巫女さんの伊澄も、無邪気な妹達にはかなわないんだね

次回は虹の舞台でFIGHTバトル！！

ファイル622・7THバトル！虹色の密室！！

1日休みを満喫したコナン達は、ディールゼイヴに戻つて來た。

カミュ

「皆さんおはようございます。昨日はしっかり休みを取れたと思います。では早速、本田の対戦人数及びフィールドを決めさせていただきます。」

ディールゼイヴの姫が、ダイスを振つた。

ヒュッ！

カツン！

7 2 計9

4 5 計9

カミュ

「人数9VS9！！フィールドはレインボーフィールド…さあ、誰が出ますか！？」

名乗りを上げたのは、真希・暁・風月・伊澄・歩・咲夜・ソニア・ヒナギク・そしてハヤテの9人だ。

カミュ

「今までの18人とは魔力が桁違いですね・・・この9人が切り札というワケですか。では、こちら側もそれなりの強者を用意しなく

てはいけませんね。」

カミュが指をパチンと鳴らすと、黒いローブを着た3人がコナン達の前に現れた。

ザツ・・・

マンハッタン・ロワイヤル・X-Y-Z

『ペンドュラムアッシュ構成員

』クラス』

ナイト』

「・・・」

カミュ

「彼らはマンハッタン、ロワイヤル、そしてX-Y-Z様です。今までのナイトよりも数倍強いです。この3人を含めた9人が今回の相手ですよ。彼らは最後の3戦に控えていますので、皆さん好戦を見せてくださいね!!」

ハヤテ達9人は、頷いた。

カミュ

「それではこの12人を、レインボーフィールドへ!!」

組織対戦7THバトル レインボーフィールド

ブン!

ハヤテ達は、レインボーフィールドへとやって来た。

辺り一面虹で覆われ、大きな箱の中にはいつの間にか雲囲気だ。

咲夜

「キレイやなあ！」ない幻想的な場所もあるやなんて！」

ハヤテ

「そうですね、咲夜さん。」

伊澄

「ハヤテ様、咲夜。景色を眺めている場合ではなさそうですよ。」

ソニア

「来ます。」

伊澄とソニアが静かに言つと、9人の構成員がワープして来た。

ヴン！

ザツ！！

カミュ

「FTHバトル開始です！さあ、最初は誰が出ますか！？」

グレナデン

『ペンドュラムアッシュ構成員

＝クラス＝

ルーク』

「オレだ。」

真希

「私よ。」

ザツ！

実希の姉、 真希出陣！！

次回、彼女のさらなる力が開花する！！

ファイル623・真希、冷静なる戦い！！

カミュ

「FTHバトル第1戦！アル、片桐真希！ペントュラムアッド、グレナデン！開始！！」

グレナデン

「あの娘の姉か。楽しませてくれそうだな。まずは小手調べだ！」

グレナデンは槍型の武器を出すと、手に持つて真希に向かって行った。

ダツ！

グレナデン

「オオオオオ…！」

真希は微動だにしない。

グレナデン

「そのまま突つ立つてると当たるぜえ…！」

ドス…！

そう言ったと同時に、槍が真希の体を貫いた。

グレナデン

「手応えあり…！」

真希

「残念！それは私の分身ですの。」

グレナデン

「え？」

グレナデンが声がした方に振り向くと、真希が平然と立っていた。

グレナデン

「なつ！？じゃあ槍が貫いたコイツは・・・？」

グレナデンが槍で貫いた真希に向き直ると、真希の体が水の粒子に変わった。

ドロオ・・・

グレナデン

「なつ・・・」

真希

「私の呪文の一つ、アクリル・ドロン！水の粒子を変化させ、私の分身を作る術ですのー！」

グレナデン

「おのれえ・・・ならば斬たるまでやるまでだあーーガトリングラ
ンスー！」

グレナデンはがむしゃらに槍を放つた。

ドシュードシュードシューーー

真希

「ガズン・アカル！！」

-- T₂ T₃ T₄ T₅ T₆

真希は水の弾丸を連射し、
槍を相殺した。

ボシュボシュボシュ！

ケレナ
ラン

真希

真希は冷静に言った。

グレナデン

チッ・・・チッケシミオオオオオオ！！！」

グレナデンは我を忘れて突っ込んで来た。

デノンシード

真希

「自分の攻撃全て防がれて、冷静さを失ったか・・・状態としては最悪ですの。」

真希は両手を前にかざした。

ババツ！！

真希

「ハアアアアアツ・・・『ティオ・アクルガ！！』」

真希は強大な水弾を放つた。

ドン！！

巨大水弾は真っ直ぐグレナデンに向かつて行き、彼に直撃した。

ドゴオ！！

グレナデン

「があああああ～つ～！」

グレナデンは吹つ飛ばされ、後方の壁に激突した。

ドゴオオオオオン！！

グレナデン

「ぐう・・・」

グレナデンは地面に落下すると、そのまま気絶した。

ドサッ！

カミュ

「第一戦！勝者！アル、片桐真希！！」

真希

「 楽勝過ぎですの。」

真希は笑顔で言つた。

真希、強すぎ！！

次回は暁が実力發揮！！

ファイル624・暁、紅蓮の炎！！

暁

「真希ちゃん、相変わらず強いなあ。次はオレが行って来るよ。」

真希が戻つて来ると、暁が準備を始めていた。

マンハッタン

「こいつらは誰が出る？」

ローゼル

『ペンドュラムアッシュ構成員

』クラス』

ルーク』

「次は私が行く。」

カミュ

「第2戦！アル、常盤暁！ペンドュラムアッシュ、ローゼル！開始！」

ローゼル

「先手必勝！ネイチャーライジング・ローズダンス！！」

ローゼルの周りに、花びらが舞い始めた。

ヒラヒラ・・・

ローゼル

「行きなさい！！！」

ドシュ――！

花びらが暁に向かつて行く。

暁

「火炎の輪舞ロンド――！」

暁が叫ぶと、彼の周りに炎が出現した。

ボオオオオオ・・・

暁

「ハツ――！」

暁が放った炎は、花びらをあつとこう間に焼き尽くした。

ボウウ・・・

ローゼル

「やつぱりやるわね、あなた。花びらが一瞬にして黒ニゲだわ。」

暁

「オレは女に手を上げるのは趣味じゃないが、負けるワケにはいかないんでね。」

暁はそつまつと、ズボンから紅蓮色の宝石を取り出した。

スッ！

ローゼル

「それは？」

暁

「オレの体内で眠っていた宝石、ブロンジュエルサンライズだ。風月の看病をした次の日、オレの手の中についた。きっと、風月を守りたいという想いに共鳴して出現したんだとオレは思ってる。そして、オレを愛してくれる風月のためにも、オレは全力でオマエを倒す！2年間音信不通にしてしまっていた償いを、少しずつしていくためにも・・・オレは絶対に負けられねえ！」

そう言つと、暁は宝石をかざした。

暁

「紅蓮色に光り輝くブロンジュエルサンライズよー今こここ、その灼熱の力をオレに示せーー！」

宝石から吹き出した炎が、暁の体を包んでいく。

「オオオオオオ・・・

ローゼル

「な、何かヤバいわね・・・シールド・R I N G ・・・」

暁

「もう遅いーー全てを焼き尽くせーー真・暁・灼熱業火の炎帝ーー！」

！」

暁は業火に包まれた炎神を召喚した。

暁

「いけえ！！」

「ゴッ！」

炎神はローゼルに突っ込み、彼女を炎で取り囲んだ。

「ゴオオオオオ！！」

ローゼル

「キヤアアアアアアー！！」

シユウウウウウ・・・

炎が消えると、ローゼルは黒焦げになつた状態でバタリと倒れた。

パタ・・・

カミュ

「第2戦！勝者！アル、常盤暁！！」

暁

「フウ・・・」

暁、愛妻のために頑張ったね！

次回は風月が戦います！！

ファイル625・風月、虹色の翼!!

風月

「暁、スゴイわ！」

暁

「ああ、楽だつたね。」

風月

「次は私が頑張つて来るね！」

風月はそう言つと、走つて行つた。

カミコ

「第3戦！アル、如月風月！ペンドュラムアッシュ、セリモン！開始！」

セリモン

『ペンドュラムアッシュ構成員

』クラス＝

ルーキ

「最初から全力で行かせてもらつぜ。ネイチャーリング・デュアルウイング！！」

セリモンは翼を背中に生やした。

バサツ！

セリモン

「行くぞ、小娘！」

セリモンは風月に突っ込んだ。

ギャン！

風月

「空中戦なら負けないわ！ シボン・ザ・ビューティ・オブ・ネイチ
ヤーーー！」

風月も4枚の翼を生やした。

バサアツ！

セリモン

「空中戦か。望むところだーーー！」

風月とセリモンは飛び上ると、空中で向き合つた。

セリモン

「行くぜーーー！」

風月

「望むところよーーー！」

2人は同時に飛び出した。

ドンーー！

セリモンは風月の頭上に飛び上ると、急降下した。

セリオン

「オラアーー！」

セリオンは風月の体を強打した。

ドゴオーー

風月

「キヤツーーぐつ・・・・」

風月はすれすれで停止した。

ピタッ！

風月

「不意打ちぐらーでナメないでよねー！」

風月はさつまつと、空中に飛び上がりセリオンの頭上をとらえた。

ビュンーー

セリオン

「は、速いーー！」

風月の体を虹色の光が包み込む。

風月

「行くわよーー！シボン・スプゼルクーー！」

風月はセミロンに突っ込んだ。

風月

「ハアアアアアツー！」

風月はセミロンを吹っ飛ばした。

ドゴオー！

セミロン

「ぐわあーー！」

セミロンはフィールドに激突した。

ドゴオオオオオーンー！

煙が晴れると、セミロンは完全に氣絶した姿で現れた。

ピクピク・・・

カミコ

「第3戦！勝者！アル、如月風月ーー！」

風月

「やつたあー曉、私勝ったよーー！」

風月はハヤテ達の所に戻つて來た。

曉

「ああ、やつたなー！」

風月

「暁のおかげよ」

そつ言ひつと、風月は暁の頬にキスをした。

チュツ！

暁

「ぐー！」

暁は顔を真っ赤にし、倒れた。

パタ！

風月

「キヤー、暁ー！！」

風月は叫んだ。

そんな風月の行動に、ハヤテ達は全員赤面しながら見つめていた・・

風月のカワイさに、暁ももうメロメロだね！

次回からはビショップ戦、鷺之宮伊澄が出陣だーー！

ファイル626・伊澄、八葉六式の実力！！

歩

「次からはペニショップ戦みたいだね。誰が先に行く？」

伊澄（鷺之宮）

「私が行きます。咲夜、私流の戦いを見ていてくださいね。」

伊澄はそう言つと、前に出た。

ブルゴーニュ

『ペンドュラムアッシュ構成員

＝クラス＝

ビショップ』

「次はオレが行こう。」

ペンドュラムアッシュからは、ブルゴーニュが進み出た。

カミュー

「第4戦！アル、鷺之宮伊澄！ペンドュラムアッシュ、ブルゴーニュ
！開始！！！」

ブルゴーニュ

「君が5THバトルでブラティを倒したメイドの雇い主か？」

伊澄

「そうですが、何か？」

伊澄は強い目つきで言つ。

ブルゴーニュ

「ブランディはオレの親友だつたんだ。だが死んだのはアイツの自業自得、別に君や彼女を恨む気はない。ただオレは、正々堂々と戦いたいだけだ。この意味わかるな？」

伊澄

「わかります、その意味。さあ、勝負といきましょうー！」

ブルゴーニュ

「あ、これでいいのか？」RHZGを使うのが苦手ですね。他の技で主に戦わせてもらひます。」

そう言つと、ブルゴーニュは数珠のような物を取り出した。

サツ！

ブルゴニュ

「オレはペンデュラムに入る前は坊主をしていたのだ。だからいつも愛用の数珠を持ち歩いている。さあ、参られよ！！」

伊澄もお札を数枚取り出した。

伊澄

「八葉六式・お札の弾丸！！」

伊澄はお札を放つた。

シユツ！

ブルゴー二ユ

「数珠の盾！！」

ド「オ！！

ブルゴー二ユは数珠を盾状に変え、攻撃を防いだ。

ブルゴー二ユ

「数珠のムチ！！」

ブルゴー二ユは数珠をムチ状にし、伊澄を攻撃した。

シユツ！

バシユ！

伊澄

「キヤン！！やりますね。では、私も本氣でいきましょう。八葉六式・収束撃破滅却！！」

伊澄は一枚のお札に力を集中させ、一気に放った。

ドシユ！！

ブルゴー二ユ

「ホウ！これは大きい！だが・・・効かん！！」

ブルゴー二ユは数珠をまとつた拳で、伊澄の攻撃を弾いた。

ガキイ！

ブルゴー＝ゴ

「そり……」

ブルゴー＝ゴは数珠のムチを伸ばし、伊澄を絡め取った。

ギュルルル！！

伊澄

「キヤツッ！！」

ブルゴー＝ゴ

「ハツ……」

ブルゴー＝ゴは伊澄を引き寄せた。

ギュオ！

ブルゴー＝ゴ

「これで、オレの勝ち……」

伊澄

「それはどうでしょうか？」

ブルゴー＝ゴ

「何……？」

伊澄は引き寄せられながら、攻撃の照準をブルゴー＝ゴに合わせていた。

伊澄

「あなたが焦つて私を引き寄せて来るこの時を待つてたんですね！
八葉六式・真・伊澄・撃破滅却！－！」

ドン！－！

ブルゴー＝ユ

「ぐわあ！！」

伊澄は強烈な術で、数珠ごとブルゴー＝ユを吹つ飛ばした。

ドザア！

ブルゴー＝ユは叫ぶ間もなく氣絶した。

カミュ

「第4戦！勝者！アル、鷺之宮伊澄！－！」

伊澄

「クスツ」

やつぱりビショップも伊澄にはかなわなかつた・・・

次回は歩が戦います！－！

味方になるのがやけにアッサリして歩ですが、突っ込まないでくださいね・・・

ファイル627・歩の氣迫！炎の木刀と氷の木刀！！

歩

「よーし、次はアタシが出ますよおーーー！」

歩は軽快に進み出た。

マンハツタン

「相手は我らを裏切つたあの女か。ソーテルヌ、行け。」

ソーテルヌ

『ペンドュラムアッド構成員

』クラス』

ビショップ』

「はい。」

カミコ

「第5戦！アル、西沢歩！ペンドュラムアッド、ソーテルヌ！開始
！！！」

ソーテルヌ

「アタシも：RINGは使わない。アンタなんか、これで充分よ！
！」

そう言つと、ソーテルヌは水色の木刀を出した。

ジャキッ！

ソーテルヌ

「アタシ愛用の木刀、影氷斬よ。アンタも持ってるんでしょ?これと対になる刀を。出しな、勝負しましょ!」

歩

「言われども出してあげる。影炎斬!—!」

歩も影炎斬をかまえた。

歩・ソーテルヌ

「勝負!—!」

歩とソーテルヌは、ぶつかり合った。

ガキイン!—!

ソーテルヌ

「一つ聞く!—なぜペントュラムを裏切った!—!」

歩

「そんなの簡単。自分が間違った事をしている事に気づいたからよ。その事を気づかせてくれた康太郎君に、アタシは感謝している。アタシは康太郎君のためなら、この命だって捨てられる覚悟がある!アタシは、彼の一生懸命で健気な姿に惹かれ、惚れたから···」

歩はソーテルヌを弾き飛ばす。

ドカ!—!

ソーテルヌ

「ぐつ!—!」

ソーテルヌは体勢を立て直す。

歩

「だからアタシは彼のために戦つ！！まがりなりにも彼の執事と約束したしね。」

歩は笑顔で言った。

ソーテルヌ

「ぬかせ！ならその決意、アタシが粉々に碎いてやる！！！」

ソーテルヌは魔力を込め始めた。

「オオオオオ・・・

ソーテルヌ

「散りな！！絶対零度雪崩！！！」

ソーテルヌは雪雪崩のエネルギー波を放った。

ヒュ、ゴオ！！

歩

「そこまで言ひながら、アタシも本氣でやらないとね。」

歩は魔力を込め始めた。

「オオオオオ・・・

歩

「焼き尽くせ！！！真・歩・影超爆裂炎冥斬！」
シャドーヤーフティーシャッター

歩は強烈な炎を放つた。

ゴオツ！！

炎の竜は雪崩の壁を突き破り、ソーテルヌに向かつて行った。

ソーテルヌ

「キヤアアアアアアー！！」

直撃を受けたソーテルヌは、吹き飛ばされ気絶した。

ドザア！

歩はソーテルヌに近寄ると、彼女の手から木刀を取った。

歩

「この木刀、有意義に使わせてもらひうわね？」

歩は笑顔で言った。

カミコ

「第5戦！勝者！アル、西沢歩！！」

やつぱり歩は強かった！！

次回はハヤテの恋人、咲夜が戦う！！

ファイル628・咲夜、ハヤテの誇れる愛妻ーー

咲夜

「伊澄さんも歩はんも強いなあ。次がウチが行くさかいな。」

ハヤテ

「頑張つて来てくださいね、咲夜。」

咲夜

「ああ。」

咲夜は頷くと、前に進んだ。

カミコ

「第6戦！アル、愛沢咲夜！ペンドュラムアーヴ、スプマンテ！開始！！」

スプマンテ

『ペンドュラムアーヴ構成員

＝クラス＝

ビシヨップ』

「速攻で終わらせてやろう、小娘！ネイチャーリ・RING・マッシュランチャーリー！」

スプマンテは銃型・RINGを取り出した。

ジャカー！！

スプマンテ

「喰らえ！！」

スプマンテは泥の弾丸を撃ち出した。

ドン！！

咲夜

「（泥使い！！）ハツ！！」

咲夜は素早く弾丸を避けた。

ババッ！

咲夜

「やるな、アンタ！」

スプマンテ

「オレはビショップの中でも上位の者だ。オマエのような小娘に負けるワケにはイカンのだ！！」

スプマンテは泥弾丸を連射した。

ビビビビビビー！！

咲夜

「くつ！！ハリセンの盾ー！！」

咲夜がハリセンを前にかざすと、ハリセンが巨大化し盾状になった。

ボウン！！

盾状になつたハリセンが、泥弾丸を防いだ。

ドォン！！

スプマンテ

「やるじゃないか。だが、質量を変えればどうかな？」

ズズズズズ！

質量が大きくなつていく。

スプマンテは巨大化した弾丸を発射した。

ドン！！

咲夜

「ハツ！！」

咲夜は再びハリセンを盾にする。

だが、泥弾丸が大きすぎたのか防ぎきれなかつた。

ドゴオ！！

弾丸は盾を弾き飛ばし、咲夜に直撃した。

ドガアン！！

咲夜

咲夜は吹っ飛ばされつつも、体勢を立て直した。

ザザザ！

スプマンテ

「そろそろトドメを刺してやるう・・・」

スマントは咲夜に近づいて行く。

カツ、カツ！

咲夜

「あたやあた魚に『ケに』しかへん!」舟はハヤテの
愛妻になるんやあ…。」

咲夜は叫ぶと、金色のハリセンを取り出した。

咲夜

「ウチが伊澄さんとの修業で得た新たな力、見せたる！！真・愛・サクハヤテ センザンコウ 咲颯・穿山甲！！！」

咲夜が叫ぶと、ハリセンが変化し巨大な金色の哺乳類となつた。

ズン！！

咲夜

「いけえええ！」

穿山甲はスプマンテめがけ、金色の光線を放つた。

ドンー！

スプマンテ

「ウオオオオオオー！！」

スプマンテは泥の盾を出す。

だが、光線は泥の盾」とスプマンテに直撃した。

ドゴォオオオオー！！

シユウウウ・・・

スプマンテ

「グ・・・ハア・・・・」

スプマンテは倒れた。

ドサッ！

カミユ

「第6戦！勝者！アル、愛沢咲夜ーー！」

ハヤテ

「（咲夜・・・何て大胆な言葉を・・・）」

咲夜

「（恥ずかつたあ・・・ハヤテの目の前でないな事言つてしまつや

なんて・・・」

ハヤテと咲夜は、お互いに赤面していた。

2人の愛の力が、悪に勝ったんだね！

次回からはナイト戦、ソニアがナイトに立ち向かうーー！

ファイル629・ソニア、頑丈なシスター！！

咲夜

「勝つて来たで！ハ、ハヤテ・・・」

ハヤテ

「ええ、頑張りましたね！さ、咲夜・・・」

ハヤテと咲夜は、まだ赤面している。

暁

「次からはナイトですね。誰が先に行きます？」

ヒナギク

「じゃあ、私が・・・」

ソニア

「いえ、私が行きますわ。」

ソニアが進み出た。

ペンドュラムアッド側からは、マンハッタンが進み出る。

マンハッタンはロープを取り去った。

バサッ！

その姿は、小さなビックリ箱に入った巨漢の男だった。

ヒュオッ！

ドン！

マンハッタン

『ペントテコラムアッド構成員

』クラス』

ナイト』

「普フフ・・・さあ来いシスターよ。オレがナイト級の強さとこつ
ものをその身に教えてやるわ。」

カミコ

「第7戦！アル、ソニア・シャフルナーブ・ペントテコラムアッド、
マンハッタン！試合・・・開始！！」

試合が始まると、マンハッタンは・RINGを取り出した。

マンハッタン

「先手必勝・・・ってね。」

マンハッタンは・RINGをフィールドの下に投げた。

ポイッ！

ソニア

「何をしたのか知りませんが、負けませんよー。」

ソニアは純金製のトンファーを取り出した。

ジャキッ！

マンハッタン

「純金製のトランジャーを2つも手に持つとは、中々の腕力だな。」

ソニア

「お褒めにあずかり光栄ですわーー！」

ドンッ！

ソニアはマンハッタンに突っ込むと、長い方を前に突き出し殴りかかった。

ヒュオッ！

ソニア

「！」

マンハッタン

「だが、いかなる怪力でも当たられなければ意味などない。」

伊澄

「な・・・箱に入った状態で、ソニアさんより高く跳躍した！？」

マンハッタン

「ディメンション・RING・トイザラスイズキューーブ！…ちなみにこのオレ、身体の軽さにおいては何者にも負けぬ自身があるぞ。」

「

マンハッタンは箱に入り込むと、回転しながらソニアに照準を合わせた。

ギュルルルルルル
・・・

マンハッタン

「ギューブリッケ・クラッシュー！」

マンハッタンは箱ごとソニアを直撃した。

二二九

ソニア
キャラーツー!

ソニアは吹っ飛ばされる。

ソニア

卷之三

ソニアは片方のトンファーを投げ、フィールドの端をつかんだ。

ガツ！

ソニアが投げたトンファーは下に落ちて行き、針山らしき物に突き

ザクッ！

ソニア

「……」

暁

「バ、バカな！…純金のトンファーが串刺しだと…？」

マンハッタン

「そうそう・・・最初にオレが投げたのは、ネイチャーリング・グレギオスニードル！鉄製の物より硬い合金でできた針山を出現させる・RINGだ。もちろん使い手であるオレの鉄箱もオレ自身の体も、紙の如く貫かれてしまうだろう。だが・・・ヨガの神體『サハスラーラ・ムドラー』を会得したこのオレには、何の問題もないのだがな。」

ギギィイイ・・・

ハヤテ

「サハスラーラ・ムドラー・・・古代インドにおいてヨガ行者が伝えた闘技法ですね。彼のように小さな鉄箱に体を収め体重や重心移動を巧みに行う事で、サルの如き身軽さと象の踏みつけものともしない硬さの箱で相手を打ち倒す。元々は自らを束縛する事で精神の解放や覚醒を促す修練法でしたが、いつしかヨガとは枝分かれし独自の形体を作ったと聞いています。最近有名な番長マンガにも、この闘技法の使い手が登場していますしね。」

咲夜

「ハヤテは相変わらずいろいろ知つとぅなあ・・・」

伊澄

「でも、サハスラーラ・ムドラーの使い手が相手になるとは・・・」

ヒナギク

「この勝負、ソニアさんの分があまりにも悪いわ！！」

マンハッタン

「どうだ？あまりの絶望的状況に声も出ないかな？」

ソニア

「一つ気になつたのですが・・・どうしてマリをしてまでそんな小さな箱に入る必要があるんですか？」

X - Y - Z

「！！」

ロワイヤル

「そこを突っ込んできたか、あの娘・・・」

ソニア

「そんなに狭い所が好きなんですか？」

ビキビキ！

マンハッタン

「ソニア・シャフルナーズ・・・」

ソニア

「はい？」

ギャルルルルル！

マンハッタンは箱ごとソニアにぶつかって来た。

マンハッタン

「キュー・ブリック・クラッシュ！！」

ソニアはトントンファーレで箱を受け止めた。

ガガアアアアアンッ！！

マンハッタン

「オマエがメイドとして仕えている橘家は、三千院家や愛沢家と並ぶ財界でも有名な大富豪！今は財政難も乗り越えてきていて、自宅の敷地面積もかなりのものと聞いている！！」

ギギギ・・・

ソニア

「それがあなたの話と何の関係があるんですか？」

ソニアはマンハッタン入りの箱を弾いた。

ガキインッ！！

マンハッタンは空中で体勢を立て直すと、影分身を始めた。

ブオオオオオツ！！

マンハッタン

「オマエ達大富豪は、在宅事情に苦しむ今の日本にあつてはなんらん存在なのだあ！！イリュージョン・キュー・ブリック！！」

ソニア

「はい？そ・・・そんな事が理由なんですか・・・？」

マンハッタン

「そ・・・そんな事だと・・・？これ以上の理由がビリにあらん
だあーつー！」

マンハッタンはソニアを窓飛ばした。

エーフー！！

ソニア

「キャン！キヤアアアアア～ツー！」

ソニアはフイールドの外に飛び出し、針山に真っ逆さまに落ちた。

ギューンツー！

ザウツー！

ハヤテ

「・・・・！」

ヒナギク

「何て事・・・！」

マンハッタン

「天に召されるが良い・・・」の戦争が我々の勝ちで終わった際に
は、日本だけでなく世界各国の国民にオレと同じ箱形の住宅を与える。これで在宅事情も一挙解決するし、とても素晴らしい生活が実

現するのだ！！」

ソニア

「どうでも良いんですけど……妄想を語るのは、私を倒してからにしていただけますか？」

下からソニアの声が聞こえた。

マンハッタン

「……なっ……」の声は！？純金をも貫く針山に落ちたハズ。生きてるワケが……」

ソニア

「真・ソニア・サイキックショーン！！」

ギュオ！！

下から鎖のような物が伸びて来て、マンハッタンの箱に巻きついた。

ギュルルルルル！！

マンハッタン

「うおっ！！」

ソニア

「ハアアアアアアツ！！」

ソニアはマンハッタンを引つ張った。

ギュン！！

針山に近づいて行くマンハッタン。

マンハッタン

「ヒツ、ヒイイ・・・」

思わず箱に体を收める。

そして、ついに針山に箱が突き刺さった。

ドスツ！！

マンハッタン

「ウオオオオオ・・・」

痛みに耐えるマンハッタン。

ソニア

「ハアアアアアツ・・・ハツ！！」

ソニアは鎖で箱を投げ飛ばした。

ビュン！！

マンハッタン

「うわあああああーー！」

マンハッタンは空中に吹っ飛ぶ。

ソニアは後を追つて空中に飛ぶと、真上から箱を叩き落とした。

ドゴォー！！

箱は一直線に落ちて行き、地面に落下した。

ズドオオオオオン！！

マンハッタン

「な・・・・なぜ・・・・」

マンハッタンは箱から体を出し、気絶した。

ドサツ！

カミュ

「だ、第7戦！勝者！アル、ソニア・シャフルナーズ！！」

ソニア

「ちなみに私も・・・体の頑丈さなら、誰にも負けない自信がありますわ。」

ハヤテ

「道理で結さんの攻撃で体を締めつけられても、吹っ飛ばされても無傷だったワケですね・・・」

ハヤテはフィールドの下を見ながら囁く。

ソニアが落ちた場所の針は、見事にひしゃげていた。

咲夜・伊澄・真希・暁・風月・歩・ヒナギク

「・・・」

ハヤテの冷静な解説に、咲夜達は啞然としていた・・・

ソニア、頑丈過ぎです・・・

次回はヒナギクが戦うよーー！

ファイル630・ヒナギク、正豪との共鳴！－

ヒナギク

「ソニアさんもやるわね。次は私が出て来るわ。」

ヒナギクは前へと進み出た。

ロワイヤル

『ペンドュラムアッシュ構成員

＝クラス＝

ナイト』

「次はオレが出る。良いな、X-Y-Z？」

X-Y-Z

「・・・」

X-Y-Z、無言。

ロワイヤル

「無言かよ。まあ良い。早くかかつて来やがれ、小娘。」

カミユ

「第8戦！アル、桂離菊！ペンドュラムアッシュ、ロワイヤル！試合開始！！」

ロワイヤル

「フッ。」

ロワイヤルはロープを取り去った。

バサツ！

ロワイヤル
「ウーポン・RING・プラチナブレードーー。」

ジャキッ！

ロワイヤル

「さあ来いや、小娘。」

ヒナギク

「望むところよ。正宗ーー。」

ビュン！

ガシッ！！

ヒナギクは正宗を握った。

ヒナギク

「行くわよ、ロワイヤルー！」

ヒナギクは正宗を握つてロワイヤルに突っ込んだ。

ドンッ！

ヒナギク

「オオオオオ・・・」

ロワイヤル

「フン、ナメるなよ。」

ロワイヤルは剣をかざす。

ロワイヤル

「きらめけ、プラチナブレード！…プラチナリティ・パーティクル
！…」

ロワイヤルの剣から、白金の粒子が放たれた。

バシュッ！

ヒナギク

「クツ・・・」

ヒナギクは正宗を両手に持ち、攻撃を防ごうとした。

だが・・・

ガキイイイン！…

ピシ！

ヒナギク

「なつ！…ま、正宗にヒビが！…？」

伊澄

「どうして…？正宗は村正と並ぶ木刀！…硬さは相当なもののはズよ
！…」

ヒナギクに正宗を預けた伊澄も、驚いている。

ロワイヤル

「その木刀がどれだけ強いかはオレは知らぬ。だが、白金から造られたこの・R I N Gの剣圧に耐えられる物はそうはないだろう。我が王国の家宝の・R I N Gだからな、この剣は。」

ヒナギク

「あなた、王国の王様なの！？」

ロワイヤル

「そうだ。オレは一国の王をやつている。今は己のために、ペンドュラムに協力するハメになつたがなあ！！」

ロワイヤルは魔力を込めると、ヒナギクに突っ込んだ。

ドンッ！！

ロワイヤル

「喰らえ、小娘え！！スラアツシユー！！」

ロワイヤルは強烈な一閃を放つた。

ドンッ！！

ヒナギク

「わわつ！！」

ヒナギクは正宗をかまえる。

一閃が正宗にブチ当たる。

ズドッ！！

ピシ、ピシ・・・

ヒナギク

「え！？」

バキイン！！

正宗は真っ2つに折れてしまった。

ヒナギク

「そ、そんな！？」

伊澄

「正宗が、折れた・・・」

ロワイヤル

「終わりだ・・・生徒会長、桂ヒナギク。」

ロワイヤルは、新たな・RINGを取り出した。

スッ！

ロワイヤル

「ネイチャー・RING・プラチナリティ・ローズウイップ！！」

ロワイヤルは白金のバラのムチを放った。

バショウッ！！

ヒナギク

「わッ！…キヤッ！…」

ヒナギクは必死に攻撃を避ける。

しかし、次の攻撃を避けた彼女の眼前にロワイヤルが現れた。

ザッ！

ヒナギク

「！！」

ロワイヤル

「ハッ！…」

ゴッ！…

ヒナギク

「キヤアッ！…」

ロワイヤルの鉄拳を喰らい、ヒナギクは吹っ飛ぶ。

そこに、バラのムチが襲いかかった。

ギュルルルルル！！

ヒナギク

「キヤアアアアアアツー！」

ヒナギクはムチで縛られた。

ギュウウウーー！

ヒナギク

「アアアアアアーーー！」

ムチに締めつけられ、ヒナギクは悲鳴を上げた。

歩

「ヒナギクーー！」

咲夜

「もう止めるーーーヒナギクはんの負けやあーーー！」

ロワイヤル

「お生憎様だね・・・オレはこの娘のようなヤツが大嫌いなんだ。
なぜなら、昔オレはこの娘のような正義感の強い娘とつき合っていたからだ。」

ロワイヤルは、自身の過去を語った。

ロワイヤル

「オレがつき合っていた娘も、この娘のように正義感の強い子だった。オレは昔イジメられていたんだが、そのたびに彼女に助けてもらっていた。その当時は感謝していた。だが・・・」

ロワイヤルは顔をしかめた。

ロワイヤル

「正義感が強過ぎて、ヤクザにまで注意を始めたんだ、彼女は・・・最初はまだ良かった。だが、最終的に彼女はヤクザの長にケンカを売り、そして殺された・・・オレは悲しかった。彼女を守れなかつた事も、彼女の正義感が強過ぎた事も全て・・・憎らしかった。だからオレは、正義感の強い者を皆殺しにする事を決めたのだ！！」

ロワイヤルは再び魔力を込め始めた。

ロワイヤル

「抹殺してやる・・・この世の見かけだけの正義者を、全てなあ！」

ロワイヤルの言葉を聞いていたヒナギクは、口を開いた。

ヒナギク

「・・・バカみたい。」

ロワイヤル

「何？何だと！？もう一回言つてみろおーー！」

ロワイヤルは絶叫する。

ヒナギク

「何度も言つてあげるわ。あなたは所詮弱い人間に過ぎない。だからそのイライラを、誰かにぶつける事で晴らそうとしてるだけよーー！」

ロワイヤル

「言つだけ言つてゐるが良い・・・所詮その状態のオマエに、この事態を開拓する策などありはしないのだからなあ・・・」

ヒナギク

「・・・それはどうかしら?」

ロワイヤル

「?」

ヒナギク

「私のお姉ちゃんが言つていた。人は信じれば強くなれると。私はお姉ちゃんの言葉を信じ、今まで頑張つて来た・・・信じる者がどれだけ強くなれるのか、あなたに見せてあげるわ!・・・」

ヒナギクが叫ぶと同時に、折れた正宗が空中に浮かんだ。

そして・・・

スウウウウウ・・・

正宗が元に戻つていく。

伊澄

「折れた正宗が、元に戻つていく・・・!..」

ヒナギク

「正宗!私を拘束しているムチを斬つて!..」

完全に元に戻つた正宗はヒナギクに接近すると、彼女を縛つてゐる

ムチを斬つた。

ザンツー！

ロワイヤル

「な、何だとおー？」

ヒナギクは正宗を右手に握った。

ガシッ！

ヒナギク

「さあ、お仕置きの時間よりロワイヤルー！」

ヒナギクはロワイヤルに突っ込んだ。

ドンッ！！

ロワイヤル

「ふざけるなあーー！ プラチナリティ・パーティクルー！」

ロワイヤルは質量を大きくした白金の攻撃を放つた。

ドシユッ、ドシユッ、ドシユッー！

ヒナギク

「全てを斬り裂きなさいーー！ 真・雛菊・花椿一閃波動ーー！」

ヒナギクは強力な波動で粒子を斬り裂きながら、ロワイヤルに向かって行く。

ザンッ！

ザシュッ！

ロワイヤル

「なーー？」

ダダダダダ・・・

あつとう間にロワイヤルとの間にこを詰めるヒナギク。

そして・・・

ザッ！

ヒナギク

「覚悟おーー！」

ヒナギクは正宗を握っていない左拳で、ロワイヤルの腹に鉄拳を打ち込んだ。

ドゴオーー！

ロワイヤル

「ぐわああああーー！」

ロワイヤルは後ろに飛んで行き、壁に突っ込んだ。

ドゴオオオオオーンーー！

ロワイヤル

「ガ・・・ハア・・・・」

ロワイヤルは地面に落ちた。

ドサッ！

カミュ

「第8戦！勝者！アル、桂離菊！-！」

ヒナギク

「感謝するわ、お姉ちゃん・・・」

姉の言葉を信じるヒナギクは、ナイト級にも勝るんだね！-！

次回はFTHバトル最終戦、ハヤテが戦うよ！-！

ファイル631：対決！ハヤテとロボット！！

ハヤテ

「最後はボクですね。では、行って来ます。」

咲夜

「頑張つてな、ハヤテ！」

ハヤテ

「ええ。」

ハヤテは咲夜の頬にキスすると、前へと進んだ。

ロワイヤル

「最後はオマエだ。行つて来い、X - Y - Z。」

X - Y - Zは無言で頷くと、前に進んだ。

ロワイヤル

「無言になるなよー！」

カミュー

「FTHバトル最終戦！！アル、綾崎颯！ペンドュラムアッド、X - Y - Z！試合・・・開始！！」

X - Y - Z

『ペンドュラムアッド構成員

』クラス"

ナイト』

「ヤツト来マシタネ、私ノ出番ガ・・・」

X - Y - Zは羽織つていたロープを取り去つた。

バサツ！

ロープを取り去つたX - Y - Zの姿は、何とロボットだつた。

ハヤテ

「ロボットだつたんですか、あなたは・・・」

X - Y - Z

「エエ。私ハ某有名げーむニモ登場シタ『ファミコンロボ』ヲもで
るニ開発サレタろぼつとテス。私ハ世界最高水準ノ兵士・・・生身
ノ人間ニ、私ヲ倒ス事ガテキマスカナ？」

ハヤテ

「そんな事、やつてみなければわかりませんよ！疾風の如く！！」

ハヤテは高速でX - Y - Zに突つ込んだ。

ギュオ！！

ドゴオ！！

ハヤテ

「（硬つ・・・）」

X - Y - Z

「言ツタはずデスヨ？私ハ世界最高水準ノろぼつとダト。硬サモ普

通ノ人間ヨリ上テス。」

ハヤテ

「クツ・・・」

X - Y - Z

「今度ハこちらノ番デス。ウエポン・R I N G・ポッドミサイル！」

X - Y - Zはポッド型ミサイルを数発放つた。

ヂヂヂヂヂー！

ハヤテ

「疾風の如く・ウインドカッター！！」

ハヤテは風の刃でミサイルを全て叩き斬つた。

ザンッ！！

ハヤテ

「ボクをナメないでください。これでも三千院家の執事ですよ。」

X - Y - Z

「ノヨウデスネ。デハ私モ本氣ヲ出シテイキマショウカ。スピード：R I N G・ジャイロレッグ！！」

X - Y - Zは足をジャイロに変え、ハヤテに突っ込んで來た。

X - Y - Z

「行キマスヨ、はやてサン！！」

ハヤテも疾風の如くで応戦する。

ドゴォ！！

しかし、X-Y-Zは寸前で足をハヤテに向けると、ジェット噴射を当てた。

ボオオオオオ！！

ハヤテ

「熱つ！！！」

ハヤテが一瞬怯む。

X-Y-Z

「すきアリテス！！」

X-Y-Zはハヤテを蹴り飛ばした。

ドカ！！

ハヤテ

「うわっ！！」

ハヤテは場外に吹っ飛ばされた。

ヒナギク

「ヤバいわ！場外には、第7戦でマンハッタンが出した・R I N G

の効果がまだ・・・

ハヤテは下へと落ちた。

咲夜

「ハヤテエーー！」

咲夜が叫ぶ。

X - Y - Z

「下ニ落チマシタカ。下ニハまんはつたんガ出シタ・R I N Gノ効
果ガ残ツ テマス。下ニ落チタはやてサンハ今頃串刺しニ・・・」

X - Y - Zがそう言つた時、ハヤテの声が聞こえてきた。

ハヤテ

「疾風の如く・神速ーーー！」

ハヤテは下の針床を踏み台にすると、高速で上に飛んだ。

ドンッー！

X - Y - Z

「ナ、何デスツテーーー？」

ハヤテ

「あいにくボクにもグレギオン合金の針は効きません。」

ハヤテはそう言いながら、フィールドに着地した。

ソニア

「そりいえば、ハヤテ君も体が頑丈でしたねえ・・・」

ひしゃげた針山をのぞき込みながら、ソニアが言つた。

ハヤテ

「今度はこちらの番です。疾風の如く・ウイングスピア!!!」

ハヤテは風を槍に変え、X-Y-Zめがけ放つた。

ドシュッ!!

ザクザク!!

X-Y-Z

「グツ・・・さすが二これハキツイデスネ。私ノぼでーーーきずワツケルホドトハ。やはり強イデスネ、はやてサンハー!!」

X-Y-Zは再び足をジャイロに変えて空中に飛んだ。

X-Y-Z

「！」カラハ空中戦デス。行キマスヨ、はやてサン!!」

ハヤテとX-Y-Zは、空中でぶつかり合つた。

ドゴオ!!

X-Y-Z

「一つ聞キタイデス。ドウシテあなたハソレホドマテー強イノデスカ？」

ハヤテ

「え？」

X - Y - Z

「人間誰シモどこかニ弱サヲ持ツテイルモノデス。私ヲ作ツタ博士モ、研究所ニイタ職員達モ皆弱サヲ持ツテイマシタ。ダカラ私ハ研究所ヲ逃げ出シマシタ。弱キ者ト一緒ニイテモ何モ得ラレナイト。今マデ旅ノ中デ会ツタ人達モソウデシタ。シカシだごんハチガツタ。弱サナド微塵モ感ジラレマセンデシタ。ダカラ私ハペんでゆらむ二入ツタノデス。ココナラ強クナレルダロウト。ダカラ私ハ今疑問ヲ感ジテイマス。ナゼあなたハ強イノデスカ？」

X - Y - Zの言葉に、ハヤテは静かに返答した。

ハヤテ

「ボクも最初は弱かつたんですよ。ぐうたらな両親のせいでも幼い頃から働かざるをえず、転校を繰り返していたから友達もできない。兄はいなくなつたきり帰つて来ない。正直生きているのが絶望的でした。でも、そんなボクにも大切な仲間達ができたんです。ボクを強く鍛えてくれたアーティン、ボクを執事として雇つてくれたナギお嬢様、優しくしてくれるマリアさんやヒナギクさんや西沢さんや瀬川さん達同級生、そしてボクの恋人になつてくれた咲夜。みんなボクに笑顔を与えてくれました。だからボクは、一生懸命皆さんにお礼をしていくつもりです。それが、ボクができるせめてもの恩返しだから・・・」

咲夜

「ハヤテ・・・」

ヒナギク・歩

「ハヤテ君……」

X - Y - Z

「ナルホド、ソレガあなたノ強サノ秘密トイウわけデスカ。トテモ羨マシイデス。ソノ強サガドレホドノものナノカ、私モ確カメテミタクナリマシタヨー！」

X - Y - Zは・R I N Gを発動すると、その上に乗った。

X - Y - Z

「これガ私ノ最後ノ・R I N G、ガーディアン『ギガントランドマスター』デス。あなたノ底力、私ニ見セテクダサイ！－！」

X - Y - Zが指を差すと、戦車型ガードイアンの砲台から弾丸が放たれた。

ドン！－！

ハヤテ

「わかりました、見せてあげますよ。見ていてくださいね、咲夜。」

そう言つと、ハヤテは体に風をまどつた。

ゴオオオオオ・・・

ハヤテ

「真・颶・疾風怒濤！－！」

ハヤテはまどつた風を竜巻に変え、X - Y - Zとギガントラングドマ

スターに突っ込んだ。

ドン！！

X
-
Y
-
Z

卷之三

ハヤテ

一 ハアアアアアツ！！！

ハヤテはX-Y-Zのガーディアンを直撃し、ギガントランドマスターを破壊した。

ド「」カ
!!

パキイン！！

X
-
Y
-
Z

X-Y-Zは真っ逆様に落ちて行く。

ハヤテはすぐに後を追うと、X-Y-Zめがけ右手を向けた。

ハヤテ

疾風の如く・レスキュー・ワインで!!

ハヤテは緩やかな風を放ち、X-Y-Zを救出した。

やつべつと地面に降り立つ。

ザツ！

X - Y - Z

「ナ、ナゼ私ヨ・・・私ハ敵ナノニ・・・」

ハヤテ

「たとえ敵であつても、困つている人は助けなさい」とアーティンから
の教えですでの。」

ハヤテは笑顔で言つた。

X - Y - Z

「さすがデスネ・・・私ノ負ケデスヨ・・・」

カミュ

「F T Hバトル最終戦！！X - Y - Zのギブアップにより、勝者！
綾崎颯！！」

咲夜

「よつしゃあー！！」

ハヤテの優しさはロボットの心も和ませる！！

次回は美保とヒカルの過去話です！！

え、ヒカルって誰だつて？

えつと、それについては『FBIから来た女・5』逆鱗・黄の章』
のファイル529：みんなでお祝い！愛子と琴葉の誕生日！－を先

にお読みください！

少ししか出でていませんが・・・

ファイル632・美保とヒカルの最初の出会い――（前書き）

オリジナルキャラクター・ファイル73

刹那ヒカル

白野蘭学塾の塾生で、美保のお田付役を務める青年。

宮本武蔵の弟子である柳生十兵衛に憧れており、ショックを受けると切腹をしようとするクセがある（美保はこの事について『ヒカルは憧れの人になりきり過ぎ』と言っている）。

昔は相当な不良だったらしく（この頃は源義経の部下の武蔵坊弁慶に憧れていたらしい）、日本各地を周り竹刀やら木刀を片つ端から奪っていた。

999本まで集め1000本目を探していた所、京都の五条大橋で当時11歳だった美保と出会い（源義経と武蔵坊弁慶の出会いそのものである）。

1000本目を狙つて美保に勝負を挑んだが、1回目はあつという間に負けてしまう。

その後数10回にわたつて彼女に様々な分野のスポーツで勝負を挑んだが（通つている小学校に転入までして押し掛けた）、いずれもことごとくあしらわれてしまう。

リベンジのために彼女の幼なじみだった銀一を誘拐し、彼を人質にして美保に1VS1の再試合を持ちかける。

しかしそのような卑怯な手を使うヒカルに美保が負けるハズもなく、11回目も彼女にコテンパンにされてしまう。

その後改心したのか、白野蘭学塾の塾生になる事を決意した。

美保と銀一の仲を羨ましく思つてゐる一方、エルの片想いには気づけないという鈍感なところもある。

だが最近は少し彼女の想いに気づいてきたようだ。

美保と銀一を暴漢から守るために彼女達をかばい、その結果左目の
視力を失い隻眼となつた。

もつとも彼は『名誉の負傷』だと思っている。

年齢は18歳。

ファイル632・美保とヒカルの最初の出会い!!

白野美保と刹那ヒカルは、いかにして出会ったのか？

今回はその出会いの話をしましょう！

7年前 京都

刹那ヒカルは京都では有名な不良で、日本各地で竹刀や木刀を集めていた。

なぜヒカルがこんな事をしているのかといふと、彼は歴史上の人物である武藏坊弁慶という男に憧れているからなのである。

何でも形から入る性格である彼は、弁慶のマネ事をしているというワケだ。

そんなヒカルは、既に999本までの刀を集めていたのである。

刹那ヒカル『当時11歳』

「ハハハ、もうコレクションも999本目。全く笑いが止まらないぜ。」

ヒカルは笑いながら、奪った木刀の一つを持って京都府内を歩いていた。

他の刀類は家の倉庫に保管しているようである。

ヒカル

「後一本で1000本目だ。早くコレクションを完成させたいものだな。」

ヒカルがそう言いながら五条大橋に差し掛かると、向こう側から1人の少女が歩いて来た。

牛若丸の格好をし笛を吹きながらやって来た、当時11歳の白野美保である。

ヒカルはその姿に少し見惚れた。

ヒカル

「（フウン、なかなかカワイイ子じゃないか……ん？）」

ヒカルは、美保が腰に差している木刀に目をやつた。

色は金色をしている。

ヒカル

「（丁度良い・・・コイツからも木刀を奪つて、記念すべき1000本目達成だ！）」

そう思ったヒカルは、美保に襲いかかった。

ヒカル

「おありやあああーー！」

ヒカルの一振りが美保に降り注ぐ。

ビュッ！

だが彼女はまるで本物の義経のように攻撃をヒラヒラとかわすと、橋の上に降り立つた。

トツ！

ヒカル

「オ、オマエ一体何者だーー！」

白野美保『当時11歳』

「あなたこそいきなり何？見たトコ普通の人間みたいだけど・・・」

ヒカルは率直に用件を言った。

ヒカル

「オマエが腰に差しているその木刀が気に入った。オレによこせ。」

美保

「イヤよ。どうしても欲しいのなら、私を倒してからにしなさい。」

美保は強氣で言った。

ヒカル

「望むところだ・・・負けて後悔するなよーー！」

ヒカルは木刀を握ると、再び美保に襲いかかった。

ヒカル

「おらあ！！」

ヒカルは美保めがけ木刀を振り下ろす。

だが美保はアツサリかわすと、ヒカルの後頭部に一撃を叩き込んだ。

ゴスツッ！！

ヒカル

「ギャー！！」

ヒカルはアツサリ地面に沈んだ。

ドサツ！

美保

「私の勝ちよ、じゃあね。」

ヒカル

「ま、待て！せめて名を名乗つて行け！！！」

美保

「あなたいつの時代の人間よ・・・まあ良いわ。私は白野美保、1歳よ。これに懲りたら、2度と私にケンカを売らない事ね。」

美保はそう言つと、足早にその場を立ち去つた。

ヒカル

「白野美保・・・覚えたぞ・・・絶対にあの木刀を奪つてやる・・・
諦めるものか・・・」

ヒカルはそう呟くと、早速行動を開始した。

公立三ツ葉小学校

5・Bの教室では、美保がクラスメイト達に囲まれていた。

昨日、彼女がヒカルに襲われたという話を銀一から聞かされたから
である。

「美つちゃん、昨日不良に襲われたんですって！？」

「大丈夫だったのか、白野！？」

美保

「別に大丈夫だったわよ？私と同じ年だったし、一撃入れたら倒れ
たしね。」

美保はシレッと言った。

「美つちゃん、カッコイイー！！」

「スゲエな、白野！！」

「さすが、クール＆スペイシー！！」

「憧れちゃう～！！」

クラスメイト達は絶賛する。

そんな中、隣にいる銀一が話しかけた。

銀一
「本当に大丈夫なの？」

美保

「大丈夫なんじゃないの？何か立ち去る時に殺気みたいなのが見えただけど。」

銀一
「・・・」

銀一の目が点になる。

しばらくすると、担任の先生が教室に入つて來た。

ガラッ！

「授業を始める前に転校生を紹介する。入つて來なさい。」

先生に言われ入つて來た子供に、美保は見覚えがあつた。

「今日から皆と一緒に勉強する事になった、刹那ヒカル君です。
みんな仲良くしてあげてね！」

「はーい・・・」

美保

「学校まで押しかけて来るとはね・・・」

美保はため息をついた。

体育の時間

美保達はドッジボールをやっていた。

両チームで残っているのは、それぞれヒカルと美保だ。

ヒカル

「勝負だ、白野！！」

美保

「はいはい、わかったわよ・・・サッサとかかって来なさい。」

ヒカル

「喰らええええ！」

ヒカルはボールを勢い良く放った。

ブン！！

美保

「・・・遅い。」

美保はそう呟くと、ボールに鉄拳を打ち込んだ。

ドン！

ボールは真っ直ぐ飛び、ヒカルの顔を直撃した。

ドカッ！

ヒカル

「グハア！」

「白野チームの勝ち！」

その放課後

美保と銀一は、一緒に帰つていた。

銀一

「美保、今からスポーツ施設巡りしない？」

美保

「良いわね。母さんのカード使わせてもらいましょ。」

ヒカル

「ちょっと待つたあ……」

美保と銀一が振り向くと、ヒカルが立っていた。

ヒカル

「オマエ達、これから何ヶ所施設を回るんだ？」

美保

「9施設よ。」

ヒカル

「丁度良い。その9戦、オレとオマエで勝負してもらおう。」

美保

「別に良いけど、負けたら代金奢りなさいよ。」

ヒカル

「良いだろう。」

1戦目 ボーリング

美保

「ハツ……」

美保はボールを思いきり投げた。

ブンッ！

バカン！！

『ストライク』

ヒカル

「何い！？」

美保

「これで全ストライク。私の圧勝ね。」

ヒカル

「・・・」

ヒカルは銀一にも負けた。

ヒカル

「気を取り直して次々。」

それから3人はカラオケ・野球・ビリヤード・パター・ゴルフ・エアホッケー・テニス・バドミントン・サッカーの8施設に行つたが、ヒカルはことごとく美保に負けた。

ヒカル

「バカな・・・9施設連続で負けるとは・・・」

美保

「これで満足した？じゃあね。」

そう言つと、美保は銀一を引っ張つて去つて行つた。

ヒカル

「チクショウ……」のままでは納得イカン……どうすれば……
そうだ。あのガキ、使えるな……」

ヒカルはニヤリとした。

1週間後

美保は今日、少し不機嫌な顔で帰つていた。

ヒカルだけならともかく、銀一も学校を休んでいたからだ。

美保

「全く、銀一が学校休むだなんて……何してんのかしら……」

美保は愚痴りながら、銀一の家に向かつた。

瀬藤邸

美保

「『めんぐださーい。』

美保が呼び鈴を鳴らすと、銀一の姉・金美が出て来た。

ガラッ！

金美

「み、美つちゃん！？」

美保

「金美ちゃん！…銀一は…？」

美保が聞くと、金美は涙を出しながら美保の手を握った。

金美

「美つちゃん、助けて…！」

美保

「ちょっと、どうしたの金美ちゃん！？」

金美

「銀一が…・さりわれたの…・・・」

美保

「何ですって…？」

美保は驚いた。

銅香と鉄斗が美保に抱きついて来る。

銅香

「お兄ちゃん今日力ゼ引いて休んでたんだけど、小学校から帰つて

来たらお兄ちゃんいなくて・・・しばらくしたら、刹那ヒカルつて
男の人からお兄ちゃんを誘拐したつて三ツ葉町の西外れの倉庫まで
来いって電話が・・・

鉄斗

「美保おねーたん、お願ひ！おにーたんを助けて！！」

銅香と鉄斗も、泣きじゃくっている。

美保

「大丈夫よ、銅香ちゃん、鉄斗君。銀一は必ず私が助け出すわ。」

美保は微笑むと、瀬藤邸を飛び出して行つた。

美保

「刹那ヒカル・・・ブツ飛ばす！！」

美保の目は殺氣に満ちていた。

三ツ葉町 西外れの倉庫

ヒカルは倉庫内で、美保が来るのを待つっていた。

倉庫の端には、銀一が寝転がっている。

しばらくして、美保が倉庫内に入つて來た。

ガラツ！！

美保

「来たわよ、このバカ。」

ヒカル

「バカとは何だよ、バカとは・・・とりあえず、オレと勝負しろ。」

美保

「性懲りもなくまたなの？しじうがないわね・・・」

美保とヒカルは、お互いに木刀を構えた。

美保・ヒカル

「勝負！！」

3分後

ヒカルは美保に負け、床に沈んでいた。

ヒカル

「やられた・・・」

美保

「これで気が済んだ？じゃあね。」

美保はそう言つと、銀一を抱えて倉庫から出て行つた。

その後ヒカルは改心したのか、白野蘭学塾の塾生の1人として加わったのだつた。

美保は幼少の頃から強かつた・・・

次回は子供好きなナイト級の女が登場！！

ファイル633・子供大好きナイト、スロージン！！

7THバトルを終えたハヤテ達と合流した哀達は、デイールゼイヴに戻つて來た。

ヴン！

「おお！ 灰原達が戻つて来たぞ！ ！」

「大変なんだ、灰原！！」

「哀ったの?」

「う、うん、それで……ペントリーマニアックを嗜んでる女が、…・・子供達と遊んでるんだ。」

哀達が指差した方向を見ると、確かに何者かが子供達と遊んでいた。

キャッ、キャッ

哀はコケた。

ド テ ツ !

哀

「なつ・・・何者よあなたーっ！？」

「ん？」

謎の人物は、振り向いた。

クルツ！

その姿は、ドクロの仮面をかぶり舌を出した、とても女性と思えない者だった。

「やつと帰つて來たの、待ち疲れたわよーつ。ま、子供達と遊んでから楽しかつたけどね。伝えたい事があつてね。『青井玲子』ってどのは子?」

玲子

「アタシ。何が用?」

「あなたに会いたがつている女がいるのよ。次の8THバトルに必ず出て来てほしいつてさー！」

女は玲子を指差した。

スロージン

『ペンドュラムアッシュ構成員

『クラス』

ナイト

『そしてアタシは、トウェンフォルックのメンバーの1人『スロージン』！—アタシが戦いたいのは・・・哀ちゃん、あなたよ。』

スロージンは哀を指差すと、消えて行った。

シユウウウ・・・

その夜

鈴はティールゼイヴ城内に割り当てられた、ジンの部屋の目の前まで来ていた。

鈴
「ジン、入るよ。」

鈴は部屋に入った。

ジンは起き上がると、鈴の方を向いた。

ジン
「来たのか、鈴。」

鈴

「ええ、せつかく休みなんだから、あなたと一緒にいたくてね。」

鈴は笑顔で言った。

ジン

「そうか。だがせめて元の姿になつてくれないか？その姿だと、万が一誰か入つて来た時に気まずいだろ？」

鈴

「わづね～、確實にこじりれるわよね～。特にあなたが」

鈴は一矢つっこむ。

ジン

「オマエ、そういう事を楽しんでないか？」

鈴

「いじる?」

鈴はシレッヒと呟いた。

ジン

「（クシ、逆らへん・・・）まあやつこいつ事にしてやるよ。」

鈴

「じゅ、薬飲むわね。」

鈴はATBT-6489を飲むと、蘭の姿になった。

ムクムク・・・

蘭

「これで良こじでしょ、ジンっ!」

ジン

「ああ・・・しかし見事なもんだな、この薬は・・・」

蘭

「わづね。」

蘭はそのまま、ジンのベッドに潜り込んだ。

「ソラ…

ジン

「近くで見ると良く似てるな、富野明美に。」

蘭

「え？？」

ジン

「ああ。シェリーが明美とオマエを重ね合わせるのも、わかる気がする。」

蘭

「そうね。それよりジン、本当にアタシなんかで良いの？」

ジン

「オレがオマエとつき合つていい事か？」

蘭

「ええ。」

ジン

「フッ。ぐじこよつだが、オレはオマエが良いんだ。今のシェリーには頼もしい騎士がいるからな。」

蘭

「クスッ、そうね。」

蘭とジンはお互いに笑うと、眠りに落ちた。

その寝顔は、2人共幸せそうな顔だったという。

毛利蘭と黒澤陣、この2人の恋愛は誰にも邪魔する事はできない・・

・

次回は回想編、刃が純一と接触！！

ファイル634：刃と純一の秘密の接触！！（前書き）

オリジナルキャラクター・ファイル74

皇純一
すめいき じゅんいち

ペンデュラムアッドの構成員の一人で、工藤新一の双子の兄。だが新一とはちがい冷酷な性格で、最強の一人であるクラレットのパートナー。

新一とは離れて暮らしており、祖父と祖母に引き取られていた。しかしその数年間に謎の博士によつて拉致され、強制的に研究に協力させられた挙げ句南極の地にて破棄処分されそうになつてしまつ。施設を爆破された後クラレットことローズに出会い、恨みを晴らすべくペンデュラムアッドに入った。

そのため、両親の愛を受けて育つた新一を恨んでいる。

新一の事を『シン』と呼んでおり、本人に対し『殺す』とまで発言しているなど、かなり歪んだ性格になつてしまつた。

『金色のガッシュ！』に登場するデュフォーや清磨と似た超能力『アンサーリドラー（答えを導き出す者）』を会得しており、純一の方が能力の強さは上。

ローズに『』と呼ばれているが、どうやら元々からそう呼ばれていたらしい。

刃の事を気にしているのか偶然を装つて接触したり、ユリに怒られていた彼女をアーミング・グレイスを歌つて助けるなど意外な面もある。

ユーリとの戦いで憎しみを全てローズの術に込めぶつけるが、ユーリの涙を見たために自らも涙を流し、戦闘不能となる。

その後ローズに『オマエは生きろ』と言われ、生きる事を約束しローズの最期を看取つた。

ペントデュラムアッドが壊滅した後は京都府警に籍を置き、超能力を生かして日夜働いている。

実は密かに刃に惚れており、彼女が結婚式強盗によって人質に取られた際は圧倒的実力で強盗を叩きのめし刃を救出。

その後ブーケをもらつた刃に対しても遠回しに告白し、ようやく彼女と結ばれ1年後に結婚した。

新一と双子であるため髪型もソックリだが、首の所にあるクセ毛の数が2本になっている点がちがう（新一は一本）。

ファイル634：刃と純一の秘密の接触！！

体験旅行でコナンと哀が失踪し、その事を自分のせいだと思い込んで落ち込んでしまった刃。

事件が解決した後も、彼女は自分を責めてばかりいた。

そしてそんな中、彼女は1人の男と接触する事となる。

刃は1人、大阪市内を歩いていた。

刃
「グス・・・グスン・・・」

刃は泣いている。

そんな彼女に、1人の男が話しかけてきた。

「また泣いているのか・・・」

刃
「え？」

「オマエはいつも泣いているな・・・」

刃
「アカンのか？」

「イヤ、思い出していたんだ・・・オマエによく似た女を・・・平
静を装つて影で泣いていた、アホな女の顔をな・・・」

刃

「ア、アホな女！？」

「じゃあな。」

男は行こうとした。

刃

「待たんかい！・・・せめて名前教えんかい！・・・」

純一

「純一だ。これで良いか？」

刃

「あ、ああ。」

純一

「そうか。」

純一は帰つて行つた。

「純一
「ただいま。」

クラレット

「お帰り、」。ビニに行つてたんだい?」

純一

「別に。ただの散歩だ。それより、ちょっと話を聞いてくれるか?」

クラレット

「何だい?」

純一

「さつき1人の少女に会つたんだが、とても寂しそうな瞳をしていてな。その顔を見ると、なぜか無性に励ましたくなるんだ。この感情が何なのか、アンタわかるか?」

クラレット

「それは恋つてヤツだよ。」

純一

「恋だと?バカバカしい。第一私にはやらねばならん事がある。そんな事にかまけていいヒマはない。」

クラレット

「たまには息抜きも必要だよ?」

純一

「まあ、アンタがそいつひなら。」

その後純一は、ちゅくちゅく刃の様子を見に行へよつこなつた。

もちろん、コナン達に見つからなこよう。

そして、彼女が好きな歌の事も知つたのだ。

純一

「クラレット、アーミンググレイスという歌を知つてゐるか？」

クラレット

「知つてるけど、それがどうしたんだ？」

純一

「私にその歌の歌詞を教えてほしいんだが。」

クラレット

「わかつたよ。君の恋路を応援したいしね。」

純一

「だからそんのではない。」

純一はその後、クラレットから齧つたアーミンググレイスで刃の窮地を救う事になる。

これが恋なのかどうか、刃と純一はまだわかつていない。

刃と純一、恋人同士になれたら良いね！

次回は8THバトル開始だ！！

ファイル635・8THバトル！再び砂漠の舞台ーー

ダゴン『ただ今帰還しました、クイーン。』

ディアナ

「そう。私の故郷はそうだったかしら？」

ダゴン『とてもステキだったと思います。ボク達が行くまでは・・・』

ディアナ

「収穫はあつたのかしら？」

ダゴン『・R・I・N・Gはないです。・・・でもありましたよ。』

ディアナ

「それ以外の収穫だとしたら・・・他の楽しみかしら。」

ダゴン『ええ！哀です！－偶然いたんですよ、嬉しかったなあ！』

ディアナはダゴンの体のキズを見た。

ディアナ

「あなたにキズをつけるなんて・・・驚きね。」

ダゴン『強くなつてますよ哀は・・・1戦1戦で成長している。果実が熟すのに、そう時間はかかるないでしょ？。』

その頃哀は、考え事をしていた。

康太郎

「どうしたんですか哀さん。 5THバトルから元気ないですよ？」

哀

「うん・・・私は非力だった。組織対戦でダゴンに勝てるのかなって・・・」

康太郎

「だつて、その戦いの前に30人以上のペンドュラムと暴れてたんでしょ？疲れてて仕方ないですよ！！負けるの当然！」

イズナ

「うん。今までの戦いからして、あの子らはルーク級。それを全員倒しただけでも大成長だと思うわよ。」

康太郎

「それよりさ・・・コナンさんは自分をカワイがっていた人と戦うつて言つてた・・・自分が同じ立場だったら、それ言つ自信ないや。哀さんは戦争みたいな事の経験は？」

哀

「ううん、なかつた。」

康太郎

「じゃあボクと同じですね！人を殺すなんて事が全然想像つかない。」

「

哀

「私だけ想像してなかつた。でも今やつてゐるのは戦争で、私達はその渦中にいるのよね。」

スロージン

「ぐは…じやああなたも！明日の組織対戦に出るのね？」

「アーニ。アーニもあの『哀』といつ子が許せなくてね。」

「子供相手に怒らないの。子供なんてカワイイイものよーっ

「子供だろうと何だろうと！　私のダゴンにキズをつけるなんて許せないのよー！」

スロージン

「ダメ。哀とやるのはアタシよ。譲れない。」

「なら絶対殺すのよー！」

スロージン

「うーん。子供・・・殺せるかしら・・・あなたも・・・やりたい相手決まってるもんね！」

ヒヨ才才才才才才

カミコ

「おせよウソやれこめす……昨日は良く眠れましたかー?」

ハナン

「あんまつーつ。」

哀

「一睡もしてないわよ、文句ある。」

玲子

「ずーっと駅の外と遊んでたー。」

カミコ

「(ハイシリ・・・) 今回から私、カミコ血のダイスを振ります。
よろしくお願ひします。」

リアン

「イカサマしたら殺すで。」

カミコ

「ヤ、ヤダなーつ。そんな事しませんよーつ。」

しょんとこいた。

カミコ

「ではーー。」

カミコはダイスを投げた。

カミュ

「5 V S 5 ! ! 砂漠ステージ ! ! 出でよ、ペントコラムアッド ! ! 」

ドン・・・

男女2人が現れた。

哀

「2人しかいないじゃないのよコノヤローッ ! ! 」

哀はカミュを蹴飛ばした。

カミュ

「ギヤース ! ! そ、そんなハズは・・・ ! ! 」

「大変だ ! ! 灰原 ! ! 」

哀

「何よ ! ! ? 」

「昨日のヤツがまた子供達と遊んでいる。」

わーい、わーい！

哀は「ケた。

スローゲン

「これで3人・・・後は・・・」

ザ・・・

「マルガリータ。4人目ね。」

どいつもコイツも強そうな4人・・・
次回、コナンがブチキれる！？

ファイル636・世界一フサイク決定戦！？『ナンキレン！…』1

マルガリータ

「これで・・・4人。もう1人は、最後になつたら出て来るそうよ。玲子と縁のある人間らしいわ。さて、そちらは・・・誰が出て来るのかしら？」

哀

「まずは私！…哀！…」

康太郎

「ボク！…！」

秀一

「オレ。」

コナン

「ボク！…！」

玲子

「そしてえ。アタシよ。誰のリクエストかよくわからないけどね。」

リアンは今回も出ず。

カミュ

「とりあえずそろいましたね。ではこのメンバーを・・・」

「おいあれ見る！…」

「あの城のテラスだ！！」

そこには、ダゴンがいた。

哀

「（ダゴン！…）」

ダゴン『よくここまで来たね、君達。これからはもうルークも、ハンパなビショップも出さないよ。そこにいる2人はね、ビショップの中でも最も強い3人が存在するんだけど・・・その3人の中の2人なのさ！ナイトに最も近い3人の内の2人！そしてナイトが3人！全員マラスキーノなんかより強いから頑張つてね』

マルガリータ

「ダゴン！！」

マルガリータは仮面を外した。

ス・・・

マルガリータ

「わ、私が勝つところを見ててね・・・！わ、私・・・頑張るからね！」

ダゴン『うん。頑張つてねマルガリータ。』

マルガリータ

「キヤーッ！頑張るつ、頑張るつ！…』

康太郎

「・・・何か今回もクセのあるヤツがいますねえ・・・」

哀

「うん。注意が必要だわ！－！」

カニコ

「それではこのメンバーを砂漠フィールドへーー！」

哀達は、砂漠フィールドへとやつて來た。

ブン！

「ボクウ。一番で出るから。あひだ

ドン！

「魔剣エクスカリバー。世界で一番カワイイのって誰え？」

『あなたです、マスター。』

「じゃーあー。あそここいつのバイクとボク、どっちがイケてる？」「？」

「ナン
？」

『マスターに決まっております・・・あの男の子はバスです!』

カツチーン!!

コナン

「ボク、一番に出るね。文句ないね?」

コナンはかなり怒っている。

哀・康太郎・秀一・玲子

「ど・・・どうぞーー!」

カミュ

「アル、江戸川コナン!!ペンデュラムアッド・ビショップ3人衆の1人、シトロン!!試合開始!!」

シトロン

『ペンデュラムアッド構成員

『クラス』

ビショップ

『ランサ』

ボンッ!

康太郎

「花?ボクと同じネイチャー・RING使いか?」

コナン

「?」

シトロン

「君をあ・・・占つてあげるしーーつ。」

そう言つと、シトロンは花びらをむしり始めた。

シトロン

「ブス。美少年。」

むしり、むしり！

花びらをむしると同時に、コナンの髪の毛もむしれた。

コナン

「あ痛つ！―か、髪の毛が！―？」

シトロン

「ブス。美少年。ブス。ブス。おーや今2回言つちやつたしー。美少年。ブス。」

むしりむしり！

コナン

「アイタタターッ！―痛いーっ！―」

ワシャワシャ！

康太郎

「・・・あれがビショップの中でも3人いるトップの1人なの？」

哀

「 ああ・・・」

シトロン

「 最後の一枚はあーつ、ブ・ス。」

むしり!

コナンの周りが爆発した。

ドカアアアアアン!!

コナン

「 アタタ・・・ケホッケホッ!!」

シトロン

「 えー、ボクの『花占いでドカン!』でも死なない。以外とタフ
だし。バスだけどおーつ。」

コナン

「 コッ・・・コイツーッ。」

ガガガガガガ・・・

コナン、爆発寸前!!

次回、お菓子の魔法に翻弄される!?

ファイル637・世界一フサイク決定戦！？『ナンキレン！…』2

「ナンナンナン…」

フッ…

玲子

「ひょ、表情は変わってるけど、あれは怒つてる…。」「…、怖いわ…」

「ナン

「さっきから、ブスだの何だのって…。温厚なボクだって怒るんだぞおーつ…！」

「ナン」はフレアードアースを放った。

ギャン…！

しかし、シトロンはそれをすべて避けた。

シトロン

「フン、フン、フン、フン。」

康太郎

「ぜ、全部避けてる…！」

哀

「しかも何か怖い…！」

秀一

「太っている割に俊敏だな・・・」

シトロン

「君つてー、顔もブサイクで弱いんだねえー。かわいそーつ。そう思つてしまエクスカリバー?」

『イエスマスター。その通りですね。（あつちの子の方が全然カワイイよ・・・正直ウソつくのは疲れるなあ・・・）』

シトロン

「何か言つたあー？」

『いえいえ、何も！』

シトロン

「いくよお一つ。」

シトロンは縮小した剣を握ると、突っ込んで來た。

ドン！

ブン、ブン、ブン！

コナン

「わーわわーーフウちゃん！ー！」

カツ！

ドスン！！

康太郎

「やつた!!」

哀

「あの男潰れたか!?」

秀一

「イヤ・・・」

ザンッ!!

コナン

「フ、フウちゃんが・・・効かない!?!」

シトロン

「君なんてえー、こんなもんだしーつ。ボクのもつとスゴい所見せ
るしーつ。出て来いーつ、お菓子の家ーつ。」

ドーン!!

シトロンはお菓子の家を出すと、壁等を食べ始めた。

シトロン

「つまいしーつ。」

ムシャムシャ!

コナン

「バ、バトル中に食事!...?つていうかアレ何の属性...RINGな

のー?」

シトロン

「うまつ。ルン」

秀一

「確かに変な・R I N Gだ・・・これで何が起るか未知・・・ビショップ最強の3人の中の1人か・・・」

ガツ、ガツ!

コナン

「もう!!バカにされてるみたいで腹立つ!!」

コナンはシトロンに突っ込んだ。

シトロン

「食べたらあ、食べただけえ・・・」

シトロンは息を吸うと、一気に吹き出した。

ブオオオオオ!!

コナン

「うわ!!わああああー!!」

コナンは吹き飛ばされた。

シトロン

「強くなるしいーつ。ヒツ、ヒツ。」

スロージン

「あーあ、コナン君もかわいそいつ。よつこよつて相手がシトロン
なんてねえーつ。」

スロージンがそつそつと、マルガリータが彼女をはたいた。

パシ！

スロージン

「アイタ！！

マルガリータ

「何言つてんの！バカじやないの！？」

スロージン

「だつて相手は子供よーーー？」

バク、バク！

ゴクン！

クチャクチャ！

玲子

「シユウちゃん。気のせいいか？」

秀一

「氣のせいじゃないね。あのシトロンとこつ男・・・体がふくらん
でいる。」

卷之三

巨大化したシトロンは、巨大な岩を持ち上げた。

• • •

シトロン

シエロ、モトヤマへ遊びにいく。

ドスン、ドスン！

康太郎 「ヤバイよ・・・! あんなの臉らつたらこへら何でも・・・」

哀

コナン

「忍者の国、インセディアで頂いた：R I N G を使う時が・・・来たようだね。（行くよ・・・！！ボクの新しい力・・・！！）」

果たして、コナンがもつた・R I N Gとは!?

次回、炎水の妖精が登場！！

ファイル638・世界一ブサイク決定戦！？「ナンキレル！…『3』

ジン

「忍者の国インセティアで…頂いた…R I N G…？それは本当なかリアン！？」

リアン

「ああ。忍者の国のお墨付きや。康太郎も玲子もシユウも瑛祐も…・そしてアタシも頂いた…！使いこなせるかわからへん位ハンパないヤツをな…！」

ザザザ…・

哀

「魔力を練り込み始めた…！それも…速い…！」

秀一

「正直驚いたな…・コナン君の魔力蓄積量が想像をはるかに超えている…！」

シトロン

「そんなもん出したってムダだしーっ…！」

ブンッ…！

コナン

「フルディーネ…」

ボヒュ！

赤色と青色の妖精が現れ、大岩を粉々に砕いた。

ボゴオ！！

康太郎

「あ・・・あれが！！」

秀一

「コナン君の新しい・・・R I N G！」

哀

「スッゴイー！」

玲子

「炎と水の、ガーディアン・・・」

「初めまして、コナン。ボクがファルディーネです。」

コナン

「はつ・・・初めまして！！」

「今回ボクが倒すべきは・・・あちらの方なの？」

ゴガガガガ・・・

「クスクス・・・美しくない方だね。」

シトロン

「ボクが美しくないってーつ！？エクスカリバー！…どう思つし

ーつー!?

『美しいです・・・あちらの方が・・・』

シトロンはその言葉にキレ、エクスカリバーを破壊した。

ドゴオ!—

シトロン

「もう君みたいなガーディアンいらないし!ボクにはまだお菓子の家があるんだしいーつ!—」

モシャモシャ!

「それではボクは命ぜられた事を全うする事にしましょう。コナン、
『命令を。』

コナン

「アイツを倒すよー!—」

「承知。フレアードルス!—!」

炎の柱が、お菓子の家を破壊した。

ドン!—!

シトロン

「ボ・・・ボクのお菓子の家が・・・ー!許せないしいーつ!—!」

ドンッ!—!

ファルディーネは左手に水玉を出現させた。

ポン！

シトロン

「バーク！ そんな小さな水玉で・・・」

ヒュン！

ファルディーネが放つた水玉が、シトロンの顔を捕らえた。

ガボボ！！

シトロン

「！」

コナン

「そうか！ どんなに大きくても、人間である以上息を止められたら
！」

「あのよつな者でも人は人。命の選択をさせてあげてはいかがかな
？」

哀

「コナン君！ ！」

コクリ！

コナン

「ギブアップするなら、手を呑みなさい。シトロンー。」

チラ・・・

スロージン

「良いわよ、ギブアップしても。」

シトロン

「（ボクはビショップ3人衆の一人・・・あんなガキに負けるなんて許されないし・・・）」

ダラン・・・

口ナン

「手を叩いてーーーシトロンーーー。」

ゴボボ・・・

パチン！

ファルディーネが水玉を解除すると、シトロンは地面に倒れた。

ズズ・・・ン！-

「の方は死ぬまでギブアップしなかつたでしょうね。だからその前に水を解きました。」

フシユルル・・・

カミュ

「勝者……アル、江戸川コナン……」

「それではまたお会いしましょ、コナン。」

ポン！

カミュ

「それでは第2戦！出で来る戦士は……？」

ヒョウ・・・

またも一クセありそうな女が・・・

次回、秀一が大ピンチ！？

ファイル639・奪われた魔力！秀一の危機！！『1』

コナン

「次は誰が出る？」

秀一

「哀君と、玲子君は決まってるからな。」

康太郎

「じゃ！ボク・・・」

秀一

「オレが行く。」

康太郎

「な、何でですか？」

秀一

「康太郎君、男なら君も今回のバトルで一度ナイト級と戦え。コナン君以外は皆戦う事になるんだ。」

康太郎

「ナ、ナイトって、あの女人の人・・・!?」

ジーッ！

康太郎

「わかりました！！今のボクがどれくらい戦えるかわからないけど、やります！！（女人だし、そんな厳しい戦いにはならないだろう。

・・・」

「 ポワーン！

「 ナン

「（康太郎君・・・変な事考えてなければ良いけど・・・）」

カミコ

「ペンドュラムアッド、ドランブイ！――アル、赤井秀一――試合つ、
開始！――」

ドランブイ

『ペンドュラムアッド構成員

＝クラス＝

ビシヨップ』

「・・・・」

ボソボソ！

秀一

「聞こえないね。14トーテムポールロッド――！」

秀一はロッドを持って突っ込んだ。

ポン！

ドランブイ

「イーターフルート。」

ドランブイはフルートを吹いた。

秀一

「…」、「これは…」

秀一の体から、何かが吸い出された。

ドランブイ

「魔力は頂く。って言つたの？」

哀

「何て…RINGなの…！私達の距離からでも魔力を吸つて
くる…近距離にいる赤井さんは…」

玲子

「離れてシユウちゃん！」

秀一

「クッ…（「イツもナイトに近い女だつた…！音が魔力を吸収す
るならば…・・・聴こえない所まで距離を保つて…・・・！」）

ザザザ…

秀一

「14トーテムポール！」

秀一は距離を保つと、14トーテムポールを放つた。

ガシャガシャガシャ…

ガシャ…！

だが、ドランブイは当たる寸前で空中へと舞い上がった。

バサツ！

秀一

「あ・・・・！」

ドランブイ

「届かないわ・・・ヨ・・・・」

ブンッ！

秀一

「グ・・・・！（羽を使って・・・砂嵐！！）」

砂嵐が晴れると、ドランブイが何人にも増えていた。

ドランブイ

「チャーミングホルン。分身。あなたに・・・本体が、わかる？」

ドランブイは分身達と共に、秀一に襲いかかった。

バサアツ！！

ナイフをガンガン投げて来る。

ブン、ブン！

秀一は次々と避けていたが、ドランブイに殴られ一瞬スキができた。

ドカ！

その瞬間、秀一の左肩にナイフが突き刺さった。

ザクッ！！

ドランブイ

「当たつた・・・アハハ・・・」

秀一

「フフ・・・フフフ・・・オレを・・・怒らせたな。」

秀一が・・・

キレた！？

次回、明暗を分ける激闘！！

ファイル640：奪われた魔力！秀一の危機！！』2

ドランブイ

「怒らせたらどうなるの？私の本体がわかるのかしら？」

秀一

「ダークネス・RING・・・ストッピングスカル！！」

カキン！！

ドランブイ

「うつ・・・！？動け・・・ないワ！？呪い！？」

ズキン！！

秀一

「クッ・・・！？（本体は・・・影が・・・ない！？本物には影が
映るハズ。つまり・・・真上！？）14トーテムポール！？」

ドン！！

ポールがドランブイを直撃した。

ズシャア！！

ドランブイ

「ブハッ！？や、やるわネ・・・でも私にはまだ秘策があるの！」
イーターフルート！？」

ドランブイはフルートを吹いた。

秀一

「 もうその笛は聴かない！ ！」

ザツ！

ドランブイ

「 今度は、逃げられないわヨ。 ドランブイ、最後にして・・・最強の・R I N G！ ！ ガーディアン・R I N G『ヴァリオス』！ ！」

ドォン！ ！

ドランブイが召喚した鬼は、秀一に襲いかかった。

ガアア！ ！

秀一

「 ウエポン・R I N G・バルデス！ ！」

秀一は盾で鬼の攻撃を防ぐ。

ガン、ガン！

『 誇り高き戦士、赤井秀一。 あなたには』の・R I N Gを『えましよつ。 』

秀一

「 （まだだ・・・まだ、使わない。）たかがビショップ相手にあれを使うのは、かわいそうすぎる。」

ドランブイ

「たかがビショップって言つたわネ？ならヴァリオスを倒して見せてヨー！」

秀一

「倒す必要も・・・ないのさ。ストッピングスカルー！」

カキン！！

秀一はヴァリオスの動きを止めた。

秀一

「君のガーディアンに呪いをかけた。これがどうこう事がわかるな？」

ドランブイ

「・・・！」

ザツ、ザツ！

秀一

「君の秘策のガーディアンは出現したまま動けない。そしてガーディアンを出している間、術者は動けない。つまり・・・君の負けだ。」

ドランブイ

ドサツ！！

ドランブイ

「ゴホッ・・・・！」さ、さすがアル最強の1人赤井秀一・・・勝てるワケがない・・・」

カミュ

「勝負あり！・・・勝者、赤井秀一・・・」

リアン

「何で・・・ヤツヤ！あの子・・・新しい・RING、いくつかもろてたハズやのに・・・1つも使わんと勝ちよつた！・・・」

「スゲエぞシユウ！・・・イカすーつ！・・・」

リアン

「喜ぶんはまだ早い。問題は・・・次からや。」

スロージン

「次。どっちが出よつか？」

マルガリータ

「私。これ以上アルの人間を勝たせてたまるか。それでたくさん・・・たくさん・・・ダゴンに誉めてもうつんだ私・・・」

康太郎

「向こうは・・・あっちの女の人か！じや。ボクですね。」

哀

「女だからって油断しないでよ東宮君！・・・」

玲子

「そりや……相手はナイトよーつ。」

康太郎

「オッケーッ！－」

コナンと秀一は完勝したが、康太郎は果たして・・・

次回、マルガリータが力の差を見せつける！－

ファイル641：快感！石使いのナイト、マルガリータ！！『1』

哀

「東富君、頑張つてよーっ！！」

コナン

「ボクも勝てたんだからねつ、『氣合』いだよーっ！！」

カミュ

「アル、東富康太郎！！ペンデュラムアッド、マルガリータ！！試合開始！！！」

康太郎

「ぬりやああーっ！！自然のスコップーー！」

ズアツ！！

康太郎

「ん？」

ギ「オオオン！！」

マルガリータ

『ペンドュラムアッド構成員

『クラス』

ナイト』

「ロールダーアックス！！本当は哀を倒して、ダゴンに讃めてもらいたかつたんだけど・・・アンタでガマンしてやる。」

マルガリータは石の斧を持つて突つ込んで来た。

ドンッ！！

康太郎

「こつ！…こんな差、汚いですよーつ！！」

ガイソー！

ガン、ガキン！！

キシイ・・・

康太郎

「（女人の人なのに・・・何て力だ！！接近戦じゃ不利だ！！離れろ
！！）」

ザザザザザ！-

ザクッ！

康太郎

「ビーンズウィップ！！」

ニヨロオオオ！！

ポン！

マルガリータ

「ロールダークロウ！」

マルガリータは石の爪で、向かつて来たツルをブチ斬った。

ブチイイイー！

康太郎

「！」

哀

「東富君のビーンズウィップが！斬られた！？」

コナン

「石の斧に石の爪・・・」

秀一

「石使いか。」

康太郎

「クツ！それなら！…ウェーブアース！…」

ドン！…

康太郎

「（これなら石の爪でも斬れない！…どうするナイト！…）」

マルガリータは右目を塞ぐ眼帯をズラした。

ス…・

玲子

「義眼！？」「

秀一

「あの右目・・・マジックボールだ！！」

マルガリータ

「空間転移。」

マルガリータと康太郎の位置が、入れ替わった。

ヴン！

康太郎

「あれ？」

「ハハハハハ！」

ウェーブアースは康太郎を直撃した。

康太郎

「のぎやあーつ！！」

ドカアン！！

マルガリータ

「クスクス・・・おバカな子。」

康太郎

「（つ、強い・・・）これがナイトの力！！」

哀

「男を見せるんでしょう！？弱気にならないでよ、東富翁！！」

康太郎

「了解ーつー！」

玲子

「元氣だけはあるわねえ。」

秀一

「それが勝利につながるとは限らない。」

イズナ

「何よあなた達、クールねえ。」

マルガリータ

「男らしさなんて、見させてあげない。強力なヤツいくよお・・・
！！ロールダーファングー！！」

ドムー！

康太郎

「わーーわっわっーー！」

ズボッ！

康太郎

「！？」

マルガリータ

「ロールダークラッシュユーー！」

空中に浮かんだ石の槍が、一斉に康太郎を襲つた。

ガキガキガキン！！

哀

「あ・・・東宮君ーつ！！」

マルガリータ

「あーああ・・・ゾクゾクするう・・・気持ち良いわあ・・・愛し
のダゴン・・・見てくれてるかしら・・・」

圧倒的実力の差に、康太郎の命運は・・・！？

次回、SM女マルガリータの逆襲が始まる！！

ファイル642・快感！石使いのナイト、マルガリータ！！『2』

マルガリータ

「さあ、カミュ。勝利の宣言を行つて頂戴。」

カミュ

「は、はい！勝者……」

哀

「イヤ……まだよ……」

コナン

「まだ康太郎君は終わってないよお……」

マルガリータ

「何？」

マルガリータが見ると、石の塊から何かが生えてきた。

ニヨロニヨロ……

ホコ……

ピシイ！

出現した巨大豆から、康太郎が出て來た。

パカン！

マルガリータ

「！」

哀

「おおーつー？」

イズナ

「豆の中から生まれたーつー！」

康太郎

「ビーンズウイップを応用した『ビーンズバリアー』……」こんな時
のため考へてた技です！！」

秀一

「良いアイデアじゃないか……」

マルガリータ

「思つたより……やるじゃないぞ。」

マルガリータは左腕につけてある・・RINGを取り外した。

ジャラ・・・

康太郎

「（新しい・・・・RING！ー）」

マルガリータ

「出でついで・・・・『刻みの秤』。」

ポン！

大きな秤のような物が現れた。

玲子

「何？あれ。」

秀一

「わからん。」

康太郎

「そつちがどういう攻撃してきてもおーつ！…ガンガン行きますよ
おー！…ウェーブアース！！」

ドン！－！

康太郎が攻撃を放つたが、マルガリータは今度は避けもせず攻撃を
喰らつた。

ドカア！－！

康太郎

「あらつ・・・よ、避けない？」

マルガリータ

「フフ・・・快・感。」

力チツ！

マルガリータ

「グラン・ロールダ。」

バキバキ

マルガリータは巨大な岩を出すと、それを自分に当てた。

ズドン！！

啞然

力チン！

マルガリータ

「気持け良こよ・・・」の悦び・・・子供にはきっとわからないね・

L

康太郎

— そんなのわからなくてすみません —

哀

「東宮君、チャンスよ！！攻めて！！」

秀

「おかしい……様子が変だ。康太郎君の攻撃を受ける。自らをキズつける……そのたびに……」

力チツ！

秀

「あの秤は…」「

力チツ！

秀一

一時を指し示している！！（何かの前兆！！）攻撃を止める、康太郎君！！」

力チツ！

ジリリリリリリ！！

マルガリータ

「……この体に刻み込まれた、数多のキスは悦び……そしてそれは相手にとって地獄の苦しみの糧となる。出でよ……メデューサ！！！」

ドクン！

メデューサが睨みつけると、康太郎の足が石化を始めた。

ピキ

康太郎

マルガリータの逆襲に、康太郎絶体絶命！！

次回、康太郎が大殊勲を果たす！！

ファイル643・快感！石使いのナイト、マルガリータ！！『3』

ドクシ！

七
•
•
•

卷二

「何だこりやあーつ！？」「

哀

マルガリータ

「ガーディアン・RING『メテヨーザ』！その瞳を見た者は、その体を石とされていく・・・私はサディストでもありますマゾヒスト・・・メデューサを出す時はいつも相手に好きに**彫**^{なぶ}られるの・・・そうして悦んで悦んで・・・相手の苦しむ姿を楽しむサディストの一面に変わる。」

秀一

「（刻みの秤・・・！あれば自分へのダメージを蓄積させる事で魔力を倍増させる媒体だつたんだ！）」

ピキパキ！

康太郎

「グヌツ・・・ググググ！－グアアアアアアアア・・・」

マルガリータ

「ああ・・・良いよ、その表情・・・ゾクゾクするわよ・・・堪らない・・・」

哀

「東宮君が石になつても、ルピナスで元に戻せないの！？」

秀一

「難しいな。あれはガーディアンだし、何より能力が高い！－あの：RINGを破壊しない限り・・・康太郎君は永遠に石像となる。」

哀

「東宮君、ギブアップして一つ！－石になっちゃうなんて、許さないわよーっ！－！」

マルガリータ

「ギブアップなんかさせてあげるもんですか・・・オマエ達は、仲間が石という屍になつていいくのを見届けなさい。」

哀

「（東宮君・・・今あなたには、歩ちゃんという恋人がいるのよ・・・）東宮君ーっ！－！」

ザス！

ピキピキ！

康太郎

「（左手は、まだ動く！）」

康太郎は左手をズボンのポケットに入れた。

ゴソゴソ！

『その力をまだ眠らせている者、東宮康太郎。あなたには、この3つの：R I N Gを差し上げましょう。』

スツ！

康太郎

「良かつた。：R I N Gは石化されてなかつた！」

マルガリータ

「この期に及んでまだそんな表情を見せるなんて・・・カワイイくない子ね康太郎」

康太郎

「もうダメかなって思いましたよ。でも・・・声が聞こえた。まだお別れしたくない、友達の声が聞こえたんだ！！」

康太郎はそう言つと、：R I N Gを投げた。

シユツ！

ズアツ・・・

次の瞬間、マルガリータは背後から巨大な食虫植物に噛みつかれた。

ズゴオオオオオオオオ！！

康太郎

「ガーディアン・R I N G・メフェュトス！－！」

マルガリータ

「ギャ・・・グギャアアアアアアア－！」

ピキン！

康太郎

「（まだ、まだ・・・まだだよ！－！－！）」

植物の1匹がマルガリータに突っ込み、頭の・R I N Gを奪つた。

そして奪つた・R I N Gを地面に叩きつけ、破壊した。

バキン！！

フッ！

マルガリータは地面に叩きつけられた。

ドサツ－！

マルガリータ

「（体が、動かない・・・私が・・・負ける？ダゴン、ゴメンね・・・）」

石化が解けた康太郎も、地面に沈んだ。

ズン・・・

カミュ

「両者ノックダウン！…ドロー！…」

哀

「東宮君！…」

コナン

「康太郎君！…」

哀達が康太郎に駆け寄る。

康太郎

「ボク・…・どうなつたの？」

哀

「ドローよー！…負けなかつたのよ、ナイトに！…」

康太郎

「そうか。もうちょっと・…・もうちょっとだつたなあ・…・」

秀一

「善戦だつたよ、オレが認める。次に期待しよう。何といつても次に出るのは・…・アルの大将だからな。」

康太郎、引き分けに持ち込む大殊勲！…

次回は哀と女の影使いが激突！！

ファイル644・戦慄の戦場—サイキックスペース!!『1』

マルガリータ

「・・・情けない戦い方しかやった・・・ダゴン・・・怒るかなあ？」

スロージン

「別に。良いんじやない?とりあえずアタシが言いたい事は一つ!
あなた達は子供の扱いがなつてないって事!アタシが手本を見せる
よ。」

グラリ・・・

イズナ

「良い、哀ちゃん!これで2勝1分。勝ち越しているけど・・・でも
もあなたはキャプテン!!あなたが負けたら1発で終わり!...よく
覚えておきなさい!-!」

哀

「うるさいわね~あなたは~!そんな事わかつてんのよーっ。」

ポカポカ!

イズナ

「あ!~痛い!~殴ったわね!~おのれ無礼者!-!」

カミコ

「8THバトル!!第4戦!!アル、キャプテン灰原哀!..ベンデ
ュラムアッシュ、スロージン!!試合開始!-!」

哀

「よーしゃってやるわ!! イズナバージョン・・・。!!?」

スロージンの体が2つに分かれたのを見て、哀は目が点になつた。

コナン・秀一・康太郎・玲子

「!!!」

スロージン

『ペントテコラムアッシュ構成員

』クラス=

ナイト』

「行くわよー。」

ドン!

スロージンは上半身だけで突っ込んで來た。

哀

「キヤアアアアアアー!!」

イズナ

「うあーっ!! おいていかないで哀ちゃんーっ!!」

パカン!

スロージンの右腕が体から外れると、哀の頭を掴んだ。

ガシ!

良い子良い子！

ナデナデ・・・

右腕は哀の頭を撫でた後、哀を殴つた。

ガンッ！！

哀

「なつなつなつ、何なのよこの人は・・・！」

スロージン

「これは『ディメンション・RING』セパレートパーティー・一体の部分を分けて空間移動ができるのよ こんな風にね！」

哀
「じつ！…」の野郎一つ！…！」

スカツ、スカツ！

哀

「うおおおおおーつ！…！」

スカスカスカスカ！

哀

「ハアハア、ハアハア・・・」

スロージン

「合体～つ」

スロージンは体を元に戻した。

カン、カシン！

哀

「テメエーッ！…おちょくつてんじやないわよーつ！…！」

ジャキ！

哀

「シャボンガトリンガー！…！」

ドゴー！

スロージン

「3次元シャドー！…！」

ニユルオ！

スロージンが出した影が、泡を吸収した。

スボスボ！

康太郎

「シャボンが影に吸収された！…？」

コナン

「影使い！…？」

スローラジンの影が、哀を殴る。

バキ！

哀

「ググツ・・・・・（強い…）」

スローラジン

「本当はこんな事あまり乗り気じゃないのよ。アタシの子供と同じくらいなのよね、実年齢の哀は。アタシは子供が大好きなのよー。」

哀

「じゃあ・・・・・ビリしてペントコラムなんかにいるのよー。」

スローラジン

「ペントコラムが強いからよ。ペントコラムにつかないとアタシの子供の命も危ない。ペントコラムが世界を統べる事で争いはなくなり、平和が訪れる。世界の子供達も死なずに済むでしょ？」

哀

「ちがうーー現にペントコラムは子供も殺してるじゃないーーペントコラムが消えた方が子供達も平和に暮らせるのよー。」

イズナ

「うん、この女の言い分はまちがつてゐ。」

スローラジン

「あなたはまだ子供だからわからないのよ。誰にもダゴンは倒せない。戦争を起こす事で、平和を作るのよ。ペントコラムアッシュが世

界を平和にする…さて・・・ここでマジックを一つ。

スローグンの言い分は果たして正しいのか・・・?

次回、魔力を半分にされ哀が大ピンチ!!

ファイル645・戦慄の戦場—サイキックスペース！！』2

スロージン

「さて……」ここでマジックを一つ。見学者の中には子供達だつて
いる。これから先の戦いは……子供達に見せたくない。サイキッ
クスペース！！」

カツ！

スロージンが・R I N Gを発動すると、紫色の巨大なドームが哀と
スロージンを包み込んだ。

オオオオオ……

ヴン……

コナン

「何これ！？」

康太郎

「中の2人の様子が、見えないよ！？」

秀一

「ディメンション・R I N G『サイキックスペース』だ。これを使
われると哀君は……」

哀

「何？」「は？」

クラ・・・

哀

「うつ・・・何?力が減つてゐるような・・・」

イズナ

「私もよーく、苦しい・・・」

スロージン

「サイキックスペースの能力よ、哀!この空間にいる者は術者以外魔力は強制的に1／2になる!どう?厳しいでしょ。そしてここで!新しい:R I N Gをまた1つ!」

バラッ!

スロージンは左手を飛ばした。

哀の肩に触れる。

トン!

スロージン

「タッチ。」

ボン!

哀の横に丸い物が現れた。

哀

「!?な、何これ?イズナかしら?」

イズナ

「私はこんなマヌケな顔はしてないわよ！！」

哀

「何か爆弾みたいね。」

スロージン

「ピンポン 爆弾よ。ウエポン・R I N G『ルーレットボム』！このボムは相手にダメージを与えると、ダメージを喰らった人間の頭の上に移動する。そういうた攻撃のやり合いをやつていてる内に、ボムはみるみる大きくなり・・・最後は、ドカン！！ね。名づけて『ロシアンルーレットボム』！！ちなみにアタシは負けた事ないわよ。」

哀

「面白いわねそれ！！要はあなたにダメージを与え続けば良いのね？」

スロージン

「ロシアンルーレットボムカーン！！スタート！！」

哀

「ハアアーッ！！」

ガツ！

スロージン

「ムムッ。（魔力は1／2なのに・・・モノスゴい集中力だわ。ダゴンが興味を示すのもわかるわね。）行くわよお哀ー！」

ドカ！

哀

「（この人つ・・・ワザと攻撃を受けている。ゲームを楽しんでるんだわ。）」

スロージン

「さて、このボムの大きさからして・・・そろそろ爆発かしら。」

ジャラ・・・

スロージン

「出でよ！――ガーディアン！――ルシュファー――！」

スロージンは巨大な女性の死神を召喚した。

ズン――！

ルシュファーは4つの腕から鎌を分離させ、一斉に投げた。

ブン――！

ザクザク――！

攻撃を4連続で受けた哀。

その哀の前に、爆弾が現れた。

哀

「…」

チツチツチツ、ピーツ！

スロージン

「ゲーム終了よ。哀！」

ボム！！

爆発に巻き込まれた哀・・・

果たして、哀の運命は・・・！？

次回、2人の信念が激突！！

ファイル646・戦慄の戦場－サイキックスペース－！－『3』

ボム！！

スロージン

「哀一つ！！」

スロージンは哀に向かつて飛んで行つた。

スロージン

「大丈夫！？死んでない！？哀！？」

煙が晴れると、巨大ゼリーに包まれた哀が現れた。

シユウウウ・・・

哀

「生きてるわよ。」

スロージン

「おお！…ティフェンスジエリーね！でも出すタイミングが遅かつたみたいね、キズだらけだわ！」

哀

「あなたに心配されたくないわよ！…」

スロージン

「…哀。ギブアップして！そしたらまだ子供のあなたを殺さなくて済む！ダゴンにも…アタシからよく言ってあげるから！…」

ね？そしたら世界も平和になるのよ。」

哀

「（ダゴン）……ちがう。ダゴンは世界の平和なんか少しも望んでない！ヤツが求めているのは殺戮と破壊だけよ！…ダゴンを倒すの！…あなたなんかに負けてられない！！」

哀の魔力が、上がり始めた。

「ゴゴゴ…。

スロージン

「なつ・・・（魔力が・・・半分にされているハズなのに・・・ドンドン上がっている…！）」

イズナ

「それでこそ私の使い手だわ、哀ちゃん…！行くわよ…！」

哀

「ショーリングフォードガーゴイル…！」

スロージン

「ルシュファー…！…！」

「ドン…！」

スロージン

「そう！わかつてもらえないの…！…なら氣絶させるしかないわね哀…！」

「ゴッ！」

ザクザク！

哀

「・・・わかるワケがないじゃないの。スロージンー！あなたは間違つてる！－！ベンテュラムアッドが子供達の笑顔なんて作れるワケないのよ！－！」

「ゴッ！－！」

スロージン

「（な、何て娘なの・・・・・子供とは思えない・・・・・）」

ギギギギギ・・・

哀

「行きなさい！－！ガーゴイル！－！」

ガーゴイルの光線が、ルシュファーを貫いた。

「ドン！－！」

「ビビビビビビビビビビビビ－！」

コナン

「ドームが・・・割れしていく・・・」

康太郎

「哀さんは！－？哀さんはどうなったんだ！－？」

ショウハウ・・・

秀一

「生きてるー。」

玲子

「勝負はどうなったのー?」

スローラジン

「・・・大した信念だわ。どうせなら本当にダーランを倒してみせなさいー子供達の笑顔・・・あなたに託すわ。アタシの負けよ。」

イズナ

「変なヤツねあなた、まだ戦えるでしょーー。」

スローラジン

「なーに。アタシは子供達が二口二口して暮らせるなりどうでも良いのよー。」

そう言いつと、スローラジンは仮面を外した。

パカ!

スローラジン

「頼むわよ。哀。」

カミコ

「勝者ーーアルーー灰原哀ーーーー。」

カミュが勝利宣言をしたと同時に、空間に穴が開き始めた。

ズズズズ・・・

「・・・やれやれ・・・スローラインともあらう者が、戦意を喪失するとはね。」

玲子・康太郎

「！」

「久しぶりね。玲子・・・」

ドドドド・・・

スローラインの心を動かした哀・・・

しかし、そのすぐ後に謎の女が・・・

果たして、玲子の事を知るこの女の正体は・・・！？

次回、因縁の再会！－！

ファイル647・氷VS氷！玲子、蘇る記憶…！』

「ハハハハ…」

ザ…

「久しぶりね、玲子。」

桃色の髪をし、左目を眼帯で塞いだ女性が現れた。

ザツザツ…

玲子
「誰？」

哀と康太郎はコケた。

哀
「知らないの！？玲子さんに縁のある人間らしいじゃない…！」

玲子
「そんな事言われても記憶にないわねえ。」

「記憶がないのもムリはない。アタシが、アタシに対する記憶を消したのだからね。」

玲子
「！？」

「しかし直に思い出す。再会の時記憶は戻るよつとしたからね。昔話は後にしよつ。戦いながらでもできる・・・」

カミュ

「組織対戦8THバトル!! 最終戦!! アル、青井玲子!! ペンデュラムアッシュ・・・ 桃井玲子、マンダリン!! 試合開始!!」

玲子

「（桃井玲子・・・!? その名前は・・・知つてゐる・・・）」

玲子はツボを召喚した。

ドン！

桃井玲子=マンダリン

『ペンドュラムアッシュ構成員

』クラス』

ナイト』

『ミラクルロープ。こつして戦つのも久しぶりね、玲子。』

ニユルニユル！

バッ！

ロープが玲子に襲いかかる。

玲子

「ペガススランス！！」

玲子はロープを斬り始めた。

スパスパ！

だが、再生してきたロープに巻きつかれた。

ニユルニユル！

グルグル！

玲子

「キヤー！チツ・・・（あのツボを壊せば・・・良いのねーー）フ
ロステイッククアイーー！」

ガシャア！

玲子

「うつ・・・」

ズキ・・・

玲子

「そつか・・・これを使うたびに出て来る影はあなただつたのね！
どうやらアタシ、あなたを確かに知つてたらしいわ。」

鈴子

「まあね。あなたの命を救つたのはアタシだからね。」

玲子

「アタシの・・・命！？」

鈴子

「 そ、う、よ。今、は、あ、な、た、の、命、を、・、・、狙、う、側、に、な、つ、た、け、ど、ね、！、！、！」

ガシヤ！

鈴子

鈴子は複数の水色の円盤を放つた。

ギャン、ギャン！

円盤から円盤に冷気が移り、玲子を直撃した。

ט' ט' ט' ט'

玲子

「キヤ！！（この人も・・・氷使い！？）」

『もつ少しで死ぬトコだつたのよ、あなた』

玲子

「？」

『今日からあなたの名前は青井玲子よ』

玲子

「（何……この声……？）」

哀

「玲子さんーっ！－！」

秀一

「あの円盤を壊せ！！あれが冷氣を操作しているんだ！！」

玲子

「言わねなくてもそうするわ。いくら冷氣に耐性があるつていつてもこう何回も受けたくないからね！必殺・・・ミリオネスードル！」

バギヤーー！

玲子

「フロステイック・・・・

『これはあなたにあげよう』

ジャキッ！

鈴子は剣をかざした。

バリバリバリ・・・・

剣に冷氣が吸収されていく。

康太郎

「冷氣を剣が吸収した！？」

ブンッ！－！

ヒコドンーー

ビキビキビキーー

『然らば、玲子』

玲子

「（思い出した・・・！ー！ー）」

玲子は何を思い出したのか！？

次回、かつての女ボスとの激突ーー

ファイル648・氷VS氷！玲子、蘇る記憶！！』2

玲子

「青井玲子……この名前はあなた……桃井鈴子からもひつた名前だわ。命も、救われた……！」

哀・康太郎

「なぬーっ！？」

鈴子

「記憶が戻ったようね。」

玲子

「ええ、思い出したわ。あなたは……元メアリードの女ボス！！桃井鈴子……！」

コナン

「メアリード……？ 盗賊団……玲子さんの前の女ボス！」

リアン

「ホンマなんか……？ ヤツはアンタらの女ボスやったんか！？」

「ほ、本当です！ 確かに鈴子様です……しかし、なぜペンドュラムにいるのか……！？」

玲子は、昔の事を思い出し始めた。

『（こ）は、どこ……？ アタシ……かなり大ケガしてるみたいね。全く動けないわ……！』

『大丈夫？今ホーリー・RINGで直してあげるからね。』

『（誰・・・？）つていうかホーリーリングって何？』

『大分元気になつたわね。もう少しで死ぬト「だつたのよ、あなた。』

『あなた、誰？』

桃井鈴子『アタシは桃井鈴子。』『、メアリードの女ボスよ。』

『メアリード？』

鈴子『盗賊よ。まだ記憶が戻らないのね。あんなに大ケガしてた理由もわからないの？』

『何も思い出せない・・・自分の名前さえも・・・』

鈴子『じゃあ今日からあなたの名前は青井玲子よ。アタシの昔の夫、青葉玲からもじつたのよ。』

鈴子『今日はこれくらいにしよ。でも大した力だわ。このアタシと互角に戦えるんだからね。』

『玲子、一生ここにいて良いのよ！』

『アンタはもうファミリー や。』

『一緒に盗賊稼業やつていこうや。』

青井玲子『（ファミリーか・・・悪くないわね・・・）』

鈴子『玲子、話がある。これをあなたにあげましょ。フロスティックアイという、メアリードの女ボスの象徴よ。今日からあなたがメアリードの女ボスよ。アタシの事は忘れなさい。いつか再び会うその時までね。然らば、玲子・・・』

玲子『待つて、玲子！待つて・・・りん・・・』

玲子

『そうよ！全てを思い出したわ！どうしてメアリードを捨ててペンドュラムに入つてるのよ！ペンドュラムのせいだメアリードがど

うなつたか知つてゐるの……？」

鈴子

「知つている。」

玲子

「だつたらどうして……？メアリードはあなたが作ったファミリーでしょ！」

鈴子

「ファミリーの絆よりも……ペントデュラムの強さの虜になつたのよ。確かにアタシはメアリードを組織し、：R I N G集めをしたり仲間と楽しく過ごしていた。でも8年前ペントデュラムが現れ組織対戦での戦いを見て……メアリードよりも……F B Iよりも……ペントデュラムの力に魅了された。組織対戦が終わりを告げた時……」

「

スレイプニル『君が鈴子だね？ペントデュラムのスレイプニルという。大した強さらしいじやないか。どうだ？スカウトされてみないか？』

鈴子

「あなたを拾つたのは……そんな時だつた。」

玲子

「だから自分を女ボスに仕立てて……メアリードを捨てたのね！？」

鈴子

「そつよ……そしてアタシはペントデュラムでナイト級まで登り詰めた……アタシには力という才能があつたのよ……」

玲子

「・・・許されないわね・・・己の欲望のために仲間を見殺しにするなんてね・・・命の恩人とはいえ倒さなきやいけない！…」

鈴子

「倒せるかしら？あなたに。」

玲子の周りに、無数の水色の羽が舞い始めた。

フワフワ・・・

玲子

「！？」

鈴子

「ウHポン・R I N G『フロステイックフュザー』…」

ビキビキ！

羽から発する冷気が、玲子を襲った。

バリッ！！

玲子

「アダ…！」

鈴子

「正直驚いたものよ。初めて会った時から、あなたの潜在能力の高さには・・・組織対戦が始まれば、あなたの性格からしてペンデュ

ラムと戦つと思つた。その時はアタシが戦おつと・・・

玲子

「ふざけるんじゃないわよ！・・・」

玲子はペガススランスを握り玲子に突っ込む。

ドンッ！・・・

鈴子

「ふざけてなどいない、至つて大マジメよ！・・・アタシとあなたはこうなる運命だつたのよ！・・・」

玲子と鈴子は、組み合つた。

ギン、ギン！・・・

玲子

「桃井鈴子。お腹一杯後悔させてやるわ！・・・」

道を違たがえた恩人の鈴子に、玲子は想いを乗せられるのか・・・！？

次回、氷使い同士の戦いに決着！・・・

ファイル649・氷VS氷！玲子、蘇る記憶…！『3』

ギン、ギン！！

鈴子

「ハアアアアアア！！！氷速真斬剣！！！」

カツ！！

鈴子は高速で剣を連打した。

ボツ！！

ザクッ、ザクッ、ザクッ！！

玲子

「ググ！！」

ズ・・

玲子

「（強いわ・・・でも・・・負けるワケにはいかないのよーーー）ハ
アアアアアアアアアーッ！！！」

鈴子と玲子は、斬り合つた。

ザシユッ！！

玲子

「ううう・・・」

兀口・・・

哀

「感情に流されないで、玲子さんーっ！－まだあなたには一メアリードの仇を取るつていう先があるハズよ！－！」

玲子

「（えうだわ・・・そうだつたわね。）」

鈴子

「アタシはあなたを倒す！－自分のとつた行動が間違つていなかつた事を・・・確かめるために！－ガーディアン・R I N G・・・ホルスエヴィーネ！－！」

鈴子は水色のエイを召喚した。

ドン！－！

哀

「エイ・・・冷氣エイ！？」

エイの背中が割れると、冷気が一点に集中する。

ビキッ！

カツ！－！

集中した冷気が、玲子を襲つた。

ヒュドン!!

イズナ

「避けなさいバカーッ!!」

秀一

「イヤ・・・玲子君はあえてあの冷氣の中で・・・魔力を最大限に練り込んでるんだ!!恐ろしい娘だ・・・」

『メアリードの女ボス、青井玲子・・・あなたには、このガーディアンを授けましょう。』

玲子

「いくわよ・・・」

玲子は左手に乗せた・・RINGを強く握った。

カツ!!

玲子

「ガーディアン・RING『ジェムニード』ーー!!」

玲子は水色のウナギを召喚した。

『キシャアアアアアー!!』

ジェムニードはホルスエヴィーネに突っ込み、エイの体に巻きついた。

グルグル！

ギリギリ・・・

『ギル・・・ギルル・・・』

ビキッ！！

ジェムニードはホルスエヴィーネを締め上げ、押し潰した。

ズンッ！！

パキイン！

鈴子

「アツ、アタシの・・・ホルスエヴィーネがーーー？」

ジェムニードは強烈な冷撃を放つ。

ヒュドンーーー

鈴子

「帶氷せよーー避冷剣ーーー」

鈴子は剣をかざす。

しかし、ジェムニードの冷撃は強かつたようだ。

ビキビキ、ビキビキ・・・

避冷剣にヒビが入り出し、剣が割れると同時に鈴子を冷撃が直撃した。

ズドン！！

鈴子

「つきやあああああーっ！！！カツ・・・ハツ・・・！」

鈴子は倒れた。

ズン・・・

鈴子

「な、なぜなの・・・なぜペンデュラムでナイトにまでなったアタシが・・・」

玲子

「力つていうのは仲間のために使うのよ！仲間を捨てたあなたに力なんてありはしないのよ。」

鈴子

「立派な女ボスになつたわね、玲子・・・アタシはきっと、どこかであなたに嫉妬していたんでしょうね・・・」

玲子

「あなたにもらつた名前と命だけは・・・これからも使わせてもらいうわよ！」

カミコ

「勝者！！青井玲子！！！」

想いの強さがものを言い、見事玲子に勝つた玲子！

次回は強くなつた瑛美が宣戦布告！－！

ファイル650・新生ナイト、復讐の本堂瑛美！！

カミュ

「S.T.Hバトル終了！！勝利チーム、アル！！今からこのメンバーを・・・ディールゼイヴへ！！」

カツ！

哀達はディールゼイヴに戻つて來た。

ヴン！

「やつたな！！今回も大勝利だ！！」

リアン

「スロージン戦はヒヤヒヤしたで。やつたな。」

哀

「うん！」

松葉

「流石やで、哀ちゃん！」

哀

「ありがと、松葉ちゃん・・・」

ゾクー！

突然の寒気。

哀が寒気がした方向に目をやると、瑛美が歩いて来るのが見えた。

ザ、ザ、ザ・・・

哀

「え、瑛美さん・・・久しぶりね・・・」

イズナ

「待つて。様子がおかしい。」

ビツ！

瑛美

「次。殺す。」

瑛美はそう言い残すと、消えた。

ヴァン・・・

哀が自分の手に目をやると、大量に汗をかいていた。

哀

「こんなに汗かいてる・・・前に会った瑛美さんとは何かちがうー！」

リアン

「瑛美さんは確か、ルーク級やつたな。そやけど今の彼女は・・・」

ペンデュラム城に、25人のナイトが集まっていた。

ロマネコンティ（女）、マラスキーノ（女）、バラライカ（女）、
サングリア（男）。

マンハッタン（男）、ロワイヤル（男）、X-Y-Z（女のロボット）、
マルガリータ（女）。

スロージン（女）、マンダリン（女）、イフリート（女）、サイク
ロプス（男）。

トード（不明）、ドレイク（男？）、スフィンクス（女）、ティタ
ーン（男）。

?????（不明）、?????（不明）、?????（不明）、????
????（不明）。

ワイバーン（男）、ゴーゴン（女）、クラレット（男）、スレイプ
ニル（男）、そしてダゴン（男）。

数あるペンデュラムアッド構成員の中から選ばれた、25人の実力
者達だ。

マルガリータ

「ダゴン・・・私やられちゃつたよ・・・ゴメンナサイ・・・」

ダゴン『良いよ。気にしないで、マルガリータ。』

マルガリータ

「ダゴン・・・」

スロージン

「アタシも負けたーしかも自分から負けたーっ。制裁して良いわよーっ。」

ダゴン『君はそういう人間だからね、スロージン。憎めないんだよねえ・・・それより制裁を受ける人間は別にいるよ。ね? マラスキーノ。』

マラスキーノ

「！」

ビターズ

「ど、どうしてお姉ちゃんなんですかダゴンー!! 納得ができません!!」

ダゴン『勝手に身内を何人も殺すのは良くないよね。でも君にチャンスをあげるよ。出ておいで。』

仮面をつけた瑛美が、歩いて来た。

カツン・・・

ダゴン『ルークの、キュラソード。』

マラスキーノ

「ルーク? キュラソー? 誰さソイツ! 存在も知らないねえー!!」

ダゴン『キュラソーと今こゝで戦つて勝てたら・・・罰を許すよマラスキーノ。』

マラスキーノ

「ルークと戦う……？バカにしてんのかい……？やつてやるひじやないのぞ……！」

マラスキーノは瑛美の事をルークだと思つて侮つていた。

ビターズ

「ま、待つてお姉ちゃん……！那人……ルークの魔力じゃないよお……！」

スレイブニル『死合……開始……』

数分後、死合はかなり残酷な形で終わった。

ルーク相手と侮つたマラスキーノを、瑛美は首を斬り惨殺したのだ。

鈴子

「な……」

瑛美はマラスキーノの首を床に投げた。

ドン！

ビターズ

「お姉ちゃん……！あああああーっ……！」

マラスキーノの首に駆け寄り泣くビターズの前で、ダゴンは瑛美に近づいた。

ダゴン『トウェンフォルアックが1人入れ替わったね。キュラソー。今日から君はナイトの1人だ!』

ダゴンからピアスを受け取る瑛美。

瑛美

「一言言つておく。この24人の中に、アタシの大切なものを奪つたヤツがいる。ソイツが誰かわかつたらソイツも殺す。それがたとえダゴンでもね。それから明日の9THバトル、アタシも出るからね。」

そう言つと、瑛美は去つて行つた。

スレイプニール『信じられない成長の仕方ですね。まさか本当に生きて帰つて来るのは……』

ダゴン『やはり人間が一番成長する方法はこれに限るね。憤怒。憎しみだ。』

瑛美はペンデュラム城の地下へとやつて來た。

瑛美

「・・・海斗・・・」

瑛美は恋人の名前を呼ぶ。

海斗

「あー・・・あー・・・あー・・・」

海斗の姿は、見るも無惨な姿だった。

まるで蟲のようだ。^{ムシ}

瑛美

「海斗・・・アタシ、ナイトになつたわよ。約束通りナイトに登り詰めたのよ・・・」

海斗

「あー・・・うー・・・あー・・・」

海斗は瑛美的ピアスに手を伸ばした。

瑛美

「うひ・・・うう・・・うわあ・・・うわあああああああーっ!
!—!—!—!—!—!—!—!—!—!—!—!—!—!—!—!—!

地下室に、瑛美的絶叫が響き渡った・・・

愛する恋人を制裁で蟲にされてしまった海斗・・・

海斗を無惨な姿にされた瑛美的怒りの矛先が、9THバトルで哀達に向く・・・!—!

次回、哀達それぞれの休息!—!

ファイル651・それぞれの休息

1 ノナンの場合

ノナン

「あー哀ちゃん。哀ちゃん。……！」

哀は康太郎と話をしている。

ノナン

「（な、何だよー・・・仲良さそうに・・・クソウー！）」

やがて、康太郎は走つて行つた。

ノナン

「（行つた・・・）」

ノナンは哀に近づいた。

ノナン

「あーいーちゃん。」

ドンー！

哀

「うわーーー！ナン君ーーー！」

ノナン

「哀ちゃん。ノド渴いてない？」

哀

「渴いてる、渴いてる……何かくれるの！？」

コナン

「あつ つう い スープ い か あつスカ？ おい ちい よ。 わーい、 うれち
い ね」

グツグツグツ・・・

哀

「・・・イヤ、 いらぬ・・・」

コナン

「左様で、コザイマスか 鬼のよつに熱いチキンいか あつスカ？ おい
ちい ょ。 わーい、 うれちいね」

哀

「な、 何か怒つてゐるコナン君？」

多分哀が原因です。

2 瑛祐と琴美の場合

2人は森の中を歩いていた。

琴美

「何か怖いよ瑛祐～つ。」

瑛祐

「大丈夫だよ琴美。」

ガサガサ！

ドン！！

琴美

「ヒギヤアーッ！！」

瑛祐

「怪物か！？？」

瑛祐は怪物らしき物体を殴った。

パコン！

「痛つ！」

ゾリゾリ・・・

「わ、私はよ一メアリードの一セカンド沼に落ちたんですねー
つ。」

瑛祐

「何だ。琴美をあまり怯えさせんな。」

琴美

「瑛祐・・・ありがとう・・・」

琴美

「瑛祐・・・ありがとう・・・」

瑛祐

「琴美はオレが守つてやる。」

「あの2人仲良いですねーっ。」

「アイテテ・・・私は殴られ損だよ・・・」

3 リアンとユーリの場合

リアン

「カーッ・・・」

リアンは寝ていた。

ユーリ

「ここに来ても結局・・・寝てばかりだなあこの女は・・・」

4 玲子の場合

玲子は男達に囲まれている。

「ボス！－いい加減にしてください！－ナンパにも程がありますよ
！」

玲子

「あら、兄ちゃんカワイイわねえ。一緒に飲まない？」

ジャスミン

「ボス……オレはジャスミン、女だつてばー（相当酔つてるな。）」

「

5 松葉の場合

松葉

「キヤー 見つけたあ！…フフン」

ジャラ・・・

松葉

「いくら組織大戦中でも、…R I N Gハントティングは止められへん
ねんなあーつ。インセティアに一つでも多く…返還せんとな…」

・

6 イズナの場合

イズナ

「あなたの女の麗しさは素晴らしい…女としての美しさを是非見
習いたい！！」

鈴

「そうね。女の魅力とは外見じゃない。内から出るものだわ。」

ジン

「イズナも外見は少々あれだが、中々良い女氣を持っている。」

イズナ

「おお！…流石わかつている…」

鈴・ジン

「…」

康太郎

「鈴さん、ジンさん。話があります。」

7 康太郎と鈴とジンの場合

康太郎は鈴とジンに話をしていた。

康太郎

「ボクをもっと強くして貰下さい…！もう足手まといはイヤだ…！」

鈴・ジン

「死ぬ覚悟で来るか？」

康太郎

「はい…！」

鈴とジンは康太郎に突っ込んだ。

ド、ゴシ――！

口・・・

康太郎

「ボクは・・・もつと強くなりたいんだあーつ――！」

8 哀の場合

哀
「（私・・・）こまで来たわよお姉ちゃん。お姉ちゃんができなかつた事を私がやり遂げるからね――」

イズナ

「何を黄痴れてるのよおーつ――」のバカ者があーつ――

ドーン――！

哀

「フフッ。（明日も頑張りましょ、みんな――）」

それぞれの思いを胸に秘めて・・・

次回、戦慄の9THバトル開始――！

リアンがかつてない危機に！？

ファイル652・rianのサバイボ『1』

カミュ

「おはようございます、アルの皆さん。今日は9THバトル！よく進みましたね。それでは・・・ステージとメンバーの人数を決めさせて頂きます。」

カミュは4つのダイスを投げた。

バツ！

カツン！

3
4

4
2

カミュ

「キノコフィールド！！人数は7VS7！！誰が出ますかー？」

哀・コナン・松葉・瑛祐・秀一・銀一が名乗り出た。

リアン

「そしてアタシやーウフフ・・・」

哀

「rianちゃん出るの久しぶりね！」

リアン

「たまには体動かさへんとなまつてまうしな。アハハハハハハハハハハハハ
ハハ！」

玲子 「そりいえば康太郎君はどこ行つたの？」

秀一

「ジンと鈴君がいない事を考へると、修業でもしているのだらう。」

カミユ

「それではこの7人を・・・ワープゲート・・・

カツ！

組織対戦9THステージ キノコファイールド

ヴン！

哀達は、9番田のバトルステージにワープして來た。

哀

「キノコスゴいーつー！」

瑛祐

「中央に一番大きなキノコがあるな。あの上で・・・戦えという事
か・・・」

松葉

「・・・来るで。」

「ヴン、ヴン、ヴン！」

7人の構成員達が、ワープして来た。

その中に、ロマネコンティと瑛美もいる。

哀

「（瑛美さん・・・！）」

瑛祐

「1人1人の魔力が禍々しく高い！！恐らく全員ナイト級・・・！」

リアン

「アタシが一番に出たるわ！！」

「行きなさい、バイオレット。」

タン！

「全員がナイトじゃないよ。ボクはビショップ3人衆最後の1人！
！そして最強の1人！！」

カミュ

「アル！！リアン・ハートネス！！ペンドュラムアッシュ！！バイオ
レット！！始め！！」

バイオレットはロープを取つた。

バサツ！

バイオレット

『ペンデコラムアッシュ構成員

＝クラス＝

ビショップ

「ワーンー！ボクがバイオレット君だワン」

その姿に、リアンは目が点になった。

リアン

「・・・なあ誰か替わってくれへんか？」

哀

「どうして？」

カミコ

「一度戦闘の宣告をした場合・・・戦士の変更は認められません！試合続行です！」

バイオレット

「いつもおーっ！－ウエポン・R H N G『シエラ・クロー』だワ

ン」

ブンー

リアン

「ひま…ひわ…ひわ…」

瑛祐

「おかしいな・・・いつものコアーンさんと様子がちがう。」

哀

「テオハンマー出して、リアンちゃんーー！」

リアン

「うるさいーー、わかつてらあーー！テオ・・・ハンマーーー！」

リアンは雷の鉄拳を放った。

ゴッー！

バイオレット

「うわ・・・」

ジワッ！

バイオレット

「うわーん！痛いワーンーー！ワーンーー！ワーンーー！」

バイオレットは泣き出す。

リアンは冷や汗をかきだした。

ゾゾゾゾゾ・・・

秀一

「オレ・・・思い出したーー！リアン君は犬アレルギーなんだーー！」

バン！

リアンに意外な弱点が判明！！

つてか読者の皆さんには以前の話で読んで知っていますよね。

次回、最悪の展開！？

ファイル653・リアンのサバイボ『2』

瑛祐

「リアンさんが・・・犬アレルギー？」

銀一

「そういえば、前に敵の忍者が言つてたなあ・・・」

ちなみにコナンと哀は知りません。

松葉

「そやけどカツ「悪い!」

リアン

「あーっ、うるせえーっ!」

哀

「待つて。でもおかしいわ!...リアンちゃん、ガーディアン・RIN
NGでリリンさん持つてるわ!」

リリンとは、2章でリアンが試練の扉内で発動させていた・RIN
Gです。

描写はないですが。

瑛祐

「ああ!あの子も犬耳だな。」

松葉

「変やんな。」

リアン

「あれは…RINGやから平氣なんやーっ…。」

バイオレット

「フム、フム。姉ちゃんボクの事が苦手みたいだね。ラッキー！」

リアン

「寄つて来るんやないでクソガキヤ…テオハンマーが飛んで来るで。」

バイオレット

「うーん、じゃあねえ…・・・せつちから近づいてあるワ
ン。ネイチャー・RING・イスワリバー…。」

ポン！

フリフリフリフリー

リアン

「「あ…・・・体が…・・・勝手に動く…・・・」

リアンはネイチャー・RINGの力で、少しずつバイオレットに近づき始めた。

ズリズリ・・・

バイオレット

「おこでー、おこでワノー。」

ザ
！

バイオレット

「フムッ。範囲内っ。シェラ・クローーーー！」

バイオレットはリアンを攻撃した。

ザシユ！！

「グッ・・・体の自由が効かへん・・・その爪・・・マヒ効果があ
るんか?」

バイオレット

「……………」

ガガガガガ！！

リアンはバイオレットの連打攻撃を受け、吹っ飛ばされた。

ズザザ！

リアン

「うあつ……チクシヨウ……（一番最初に出来んやなかつたわ……）」

倒れたrianに、バイオレットが近づいて来る。

そして、リアンの唇にキスをした。

チム

リアン

「ホホホホホホホーッ！！」

グルグルグルグル！

バイオレット

「姉ちゃんカワイイイワン」「

瑛祐

「あ、あんなリアンさん見た事ない・・・っていうか見たくなかった！」

哀

「私達の中でも最強のハズなのにね・・・」

グラリ・・・

リアン

「おのれ・・・アタシを怒らせよつたな犬男！！後悔させたるで！
！」

『前回の組織対戦でペントュラムを倒しまくったFBIのナンバー
2、リアン。あなたにはこの・R I N Gを授けましょう。』

リアンは上着に手を突っ込んだ。

「ゴソゴソ……

コナン

「リアンちゃんがインセティアからもひた・RINGを出すよー！」

しかし・・・

スカスカ！

哀

「あの顔・・・まさか・・・! あの娘・RING忘れてるわよーつー！」

瑛祐

「なつ、何て事だーー！」

コナン

「バカ〜ツ、リアンちゃんーー！」

松葉

「死ねーーーそこで死ねーーー！」

バイオレット

「そりそり白黒決めさせてもう一つンーーガーディアンーーヤルルーーー！」

ゴン！

『グルルルルルツーーー』

猫がリアンに突っ込む。

リアン

「アホが！ 猫やつたら・・・一撃で終わらせてやれるで！！」

リアンはニヤルルを粉碎した。

ドン！！

そんなリアンに、バイオレットが近寄って来た。

トッ！

リアン
「！」

バイオレット

「ニヤルル、 ただのオトリ」

リアン

「ヒツ・・・」

バイオレット

「ハアアアアア・・・ワンワン波！-！-！」

ドゴォ！！

リアンは吹っ飛ばされた。

ズン・・・

カミュ

「第1試合・・・勝者、バイオレット！！」

松葉

「アホや、あの娘・・・実力を10パーセントも出せへんかった・・・」

・

リアン

「犬なんて・・・大つ嫌いや。」

バイオレット

「ワン」

ああ、最低な幕切れ・・・

次からは頑張つてもらわないと、ね？

次回、銀一が美保のために戦う！！

ファイル654：カップルの絆『1』

「ナン

「全く・・・rianちゃんが負けるト「初めて見たよ。大丈夫?」

rian

「大丈夫やない・・・」

銀一

「次はオレが出よつ。」

タンツ！

「私の番ね。」

シユタン！

カミュ

「9THバトル第2戦！！アル！瀬藤銀一！ペンドュラムアッシュ！パステイス！！試合開始！！！」

パステイス

『ペンドュラムアッシュ構成員

『クラス』

ナイト』

「私の姿を見て、驚きなさい。」

パステイスはロープを取り去った。

バサツ！

銀一

「な、何！？」

パステイスの姿は、美保に瓜二つだった。

といつても、髪の色は水色だが。

銀一

「なぜだ！なぜ美保に似ている！？」

パステイス

「似てて当然。私は人の姿ソックリに変身する事ができるのだから。

」

そう言つと、パステイスは指をパチンと鳴らした。

パチン！

すると、球体に包まれた美保が現れた。

ポン！

銀一

「み、美保！？」

美保

「んつ、んんんんつ（ぎつ、銀一）……」

美保は手足を縛られ、口をテープで塞がれている。

パステイス

「この子はこないだ京都に行つた時に見かけてね。丁度良いから顔を「コピー」させてもらつたのよ。それにこの事バラされちゃ困るから、拉致つちやつた」

銀一

「テ、メエ・・・よくも美保を！…許さねえ…！」

銀一は腕に風をまとわせた。

銀一

「ウルレン！…」

銀一は風をまとつた鉄拳を放つた。

ゴツ！

パステイス

「グハツ！！」

パステイスはふらついた。

パステイス

「この男、風使い…・・・」

銀一

「『』名答だ。オレを怒らせたんだ、目一杯後悔させてやるよ。」

銀一は両手に風をまとわせた。

「オオオオオオ！」

銀一

「リオル・ウル・・・」

パステイス

「フフフ。」

パステイスは美保が入った球体を自分の目の前に引き寄せた。

ギュオ！！

美保

「んんっ！！」

銀一

「！！」

銀一は腕を止めた。

パステイス

「スキありー！ネイチャーッTING・炎の渦潮！！」

パステイスは炎の渦で銀一を包み込んだ。

ボオオオオオ！！

銀一

「グオツ・・・！」

哀

「あの女・・・炎使い！！」

美保

「んんんん～！～」

瑛祐

「マズイぞ・・・銀一君は美保ちゃんの事が自分の命と同等ぐらい大切な存在！彼女を人質に取られている今、戦況は圧倒的に不利だ！！」

パステイスは容赦なく銀一を攻撃する。

ゴオオオオオ！！

銀一

「熱つ・・・ぐあああああ～！」

徐々にヤケドを負っていく銀一。

秀一

「このままで、分が悪いぞ・・・」

哀

「銀一君～つ！～」

パステイス

「そろそろ虫の息ねえ・・・」

ヨロ・・・

銀一

「ク・・・ククク・・・」

パステイス

「?」

銀一

「オレを怒らせたな・・・テメエ、もう許さねえ・・・」

恋人を人質に取られた銀一に、逆転の策はあるのか!?

次回、銀一が男気を見せる!!

ファイル655・カップルの絆『2』

銀一

「オレを怒らせたな、この女・・・絶対許さねえぞ、テメエ・・・」

銀一の周りに、風が漂い始めた。

「オオオオオ・・・

さしづめ、これが銀一の怒りのオーラだらつ。

パステイス

「怒らせたらどうなるのよ? どのみちあなたの恋人がこちらの手中にある限り、あなたの戦況的不利は否めないのよ?」

銀一

「確かにそうだよな。このまま続ければオレが勝つ可能性は低いな。」

パステイス

「ホラ見なさい。私の勝利は確定・・・」

銀一

「だが、3分あればどうかな?」

パステイス

「何ですって?」

銀一

「3分あればカタをつけられる自信があるぜ。」

パステイス

「えらい自信ね。その自信が本当かどうか、確かめてやるわ。」

銀一

「望むところだ。行くぞ！ ギルウルク！」

銀一は風をまとって突っ込んだ。

ドンッ！！

パステイス

「は、速つ！！」

銀一

「リオル・ウルレン！！」

ドンッ！！

銀一はパステイスめがけ風を放った。

パステイス

「クツ！！」

パステイスはすんでのところで避けた。

ババッ！

パステイス

「クツ・・・」「イツのスピードが速くて、女を盾にする余裕ができる
な・・・」

銀一

「オラア！！」

ドゴッ！！

パステイス

「キヤツ！！」

パステイスは吹っ飛ばされる。

パステイス

「クソツ！－」うなつたら女じと燃やし尽くしてやる－－！」

パステイスはせつきの・・RINGの威力を、さらに増大させた。

炎が美保の入っている球体」と包み込み始めた。

「オオオオオ！！」

美保

「んんんん・・・－！」

銀一はゆっくり風をまとわせていく。

銀一

「フォレストシルバー！－白銀のせざぬき－－！」

銀一は強風を放つた。

「オオオオオオ！」

パステイス

「ぐう・・・！！」

銀一

「（まだだ・・・まだまだ・・・！！）」

銀一はパステイスとの間合いを詰め始める。

ジリジリ・・・

パステイス

「（コイツ、何かをしようとしている！？）させるかあ！！」

パステイスは炎を放つた。

「オッ！」

銀一

「ぐ・・・」

パステイス

「残念だつたわね。」

銀一

「イヤ・・・作戦通りだ！上を見な！」

パステイス

「え？」

パステイスが上を見ると、美保が入っていた球体が割れていた。

銀一は美保を抱えている。

銀一

「大丈夫か、美保？」

美保

「う、うん……」

銀一は微笑むと、パステイスを睨んだ。

銀一

「パステイス！」

パステイス

「な、何？」

銀一

「次にこんな事をしやがつたら、今度こそオマエの息の根を止めてやるからそのつもりでいろ！！！」

パステイス

「は、はい！？」

銀一

「それで・・・良い。」

銀一はそう言ひうと、バタリと倒れた。

パタ・・・

シユツ！！

パステイス
「！」

パステイスが頬をさすると、風が頬をかすつていた。

パステイス

「（この一撃は、あの一瞬の内に女を助けなおかつ私を倒すチャンスを伺つてたつて証拠・・・一步間違えれば、私は負けていたわ・・・）」

カミュ

「第2戦！！勝者！ペンデュラムアッシュ、パステイス！！」

後一步のところで倒れた銀一・・・

でも恋人を想う力はさすがだね！

次回は秀一がリベンジバトル！！

ファイル656・永遠の刹那『1』

秀一

「次はオレだ。来いよロマネ、もう一度勝負しよう。」

ロマネコンティ

『ペントラムアッシュ構成員

＝クラス＝

ナイト』

「はい。」

カミコ

「9THバトル第3戦！！アル、赤井秀一！…ペントラムアッシュ、

ロマネコンティ！！開始！！」

「オ・・・

ロマネコンティ

「跳ねなさい。」

ロマネコンティは爆弾石を数発放つた。

「アッ！！

秀一はそれを全て避ける。

ヒュウ、ヒュウ！

秀一

「！」の程度か？」

ロマネコンティ

「動きが全然ちがう。成長なされたんですね。ではいひしまじょう！レイピアウイップ。」

ジャキ！

秀一

「ウエポンか。」

秀一はロッドを持つ。

ロマネコンティ

「行きまーす。せー・・・・のーーー！」

ビュン！-

ドカン！-

秀一

「グツーーー（剣ではなく、爆発を生むムチだったか。）」

ロマネコンティ

「ドンドン行きますね」

ドカンドカンドカン！-

ビシッ！

ロマネコントイ

「…」

秀一

「救いたいんだ。世界を…！」

秀一はムチを掴むと、呑めりきった。

ブチッ…！

パキン！

ロマネコントイ

「レイピアウイップを引きたがるなんて…・・・ムチャな人ですね。」

秀一

「世界を救う時間が、オレにはもう残り少ない。不死の縛がほぼ全身に回りつつある。」

ロマネコントイ

「喜ばしい事じゃないですか…！…もうすぐあなたはダーポンと同類になれる…！…私はまだ時間が必要ですからね。実に羨ましい。」

秀一

「ふざけるな…！」

デンドン…！

ロマネコントイ

「ふざけていませんよ。私は本気です。永遠の命を得られるのです

よ？老いる事もなく。そつ・・・ダゴンのよつに・・・

秀一

「全ての人間がそんなものに憧れるワケじゃない！…オマエは自ら生ける屍になりたいのか、ロマネ！？ハイスピード14トーチムポール！」

ガキン！！

ロマネコンティ

「うつ！…」

秀一

「限りある命を・・・大切な人と歩む事に人間の意味があるんだ。

ロマネコンティ

「ちがいますよ。大切な人と限りなく歩む事が素晴らしいのです。ねえ秀一さん。永遠に生きていきましょうよ。」

秀一

「断るね。オレはダゴンと共に歩んでいくつもりはない！」

ロマネコンティ

「理解できません・・・永遠の命が手に入れば、大切な人が死ぬ苦しみから・・・解放されるのですよ？わかつていただけるまで、戦います。アン・ジエラス！…」

バサツ！！

ロマネコンティは空中に飛び上がった。

ロマネコンティ

「跳ねなさい。」

ババッ！！

秀一

「バルデス！！ちがう、ちがうんだロマネ。大切な人が死んでいくのは確かに辛い。しかし・・・人間は・・・新しい命を育む事ができる。それは永遠に屍として徘徊する事よりも素晴らしい事なんだ！！！」

ロマネコンティ

「・・・あなたにはわからないです。両親に先立たれてたった1人で生きてきた私がどんな気持ちだったかを・・・！私にはダゴンしかいない。」

秀一

「ダゴンは歪んでいる…なぜそれに気づかない！？」

秀一はトーテムポールをバラバラにすると、一気に放った。

バラッ！！

トーテム達はロマネコンティを直撃した。

ドカドカドカドカ！！

シュウウウ・・・

ロマネコンティ

「それでも大好きなんです。彼が・・・」

ロマネコンティは、・R・H・Z・Gを取り出した。

ロマネコンティ

「臨兵鬪者隊陣列在前・・・」

激突する2人の信念・・・

次回、秀一が信念を貫く！

ファイル657・永遠の刹那『2』

ロマネコンティ

「あなたには、自分よりも大切なものがありますか?」

秀一

「・・・ある。世界の平和だ!!」

ロマネコンティ

「私は・・・ダゴンです。」

秀一

「ダゴンがオマエに『』えているのは愛情じゃない!! 永遠といつ名の束縛だ!!」

ロマネコンティ

「束縛でも、構わない・・・ガーディアン・R I N G『バシリスク』

!!」

カツ!!

ズアツ!!

ロマネコンティは大蛇を召喚した。

ロマネコンティ

「私は1人で生きるのも死ぬのも・・・怖いのです・・・」

バシリスクは、石化する息を秀一に放った。

バアアアアアアー！！

ピキピキ・・・

秀一の体が石化を始めた。

哀

「赤井さんが石化していく！！」

康太郎

「マルガリータのメデューサと同じだーー！」

秀一

「人間は皆同じなんだよ、ロマネ・・・ガーディアン・R I N G『ア・バオア・クー』！！！」

カツ！！

ウオオオオオン！！

ギラッ！！

クルン！！

ロマネコンティとバシリスクが、球体に包まれた、

ロマネコンティ

「しつ・・・しまった！！」

秀一

「オマエが出会っていたのがダ'ゴンではなく明美だったら……同じ道を歩めたかもしけないな、ロマネ。バーストアップ・・・」

「ダ'ゴン！－！」

ロマネコンティを包んでいた球体が、爆発した。

ザツ・・・

ロマネコンティ

「ダ・・・ゴン・・・」

カミュ

「勝者！－！アル、赤井秀一！－！」

リアン

「シユウはゾンビになる事を心から望んぢらくん。もし・・・ゾンビになりそうになつた時・・・アイツは・・・自らの命を断つやうな。」

哀

「そんな事をさせないわよ！－！あの人も仲間だわ！－！」

イズナ

「仲間というよか、家来ね。」

秀一

「もう聞こえてるぞ、イズナ！－！」

信念を貫き通したシユウ、ロマネコンティに見事リベンジ！－！

次回、ゼクト以上に顔のコンプレックスがある男が瑛祐を強襲！？

ファイル658・瑛祐が許せない『1』

タン！

ザ・・・

瑛祐

「次はオレが出る。」

「『Jリーグ』では誰が出ましょつか？」

「オレ様がやりてえ。あのヤロウのジララが気に入らねえんだーー！」

ブンッ！

ズンン！

バサツ！

「おいチビ、ギビツたか？ブチ殺してやるぜ。」

カミュ

「9THバトル第4戦！！アル、本堂瑛祐！！ベンデュラムアッシュ、
ラオチュウ！！試合開始！！」

伊賀高岩＝ラオチュウ

『ベンデュラムアッシュ構成員

』クラス

ナイト』

「ウHポン・R I N G！七文字！！行くぜえーー！」

ラオチュウは七文字を握つて突つ込んだ。

ドンッ！

瑛祐

「ギドナ・エルドー！」

瑛祐はロジードのような物を持つて応戦する。

カキン、カキン！

ガツキイイイン！！

瑛祐はラオチュウを睨む。

ラオチュウ

「ああ・・・その目・・・そのツラ・・・！..氣に入らねえって言つてんだろーつー！..ディメンション・R I N G！砂地獄！！」

ラオチュウが・R I N Gを発動すると、瑛祐の足が沈み出した。

ズブ・・・

瑛祐

「！（体が・・・流砂の中のように潜つていぐ！？）」

ズブズブ・・・

ラオチュウ

「その辺で止めといでやるぜ。全部潜らせちまつたら楽しみが少なくなっちゃまつ。ウエポン・RING!アノマロカリス!!!」

ズルル!!

ラオチュウ

「そりゃあ!!」

ラオチュウは瑛祐を攻撃した。

バキヤ、バキイ!!

哀
「瑛祐君!!」

ラオチュウ

「オレ様はなあ、オマエみたいに美少年ぶつてるヤツが大っ嫌いなんだよ!虫唾が走る!!理由を教えてやるぜ!!」

ラオチュウは仮面を外した。

パカ!

ラオチュウ

「見る。この顔!!」

その顔は、ゼクトに勝るとも劣らない醜い顔だ。

ラオチュウ

「オマエとちがってオレ様は醜い！！オマエみたいなヤツは、殺して殺したくて仕方ねえんだよ！！」

瑛祐

「確かに醜いね、心も顔も・・・万死に値する。」

静かに激昂する瑛祐・・・

次回、瑛祐が本領発揮！！

ファイル659・瑛祐が許せない『2』

瑛祐

「確かに醜いね、心も顔も・・・万死に値する。」

ラオチュウ

「言つてくれるじゃねえかこのクソガキヤアー！脳ミソソバちまけや
がれ！！」

ラオチュウはムカデを放つた。

ゴオツ！

ググ・・・

瑛祐

「ハアア・・・」

瑛祐はロッドをムカデに打ち込んだ。

バコツ！！

ラオチュウ

「カツ・・・オレ様のアノマロカリスが・・・！？」

ズブッ！

瑛祐はロッドを流砂に刺すと、ロッドを長くして飛び上がった。

タン！

ザ！

瑛祐

「脱出しようと思えばいつでもできたさ。ナイト級としてのキサマの力量を測っていたんだ。結論。オマエはナイトでも下位クラスだ！マラスキーノよりも弱い！！」

ラオチュウ

「グッ・・・この・・・！－ブッ殺してやるあーっ！－チビーッ！－！－ナイチャ－・R I N G！霧靄！－！」

ラオチュウは霧靄を吹いた。

フシュウウウウ－！

瑛祐の周りが煙に包まれた。

哀

「何あれ！－？」

コナン

「煙だよ！－」

ラオチュウ

「クククク・・・オレ様がどこにいるか見えないだろ？！－この霧霞は魔力も消すぜ！－どづする色男！？ヒエヘヘヘ－！」

ラオチュウは周りが見えない瑛祐を攻撃し始めた。

ラオチュウ

「撤回しろーー！」

バキヤ！

ラオチュウ

「オレ様が弱いという事をーーー！」

ドコッ！

ラオチュウ

「そして死ねチビーー死にやがれーーー！」

ガニッ！

瑛祐

「撤回はしない。なぜなら・・・次のオレの攻撃でキサマは終わるからだ。」

ラオチュウ

「ホウ、面白い。」

ザザザザザ！

ラオチュウ

「ガーディアン・R I N G『クンフーレオン』ーー『イツを出しち
またオレ様に同じ事が言えるかなーーー？』

ラオチュウが巨大カメレオンに乗つて現れた。

ラオチュウ

「クンフーレオンはクンフーの達人！！テメエなんざ酛り殺してやるつてよおーつ！！」

『その心の中に憤怒を隠す少年、本堂瑛祐。あなたには、赤井秀一に授けたのと同じタイプのガーディアンを授けましょう。』

ゴソ・・・

瑛祐はズボンから・RINGを取り出した。

ラオチュウ

「何をするかは知らねえがもう遅え！！クンフーレオンの餌食となれ！！」

ラオチュウは突っ込んで来た。

ザザザザ！

瑛祐

「撤回するよ。キサマはナイト級の器でもない。」

シユツ！

ボンッ！

カキン！

瑛祐

「ガーディアン・R I N G・・・ジガ・デイラス・ボウ！－！」

ラオチユウ

「なつ・・・何だあこりやあ！－？」

瑛祐

「それを知った時・・・キサマは地獄に墮ちている。」

果たして、この・R I N Gの能力とは－？

次回、瑛祐が地獄を見せる！！

ファイル660・瑛祐が許せない『3』

瑛祐

「ガーディアン・R I N G · · ジガ・デイラス・ボウ！－！」

哀

「あ・・・あれが！－！瑛祐君の新しい・・・ガーディアン！－！」

コナン

「何か・・・怖い・・・」

松葉

「とんでもない物をインセディアは渡しよつたな。ガーディアン：R I N G『ジガ・デイラス・ボウ』、これでの『デカイヤツ』は逃げられへん。」

ラオチュウ

「な、何かヤバそうだな・・・！－！クンフーレオン！－動けない術者を狙え！－！」

ガーディアンがラオチュウとクンフーレオンを睨む。

カツ！

すると、ラオチュウとクンフーレオンが球体に包まれた。

ポワン！

ラオチュウ

「うーーーーーー？」

瑛祐

「残念な事だが・・・オレがある一言を言つと、オマエは終わりだ。」

「

ラオチュウ

「でつ、出られねえーーーー！」

瑛祐

「最後に言つ事はあるか？」「

ラオチュウ

「ちょっと待つてストップストップ！－美少年はもつと優しいもん
だぜ兄ちゃん！－！」

瑛祐

「オレは別に美少年じゃ ないからな。 つまらない辞世の句だった。
ブラストバーン！－」

カツ！

ガーディアンの目が光ると、ラオチュウを包んでいた球体が爆発した。

ドゴオオオオオン！－！

ラオチュウ

「グギヤツ！－アアアアアア－！－」

ラオチュウは地面に落ちた。

ボスン！！

ピクピク・・・

瑛祐

「殺しあしない。キサマにはその価値もない。」

カミユ

「勝者ーっーー！アル、本堂瑛祐ーーー！」

哀

「爆発するガーディアンーーー？」

松葉

「そやで。シユウが持つとうア・バオア・クーと同じく、カプセルの中に相手を閉じ込めてその中で爆発させるんや。魔力を相当消費するハズやけど・・・」

トン！

瑛祐

「勝つて來た。」

元氣つ！

コナン

「全然・・・平氣だね・・・」

哀

「うん・・・」

リアン

「（ホンマに強うなりよつたな）コイツ・・・アタシをも凌ぐ・・・か？瑛祐君・・・」

「次・・・ワタシが出るワ。」

バサツ！

タンツ！

哀

「あの娘・・・人間じゃない！-！」

コナン

「人形！-？」

『ホラ、アリス。新しい人形作つてあげたのよ。』

『わーい、ありがとうお姉ちゃん。』

『もう壊しちゃダメよ。』

松葉

「次はアタシが出るで。あればティアナの作り物や-！」

次に出て来たのは、ティアナが作りし人形-！！

次回、松葉が女人形と激突-！！

ファイル661・松葉が食べられた『1』

哀

「あの娘がティアナの造った人形！？」

松葉

「そやで。ティアナはよう人形をアタシに造ってくれとつたわ。そ
やからあれば・・・アタシが破壊する。」

タン！

カミュ

「9THバトル第5戦！！アル！桜野松葉！！ペンドュラムアッド
！ピノー！！試合、開始！！」

松葉

「ティアナは元気か？」

ピノー

『ペンドュラムアッド構成員

『クラス』

ナイト』

「ううん、病氣ヨ。死にそうなノ・・・」

ピノーの鼻が伸び出した。

グングン！

松葉

「アンタは『ティアナ』に造られたんやろ?」

ピノー

「ううん、ちがうわヨ。」

グングン!

カシン!

松葉

「アタシに勝てると思ってる?」

ピノー

「とんでもないワ。負けると思ってル・・・

グン!

ガシン!!

ピノーは弾丸を放つた。

ドンドン!!

ドカン、ドカン!!

松葉は微動だにしない。

ピノー

「避けようともしないのネ。憎たらしい人だワ!! ワタシをナメない方が良いわヨ・・・」

チヤキ！

ピノーは右腕を回し始めた。

ギヨラギヨラ

「ウハポン・RIZG・・・ノ「ギリギンー!」

ピノーは3本の腕でノコギリを持つた。

ガシヤ！

「右腕が一本増えてるーー！」

リアン

「人形やからな。あれくらいは：R I N Gなしでもできるやろ。」

松葉は翼を生やすと、ピノーに突っ込んだ。

タン！

タツ！

ピノーのノコギリが松葉の翼を弾き、そのまま腹部をかすつた。

ガキン！

ザシユ！

松葉

「アイタ！！チツ！！」

タン！

ピノー

「せーの・・・」

ピノーはノコギリを投げた。

ブン！

松葉

「ナメんなや！！人形！！ファイアリウイング！！」

ガシャガシャ！

松葉

「フウ・・・ディアナも凶悪なもんを造ったもんやな・・・」

ピノー

「ちがうわヨ。ワタシ凶悪じゃないわヨ。」

グングン！

松葉

「ティアナはペンギン城にあるな？」

ピノー

「いないわ！」

ジャキ！

ドカン！－

松葉

「『ホッ』『ホッ』。マトモに会話もできへんな。このウソッキ人形。

ピノー

「そんな事言わないで···近くでお話しあいましょ！」お姉さん。
ワイヤーハンズ！」

ピノーは3つの手を伸ばした。

ニョルウ！－

手が松葉の手足を掴んだ。

ガツ！

松葉

「キヤー！」

ピノー

「いいものを、あげるわ！」

女人形の攻撃に翻弄される松葉・・・

次回、松葉最大の危機！？

ファイル662・松葉が食べられた『2』

ピノー

「キレイなお姉さん……いいものあげるわ！」

ピノーの服のボタンが外れる。

ピッ、ピッ！

ガシャ！

ピノーのお腹から、回転式ノゴギリが飛び出した。

ウイイイイイイン！

ピノーは松葉を引き寄せようとする。

グッ！

ピノー

「うわあく・・・おじテ・・・」

松葉

「アホウ！..冗談ちやうわ！..ブリキス！..」

松葉は自分達の真上にブリキスを落とした。

ドカアアアアアン！..

哀

「ブリキスを・・・自分の上にまで落としたーー?」

リアン

「ファイアリーウィングは腕を掴まれて使われへん。あの娘にはガーディアンしか道はなかつたんや。」

コナン

「松葉ちゃん・・・」

フツ！

シユウウウ・・・

松葉が無傷で現れた。

哀

「松葉ちゃんは無事だわーー!ピノーはーー?」

ピノーは右腕と左腕が一本分欠け、右足がヒザの辺りまで欠けていた。

松葉

「その体じゃもうムリやね。後一撃でバラバラにしたるわ。」

ピノー

「バラバラになんてされてたまるもんですカ・・・ワタシは・・・ワタシは・・・アンタを倒して、ティアナ様に人間にしてもううのヨーッーー!」

ピノーは・R I N Gを振り上げた。

ピノー

「ガーディアン・R I N G『ヴァスティトカロン』——」

ピノーは巨大鯨のガーディアンを召喚した。

バツ！

松葉

「キヤーッ！」

バクン！

松葉はガーディアンに飲み込まれた。

瑛祐

「鯨の・・・ガーディアン！？」

哀

「松葉ちゃんーっ！！」

ピノー

「ケケケ・・・ワタシはこれでもう人形じゃあなイ・・・人間になれるんだワ！！人間になれるんだワーッ！！！」

松葉、鯨の体内。

松葉

「うつわ！クッサ！！まいったなこりや・・・」

そう呟いた松葉は、何かの気配に振り返った。

松葉

「誰や！？」「

「やあお嬢ちゃん。君もヴァースティトカロンの中に入つて来たんだね。」

松葉

「アンタ、何者？」

「ヴァースティトカロンの・・・住人さ。」

鯨に飲み込まれた松葉が出会つたのは、謎の生物らしき者・・・

果たしてこの生物は一体何者！？

次回、松葉が逆転勝利！！

ファイル663・松葉が食べられた『3』

リオ

「やあお嬢ちゃん。君もヴァステイトカロンの中に入つて来たんだね。ボクはヴァステイトカロンの住人。リオっていうんだ、ヨロシク。」

松葉

「アンタ・・・ずーっとこの鯨の中に住んでるん?」

リオ

「そうだよ。普通の人間はこの中にいると、溶けてしまふんだ。ホラ、そこ見てみそ。」

リオが指差した方を松葉が見ると、頭蓋骨が浮いていた。

ブカブカ!

松葉

「お生憎様!こんな中すぐに出でやるべ!溶けてまうやなんて、松葉ちゃん真つ平!..レインキャット!..」

松葉はレインキャットを召喚・・・

できなかつた。

松葉

「あ~り?~あ~り?~」

リオ

「ムリムリ。この中では・RINGは発動できないんだ。ボクの、
許可なしではね。」

松葉

「許可せんかい！！」

リオ

「ダメだよ～つ。これは・・・ディアナの呪いなんだ。元々ボクは、
ディアナの召使いだった。ところがある日、彼女のスカートを間違
って踏んでしまったのさ。これは呪いなんだ。彼女は言つたよ、『
一生この中で暮らすが良い。せめてもの情けにこの中にいても溶け
ない体にしてあげる。』と。で、今ボクはヴァスティトカロンの住
人つてワケ。」

松葉

「・・・アンタ、外に出たくないん？」

リオ

「そりゃあ出たいセーもう何年もこんな所にいるからね。」

松葉

「ほな・RING使はん許可してや。アンタも一緒に外に出したる

」

リオ

「ダメだよダメだよ！－ヴァスティトカロンが死ないとボクは外
に出られないんだ！－お嬢ちゃんにヴァスティトカロンを殺せるワ
ケないじゃないか！－それにお嬢ちゃんだけが外に出たらまたボク
は独りぼっちだ！－

チウ！

松葉

「ヴァスティトカロンは一撃で殺すわ。信用して。」

松葉を心配する哀達。

哀

「ちょっと・・・もう15分は経ったわよ・・・あの中には・・・ずっと松葉ちゃんが・・・！どうしたら良いの・・・！」

ピノー

「助かるわヨ、お姉さんなら！－－キヤハハハハハ－－！」

パンッ！

カミュ

「これはもう終わりですねっ！勝者・・・」

コナン

「待つて！－－様子が変だよ－－！」

ピノー

「！？」

ピノーが振り返ると、ヴァスティトカロンの背中が破れ始めた。

ビシビシ－

松葉

「レインキャット『リリ』！……」

リリで鯨の背中を食い破り、松葉とリオは外に脱出した。

リオ

「出られた・・・外に出られたよお～つ。」

松葉

「なつ、言つたやろ？」

ブン！

パキイン！

ピノー

「ワ、ワタシの・・・ヴァスティトカロンが・・・！」

松葉

「アンタからは『ティアナの匂いがパンパン』じょう。不快や、消えな。

」

リリはピノーに噛みつき、バラバラに碎いた。

メキヤー！

コン！

哀

「やつた！……大逆転だわーつ！……つて、あなた何？」

リオ

「リオと言います、ハイ。」

ピノー

「あなたみたいなキレイな人にやられて嬉しいわ。」

松葉はそういうピノーの鼻をへし折った。

ボキッ！

松葉

「ウソ吐^つき。」

カミュ

「勝者・・・アル、桜野松葉！！」

松葉

「悪いな、デイアナ。また壊してもうたわ」

松葉、カラクリ女人形を見事擊碎！！

しかし、次に出るペンデュラムは・・・！？

次回、コナンに衝撃！！

ファイル664・「ナンが笑った『1』」

哀

「やつたわね松葉ちゃん！－鯨の中に入れられた時はヒヤヒヤしたわ－！」

松葉

「あら哀ちゃん、心配してくれたん？おおきにーつ。」

リオ

「やあお嬢ちゃん、ヴァスピーティカロンの中から出して貰ってアリがとな。」

松葉

「何でアンタ」「おるをや・・・」

リアン

「残り・・・2人・・・」

ズズズズズ・・・

瑛美じやない方の人間が、進み出て來た。

トン－

「ナン

「哀ちゃんは瑛美さんでしょ？だから・・・次、ボクが行く－！」

哀

「ええ……頑張つて来なさいよコナン君……」

イズナ

「コナン君なら大勝利間違いなしだわ……」

コナンは微笑むと、進み出た。

タツ！

哀

「ダメだわ……」

秀一

「どうした哀君？」

哀

「……あっ、イヤ……何でもない……（ただ、今……何か、
スゴくイヤな予感がしたのよ。）」

「さて……お久しぶりです。新一様……」

バサツ！

ローブを脱ぎ去った人間の正体に、コナンは驚愕した。

なぜなら……

コナン

「きーー！君は……マジカル・ユウ！？」

「お元気そうで、何よりですわ・・・」

リアン

「ア・・・アイツは・・・」

そう、コナンとリアンが昔世話になつたベビーシッターの一人だつたからだ。

コナン

「どうして君がペンドュラムアーヴにー?」

回想

新一『えーん・・・えーん・・・うええ・・・ん。』

ディアナ『泣かないで、新一君・・・今日は楽しい人を連れて來たの。』

新一『楽しい・・・人?どこ?』

ポン!

マジカル・ユウ『初めまして、新一様。私、マジカル・ユウと申す者でございます。今日はあなた様を笑わせに参上いたしました。』

ギュルギュル!

マジカル・ユウ『ホラ!ご覧ください!ー何でもジャグリングでござります!ー』

マジカル・ユウはそれからも、次々とマジックを新一に見せた。

新一『スゴイ!!スゴイスゴーイ!!』

ポン!-

マジカル・ユウ『新一様、どうぞ。』

マジカル・ユウは新一に花束を渡した。

新一は満面の笑顔を見せた・・・

「あなた様とこのよくな形で再会するのは、正直心が痛みます。あの頃は毎日遊んでいましたからね。」

コナン

「君がペンドュラムなんて納得いかないよーーあんなに優しくしてくれたじゃないーー！」

「ペンドュラムに入ったのではなく、元タペンドュラムだったのです。私の父はシードル、父の主人はティアナ様。その命令に従つただけ・・・」

コナン

「(そんな・・・)」

イズナ

「コナン君、どうしたの？」

リアン

「コナン君にとつては・・・戦いくじに相手やつひひつや。」

カミコ

「9THバトル第6戦!!ペンドュラムアッド!!マジカル・ユウ
!!アマレット!!アル!!江戸川コナン!!試合!!・・・開始!!!!」

マジカル・ユウ=アマレット
『ペンドュラムアッド構成員

『クラス』

ナイト

「運命が私達を手繕たぐり寄せた。勝負です、新一様。」

自分に優しくしてくれたベビーシッターと、コナンは戦わなくてはならないのか・・・！？

次回、躊躇ためらいのコナン・・・！

ファイル665：コナンが笑つた『2』

マジカル・ユウ

「ウエポン：R I N G · · · ードルボール！」

ジャキン！！

マジカル・ユウはボールを召喚すると、上に乗つた。

ギャルルルルル···

マジカル・ユウ

「行きますよ新一様！！！」

マジカル・ユウはコナンに突っ込んだ。

ギャ、ギャ、ギャ···

コナンはボールを避け、後ろに下がつた。

ザシャ！

マジカル・ユウ

「フウム···絶対に当たらない距離を作りますね。本当にお強くなられましたね。素晴らしい。それでは···これならいかがされる？ネイチャ－：R I N G！ブリザードウェイール！！」

マジカル・ユウは氷の輪を複数放つた。

ザザザザザザ！

哀

「氷の輪がコナン君に突っ込んで行くわ！！」

コナンは氷の輪に突っ込んだ。

ゴ
ジ
！

二
ナ
ン

二ナンは氷の輪を全てくぐり終えると
炎の世界にて氷の輪を燃やした。

ボシュウウウー！！

マシナル・コウ

川・夕不力!!

マシガ川・一之瀬の虎を放した

ガオオオオオオ！！

ヨアッ!

「ナン

「フレアド・・・アース！！」

「ナンは炎を放ち、泡の虎を消し去った。

ボシユー!!

マジカル・コウ

「フム、一撃か。これはますます驚きましたわ。」

コナン

「ハア、ハア……」

哀

「ナン君絶好調じやないのよコアンちゃんーー！」

イズナ

「そうよセリウムーー！」

リアン

「イヤ……魔力が荒れとる。ナン君はホンマはアイツと戦いたくないんや。」

コナン

「マジカル・コウ……ボク……君と戦いたくない。」

マジカル・コウ

「私もです。しかしこれもティアナ様の命。戦わなければならないのです！！ガーディアン・RING・トランプファイターズ！！」

マジカル・コウは4体のトランプ兵を召喚した。

コナン

「どうしても……ダメなんだね……」

ディアナ『オマハに指令を出す、マジカル・コウ。』藤新一を・・・

『

マジカル・コウ

「・・・やれ。」

4体のトランプ兵は、コナンに襲いかかった。

コナンは覚悟を決められるのか！？

次回、コナンを悲劇が襲う！？

ファイル666・コナンが笑った『3』

ハートの兵士は、矢を放つた。

チュン！

ザス！

コナン

「あうーー！」

クラブとダイヤも、コナンに向かって来る。

コナン

「たくさんの・・・フウちゃんーー！」

コナンは複数の炎のダルマを放つた。

バツ！

フレアマン達はトランプファイターズ4体を押し潰した。

ドン、ドン、ドンーー！

マジカル・ユウ

「今だーー！マネッ子メダルオンーー！」

マジカル・ユウはメダルのような物を出した。

すると、フレアマンが複数現れた。

ブン！

コナン

「えーー？」

コナンはフレアマンに襲われた。

コナン

「うわあーーっーー！」

ドン、ドンー！

コナン

「な、何で・・・フウちゃんがボクを・・・？」

マジカル・ユウ

「マネツ子メダルオンは相手と同じ：R I N Gの能力を発動できるのです。トランプファイターズはただのオトリだったのですよ。」

コナン

「ハア、ハア・・・」

マジカル・ユウ

「いきますよ、新一様！ガーディアン・R I N G！－ナイトメア！－！」

マジカル・ユウはキバが生えたボールを複数召喚した。

ボボボ！！

ボールは合体する。

ガチン！

ボールはバラツと弾けると、コナンを襲つた。

バラツ！

ドカ、バキ！！

哀

「おかしいわ・・・コナン君は今まで一度もあの子に直接攻撃していない！！」

松葉

「リアンちゃん！コナン君が戦いたくないってどういう意味や？」

リアン

「アタシや新一君が小さかつた頃世話になつてていたベビーシッター・・・その1人やつたんや、あの女は。」

秀一

「心理的なものか・・・」

リアン

「ええ加減にせえコナン君！！アンタは戦う覚悟を決めたんやなかつたんか！！？」

コナン

「（そうだ・・・ボクはまだ甘えている・・・戦わなきゃいけない
！－）ファルディーネ！－」

ボウン！

「お久しぶり、コナン。今回ボクが倒すべきは・・・あのガードイ
アンかな？」

コナン

「そりだよつ、行つてファルディーネ！－」

「フレアードルス！－」

ファルディーネは炎の槍でナイトメアを撃破した。

ドガア！－

その時だった。

コナンが謎の球体に包まれたのは。

ボウ・・・

哀

「！？」

マジカル・ユウ

「ナイトメアもオトリだったのですよ。私の本当の目的はあなた様
を倒す事ではなく・・・」

ディアナ『オマエに指令を出す、マジカル・コウ。工藤新一とコナ
ー王子を・・・私の元まで連れて来るのです。』

マジカル・コウ

「これもディアナ様の命・・・新一様はペンデュラム城に連れて行
く・・・」

『パ、パ、パ、パ、パ・・・

コナン

「そんなのヤダよ志保!! 志保あ!!!!」

哀

「新一ーつーーー!!」

マジカル・コウ

「新一様は頂きましたよ・・・アルの皆様・・・」

フツ!

コナンがマジカル・コウに連れ去られて行くのを、哀達は呆然と見
ているしかなかった・・・

マジカル・コウにさらわれてしまつたコナン・・・

なぜ彼はさらわれたのか?

そして、彼をさらひよひ指示したディアナの目的とは・・・!?

哀達アルの面々は、コナンを必ず救い出さなくてはいけない！

そして、ペントコラムアッドを絶対に滅ぼさなくてはならないのだ
！！

回り出した運命の歯車が、今一つにつながった！…！

運命の最終決戦が、もうすぐ始まる…・・・

第6章・完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2970e/>

FBIから来た女:6～漆黒・黒の章

2010年10月9日18時14分発行